松山市文化財調査報告書 88

船ヶ谷遺跡

—4次調査—

遺構・遺物編

2002

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

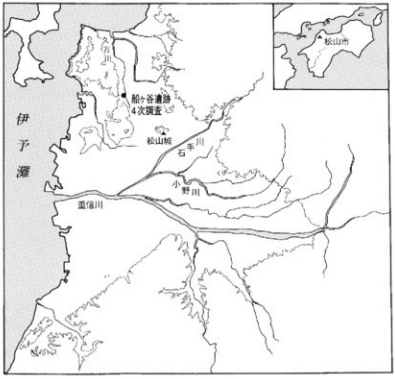
埋蔵文化財センター

船ヶ谷遺跡

（ふながたに）

―４次調査―

遺構・遺物編



２００２

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

1．SR1 G7 区出土陶質土器

2．市場系土器

3．初期須恵器

4．軟質土器

5．口頸部を打ち欠かれた土器

6．SK2 焼土堆積状況

7．SK2 二次焼成を受けた遺物

序

松山市は、市内西長戸町に松山市北部福祉施設を建設するに伴い、事前の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめたものです。

調査地は、松山平野の北西部にあたり、松山市を代表する縄文時代晩期の遺跡が豊富な地区です。

調査地の北方には縄文時代晩期の水稲耕作で著名な大渕遺跡、西方丘陵上には船ヶ谷向山古墳、船ヶ谷三ツ石古墳等の古墳群が存在します。

今回の発掘調査地は、平成9年度の2次調査の東隣にあたり、前回と同じく古墳時代の流路を検出し、多数の土器や石器が出土しました。その中には朝鮮半島で製作された陶質土器2点があり、朝鮮半島との交流が具体的に明らかになり、貴重な成果を得ることができました。

このような成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであり、心から感謝申しあげる次第です。

なお、本書が今後各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

平成14年12月24日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　言

1．本書は松山市埋蔵文化財センターが平成12年4月から9月に、松山市西長戸町638－1外3筆で実施した松山市北部福祉施設建設に伴う事前の発掘調査報告書である。

2．遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柵列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、自然流路：ＳＲ、性格不明遺構：ＳＸである。

3．遺構の測量と作図は高尾和長・山之内志郎の指示のもと後藤公伸・高松健太郎他が行った。遺構の写真撮影は高尾・山之内・大西朋子が行った。遺物撮影と図版作成は大西が行った。

4．本書報告の遺構図の縮尺は縮分値をスケール下に注記した。遺物の実測図は縄文土器、弥生土器は1/4、土師器、須恵器は1/3、石製品2/3・1/3、木製品1/6を原則とし、他は縮分値をスケール下に記した。

5．遺物の実測・製図は高尾・山之内・田崎真理・中村紫・宮内真弓・仙波千秋・仙波ミリ子・金子育代・高尾久子・東山里美・大野裕子・山之内聖子・吉岡智美・森田利恵・平岡華美・水口あをい・山下満佐子・平岡直美・大西陽子・西本三枝・日之西美春が行った。

6．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。

7．本書では遺構・遺物編の報告と遺構写真図版の掲載を行い、次集に船ヶ谷遺跡４次調査－考察・写真図版編－の報告を行う。

8．本書の執筆は第Ⅰ～Ⅲ章を山之内が担当し、他は高尾が執筆した。

9．自然化学分析では、株式会社古環境研究所、大谷女子大学三辻利一先生に分析と寄稿していただいた。記して感謝申しあげます。また、Ｘ線写真撮影及び木製品の保存処理は財団法人元興寺文化財研究所に、測量用の座標の取り付けは株式会社国際航業に委託した。

10．調査及び報告書作成においては、愛媛大学 下條信行・田崎博之・吉田広・三宅秀充・徳島大学 定森秀夫・岡山理科大学 亀田修一・(財)大阪市文化財協会 田中清美・池田研・村元健一・辻美紀・奈良大学 植野浩三・柏原市教育委員会 北野重・(財)大阪府文化財調査センター 岡戸哲紀・枚方市教育委員会 大竹弘之・香川県埋蔵文化財センター 森下英治・高松市教育委員会 大島和則の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申しあげます。

11．本書の編集は高尾が行い、山之内・梅木謙一・宮内慎一・加島次郎・水口あをいの協力を得た。

12．本書で報告した遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに ―――― 山之内 …… 1

1．調査に至る経過

2．調査・刊行組織

第Ⅱ章　遺跡の概要 ―――― 山之内 …… 3

1．地理的環境

2．歴史的環境

第Ⅲ章　調査の概要 ―――― 山之内 …… 9

1．調査の経緯

2．層位

第Ⅳ章　遺構と遺物 ―――― 高尾 …… 17

1．弥生時代前期～古墳時代後期（1）自然流路

2．弥生時代前期（1）土坑

3．弥生時代中期（1）溝　（2）土坑

4．弥生時代後期（1）溝　（2）土坑

5．古墳時代前期（1）土坑

6．古墳時代中期（1）掘立柱建物　（2）土坑　（3）溝　（4）柵列　（5）杭列

7．古墳時代後期（1）掘立柱建物　（2）竪穴式住居　（3）土坑

（4）溝　（5）柵列　（6）性格不明遺構

8．第Ⅶ層出土遺物

9．出土地点不明遺物

第Ⅴ章　自然化学分析

1．船ヶ谷遺跡4次調査における樹種同定 ―――― (株)古環境研究所 …… 215

2．船ヶ谷遺跡4次調査における種実同定 ―――― 〃 …… 225

3．船ヶ谷遺跡4次調査における花粉分析 ―――― 〃 …… 228

4．船ヶ谷遺跡4次調査における植物珪酸体分析 ―――― 〃 …… 231

5．船ヶ谷遺跡4次調査出土の硬質土器の蛍光X線分析 ―― 三辻利一 …… 240

第Ⅵ章　まとめ ―――― 高尾 …… 252

挿 図 目 次

第 1 図　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）…… 5
第 2 図　調査地位置図（1）（縮尺1/5,000）…… 6
第 3 図　調査地位置図（2）（縮尺1/1,000）…… 7
第 4 図　遺構配置図（縮尺1/200）…… 11・12
第 5 図　調査区土層図（1）（縮尺1/80、1/200）…… 13・14
第 6 図　調査区土層図（2）（縮尺1/80、1/200）…… 15・16
第 7 図　SR1③層の範囲（縮尺1/400）…… 18
第 8 図　SR1③層出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 19
第 9 図　SR1③層出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 20
第 10 図　SR1③層出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）…… 21
第 11 図　SR1③層出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）…… 22
第 12 図　SR1③層出土遺物実測図（5）（縮尺1/4）…… 23
第 13 図　SR1③層出土遺物実測図（6）（縮尺1/4）…… 24
第 14 図　SR1③層出土遺物実測図（7）（縮尺1/4）…… 25
第 15 図　SR1③層出土遺物実測図（8）（縮尺1/4）…… 26
第 16 図　SR1③層出土遺物実測図（9）（縮尺1/4）…… 27
第 17 図　SR1③層出土遺物実測図（10）（縮尺1/4）…… 28
第 18 図　SR1③層出土遺物実測図（11）（縮尺1/4）…… 29
第 19 図　SR1③層出土遺物実測図（12）（縮尺1/4）…… 30
第 20 図　SR1③層出土遺物実測図（13）（縮尺1/3、2/3）…… 31
第 21 図　SR1③層出土遺物実測図（14）（縮尺1/3）…… 32
第 22 図　SR1③層出土遺物実測図（15）（縮尺1/3）…… 33
第 23 図　SR1③層出土遺物実測図（16）（縮尺1/3、2/3）…… 34
第 24 図　SR1③層出土遺物実測図（17）（縮尺2/3）…… 35
第 25 図　SR1③層出土遺物実測図（18）（縮尺2/3）…… 36
第 26 図　SR1③層出土遺物実測図（19）（縮尺1/3）…… 37
第 27 図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 38
第 28 図　SR1②層G6･7区出土遺物配置図（縮尺1/40）…… 39
第 29 図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 40
第 30 図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 41
第 31 図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（4）（縮尺1/3）…… 42
第 32 図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（5）（縮尺1/3）…… 43
第 33 図　SR1②層の範囲（縮尺1/400）…… 45
第 34 図　SR1②層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 45
第 35 図　SR1②層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 46
第 36 図　SR1②層出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 47

第 37 図　SR1②層出土遺物実測図（4）（縮尺1/3）…… 48
第 38 図　SR1②層出土遺物実測図（5）（縮尺1/3）…… 49
第 39 図　SR1②層出土遺物実測図（6）（縮尺1/3）…… 50
第 40 図　SR1②層出土遺物実測図（7）（縮尺1/3）…… 51
第 41 図　SR1②層出土遺物実測図（8）（縮尺1/3）…… 52
第 42 図　SR1②層出土遺物実測図（9）（縮尺1/3）…… 53
第 43 図　SR1②層出土遺物実測図（10）（縮尺1/3）…… 54
第 44 図　SR1②層出土遺物実測図（11）（縮尺1/3）…… 55
第 45 図　SR1②層出土遺物実測図（12）（縮尺1/3）…… 56
第 46 図　SR1②層出土遺物実測図（13）（縮尺1/3）…… 57
第 47 図　SR1②層出土遺物実測図（14）（縮尺1/3）…… 58
第 48 図　SR1②層出土遺物実測図（15）（縮尺1/3）…… 59
第 49 図　SR1②層出土遺物実測図（16）（縮尺1/3）…… 60
第 50 図　SR1②層出土遺物実測図（17）（縮尺1/3）…… 61
第 51 図　SR1②層出土遺物実測図（18）（縮尺1/3）…… 62
第 52 図　SR1②層出土遺物実測図（19）（縮尺1/3）…… 63
第 53 図　SR1②層出土遺物実測図（20）（縮尺1/3）…… 64
第 54 図　SR1②層出土遺物実測図（21）（縮尺1/3）…… 65
第 55 図　SR1②層出土遺物実測図（22）（縮尺1/3）…… 66
第 56 図　SR1②層出土遺物実測図（23）（縮尺1/3）…… 67
第 57 図　SR1②層出土遺物実測図（24）（縮尺1/3）…… 68
第 58 図　SR1②層出土遺物実測図（25）（縮尺1/3）…… 69
第 59 図　SR1②層出土遺物実測図（26）（縮尺1/3）…… 70
第 60 図　SR1②層出土遺物実測図（27）（縮尺1/3）…… 71
第 61 図　SR1②層出土遺物実測図（28）（縮尺1/3）…… 72
第 62 図　SR1②層出土遺物実測図（29）（縮尺1/3）…… 73
第 63 図　SR1②層出土遺物実測図（30）（縮尺1/3）…… 74
第 64 図　SR1②層出土遺物実測図（31）（縮尺1/3）…… 75
第 65 図　SR1②層出土遺物実測図（32）（縮尺1/3）…… 76
第 66 図　SR1②層出土遺物実測図（33）（縮尺1/3）…… 77
第 67 図　SR1②層出土遺物実測図（34）（縮尺1/3）…… 78
第 68 図　SR1②層出土遺物実測図（35）（縮尺1/3）…… 79
第 69 図　SR1②層出土遺物実測図（36）（縮尺1/3）…… 80
第 70 図　SR1②層出土遺物実測図（37）（縮尺1/3）…… 81
第 71 図　SR1②層出土遺物実測図（38）（縮尺1/3）…… 82
第 72 図　SR1②層出土遺物実測図（39）（縮尺1/3）…… 83
第 73 図　SR1②層出土遺物実測図（40）（縮尺1/3、1/4）…… 84
第 74 図　SR1②層出土遺物実測図（41）（縮尺1/4）…… 85
第 75 図　SR1②層出土遺物実測図（42）（縮尺1/4）…… 86

第 76 図　SR1 ②層出土遺物実測図（43）（縮尺1/4）…… 87
第 77 図　SR1 ②層出土遺物実測図（44）（縮尺1/4）…… 88
第 78 図　SR1 ②層出土遺物実測図（45）（縮尺1/4）…… 89
第 79 図　SR1 ②層出土遺物実測図（46）（縮尺1/4）…… 90
第 80 図　SR1 ②層出土遺物実測図（47）（縮尺1/4）…… 91
第 81 図　SR1 ②層出土遺物実測図（48）（縮尺1/4）…… 92
第 82 図　SR1 ②層出土遺物実測図（49）（縮尺1/4）…… 93
第 83 図　SR1 ②層出土遺物実測図（50）（縮尺1/4）…… 94
第 84 図　SR1 ②層出土遺物実測図（51）（縮尺1/4）…… 95
第 85 図　SR1 ②層出土遺物実測図（52）（縮尺1/4）…… 96
第 86 図　SR1 ②層出土遺物実測図（53）（縮尺1/4）…… 97
第 87 図　SR1 ②層出土遺物実測図（54）（縮尺1/4）…… 98
第 88 図　SR1 ②層出土遺物実測図（55）（縮尺2/3）…… 99
第 89 図　SR1 ②層出土遺物実測図（56）（縮尺2/3）…… 100
第 90 図　SR1 ②層出土遺物実測図（57）（縮尺1/3）…… 101
第 91 図　SR1 ②層出土遺物実測図（58）（縮尺1/3）…… 102
第 92 図　SR1 ②層出土遺物実測図（59）（縮尺1/3）…… 103
第 93 図　SR1 ②層出土遺物実測図（60）（縮尺1/3）…… 104
第 94 図　SR1 ②層出土遺物実測図（61）（縮尺1/3）…… 105
第 95 図　SR1 ②層出土遺物実測図（62）（縮尺1/3、2/3）…… 106
第 96 図　SR1 ②層出土遺物実測図（63）（縮尺2/3）…… 107
第 97 図　SR1 ②層出土遺物実測図（64）（縮尺2/3）…… 108
第 98 図　SR1 ②層出土遺物実測図（65）（縮尺2/3）…… 109
第 99 図　SR1 ②層出土遺物実測図（66）（縮尺2/3）…… 110
第100図　SR1 ②層出土遺物実測図（67）（縮尺2/3）…… 111
第101図　SR1 ②層出土遺物実測図（68）（縮尺2/3）…… 112
第102図　SR1 ②層出土遺物実測図（69）（縮尺2/3）…… 113
第103図　SR1 ②層出土遺物実測図（70）（縮尺1/3、2/3）…… 114
第104図　SR1 ②層出土遺物実測図（71）（縮尺1/2、1/6）…… 115
第105図　SR1 ①層の範囲（縮尺1/400）…… 116
第106図　SR1 ①層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 117
第107図　SR1 ①層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 118
第108図　SR1 ①層出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 119
第109図　SR1 ①層出土遺物実測図（4）（縮尺1/3）…… 120
第110図　SR1 ①層出土遺物実測図（5）（縮尺1/3）…… 121
第111図　SR1 ①層出土遺物実測図（6）（縮尺1/3）…… 122
第112図　SR1 ①層出土遺物実測図（7）（縮尺1/3）…… 123
第113図　SR1 ①層出土遺物実測図（8）（縮尺1/3）…… 124
第114図　SR1 ①層出土遺物実測図（9）（縮尺1/3）…… 125

第115図　SR1①層出土遺物実測図（10）（縮尺1/3、1/4）…… 126
第116図　SR1①層出土遺物実測図（11）（縮尺1/3、2/3）…… 127
第117図　SR1①層出土遺物実測図（12）（縮尺2/3）…… 128
第118図　SK1測量図（縮尺1/20）…… 129
第119図　SK1出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 130
第120図　SK10測量図（縮尺1/20）…… 130
第121図　SK10出土遺物実測図（縮尺1/5）…… 131
第122図　SR1-SD1出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 132
第123図　SR1-SD3出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 132
第124図　SK11測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4、1/40）…… 133
第125図　SK12測量図（縮尺1/40）…… 133
第126図　SR1-SD2出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 134
第127図　SK9測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4、1/20）…… 135
第128図　SK4測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4、1/40）…… 136
第129図　SK18測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4、1/40）…… 137
第130図　SK7測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/20）…… 138
第131図　SK7出土遺物実測図（2）（縮尺1/3、1/6）…… 139
第132図　SK15測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/40）…… 140
第133図　SK15出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 141
第134図　SK13測量図（縮尺1/30）…… 141
第135図　SK13出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）…… 142
第136図　SK13出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 143
第137図　SK13出土遺物実測図（3）（縮尺1/4）…… 144
第138図　SK13出土遺物実測図（4）（縮尺1/4）…… 145
第139図　SK13出土遺物実測図（5）（縮尺1/3、2/3）…… 146
第140図　SK13出土遺物実測図（6）（縮尺1/3、1/6）…… 147
第141図　SK19測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4、1/40）…… 148
第142図　SK20測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/40）…… 149
第143図　SK20出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）…… 150
第144図　SK5測量図（縮尺1/40）…… 150
第145図　SK17測量図（縮尺1/40）…… 151
第146図　SK21測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4、1/40）…… 151
第147図　SK6測量図（縮尺1/20）…… 152
第148図　SK6出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）…… 153
第149図　SK8測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/40）…… 154
第150図　SK8出土遺物実測図（2）（縮尺1/3、1/4）…… 155
第151図　SK14測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺1/3、1/20）…… 156
第152図　SK14出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 157
第153図　SK14出土遺物実測図（3）（縮尺1/3、1/6）…… 158

第154図　SK22測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/6、1/20）…… 159
第155図　SK16測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/40）…… 160
第156図　SK23測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/40）…… 161
第157図　SK3測量図（縮尺1/40）…… 161
第158図　掘立3出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 162
第159図　掘立3測量図（縮尺1/60）…… 163
第160図　掘立5測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/60）…… 164
第161図　SK24測量図（1）（縮尺1/30）…… 165
第162図　SK24測量図（2）・出土遺物実測図（縮尺1/6、1/30）…… 166
第163図　SK24最上層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 167
第164図　SK24最上層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3、1/4）…… 168
第165図　SK24出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 169
第166図　SK24出土遺物実測図（2）（縮尺1/1、1/3）…… 170
第167図　SK24出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 170
第168図　SK24出土遺物実測図（4）（縮尺1/3）…… 171
第169図　SK24出土遺物実測図（5）（縮尺1/1、1/3、1/4）…… 172
第170図　SK24出土遺物実測図（6）（縮尺1/3、2/3）…… 173
第171図　SK24出土遺物実測図（7）（縮尺1/6）…… 174
第172図　SK24出土遺物実測図（8）（縮尺1/6）…… 175
第173図　SK2測量図（縮尺1/20）…… 176
第174図　SK2出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 177
第175図　SK2出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 178
第176図　SD1測量図（縮尺1/30、1/60）…… 179
第177図　SD3測量図（縮尺1/20、1/40）…… 180
第178図　SD4測量図（縮尺1/20、1/80）…… 181
第179図　SA3測量図（縮尺1/30）…… 182
第180図　杭列1出土遺物実測図（縮尺1/6）…… 183
第181図　杭列2出土遺物実測図（縮尺1/6）…… 184
第182図　掘立1測量図（縮尺1/100）…… 186
第183図　掘立1出土遺物実測図（縮尺1/3、1/6）…… 187
第184図　掘立2測量図（縮尺1/100）…… 188
第185図　掘立2出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 189
第186図　掘立4測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/60）…… 190
第187図　掘立6測量図（縮尺1/60）…… 191
第188図　SB1測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/60）…… 192
第189図　SK25測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/40）…… 193
第190図　SK26測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/40）…… 193
第191図　SD2測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/2、1/30、1/60）…… 194
第192図　SA1測量図（縮尺1/40）…… 195

第193図　SA1 出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 196
第194図　SA2 測量図（縮尺1/30）…… 196
第195図　SX2 測量図（縮尺1/20）…… 197
第196図　SX2 出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 198
第197図　第Ⅶ層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 199
第198図　第Ⅶ層出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 200
第199図　第Ⅶ層出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 201
第200図　第Ⅶ層出土遺物実測図（4）（縮尺1/3）…… 201
第201図　第Ⅶ層出土遺物実測図（5）（縮尺1/3）…… 202
第202図　第Ⅶ層出土遺物実測図（6）（縮尺1/3）…… 203
第203図　第Ⅶ層出土遺物実測図（7）（縮尺1/2、1/4）…… 204
第204図　第Ⅶ層出土遺物実測図（8）（縮尺1/3、2/3）…… 205
第205図　第Ⅶ層出土遺物実測図（9）（縮尺2/3）…… 206
第206図　第Ⅶ層出土遺物実測図（10）（縮尺1/3、2/3）…… 207
第207図　出土地点不明出土遺物実測図（1）（縮尺1/3、1/4）…… 208
第208図　出土地点不明出土遺物実測図（2）（縮尺1/3、2/3）…… 209
第209図　出土地点不明出土遺物実測図（3）（縮尺1/3）…… 210
第210図　出土地点不明出土遺物実測図（4）（縮尺1/3、2/3）…… 211
第211図　出土地点不明出土遺物実測図（5）（縮尺1/3、2/3）…… 212
第212図　船ヶ谷遺跡4次調査の木材Ⅰ …… 221
第213図　船ヶ谷遺跡4次調査の木材Ⅱ …… 222
第214図　船ヶ谷遺跡4次調査の木材Ⅲ …… 223
第215図　船ヶ谷遺跡4次調査の木材Ⅳ …… 224
第216図　船ヶ谷遺跡4次調査の種実 …… 227
第217図　船ヶ谷遺跡4次調査の花粉 …… 236
第218図　植物珪酸体の顕微鏡写真 …… 239
第219図　船ヶ谷遺跡4次調査出土陶質土器の両分布図 …… 243
第220図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（1）…… 244
第221図　通谷窯出土須恵器の両分布図 …… 245
第222図　陶邑群と通谷群の相互識別 …… 246
第223図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（2）…… 247
第224図　伽耶群と通谷群の相互識別 …… 248
第225図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（3）…… 249
第226図　船ヶ谷遺跡4次調査産地別出土遺物実測図（1）（縮尺1/4、1/8）…… 250
第227図　船ヶ谷遺跡4次調査産地別出土遺物実測図（2）（縮尺1/4、1/8）…… 251
第228図　船ヶ谷遺跡2次調査地と4次調査地との土層合成図 …… 253
第229図　船ヶ谷遺跡4次調査検出遺構の変遷図 …… 254
第230図　SR1 グリッド別出土遺物重量図 …… 258
第231図　SR1 F4区出土遺物実測図（縮尺1/8）…… 260

第232図　SR1 F5区出土遺物実測図（1）（縮尺1/8）…… 261
第233図　SR1 F5区出土遺物実測図（2）（縮尺1/8）…… 262
第234図　SR1 F6区出土遺物実測図（1）（縮尺1/8）…… 263
第235図　SR1 F6区出土遺物実測図（2）（縮尺1/8）…… 264

表　目　次

表1　自然流路一覧 …… 213
表2　自然流路内溝一覧
表3　土坑一覧
表4　竪穴式住居址一覧 …… 214
表5　掘立柱建物一覧
表6　溝一覧
表7　柵列一覧
表8　性格不明遺構一覧
表9　船ヶ谷遺跡4次調査における樹種同定結果 …… 220
表10　船ヶ谷遺跡4次調査における種実同定結果 …… 226
表11　船ヶ谷遺跡4次調査における花粉分析結果 …… 234
表12　船ヶ谷遺跡4次調査における花粉ダイアグラム …… 235
表13　船ヶ谷遺跡4次調査における植物珪酸体分析結果 …… 237
表14　船ヶ谷遺跡4次調査における植物珪酸体分析結果 …… 238
表15　船ヶ谷遺跡4次調査出土陶質土器分析結果 …… 242

図　版　目　次

巻頭図版1．SR1 G7区出土陶質土器
2．市場系土器
3．初期須恵器
4．軟質土器
5．口頸部を打ち欠かれた土器
6．SK2 焼土堆積状況
7．SK2 二次焼成を受けた遺物
図版1．1　遺構検出状況南区（東より）
2　遺構検出状況北区（南東より）
図版2．1　遺構完掘状況南区（北東より）
2　SR1 陶質土器出土状況（南より）
図版3．1　SK1 遺物出土状況（北東より）
2　SK10 遺物出土状況（南より）
図版4．1　SK7 遺物出土状況（南より）
2　SK8 完掘状況（西より）
図版5．1　SK14 遺物出土状況（南より）
2　SK22 柱出土状況（南より）
図版6．1　SK24 遺物出土状況（北東より）
2　SK24 井戸枠出土状況（東より）
図版7．1　SK2 焼土出土状況（北西より）
2　SK2 土層（西より）
図版8．1　SX2 遺物出土状況（北より）
2　SB1 完掘状況（南より）
図版9．1　遺構完掘状況北区（南東より）

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過

1999（平成11）年11月、松山市障害福祉課（以下、申請者）より松山市西長戸町638-1外3筆における松山市北部複合福祉施設建設に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「No.173 東山町古墳群」内にあり、周知の遺跡として知られている。さらに申請地周辺ではこれまでに発掘調査が数多く実施されている。北1.5㎞には多量の縄文時代晩期後半の遺物が出土した大渕遺跡（栗田2000）のほか、北500ｍには縄文時代晩期中葉の基準資料となっている船ケ谷遺跡（阪本1984）がある。また西300ｍの丘陵上には中期の前方後円墳である船ケ谷向山古墳（池田1989）と、南西400ｍに同時期の周溝内祭祀が行われた船ケ谷三ツ石古墳（梅木1993）がある。さらに申請地の西隣には古墳時代中期の自然流路が確認された船ケ谷遺跡２次調査地（髙尾1999）のほか、北東300ｍには中世の農村的集落を確認した同遺跡３次調査地（加島1999）がある。

文化教育課は、確認願いが申請された地点について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、翌12月に試掘調査を実施した。その結果、溝・土坑・柱穴の遺構を確認し、遺物では弥生土器・土師器・須恵器が出土した。さらに堆積土層を確認した結果、調査区中央部には多量の遺物を包含する包含層または自然流路が存在していることを確認した。

この結果を受け財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）及び文化教育課・申請者の三者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、記録保存のための事前の発掘調査が必要と判断された。発掘調査は弥生時代と古墳時代の集落関連遺構の広がりの確認を主目的とし、2000（平成12）年４月10日より埋蔵文化財センターが主体となり、本格調査を実施した。

（参考文献）

栗田茂敏　2000「大渕遺跡」『大渕遺跡－１・２次調査地－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

阪本安光ほか　1984『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会

池田　學ほか　1989「船ケ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一　1993「船ケ谷三ツ石古墳」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

髙尾和長　1999『船ケ谷遺跡２次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

加島次郎　1999『船ケ谷遺跡３次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

2．調査・刊行組織

調査地　松山市西長戸町638－1 外3筆
対象面積　2,881㎡
調査期間　2000(平成12)年4月10日～同年9月29日

〔調査組織〕平成12年9月30日現在

松山市教育委員会	教育長	中矢　陽三
事務局	局長	圓上　和敬
	局長付参事	森脇　將
	次長	赤星　忠男
文化教育課	課長	馬場　洋
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	江戸　孝
		森　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　隆
	専門監	野本　力
	調査係長	田城　武志
	調査主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	担当	高尾　和長・山之内志郎

〔刊行組織〕平成14年12月24日現在

松山市教育委員会	教育長	中矢　陽三
事務局	局長	武井　正浩
	企画官	川口　岸雄
		石丸　修
文化財課	課長	馬場　洋
	主幹	八木　方人
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	菅　嘉見
		森　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　隆
	専門監	野本　力
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	担当	高尾　和長・山之内志郎・大西　朋子

第Ⅱ章　遺跡の概要

1．地理的環境

本調査地は松山平野北西部の松山市西長戸町に所在する。松山平野は愛媛県のほぼ中央に位置しており、西は伊予灘と斎灘に面し、南東部を石鎚山系、北東部を高縄山系に囲まれた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し北東から南西方向に流れる石手川と、石鎚山系に源を発しほぼ西流する重信川の二大河川が存在し、これらの沖積作用によって平野は形成された。

本調査地は、この石手川によって形成された扇状地の北に広がる沖積低地上に立地し、標高約８ｍを測る。この低地は、東を高縄山系の分岐丘陵、西を太山寺山塊に挟まれた東西3.0㎞、南北7.0㎞の細長い地溝性の低地である。また、この中央を石手川の支流である久万川が蛇行しながら北流している。なお調査地は、斎灘に面した現海岸線までは北へ3.8㎞、伊予灘に面した現海岸線までは西へ 2.5㎞の位置にある。

2．歴史的環境

縄文時代

沖積低地に立地した大渕遺跡（栗田2000）と船ヶ谷遺跡（阪本1984）の調査が行われている。大渕遺跡は1987（昭和62）年に発掘調査が行われ、遺物包含層から晩期後半の突帯文土器とともにナスビ形の彩文を施した壺形土器や石庖丁、籾圧痕土器などが出土し初期稲作遺跡と考えられている。また、船ヶ谷遺跡は1975（昭和50）年に発掘調査が行われ、大渕遺跡に先行する時期の河川や杭列、竪穴式住居址とともに土器・石器・木製品が多数出土している。

弥生時代

沖積低地に立地する遺跡と、その周辺の丘陵緩斜面上に立地する遺跡とに区分できる。

低地には、山越遺跡２次調査地（梅木1993）があり、溝ＳＤ２から前期中葉の土器とともに木製鍬と柳葉形の磨製石鏃が出土している。

丘陵には、西側に太山寺山塊、東側に高縄山系がある。太山寺山塊の東麓には、鵜が峠遺跡（西尾1986）が位置し土坑内から前期後半の土器群を検出しており、土器編年資料として良好なものである。また、高縄山系の丘陵は南麓と西麓に分岐し南麓では、座拝坂遺跡（松村1993）、谷町遺跡（山本1998）、平田七反地遺跡（西川2000）がある。座拝坂遺跡では、包含層から前期中葉の土器が出土しており、鵜が峠遺跡出土資料とともに貴重なものである。また、竪穴式住居址ＳＢ３からは後期前葉の土器が出土している。谷町遺跡ＳＢ１は高床部を付設する後期末の竪穴式住居址である。出土遺物では、竪穴式住居址内と第Ⅴ層中から外来系（青備系）の土器が出土している。平田七反地遺跡では、検出遺構や出土遺物によって弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、集落がひとつのピークを迎えていたことを確認することができた。出土遺物には、外来系（布留系甕など）の土器が出土していることから、他地域との交流が考えられる特筆すべき遺跡である。

西麓には、吉藤宮ノ谷遺跡（栗田1989）と姫原遺跡（相原1998）が位置する。吉藤宮ノ谷遺跡では、墓が唯一確認されている。土坑ＳＫ６内から頸部より上位を欠失した後期の壺形土器（壺棺）が出土

している。姫原遺跡では、溝５条と周溝状遺構２条を検出した。周溝状遺構は、周溝に区画された内側からは遺構と遺物は検出されなかったが、ＳＤ17の周溝内からは土器が一括投棄された状態で出土している。遺構の性格解明を進める上で重要な資料である。

古墳時代

当該期は集落と古墳に分けて分布をみる。集落はこれまでに発掘調査によって確認された事例が少ない。そのなかでも近年発掘調査された大渕遺跡３次調査地（吉岡2000）と船ケ谷遺跡２次調査地（高尾1999）の２遺跡がある。大渕遺跡３次調査地では、前期初頭の竪穴式住居址を確認した。竪穴式住居址は、自然流路ＳＲ７の周辺に配置される状況であった。さらにＳＲ７からは遺物が多量に出土し、当該期の土器編年の基準資料となるものである。また６世紀代後半の掘立柱建物群と溝状遺構との関連が明確になりその変遷をたどることができた。また船ケ谷遺跡２次調査地（高尾1999）では、５世紀前半の自然流路ＳＲ１と祭祀遺構ＳＫ6・7の２基を検出した。ＳＲ１からは多量の土師器が出土した。

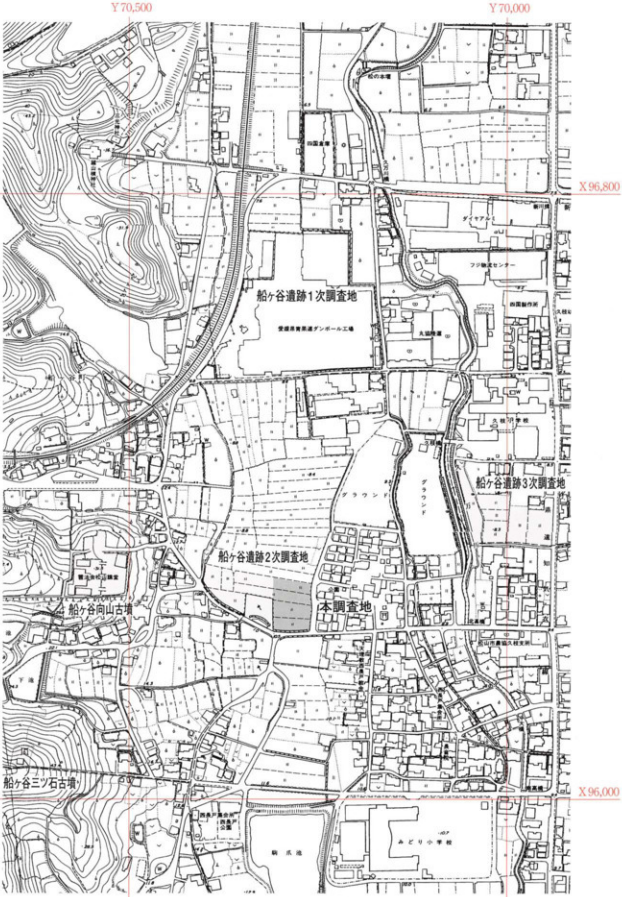
古墳は、調査地の西側に太山寺山塊、東側に高縄山系の分岐丘陵があり、数多くの古墳が分布している。太山寺山塊丘陵上には、高月山古墳群・東山古墳群・北山古墳群・鶴が峠古墳群などの古墳群が存在している。東山古墳群には、第Ⅰ章でも触れた船ケ谷向山古墳（池田1989）と船ケ谷三ッ石古墳（梅木1993）の調査が行われている。船ヶ谷向山古墳は後円部径26ｍを測る前方後円墳か帆立形古墳と考えられ、くびれ部に円筒埴輪を配列し、周溝内からは馬や鶏などの形象埴輪が出土している。船ヶ谷三ッ石古墳は２基の円墳を検出し、１号墳の周溝では祭祀が行われたと推定される須恵器と土師器がまとまった状態で出土している。古墳の年代は、出土遺物より５世紀末から６世紀初頭と推定される。高月山古墳群内にある高月山２号墳（宮崎1988）は、箱式石棺を内部主体とする16×10ｍの長方墳である。周溝内からは底部を焼成後に穿孔された土師器直口壺と鎮鐵が出土し４世紀末～５世紀初頭の古墳と推定されている。

高縄山系の分岐丘陵では、潮見古墳群内にある蓮華寺境内に県内で唯一の刳り抜き式石棺（阿蘇溶結凝灰岩製）の舟形石棺（高木1987）の身部が置かれている。また７世紀前半の塚本１号墳（栗田1991）と北谷古墳（岡野1980）は大型石材を用いた横穴式石室を内部主体とする古墳である。塚本１号墳は一辺17～18ｍを測る方墳であり、出土遺物に圭頭大刀や挂甲小札を副葬することから、後期の首長墓の系譜を考える上での重要な古墳である。

古代・中世

当該期の遺構の検出例は少なく、座抒坂遺跡（松村1993）と船ケ谷遺跡３次調査地（加島1999）の２遺跡がある。座抒坂遺跡では７～10世紀前半の掘立柱建物２棟のほか、10世紀後半以降の土坑２基や柵列４条を検出している。船ケ谷遺跡３次調査地（加島1999）では、14世紀代の掘立柱建物址や柵列・井戸によって構成される中世集落の様子が明らかとなった。

第１図　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）



第２図　調査地位置図（１）（縮尺1/5,000）

第3図　調査地位置図（2）（縮尺1/1,000）

<参考文献>

栗田茂敏　2000「大渕遺跡」『大渕遺跡－１・２次調査地－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

阪本安光ほか　1984『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会

梅木謙一ほか　1993「山越遺跡２次調査地」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾幸則　1986「鵜が峠遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県

松村　淳ほか　1993「慶拝坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山本健一　1998「谷町遺跡」『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西川真美ほか 2000「平田七反地遺跡」『道ケ谷古墳・池の奥古墳・平田七反地遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1989「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

相原浩二　1998「餘原遺跡」『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

吉岡和哉　2000『大渕遺跡－３次調査地－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

高尾和長　1999『船ケ谷遺跡２次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

池山　學ほか　1989「船ケ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一　1993「船ケ谷三ツ石古墳」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮崎泰好　1988『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会

高木恭二　1987「石棺を運ぶ」『東アジアの古代文化　50号』大和書房

栗田茂敏　1991「塚本１号墳」『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

岡野　保　1980『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会

加島次郎　1999『船ケ谷遺跡３次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅲ章　調査の概要

1．調査の経緯

本調査地は調査の進行上、南区と北区に区分して調査を行った。調査は最初に南区から開始し、南区終了後に北区を行った。なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリッドに区分けを行った。グリッドは西から東へＡ・Ｂ…Ｋ・Ｌとし、北から南へ１・２…16・17と設定した。

2000（平成12）年４月10日に調査事務所を設置する。11日に南区の調査区を設定し、重機により表土剥ぎを開始し、廃土は北区へ移動した。同時に、西に隣接した船ケ谷遺跡２次調査地の発掘調査時の経験から多量の湧水が予想されたため、四方の壁面直下に排水用のトレンチを掘削し北西角と南東角に水中ポンプを設置し湧水に対処した。この時点で、試掘調査時に包含層または流路とした土層が、自然流路（以下、ＳＲ１）の埋土であることを確認した。重機による表土剥ぎは、試掘調査によって得られたデータをもとに南区の南西部では基盤面（後述する第Ⅷ層）の上面まで掘削し、南区の大部分を占めるＳＲ１は遺構上面まで掘削を行った。その後遺構検出作業を行い、５月11日に遺構検出状況の写真撮影を行った。ＳＲ１については、本来は遺構に直行する方向に土層確認用のベルトを設定するべきであったが、規模が大規模であったことから調査グリッドを利用して南北（第４図ａｂ）と東西方向（第４図ｃｄ）に各１本のベルトを設定し４ｍグリッドごとに遺物の取り上げを行った。以後、その他の遺構の掘り下げも同時進行で行い、一部を除いて南区の調査を完了し、６月30日に南区完掘状況の写真撮影を行った。その後７月５日まで南区の遺構測量の補足を行った。

７月６～14日の間、北区に置いてあった廃土を移動して南区を埋め、北区の調査区を設定し重機による表土剥ぎを行う。北区では北壁と西壁直下に排水用のトレンチを掘削した。試掘調査のデータと南区の遺構配置状況から総合して、北区北東部は平坦面をなし、ＳＲ１は北西方向へ緩やかにカーブすることが推定されたため、北東部は基盤面まで掘削し、ＳＲ１は遺構上面まで掘削を行った。17日からは遺構検出作業を行い、19日には遺構検出状況の写真撮影を行った。以後遺構の掘り下げを開始し、ＳＲ１は南北方向のベルト１本を残し掘削を開始した。また同時進行でＳＲ１以外の遺構の掘り下げも行い、９月７日に北区完掘状況の写真撮影を行った。９日には一般市民向けの現地説明会を行った。

現地説明会後は、北区北東部で検出した掘立柱建物の規模や範囲を確認するため北区の東側を拡張した。この拡張区においても遺構や遺物を確認したため、遺構の掘り下げと図面測量を行った。また滑石製臼玉が出土したＳＫ24の土壌をふるいにかけ、臼玉の検出に努めた。29日には全ての測量が完了し、発掘機材や道具の搬出を行い、屋外調査を終了した。

2．層　位（第5・6図）

調査地は、調査前には水田として利用されていた。現地表面の標高は約9.0～9.5mで、南から北へ傾斜している。

基本層位は第Ⅰ層から第Ⅷ層を検出した。第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層橙灰色粘質土と灰色粘質土の互層、第Ⅲ層灰色粗砂質土、第Ⅳ層灰色シルト、第Ⅴ層灰褐色シルト、第Ⅵ層褐色シルト、第Ⅶ層暗灰色粘質土、第Ⅷ層黄灰色粗砂質土（地山）である。

第Ⅰ層：現代の水田耕作土である。調査区全域に厚さ10～30cmで堆積する。

第Ⅱ層：旧耕作土と旧床土の互層である。調査区全域に厚さ9～78cmで堆積する。

第Ⅲ層：灰色粗砂質土である。東半部に厚さ6～28cmで堆積する。

第Ⅳ層：灰色シルトである。約1mm以下の微砂質土を含む。南区南東部に厚さ10～20cmで堆積する。

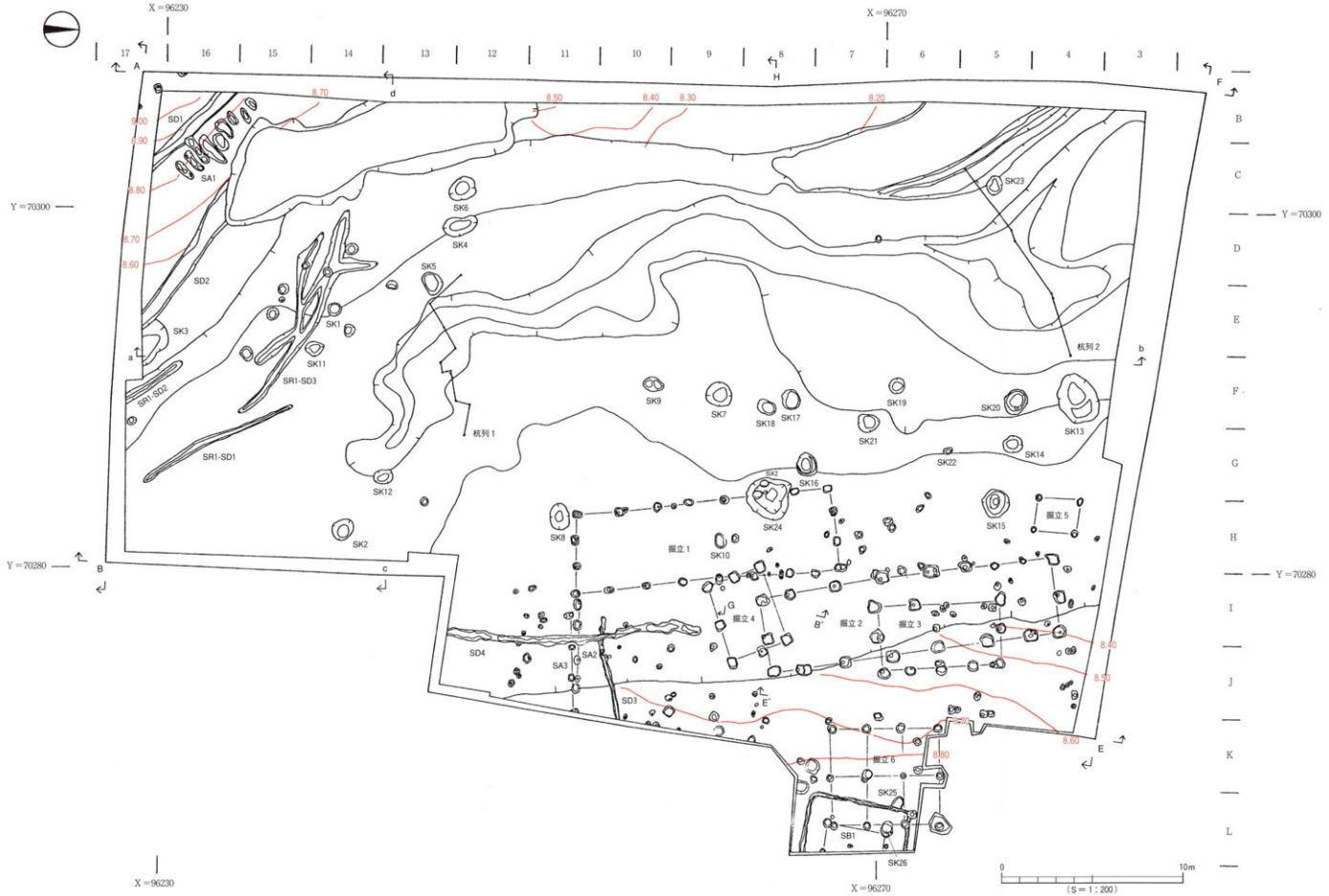
第Ⅴ層：灰褐色シルトである。本層上面では褐色粘質土をブロック状に含む。南区南東部に厚さ8～22cmで堆積する。

第Ⅵ層：褐色シルトである。東部を除く調査区のほぼ全域に厚さ6～30cmで堆積する。

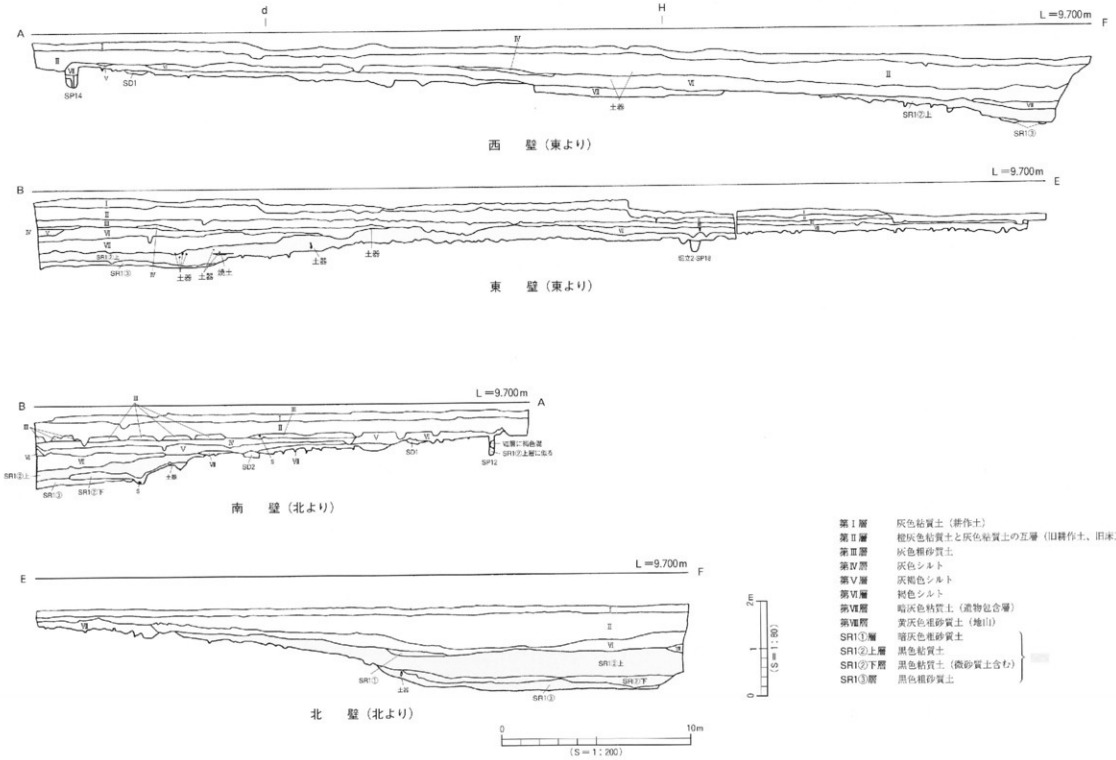
第Ⅶ層：暗灰色粘質土で遺物包含層である。局部的に灰色粗砂質土を含む。東部と北部を除く調査区のほぼ全域に厚さ12～40cmで堆積する。

第Ⅷ層：地山である。

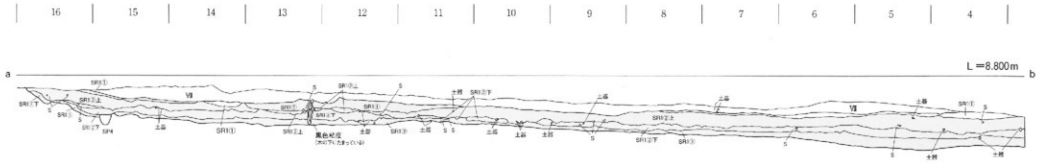
後述する各遺構は第Ⅷ層上面またはＳＲ１内の各層上面で検出した。第Ⅲ～Ⅵ層は、古代から近世の遺構の存在が予想されたが、当該期の遺構と遺物は検出されなかった。第Ⅶ層には、局部的に灰色粗砂質土を含んでいたため、重機による掘削段階からＳＲ１①層との区別が明確でない部分もあった。また第Ⅶ層は、その下層に存在するＳＲ１が凹地になった部分に堆積していることから本来はＳＲ１の堆積土層の一部であった可能性も考えられたが、西に隣接した2次調査地ＳＲ１との関連から、本調査でも遺構埋土としては取り扱わなかった。（第Ⅵ章参照）


X＝96230
X＝96270
Y＝70300
Y＝70280
SD1
SA1
SD2
SK3
SK1
SK11
SR1-SD3
SR1-SD2
SR1-SD1
SK12
SK2
SK6
SK4
SK5
杭列1
SK9
SK7
SK18
SK17
SK19
SK21
SK20
SK13
SK14
SK22
杭列2
SK23
SK16
SK24
SK15
SK8
SK10
掘立1
掘立2
掘立3
掘立4
掘立5
掘立6
SD4
SA3
SA2
SD3
SK25
SB1
SK26
8.70
8.60
8.50
8.40
8.30
8.20
8.80
8.90
9.00
0
10m
(S＝1：200)

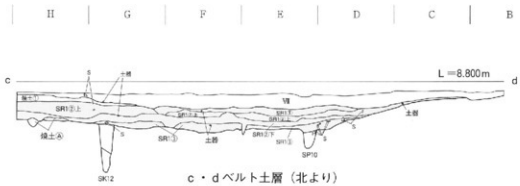
第４図　遺　構　配　置　図


A
d
H
L＝9.700m
F
SP14
SD1
土器
SR1②上
SR1③
西　壁（東より）
B
L＝9.700m
E
SR1②上
SR1③
土器
焼土
SD2 SP12
東　壁（東より）
B
L＝9.700m
A
SR1②上
SR1③
SR1③下
土器
SD2
SD1
SP12
南　壁（北より）
E
L＝9.700m
F
SR1①
土器
SR1②上
SR1②下
SR1③
北　壁（北より）
0
10m
（S＝1：200）
2m
1
0
（S＝1：50）
第Ⅰ層　灰色粘質土（耕作土）
第Ⅱ層　褐灰色粘質土と灰色粘質土の互層（旧耕作土、旧水工）
第Ⅲ層　灰色細砂質土
第Ⅳ層　灰色シルト
第Ⅴ層　灰褐色シルト
第Ⅵ層　褐色シルト
第Ⅶ層　暗灰色粘質土（遺物包含層）
第Ⅷ層　黄灰色粗砂質土（地山）
SR1①層　暗灰色粗砂質土
SR1②上層　黒色粘質土
SR1②下層　黒色粘質土（微砂質土含む）
SR1③層　黒色細砂質土

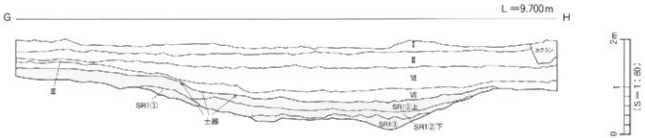
第5図　調　査　区　土　層　図　（1）



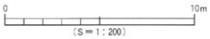
a・bベルト土層（東より）



c・dベルト土層（北より）



G・Hベルト土層（南より）



第Ⅰ層	灰色粘質土（耕作土）
第Ⅱ層	橙灰色粘質土と灰色粘質土の互層（旧耕作土、旧床土）
第Ⅲ層	灰色砂質土
第Ⅳ層	灰色シルト
第Ⅴ層	灰褐色シルト
第Ⅵ層	褐色シルト
第Ⅶ層	暗灰色粘質土（遺物包含層）
第Ⅷ層	黄灰色砂質土（地山）
SR1①層	暗灰色砂質土
SR1②上層	黒色粘質土
SR1②下層	黒色粘質土（微砂質土含む）
SR1③層	黒色砂質土

第6図　調査区土層図（2）

第Ⅳ章　遺構と遺物

本調査では、弥生時代と古墳時代の遺構と遺物を検出した。遺構は自然流路１条、竪穴式住居址１棟、掘立柱建物跡６棟、土坑26基、溝７条、柵列３基、杭列２基、柱穴120基、性格不明遺構１基である。遺物は土製品（弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、朝鮮系軟質土器、分銅形上製品、ミニチュア土製品）、石製品（石鏃、石庖丁、石斧、石錘、砥石、磨石、敲石、台石）、滑石製品（紡錘車、有孔円板、勾玉、管玉、臼玉）、木製品（農具、井戸枠、柱材、杭材）、鉄製品、種子、骨、歯牙がある。

以下、時代ごとに遺構と遺物について説明を行う。自然流路ＳＲ１は、弥生時代前期から古墳時代後期まで長期間にわたって存在し、本調査の重要な遺構であり調査区の大部分を占めるため最初に記述する。出土遺物の弥生土器は、松山平野の時期編年が示されているため時期別に掲載し、須恵器は器種ごとに掲載する。

１．弥生時代前期～古墳時代後期

(1) 自然流路（SR）

ＳＲ１（第４図）

調査区のＢ３～Ｈ17区に位置し調査区の大半を占める。北側と南側は調査区外に続く。西側は急勾配を呈するのに対して、東側は緩やかな勾配を呈する。流路は、南東から北西方向へ向かって蛇行しながら流れている。規模は検出長56ｍ、上場幅28～30ｍ、深さ92㎝を測る。上流と下流の川幅はほぼ同じである。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は３層に分かれ、①層暗灰色粗砂質土、②層黒色粘質土、③層黒色粗砂質土である。①層と②層、②層と③層との境に灰色粗砂質土を５～10㎝の厚みでブロック状に含んでいる。遺物は、各層ともに多数出土したため、取り上げはグリッドごとに取り上げ、完形品は番号を付けて取り上げを行った。②層はＧ６・７区から完形の陶質土器が出土したため他の遺物と分けて②層の最初に掲載する。以下、各層ごとに概説を行う。

ＳＲ１③層（第７図）

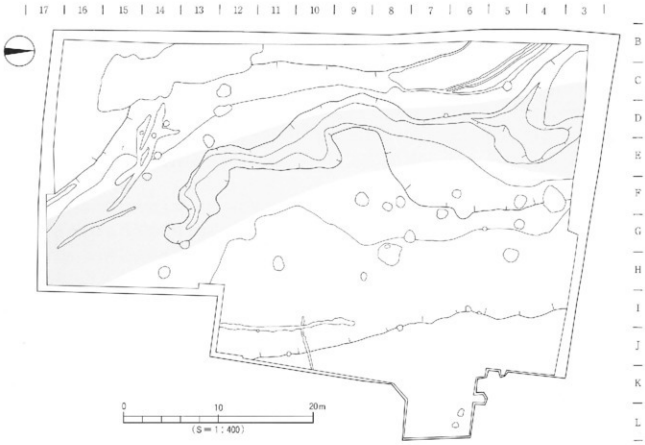
③層の範囲はＥ・Ｆ４～13区を中心に流路の最下層に深さ９～30㎝の厚みで堆積している。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、石器がある。③層の最終埋没時期は弥生後期末から古墳時代初頭であるため、遺物は弥生後期、古墳初頭、弥生中期、弥生前期、縄文、石器の順で掲載する。なお弥生土器の時期は（菅原・梅木編年2000木耳社）『弥生土器の様式と編年四国編』を使用する。

出土遺物（１～267）（第８～32図）

弥生時代後期（Ｖ－３様式）（第８～10図）

甕形土器（１～11）１・２は大型品で口縁部は外反する。３～５は中型品の口縁部。６～９は「く」の字状の口縁部。10・11は小さい底部。

壺形土器（12～28）12～17は複合口縁壺。12・13は大きく内傾する拡張部。12・15・16は拡張部に施文を施す。18は外反する口縁部、頸部に凸帯を貼り付ける。19・20は口縁部の小片、端部を拡張し波状文を施す。21は復元完形、小型品。22は外反する口縁部。23は長い口頸部、外面に細い沈線状の線１条。24・25は直線的に伸びる口縁部。26は外反する口縁部。27は胴部片、外面に波状



第７図　SR1③層の範囲

文を施す。28は丸味のある底部から胴部。

鉢形土器（29～34）29は外反する口縁部。30は「く」の字状口縁部。31はくびれの弱い口縁部。32・33は小さな丸味をもつ底部。34は直口口縁。

高坏形土器（35～41）35・36は坏部の口縁部、端部を拡張し施文を施す。37～40は柱部。38・39には円孔。40は短い柱部。41は有段の裾部に円孔と施文を施す。

器台形土器（42）エンタシス状の柱部。

支脚形土器（43～47）43～45は中空。46は器高が低く上下が凹む中実。47は角状で背面に円孔。

甑形土器（48）尖底の底部。

土製品（49）小さい把手状。

ミニチュア土器（50・51）50は丸底。51はくびれの上げ底、口縁部は「コ」の字状。

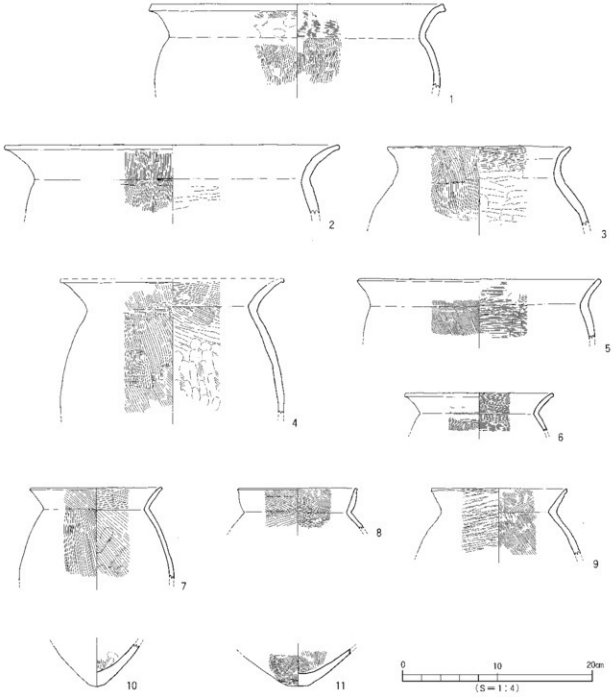
古墳時代初頭（Ⅴ－４様式）（第11図）

壺形土器（52）胴部の小片、簾状文。

高坏形土器（53・54）53は短い柱部、裾部に円孔。54は坏部はわずかに外反し丸い。

鉢形土器（55）丸味のある口縁部。

壺形土器（56・57）56は複合口縁壺、拡張部は直線的に立ち上がる。57は長胴の胴部、頸部は太頸で短い。

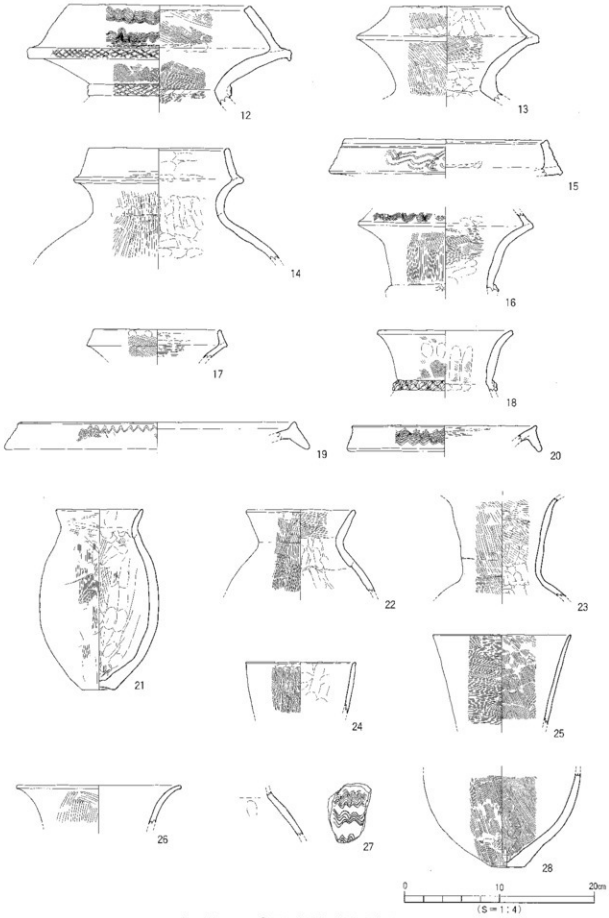


第８図　SR1 ③層出土遺物実測図（１）

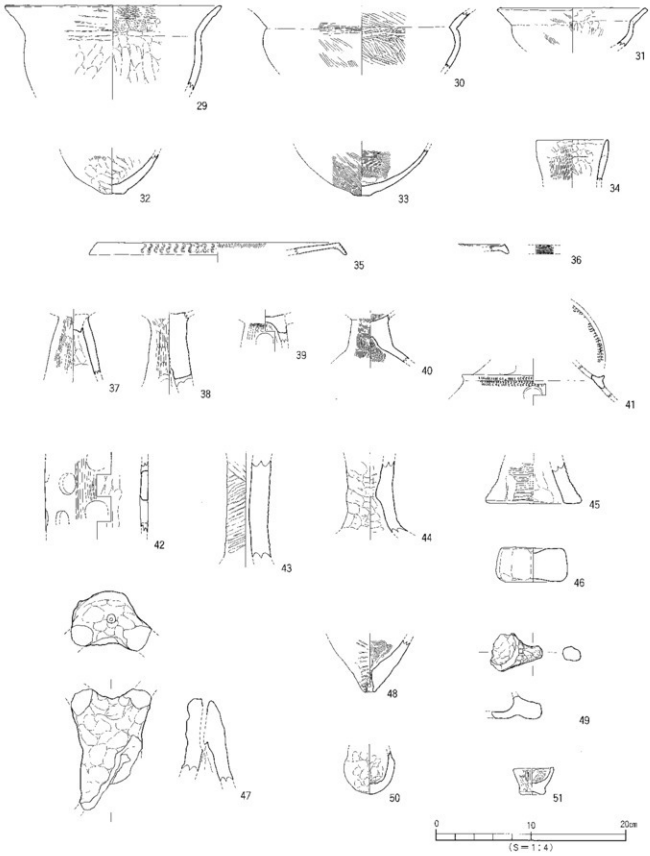
弥生時代後期（Ⅴ－１様式）（第12図）

甕形土器（58・59）58は肩部の張りが弱い。59は「く」の字状口縁。

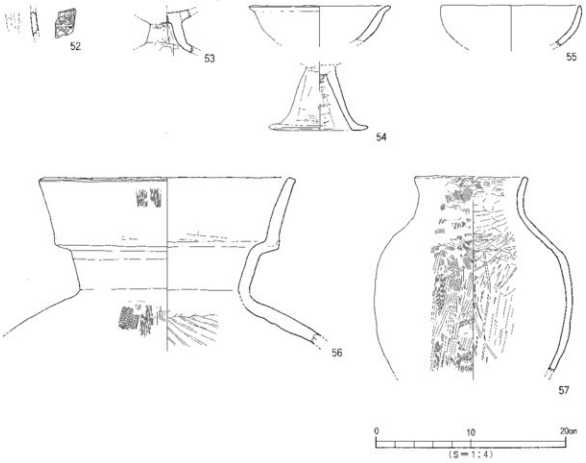
壺形土器（60～64）60・61は口縁部に凹線文を施す。62は短く直立する頸部、水平に開く口縁部。63は長頸壺、頸部に沈線。



第９図　SR1③層出土遺物実測図（２）



第10図　SR1③層出土遺物実測図（3）



第11図　SR1③層出土遺物実測図（4）

鉢形土器（64）大型品、「く」の字状口縁。

弥生時代中期（Ⅲ様式）（第13図）

甕形土器（65～69）65・66は折り曲げ口縁。67は貼付口縁。68・69は口縁下に押圧された凸帯を貼り付ける。

壺形土器（70～76）70・71は外反する口縁部。71は口縁下に凸帯。72・73は口縁部端部に斜格子文。74・75は無頸壺。74は沈線1条と円孔。76は胴部片、凸帯を2条貼り付ける。

ジョッキ形土器（77・78）平底の端部に穿孔。

高坏形土器（79）組合せ技法。

甕形土器（80）くびれの上げ底。

分銅形土製品（81）隅丸方形。顔面の表現なし。

弥生時代中期（Ⅱ様式）（第14図）

壺形土器（82～84）82は波状文と沈線文。83は竹管文と櫛描波状文。84は竹管文と弧状の沈線文。

甕形土器（85）くびれの上げ底。

弥生時代中期（第15図）

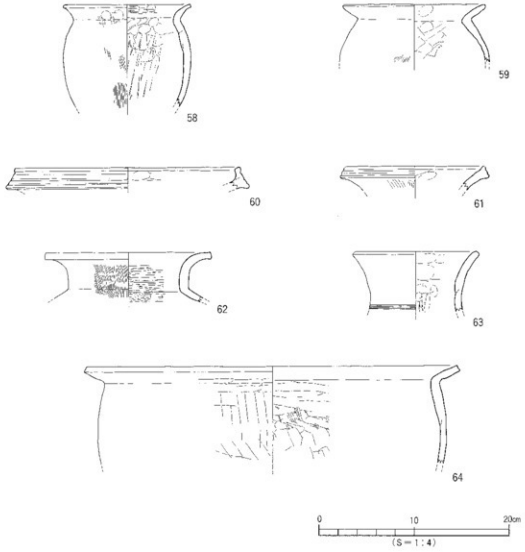
甕形土器（86～93）86～88は折り曲げ口縁、口縁下に沈線文。86は縦方向の櫛描沈線文。88は櫛描沈線文。89は口縁下に櫛描沈線文と刺突文を施す。90～93は貼付口縁下に沈線文。92は櫛描。93は頸部下に凸帯１条と櫛描沈線文を施す。94は胴部片、櫛描沈線文。95はわずかに丸味をもつ平底。

鉢形土器（96）口縁部の小片。

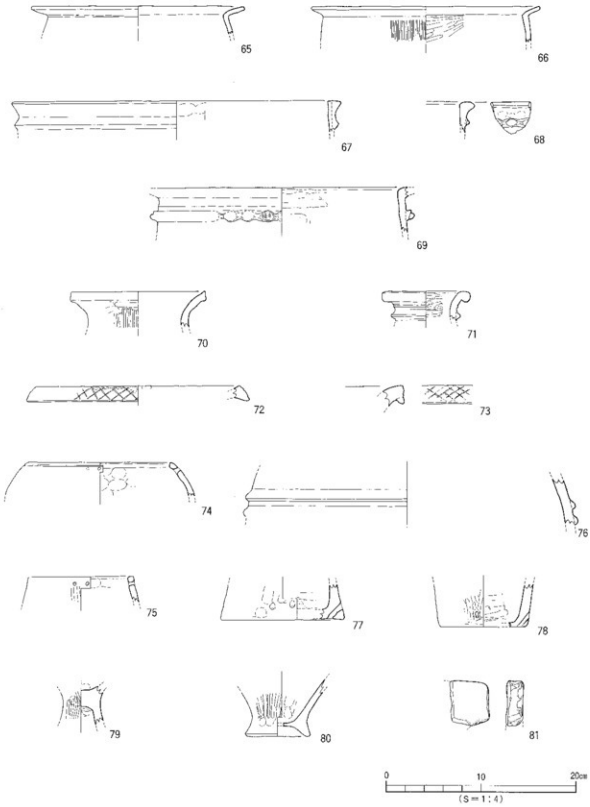
壺形土器（97～108）97・98は外反する口縁部、内面に凸帯を貼り付ける。99は頸部に凸帯を貼り付ける。100は胴部片、凸帯１条と波状文を施す。101～108は胴部片で波状文、刺突文、沈線文、斜格子文を施す。

弥生時代前期（Ⅰ－４様式）（第16・17図）

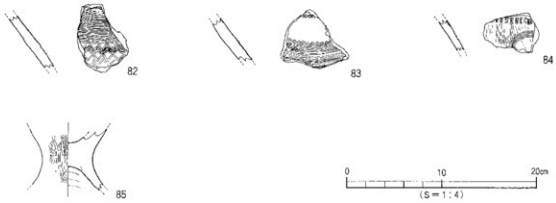
甕形土器（109～118）109～112は折り曲げ口縁。111・112は口縁下に沈線文を施す。113～116は



第12図　SR1 ③層出土遺物実測図（５）



第13図　SR1③層出土遺物実測図（6）



第14図　SR1③層出土遺物実測図（7）

貼付口縁。115・116は口縁下に沈線文を施す。117は口縁下に縦・横方向の沈線文と刺突文を施す。118は口縁下に沈線文と「M」字状の凸帯を貼り付ける。

壺形土器（119～126）119は端面に刻み、内面に凸帯を貼り付ける。120は内面に凸帯、頸部に沈線と刺突文を施す。121～123は外反する口縁部、端部に刻みを施す。124は頸部に刺突押圧された凸帯を貼り付ける。125は胴部片、押圧された凸帯を貼り付ける。126は胴部片、貝殻文を施す。

鉢形土器（127～130）127・128は大型品。口縁部を折り曲げる。129は貼付口縁の小片。130はくびれの上げ底。

甕形土器（131～133）131はくびれの上げ底。132は上げ底（城ノ越式）。133は厚みのある平底。

高坏形土器（134）柱部に凸帯を貼り付ける。

弥生時代前期後半（Ⅰ－3様式）（第18図）

甕形土器（135）貼付口縁。

鉢形土器（136）端部に凸帯を貼り付ける。（無文土器系）

壺形土器（137～144）137は外反する口縁部、頸部に段をもつ。138は外反する口縁部、頸部に2条の沈線文。139は頸部の小片、沈線文を施す。140～142は胴部片。140は沈線文と弧文を施す。141は沈線文。142は弧文を施す。143は厚みのある平底、大分産か。144は平底、外面に3条の貝殻文を施す。

弥生時代前期前半（Ⅰ－1・2様式）（第19図）

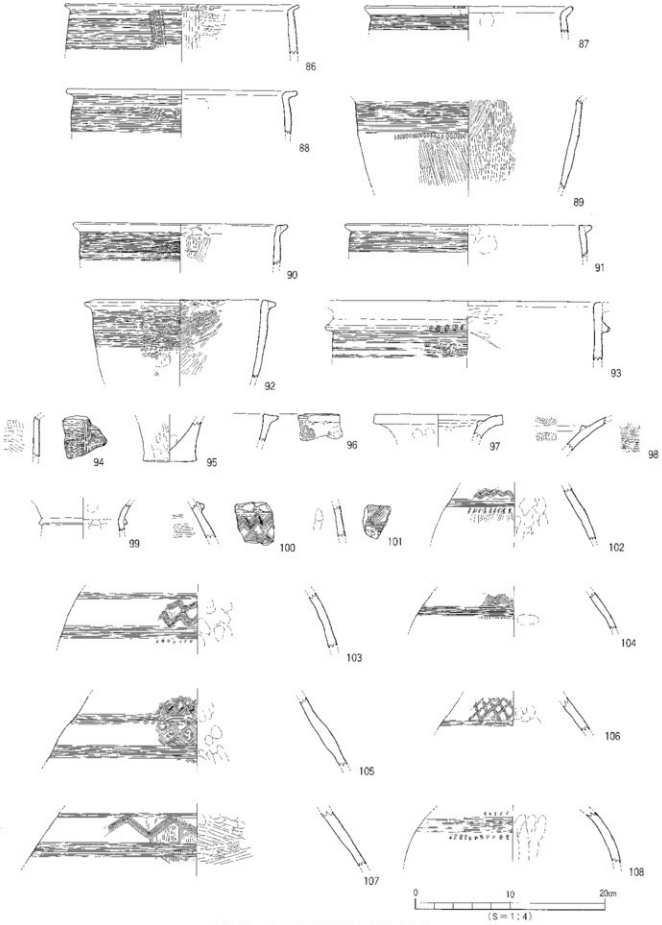
甕形土器（145～147）145・146は口縁部片、口縁部下部に凸帯を貼り付ける。147は屈曲する胴部に刻み目を施す。

壺形土器（148・1479）148は頸部に1条の沈線。149は内傾する太い頸部に沈線を施す。

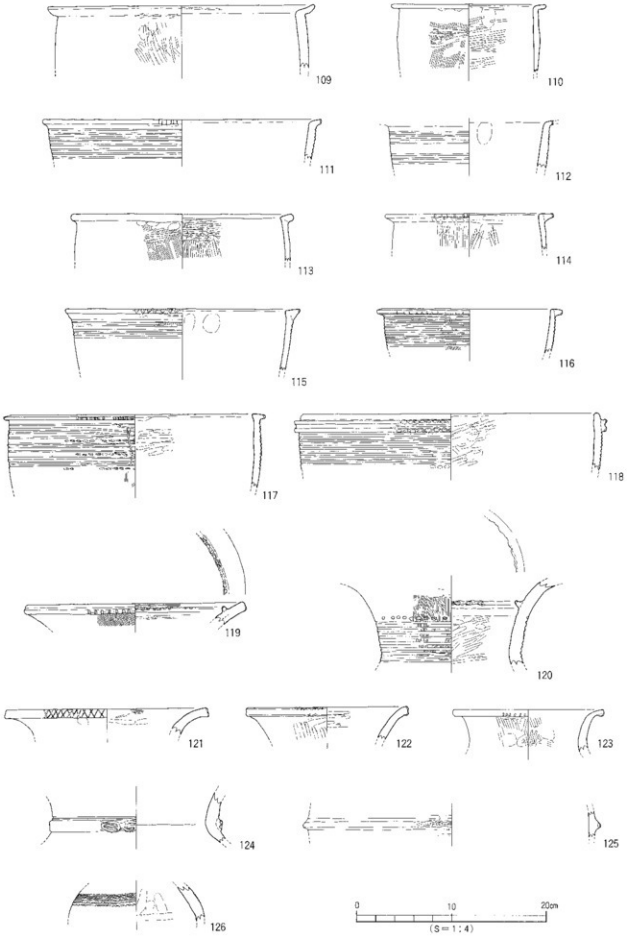
縄文時代～弥生時代前期（第19図）

深鉢（150）直口する口縁部。

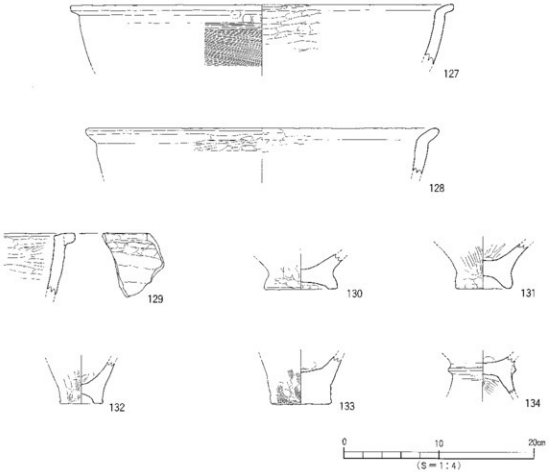
浅鉢（151・152）151は口縁部内面に2条の凹線が巡る。152は胴部が張る。



第15図　SR1③層出土遺物実測図（8）



第16図　SR1③層出土遺物実測図（9）

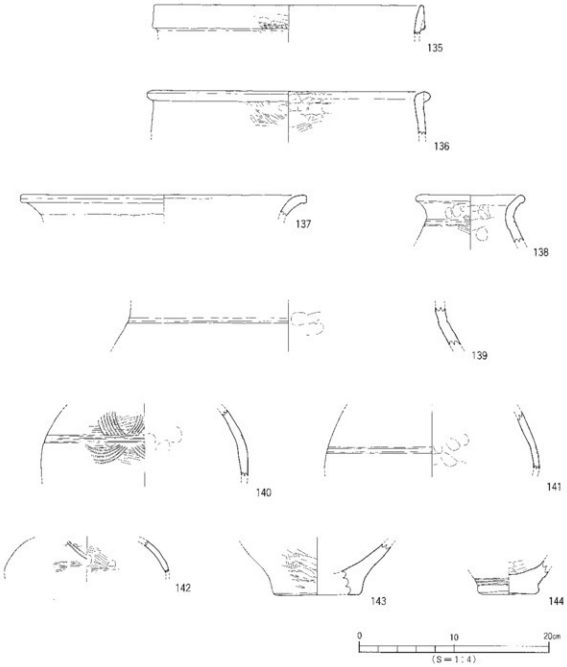


第17図　SR1③層出土遺物実測図（10）

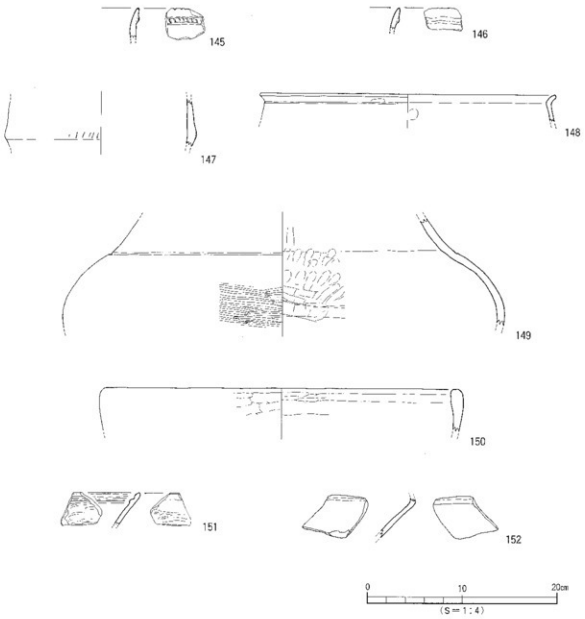
ＳＲ１③層出土石製品（153～204）（第20～26図）

153は石錐。打製の完形品。154～157はスクレイパー。材質はサヌカイト。158は剥片。材質はサヌカイト。159は土掘り具。装着部は欠損している。160～163は石錘。160は細い溝が全周し、幅広の浅い溝が半周する。161・162は側面に抉り。163は打ち欠き礫石錘。164～168は敲石。164・165は完形品。円形で使用痕が顕著。166は楕円形状、欠損しているが使用痕顕著。167は楕円形状、使用痕顕著。168は球形状、欠損している。169は敲・磨石、球形。170～177は磨石。171～173は使用痕顕著。178～181は砥石。178・179は安山岩。180は石英粗面岩。181は仕上げ用。182～186は台石。187～191は石皿丁。187は２カ所の穿孔。188～191は未製品。192・193は石鎌。未製品。194～198は石斧。194は柱状片刃石斧の欠損品。195は刃部が使用により潰れている。197は鑿状片刃石斧。198は扁平片刃石斧。研磨行程の未製品。199は石鎌。200は石器素材。201は扁平片刃石斧の未製品（打製段階）。202は石器素材。203・204は原石。203は紡錘車用か？

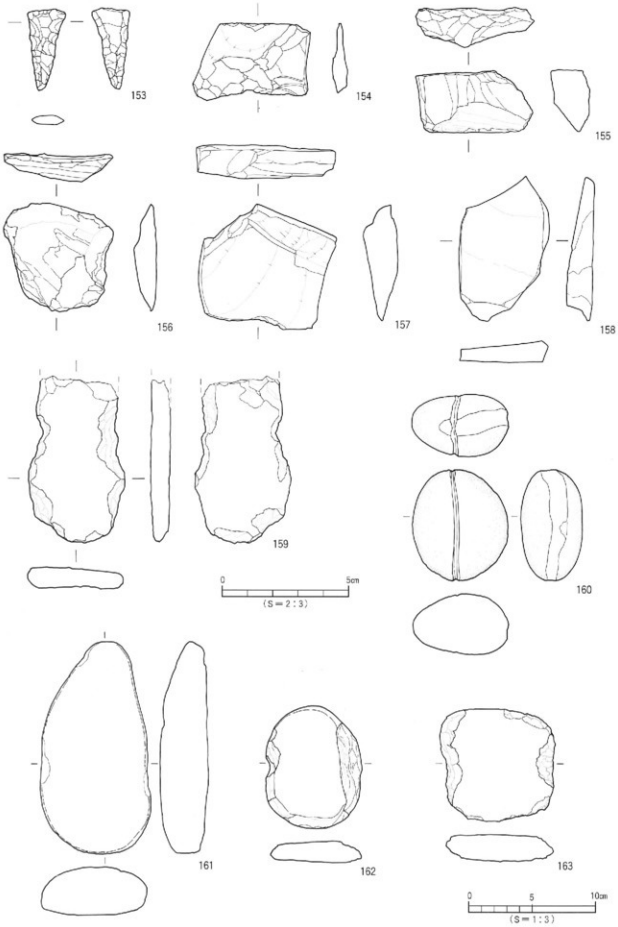
時期：出土した土器の年代と十坑との切り合い関係から弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。



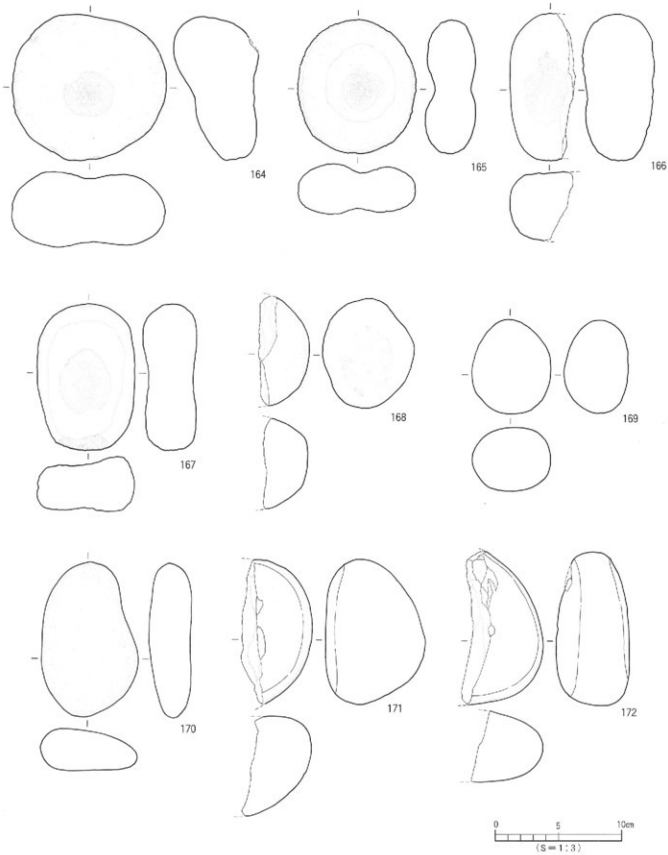
第18図　SR1③層出土遺物実測図（11）



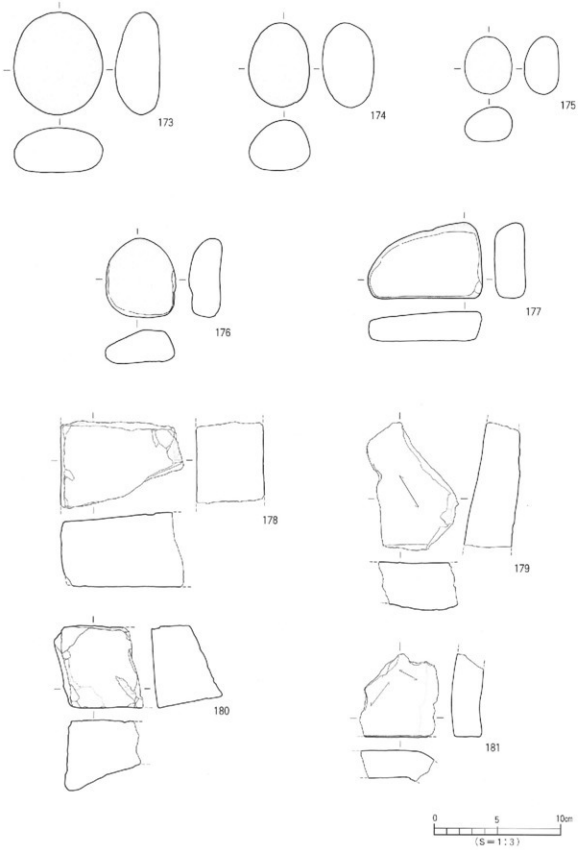
第19図　SR1③層出土遺物実測図（12）



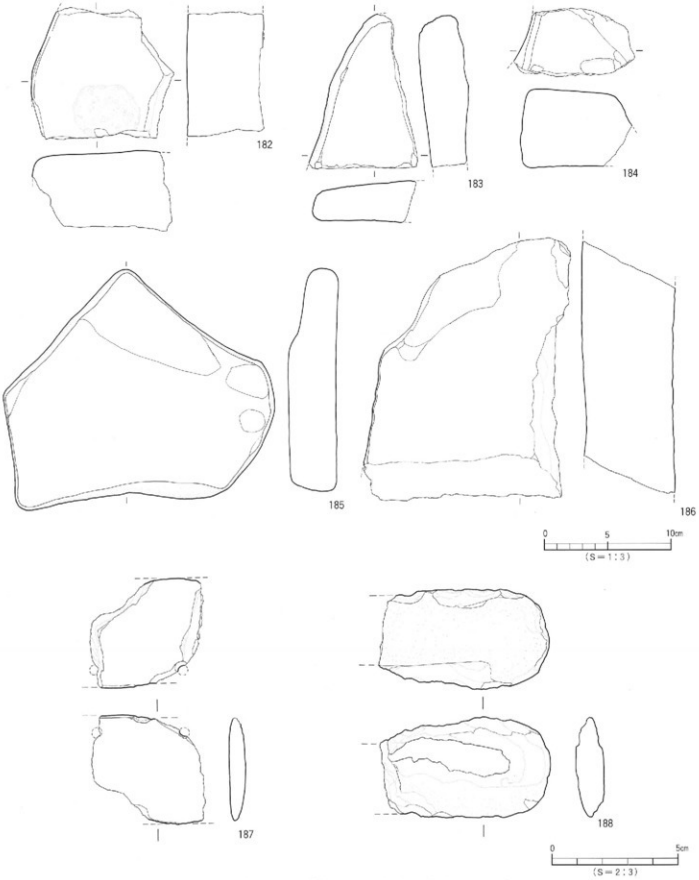
第20図　SR1③層出土遺物実測図（13）



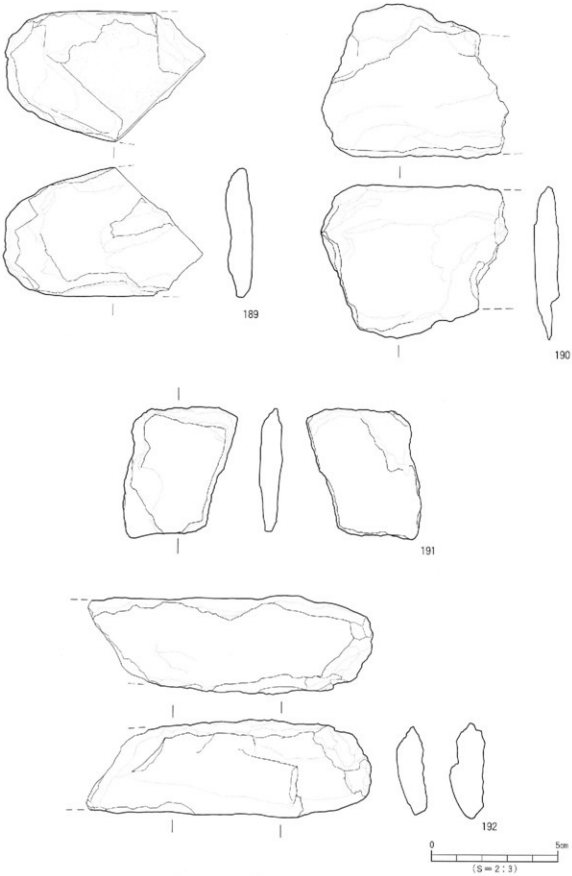
第21図　SR1③層出土遺物実測図（14）



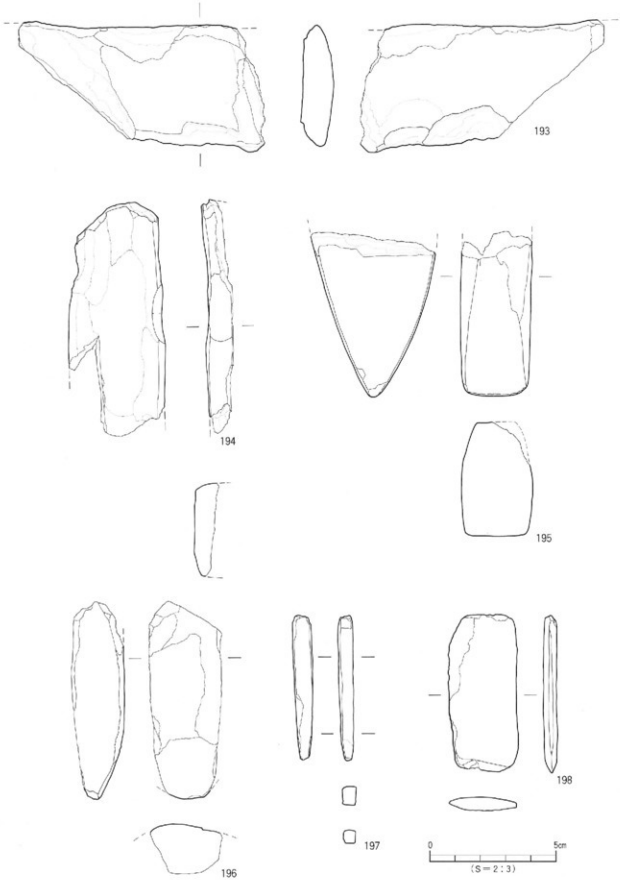
第22図　SR1③層出土遺物実測図（15）



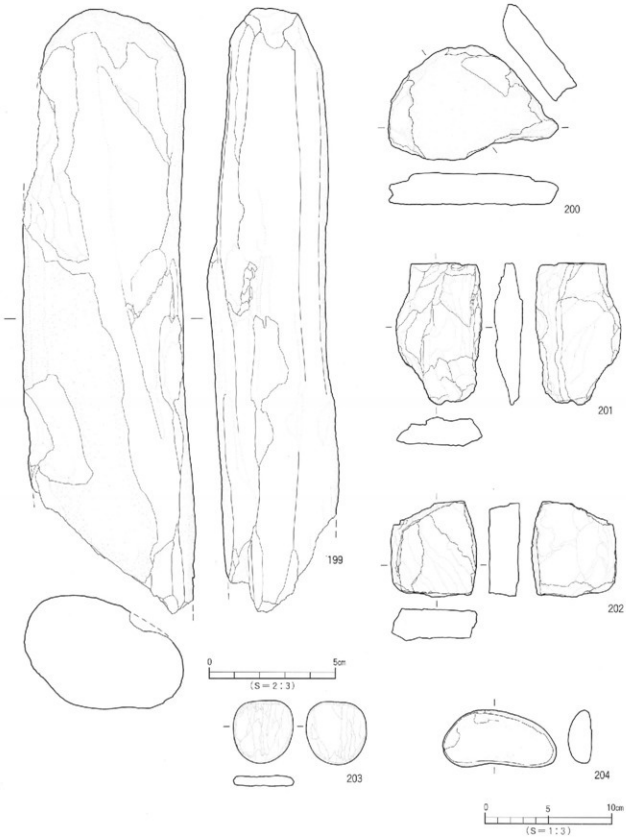
第23図　SR1③層出土遺物実測図（16）



第24図　SR1③層出土遺物実測図（17）



第25図　SR1③層出土遺物実測図（18）



第26図　SR1③層出土遺物実測図（19）

ＳＲ１②層Ｇ６・７区（第28図）

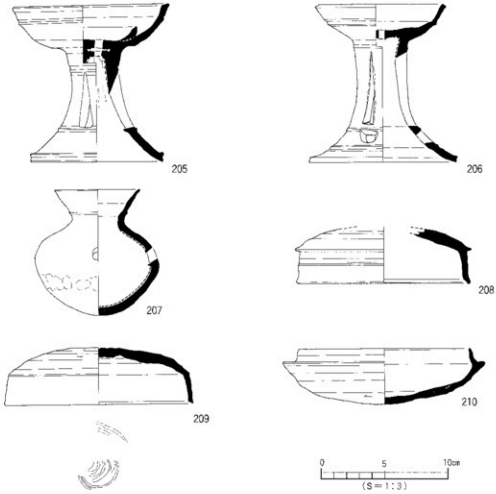
②層掘り下げ中に須恵器の完形品が出土した。このためＧ６・７区は、全ての遺物を残して掘り下げを行うことにした。その結果、Ｇ６・７区は上下に分層される。出土状況は上層では、須恵器の坏蓋と坏身が３点（208～210）出土し土師器は出土していない。下層では、陶質土器の小型器台２点、鼎１点、軟質土器、勾玉１点と土師器が多数出土し、とくに、土師器の器種では高坏形土器とミニチュア土器が多くを占める。小型器台の出土状況はＧ７区に並んで出土した。205は口縁部を下にし脚部は破損していた。破損した脚部は重なりあって出土した。206は完形品で横転した状態で出土した。鼎207は完形品でＧ６区に横転した状態で出土した。

出土遺物（205～267）（第27～32図）

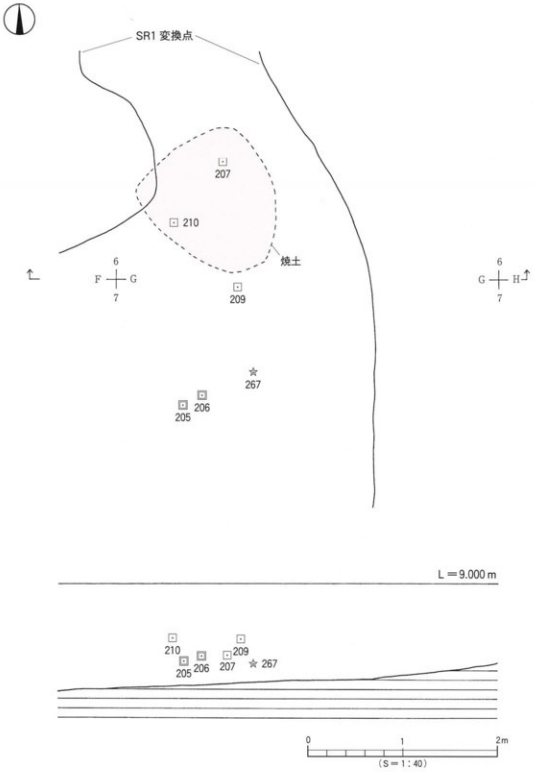
陶質土器　205・206は完形品の小型器台。205は坏内面に凸帯を巡らし中央部に穿孔。脚部は２条の凹線、１条の凸帯、三角形の透かしを施す。206は坏中央部に穿孔。脚部に三角形と半円形の透かし、裾部２カ所に凸帯を施す。

須恵器　207は鼎の完形品。口縁部は外傾し端部は尖り気味。208・209は坏蓋。208は口縁部と天井部を分ける稜は断面三角形状で長い。209は完形品。210は坏身。

土師器　211～214は甕形土器。215～225は壺形土器。226～246は高坏形土器。247は脚。248～



第27図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（１）

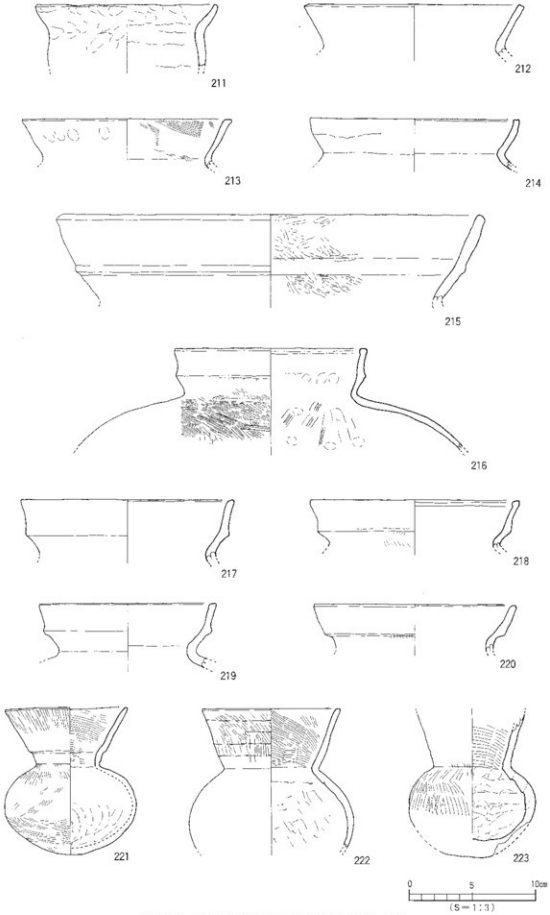


第28図　SR1 ②層 G6･7 区出土遺物配置図

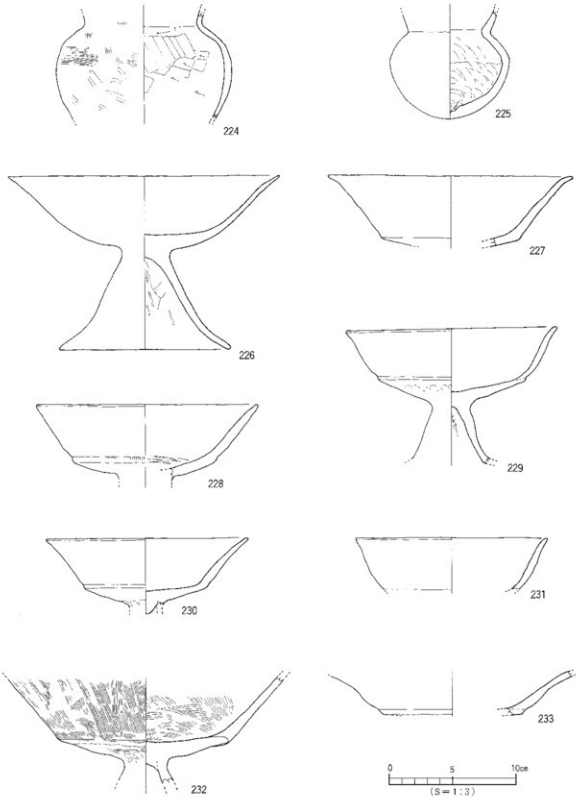
261はミニチュア土器。

軟質土器　262・263は甑。262は短く外反する口縁部。把手がつく胴部に沈線を施す。263は胴部片。264～266は甑か甕の胴部片か？267は勾玉の完形品。

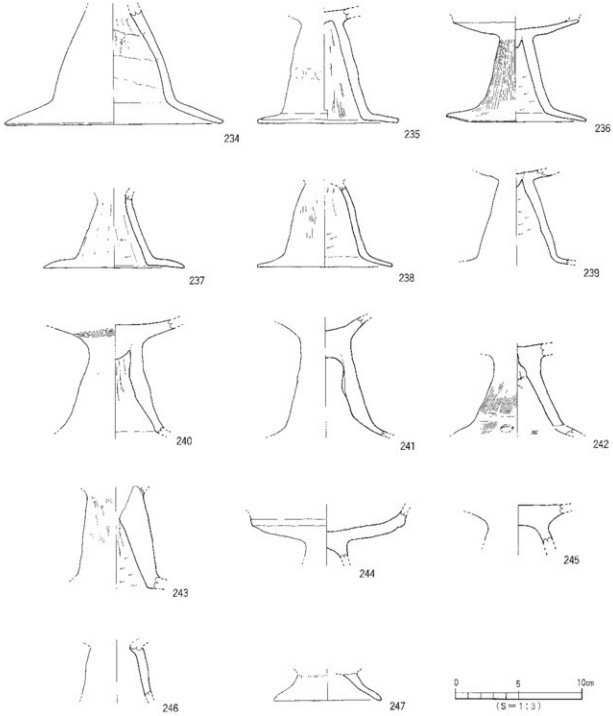
時期：出土した土師器の形態より古墳時代前期と考える。



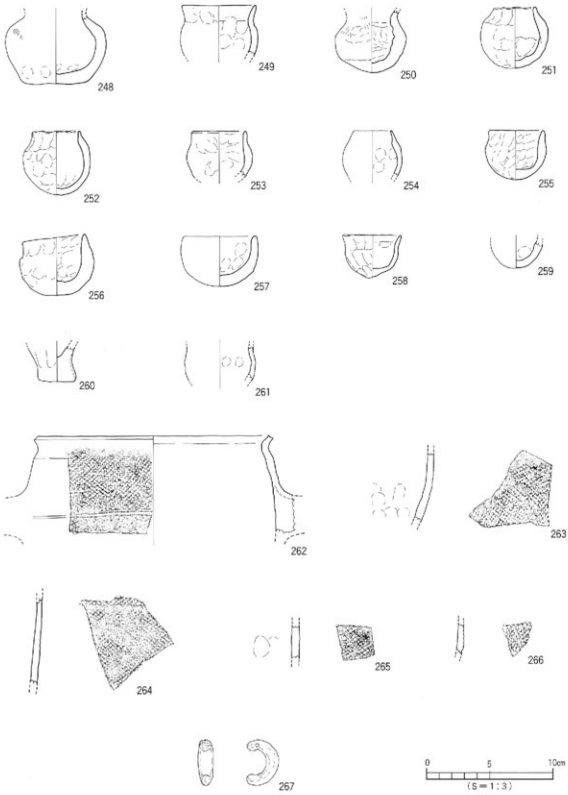
第29図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（2）



第30図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（3）



第31図　SR1②層G6･7区出土遺物実測図（4）



第32図　SR1 ②層G6･7区出土遺物実測図（5）

ＳＲ１②層（第33図）

②層の範囲はＳＲ１内すべてに堆積し、流路の中位に深さ10～85㎝の厚みで堆積している。②層はＳＫ14・22・24との切り合い関係から、上下層に分けることが調査の終盤で判明したが、②層はほとんど掘り下げが終わっていたため分層した遺物の取り上げはできなかった。出土遺物は、土師器、須恵器、陶質土器、朝鮮系軟質土器、ミニチュア土製品、石鏃、石庖丁、石斧、砥石、磨石、敲石、台石、紡錘車、有孔円板、勾玉、管玉、臼玉、杭材、鉄器、骨、歯牙がある。とくに、須恵器の甕、短頸壺は、底部を上に向けた状態で、ＳＲの東岸から多くが出土した。606の甕形土器は肩部から口縁部が②層から出土し、胴部から底部はＳＫ24から出土した。

出土遺物（268～1095）（第34～104図）

土師器（268～474）268～308は甕形土器。268～279は外反する口縁部。280～293は口縁端部が内傾する面をもつ。294～308は口縁外面に線刻を施す。309～352は壺形土器。309～312・316は二重口縁壺。322・323は肩部に線刻を施す。330～340は小型丸底壺か。341～352は手捏品。353は甑。354～397は高坏形土器。398～420は鉢形土器。409は底部に葉脈状の線刻を施す。413は内面に放射状の暗文。421～442は甑形土器。421・422は口縁部。423～426は把手上面に切り込みあり。427～429は把手端面に穿孔。441・442は底部に円孔。443～453は製塩土器。454～474はミニチュア土器。472は線刻あり。473・474は把手か。475は脚。前面部が尖り裾部に凸帯を貼り付ける衝角付冑。476・477・478は短甲。476は中空で押付板が隅丸方形、上部側面と前面に抉りを施す。裾部は摘み出しにより僅かに開く。477は中空で、上部側面と前面に抉り、裾部はくびれて僅かに開く。478は上部と下部を欠失する。上部前面の抉りが残る。479は盾。隅丸の長方形状である。背面に粘土紐による把手を貼り付けている。480は紡錘車。外面に沈線。481～484は土錘。485はふいご（羽口）。486は円筒埴輪。

須恵器（487～741）487～515は坏蓋。516は蓋。高霊タイプか。517～548は坏身。549～552は高坏の蓋。553～604は高坏。566～568の坏部と604の脚部は市場タイプか。605～647は甕形土器。605は底部内面に「十」字の線刻。606は肩部から口縁部がＳＲ出土、肩部から底部はＳＫ24出土。607は頸部に段を持つ。609は縄席タタキ。610は頸部に段を持つ、底部は平坦気味。611～613は器壁が薄い。614・615は格子タタキ。648は把手付鍋。把手は貫通する切り込み、胴部に沈線。649～651は甑形土器。650は胴部に沈線。652～688は壺形土器。653は外面に格子タタキと螺旋状の沈線。655は底部近くに厚みを持ち沈線あり。656～661は口縁部に凸帯が巡る。662は底部が凹む。663は口縁部中位に凸帯を巡らし二重口縁とする。666は頸部に段を持つ。672は底部が平坦で外面は黒褐色。679は外面にタタキが残る。687・688は脚部。689～692は壺蓋。693は坩。694～721は甑形土器。694は外面にヘラ記号。722は把手付埦。723～725は埦形土器。726～741は器台形土器。730は外面に波状文で黒色。737～739は竹管文を施す。741は透かしあり。742～801は軟質土器。781は把手部。端部に穿孔。

縄文土器（802・803）

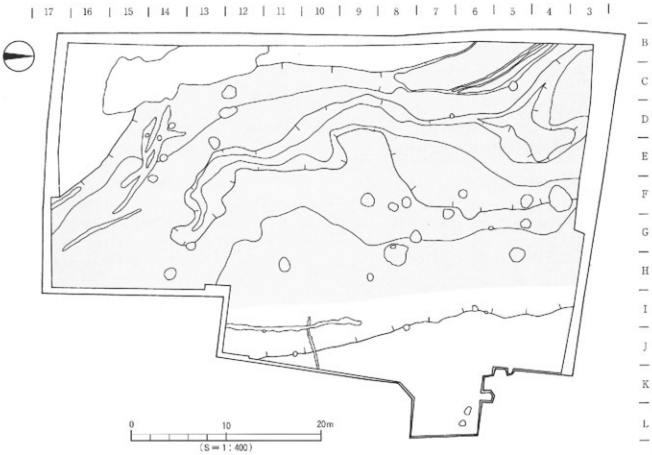
802・803は深鉢の口縁部。803は幅広の沈線文。

弥生時代前期末～中期初頭（Ⅰ－４様式）（804～826）（第74・75図）

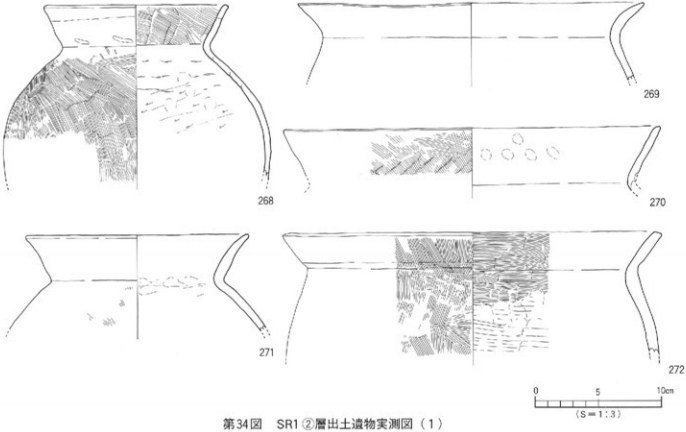
804～811は甕形土器。812～820は壺形土器。821～824は鉢形土器。825は蓋か。826は不明土製品。

弥生前期前葉（Ⅱ様式）（827～843）（第75・76図）

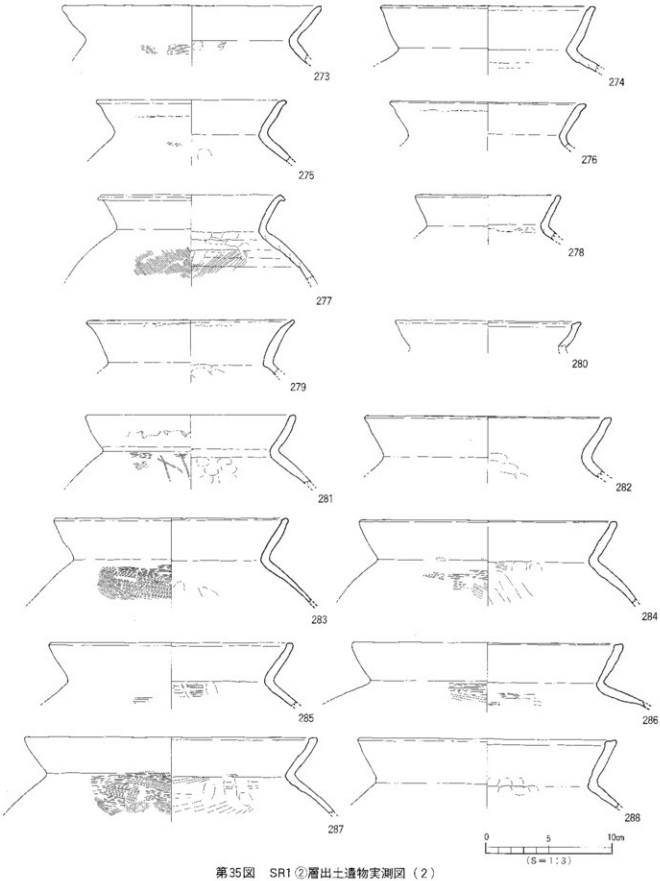
827～831・841は甕形土器。832～836は壺形土器。835は搬入品（安芸）。837・840は高坏形土器。838・839は台形土器。842・843は分銅形土製品。



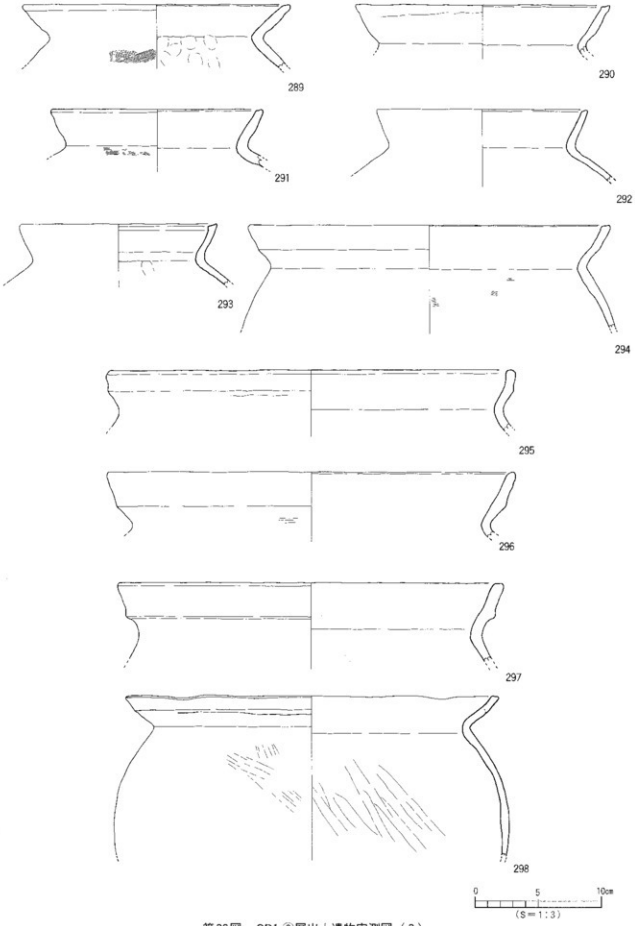
第33図　SR1②層の範囲



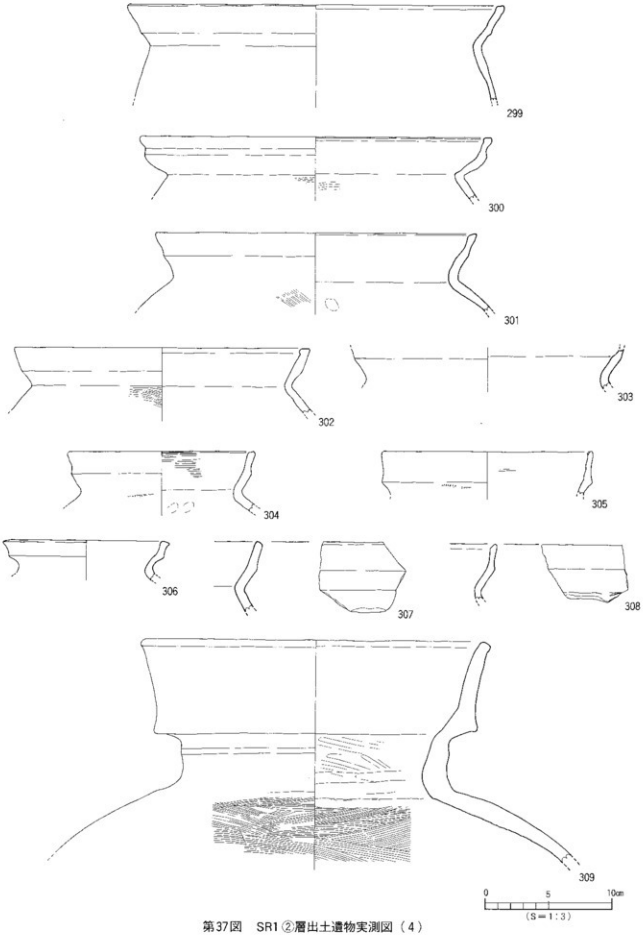
第34図　SR1②層出土遺物実測図（1）



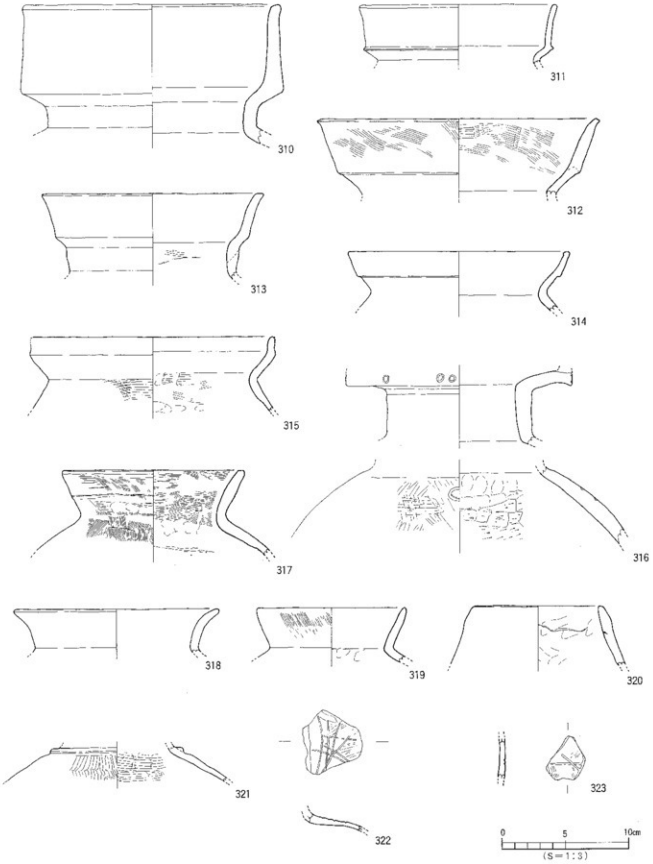
第35図　SR1②層出土遺物実測図（2）



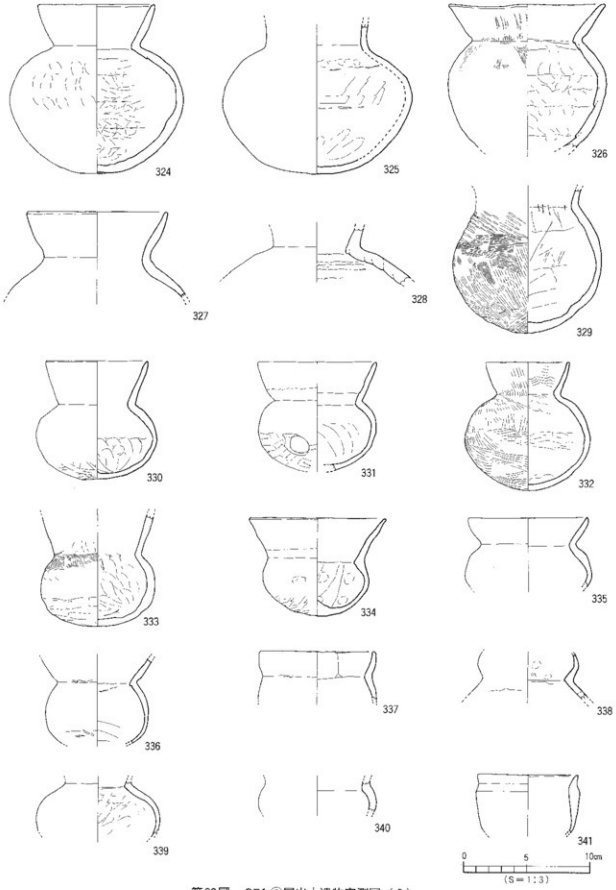
第36図　SR1②層出土遺物実測図（3）



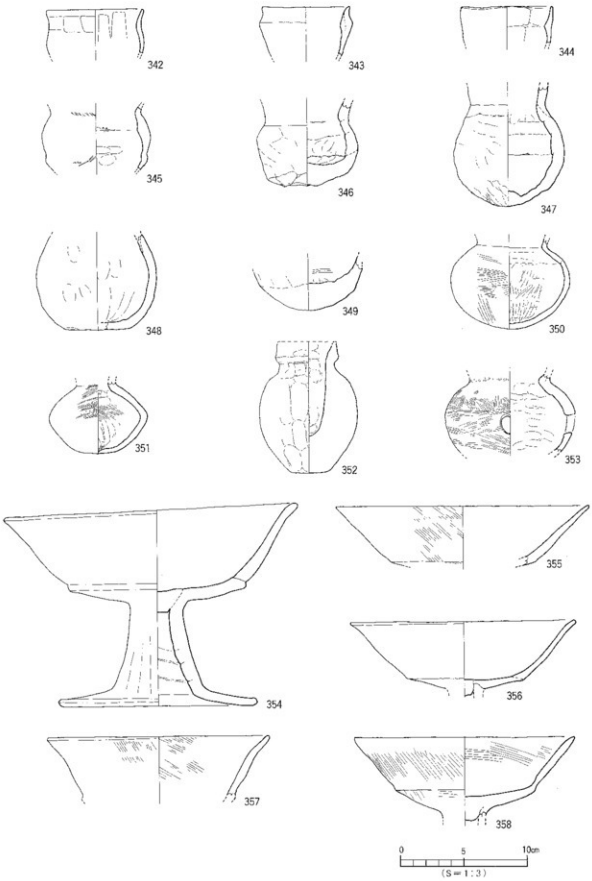
第37図　SR1②層出土遺物実測図（4）



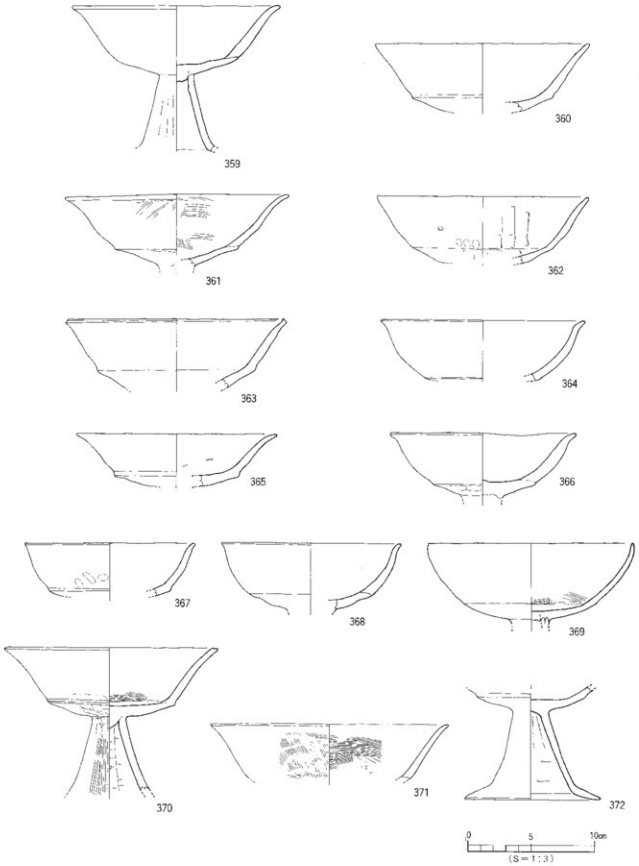
第38図　SR1②層出土遺物実測図（5）



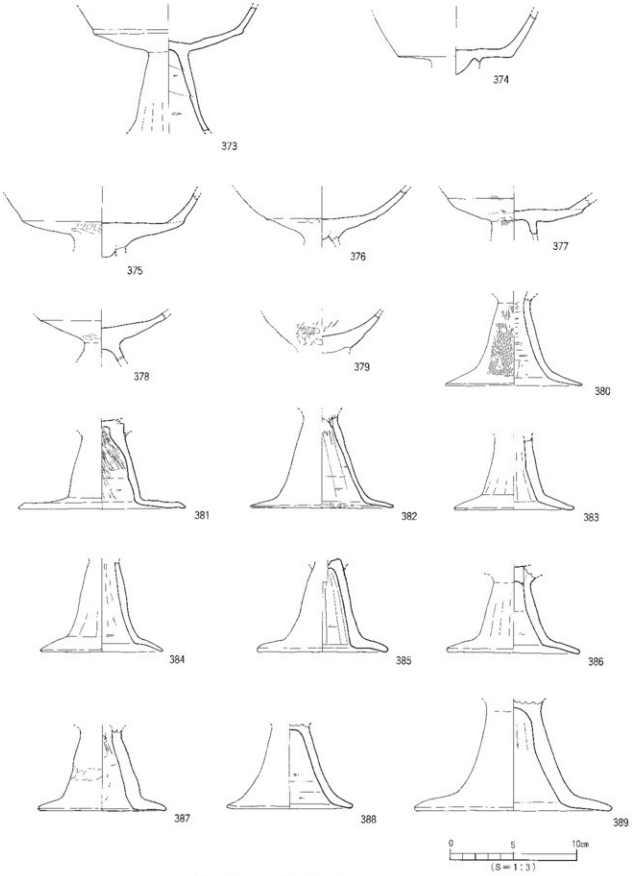
第39図　SR1②層出土遺物実測図（6）



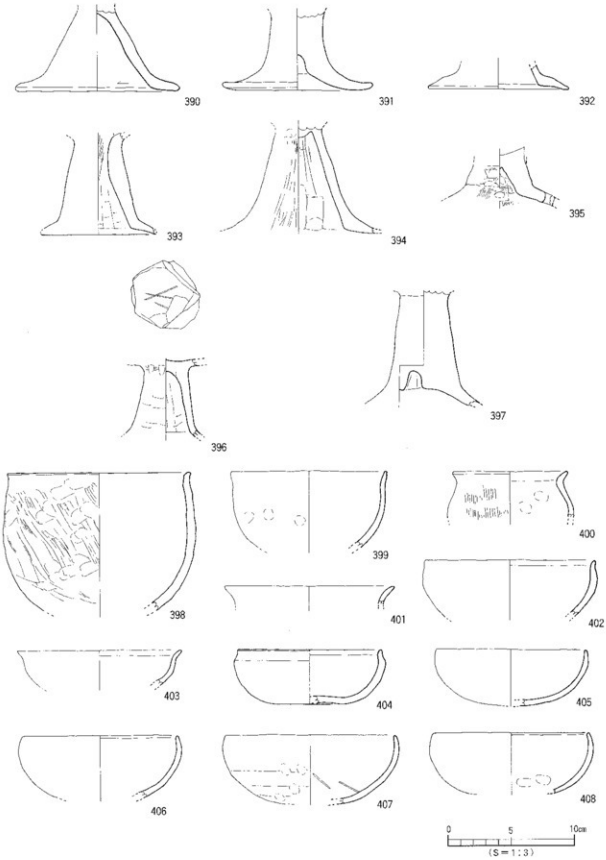
第40図　SR1②層出土遺物実測図（7）



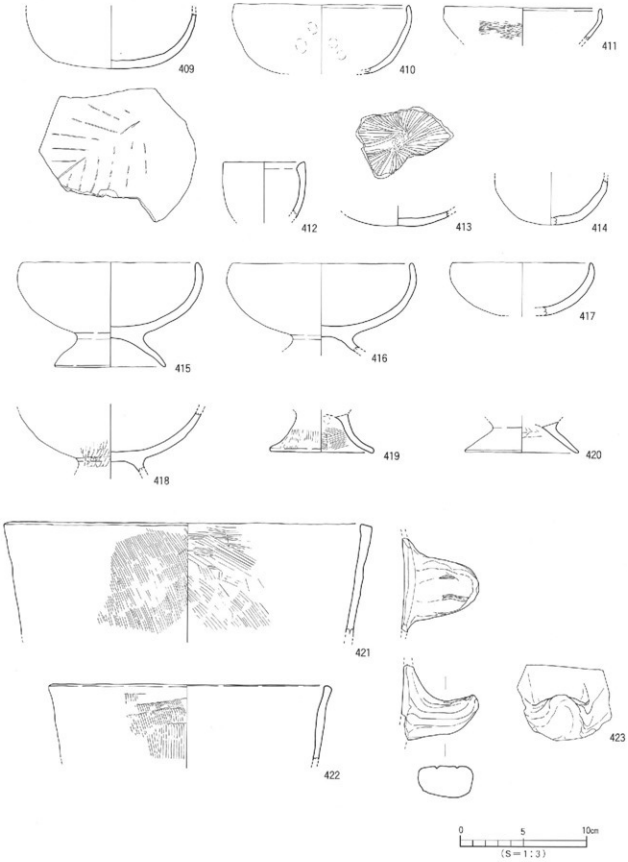
第41図　SR1②層出土遺物実測図（8）



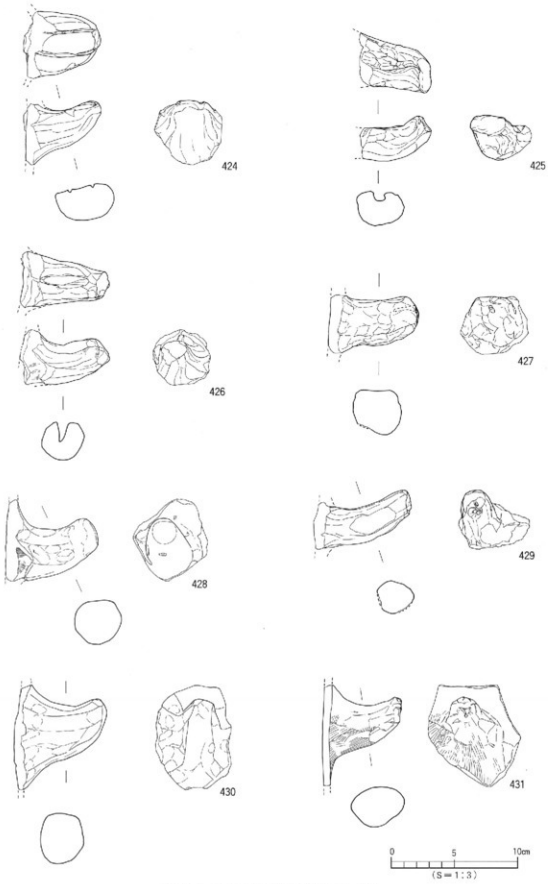
第42図　SR1②層出土遺物実測図（9）



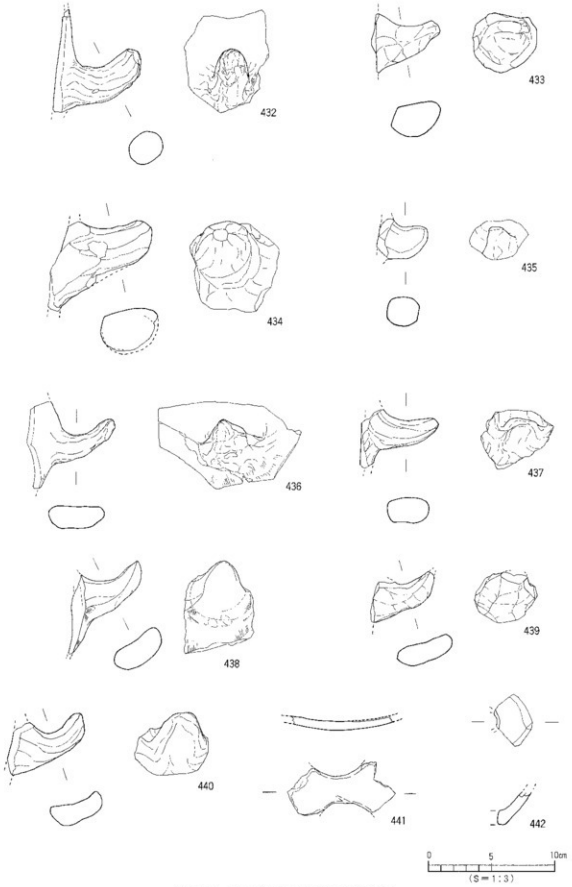
第43図　SR1②層出土遺物実測図（10）



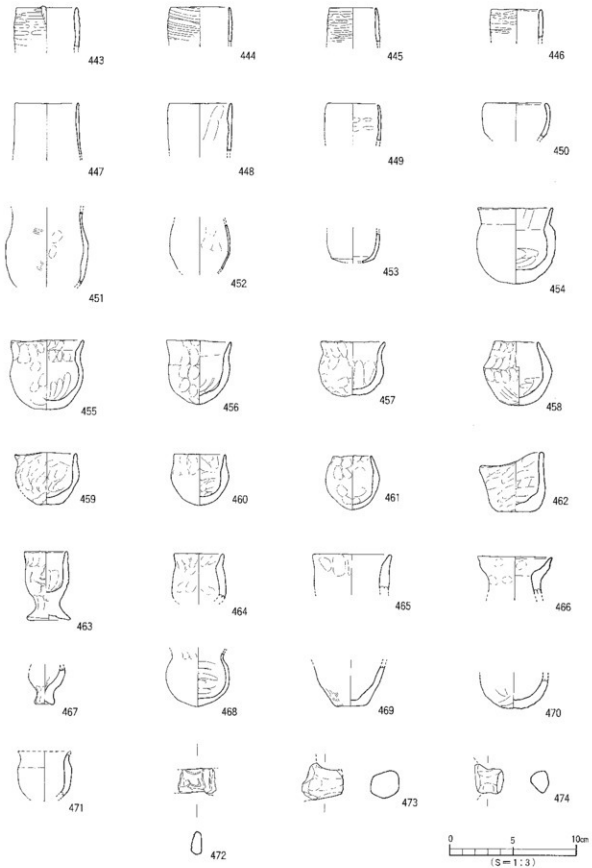
第44図　SR1②層出土遺物実測図（11）



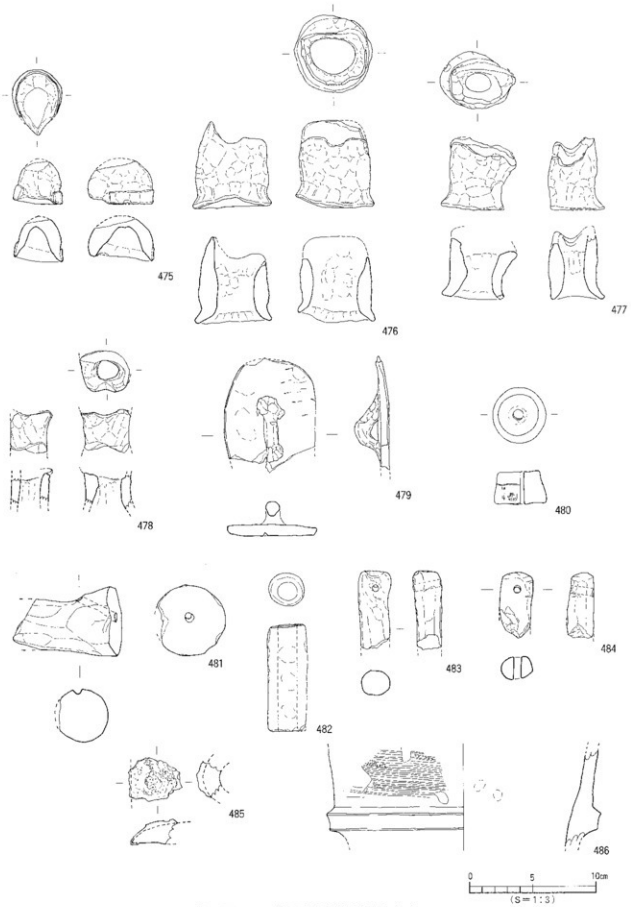
第45図　SR1②層出土遺物実測図（12）



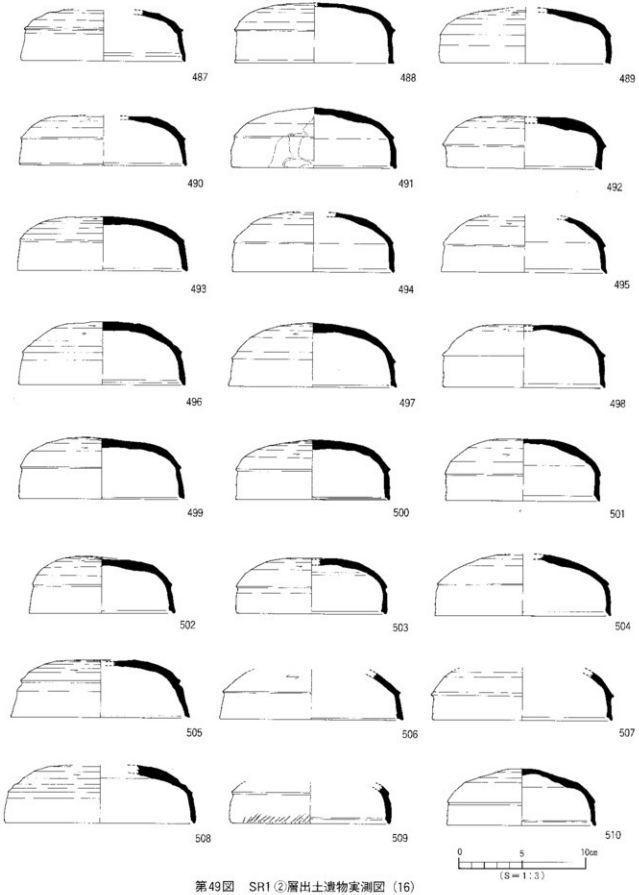
第46図　SR1②層出土遺物実測図（13）



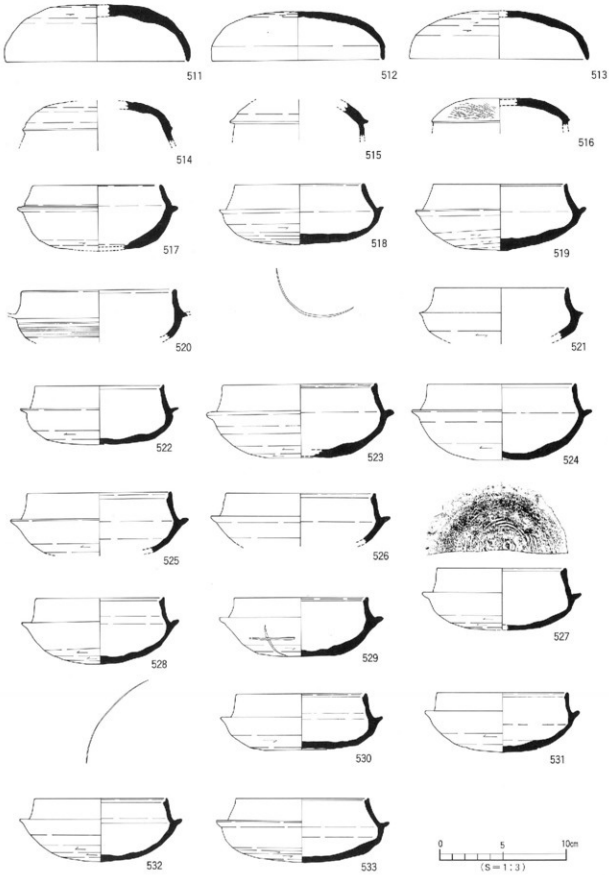
第47図　SR1②層出土遺物実測図（14）



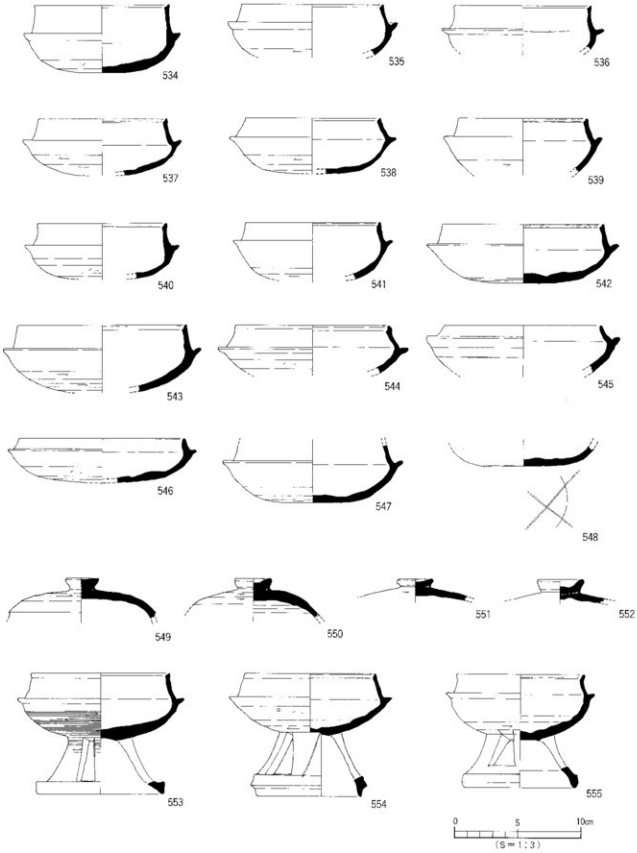
第48図　SR1②層出土遺物実測図（15）



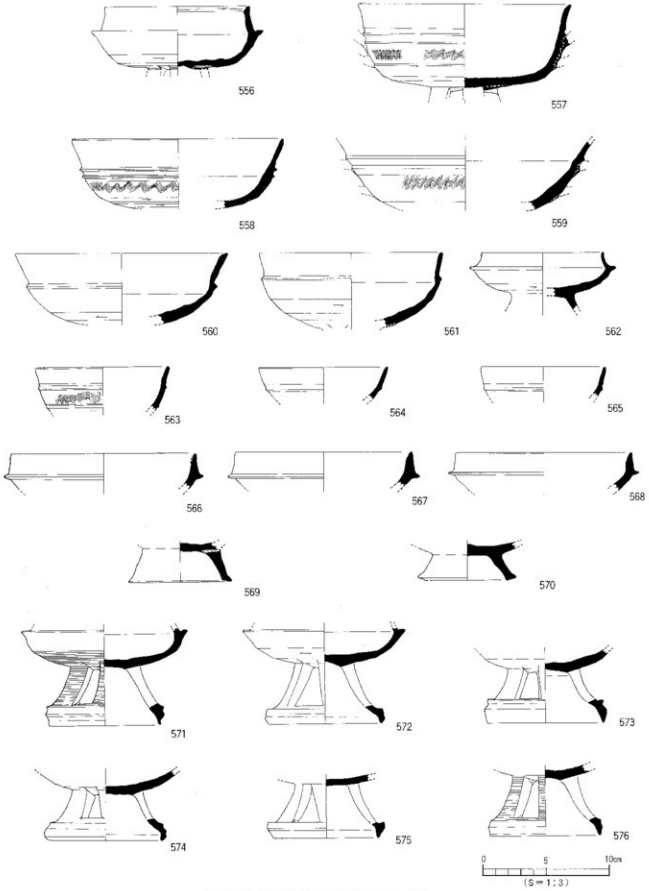
第49図　SR1②層出土遺物実測図（16）



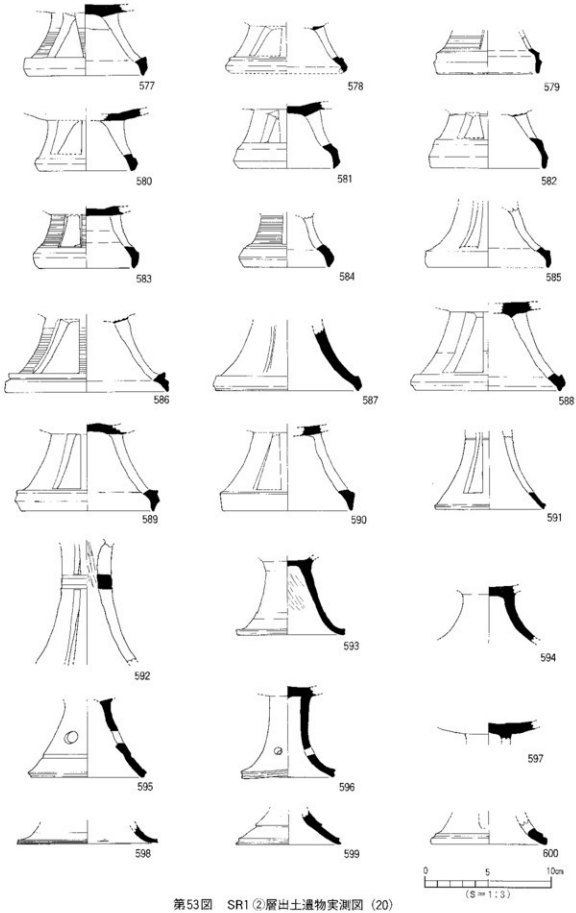
第50図　SR1 ②層出土遺物実測図（17）



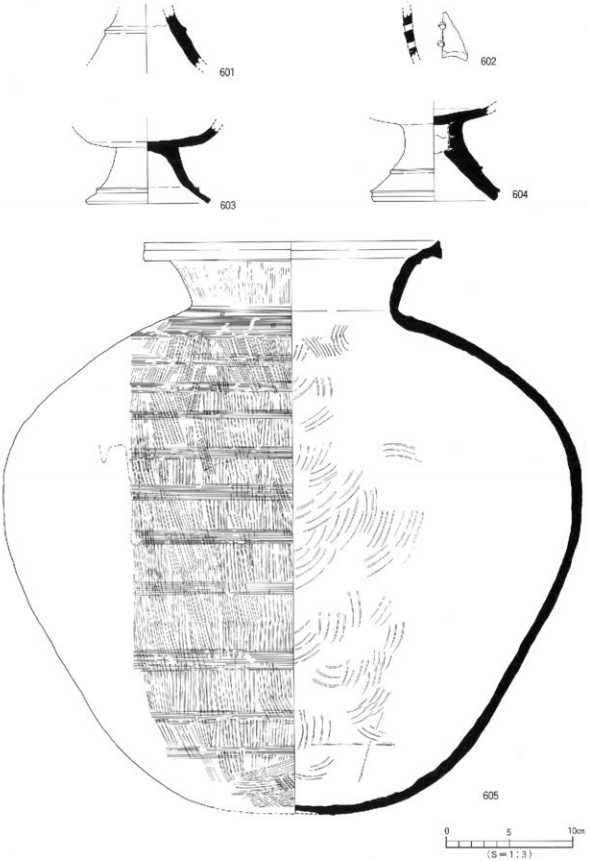
第51図　SR1②層出土遺物実測図（18）



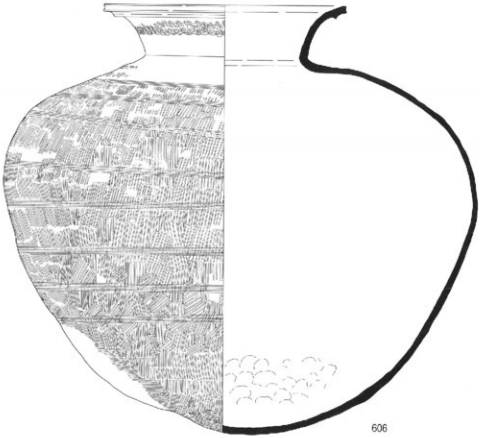
第52図　SR1②層出土遺物実測図（19）

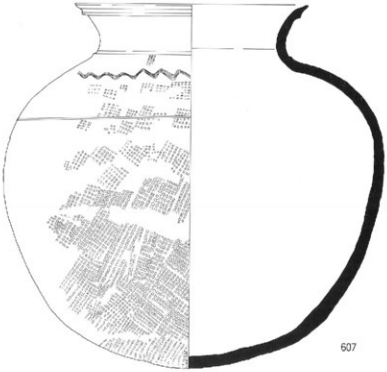


第53図　SR1②層出土遺物実測図（20）



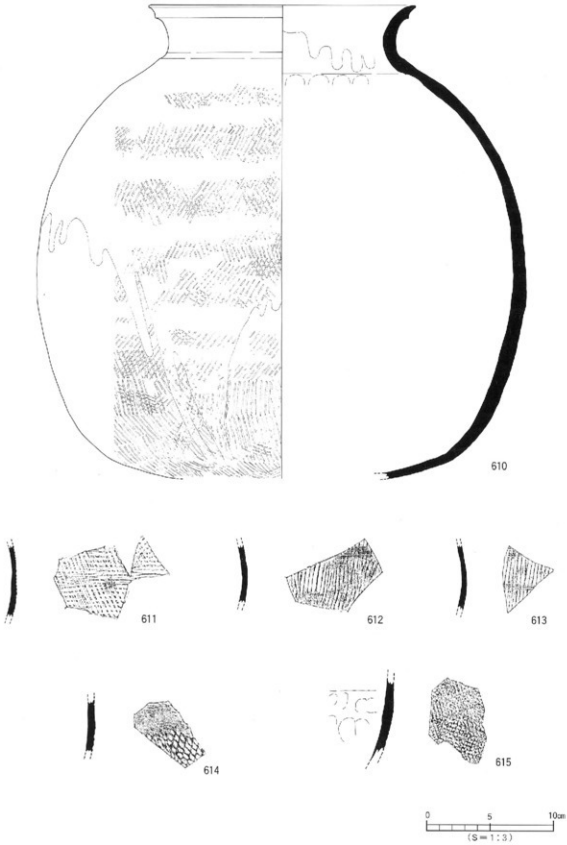
第54図　SR1②層出土遺物実測図（21）



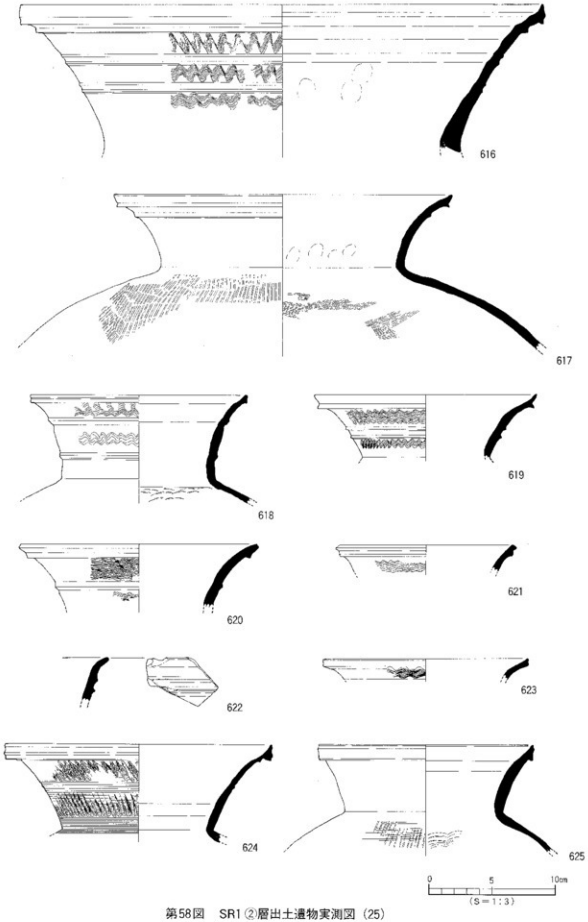


第55図　SR1②層出土遺物実測図（22）

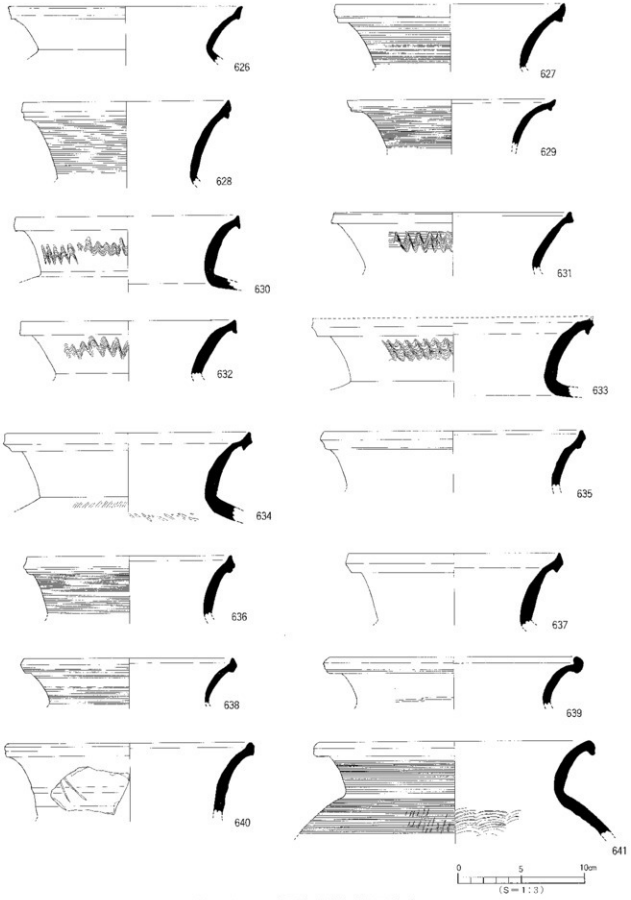
第56図　SR1②層出土遺物実測図（23）



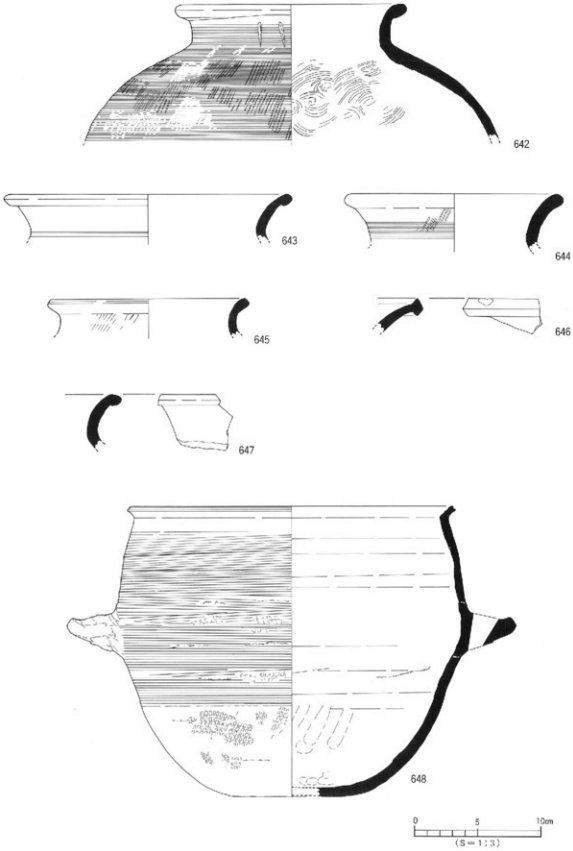
第57図　SR1②層出土遺物実測図（24）



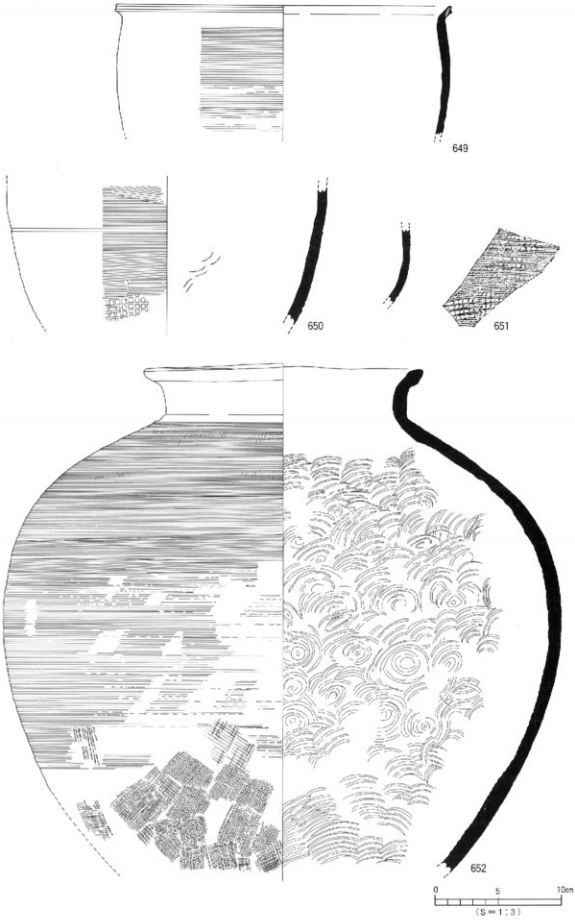
第58図　SR1②層出土遺物実測図（25）



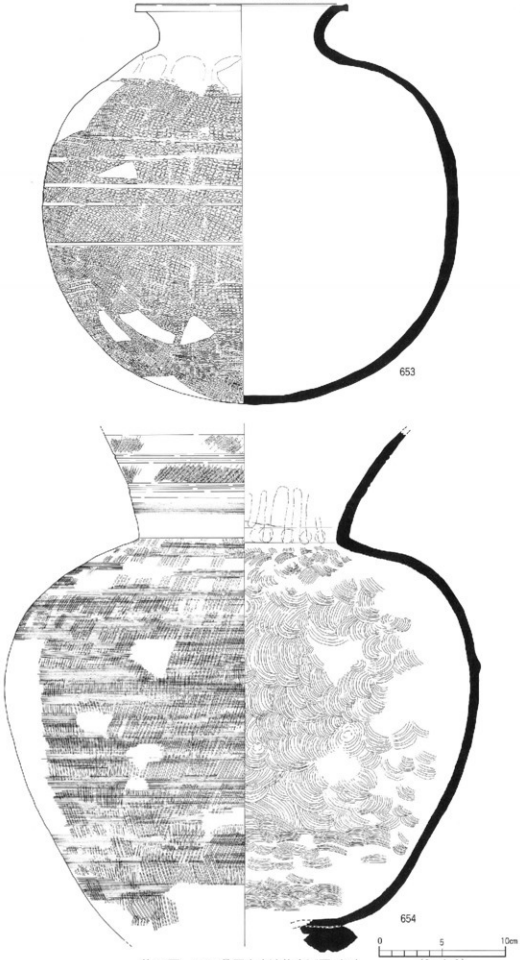
第59図　SR1②層出土遺物実測図（26）



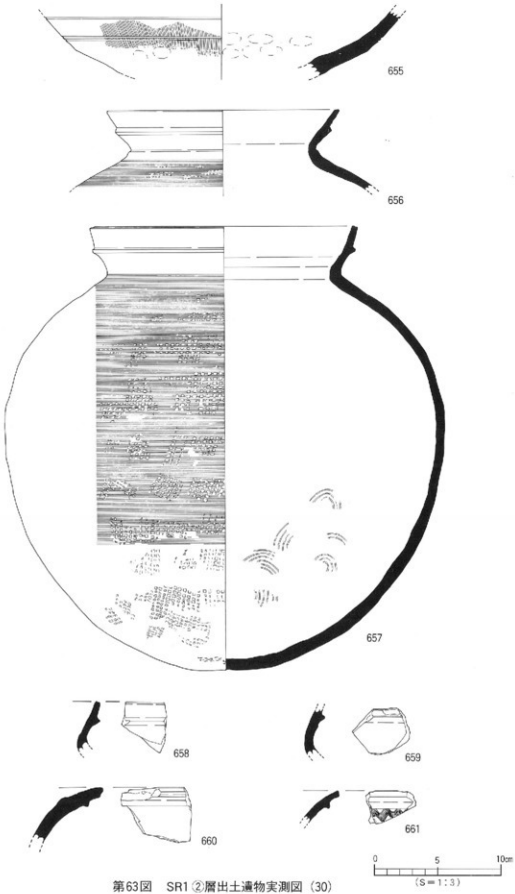
第60図　SR1②層出土遺物実測図（27）



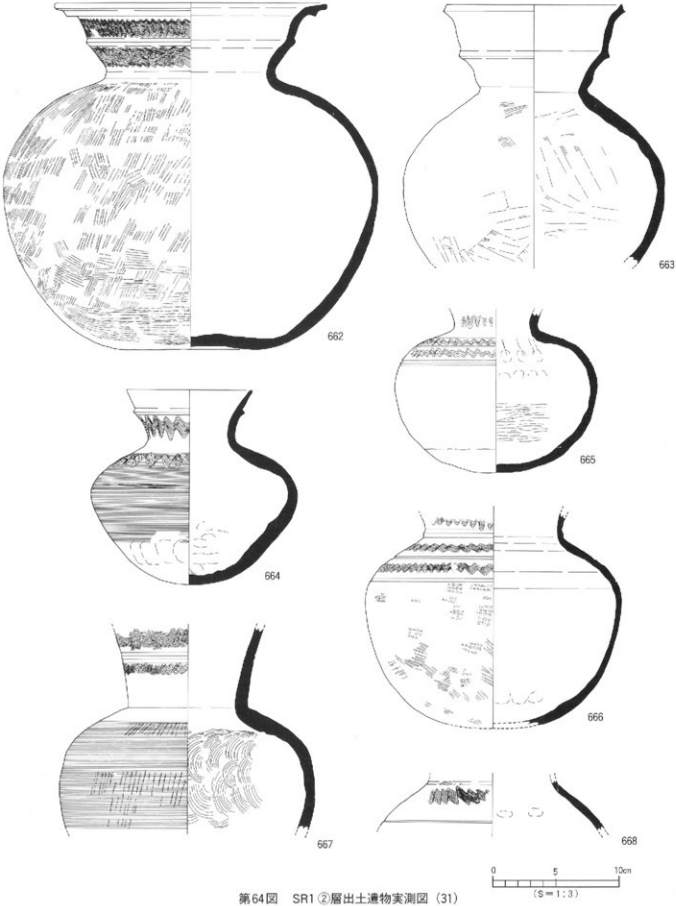
第61図　SR1②層出土遺物実測図（28）



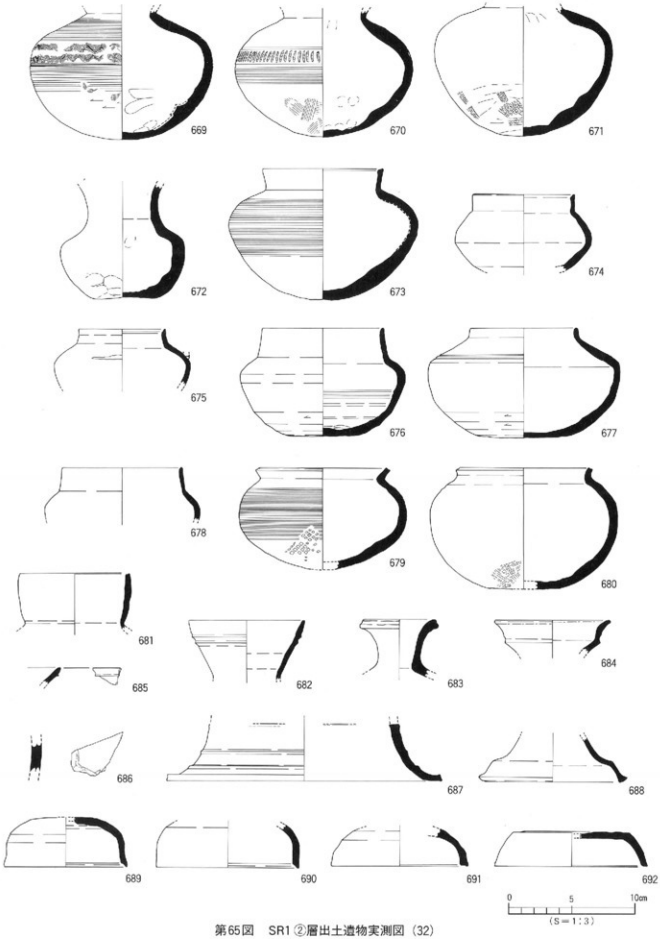
第62図　SR1②層出土遺物実測図（29）



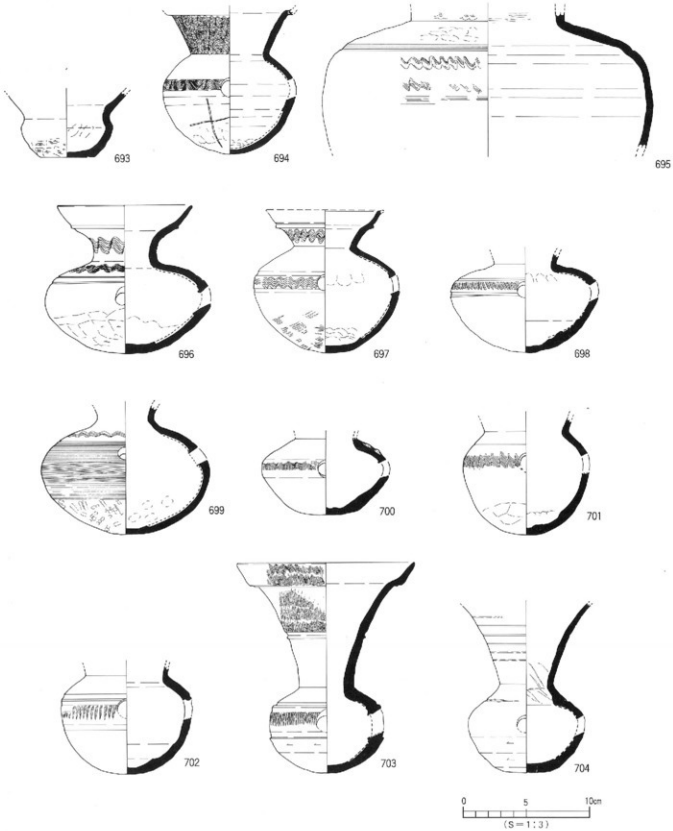
第63図　SR1 ②層出土遺物実測図（30）



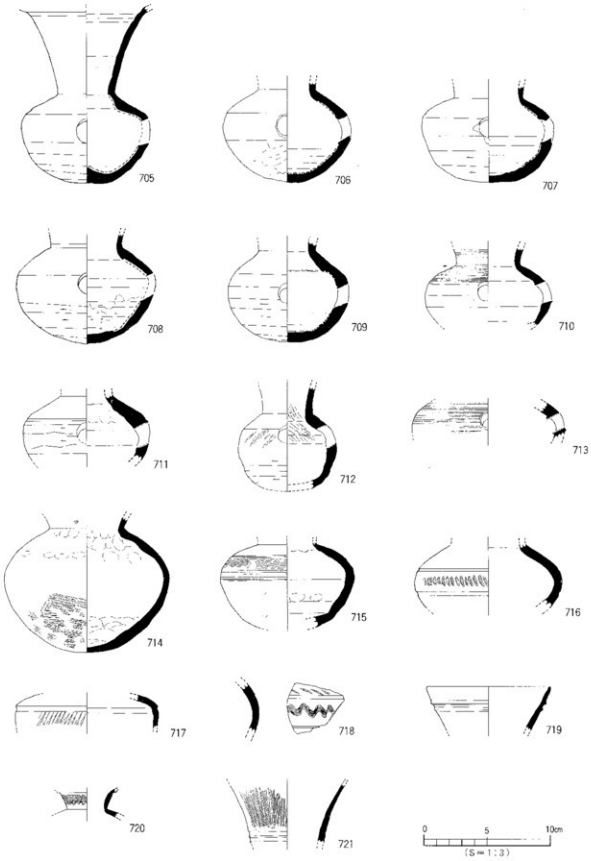
第64図　SR1 ②層出土遺物実測図（31）



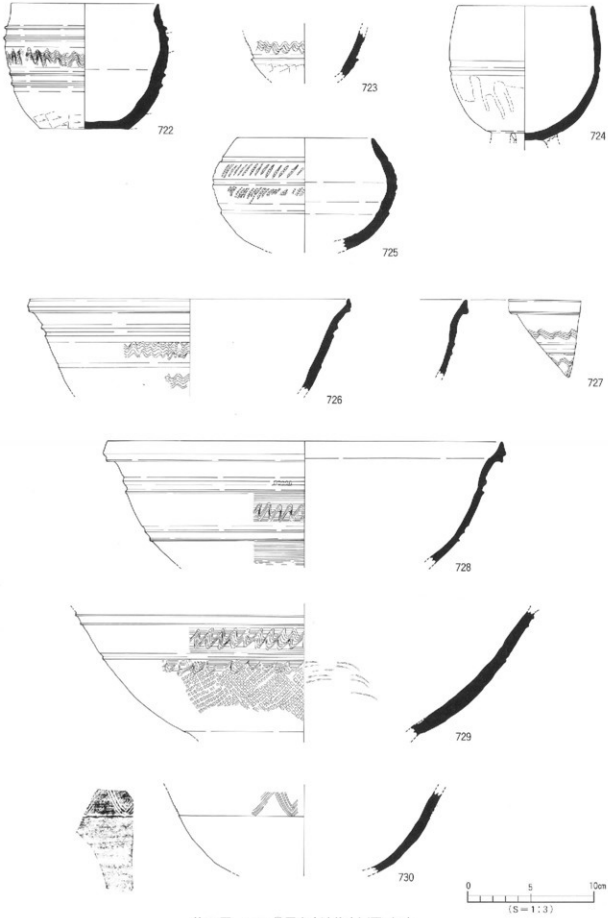
第65図　SR1②層出土遺物実測図（32）



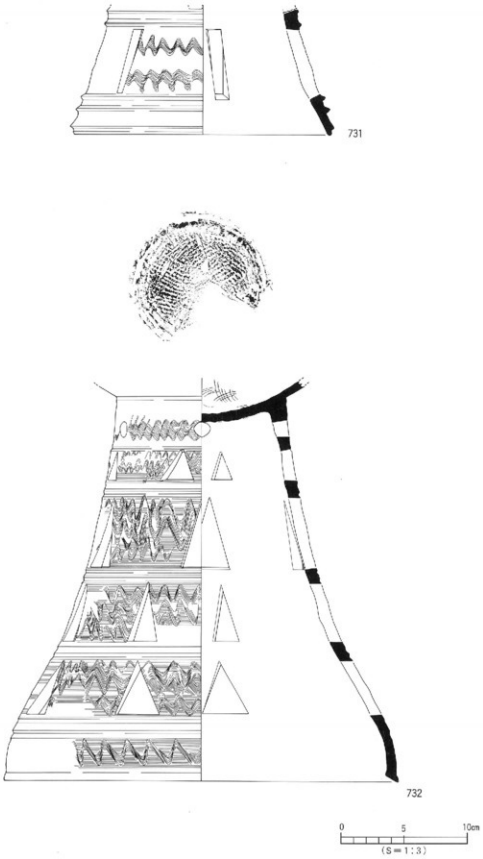
第66図　SR1②層出土遺物実測図（33）



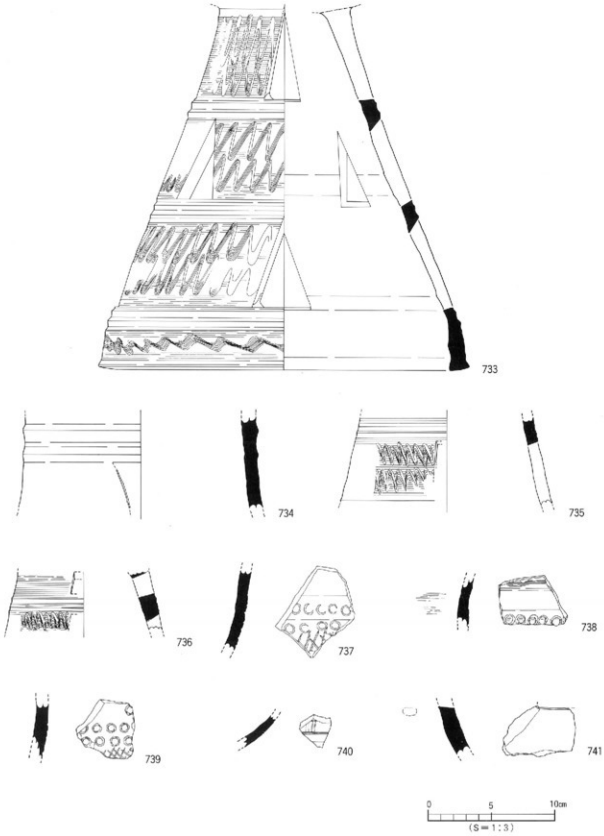
第67図　SR1②層出土遺物実測図（34）



第68図　SR1②層出土遺物実測図（35）

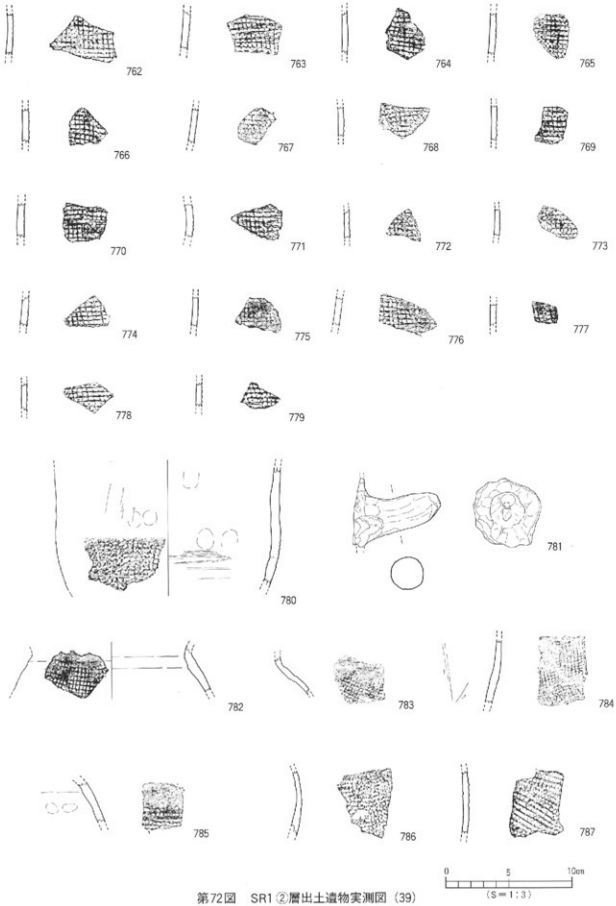


第69図　SR1②層出土遺物実測図（36）

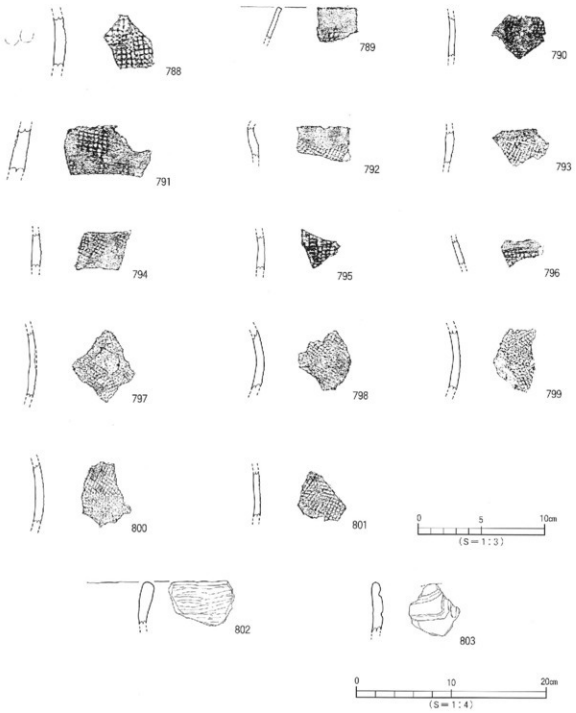


第70図　SR1②層出土遺物実測図（37）

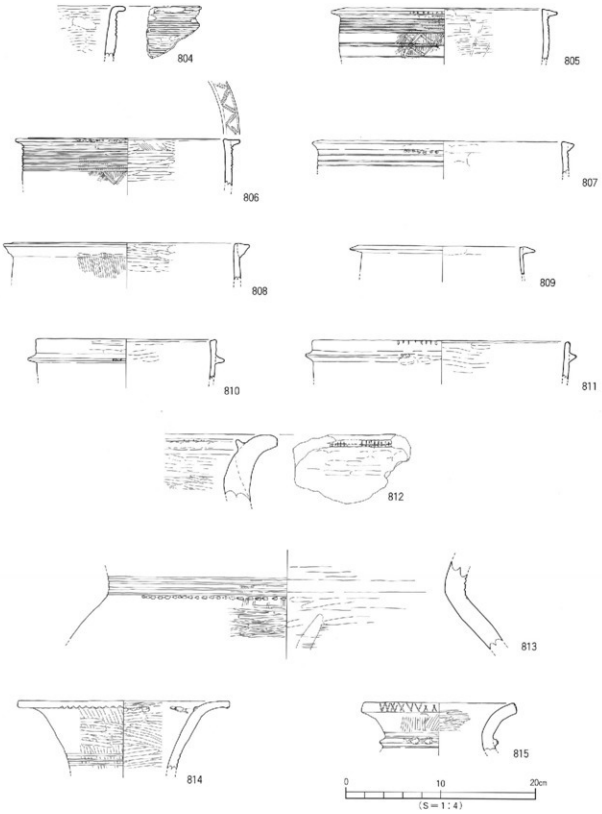
第71図　SR1②層出土遺物実測図（38）



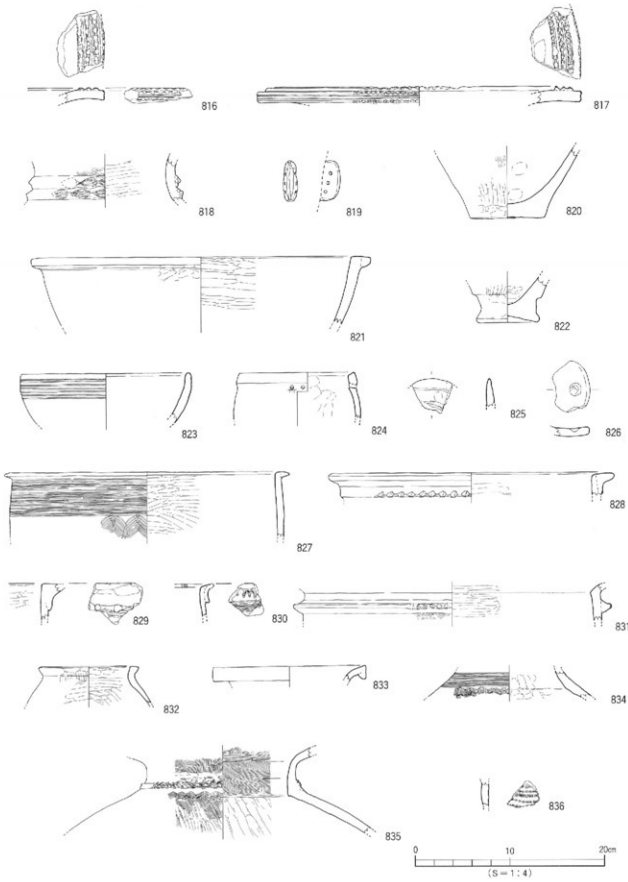
第72図　SR1②層出土遺物実測図（39）



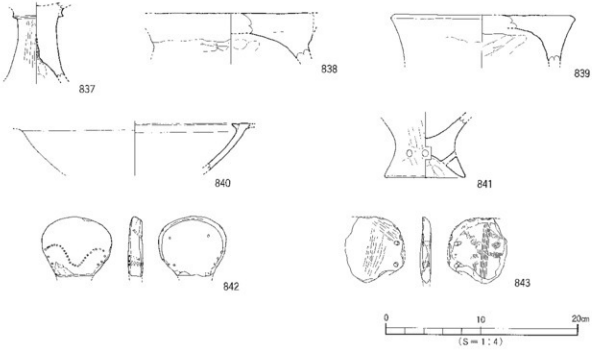
第73図　SR1②層出土遺物実測図（40）



第74図　SR1②層出土遺物実測図（41）



第75図　SR1②層出土遺物実測図（42）



第76図　SR1②層出土遺物実測図（43）

弥生後期（Ⅴ様式）（844～990）（第77～87図）

844～875は甕形土器。874は搬入品（讃岐下川津Ⅳ）。876～927は壺形土器。876～904は複合口縁壺。907～912は口端部を拡張し施文を行う。919～922は長頸壺。928～947は鉢形土器。941は搬入品（讃岐下川津）。香川県以外では出土していない。948～954は高坏形土器。955・956は器台形土器。957・958は甑形土器。959は鼓形土器。960は不明土製品、接合面が残る。961はミニチュア土器。962は注口土器。963・964はさじ形土器。964は把手部。965は分銅形土製品。966～990は支脚形土器。966～971は角状突起を持つ。972～975は中空。976～990は底脚。

ＳＲ１②層出土石製品（991～1087）（第88～103図）

991はスクレイパー。992～996は粗製剥片刃器。997～999は石鏃。1000は砥石。1001～1024は石錘。1025・1026は石棒。1027・1028は男根状石製品。1029～1040は敲石。1041・1043は磨石。1042は敲・磨石。1044～1046は砥石。1047・1048は台石。1049～1056は石庖丁。1057～1059は石鎌。1060～1062は石剣。1063～1068は両刃石斧。1069～1073は柱状片刃石斧。1074～1079は紡錘車。1074と1078は上部に加飾する。1080は有孔円板。1081は勾玉。1082は残核。1083は板状剥片素材。1084～1087は原石。

ＳＲ１②層出土装身具（1088）（第103図）

1088は垂飾品。材質は骨で2³カ所の穿孔が残る。

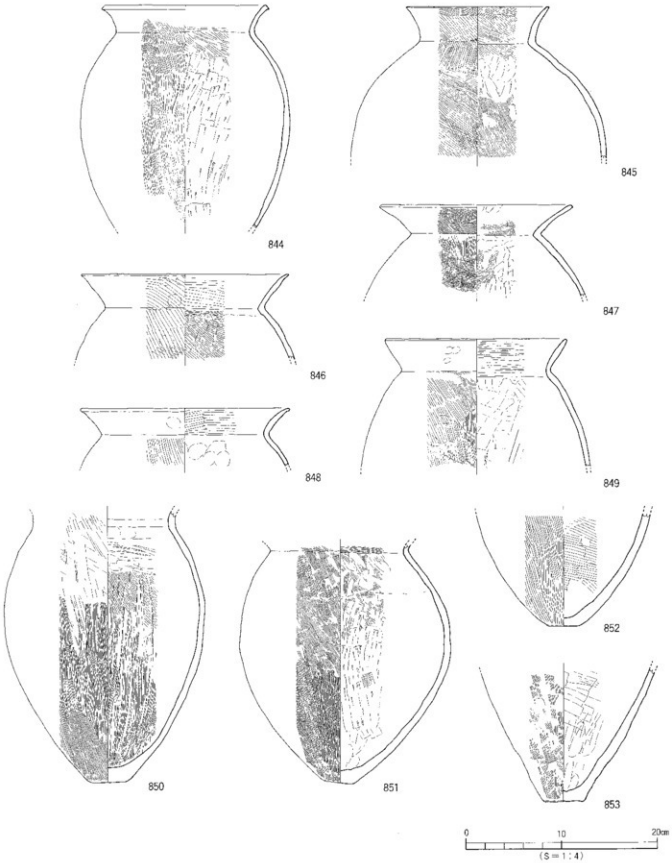
ＳＲ１②層出土木製品（1089～1092）（第104図）

1089・1090は板材。1091・1092は杭。

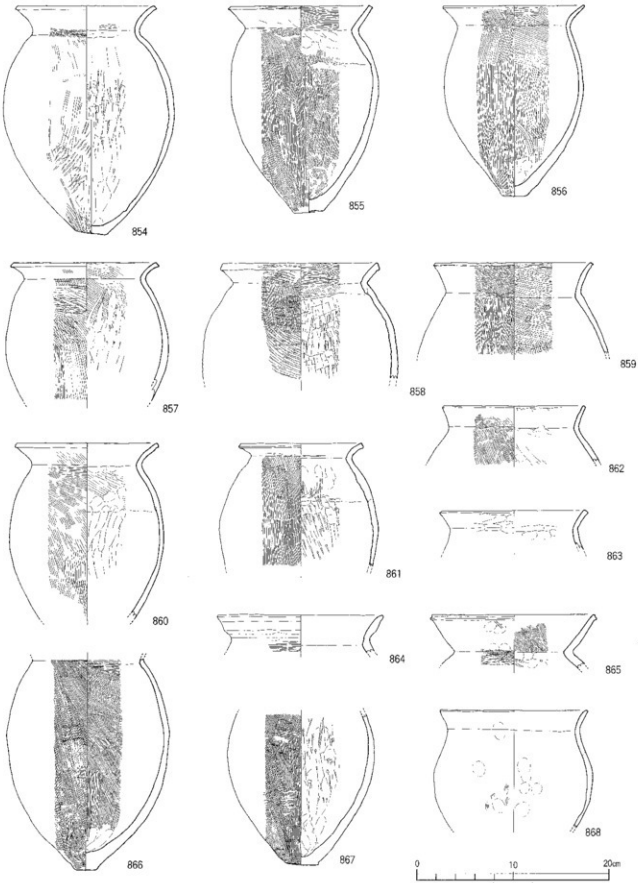
ＳＲ１②層出土鉄製品（1093～1095）（第104図）

1093は鉄刀。1094は不明品。1095は鉄鏃。

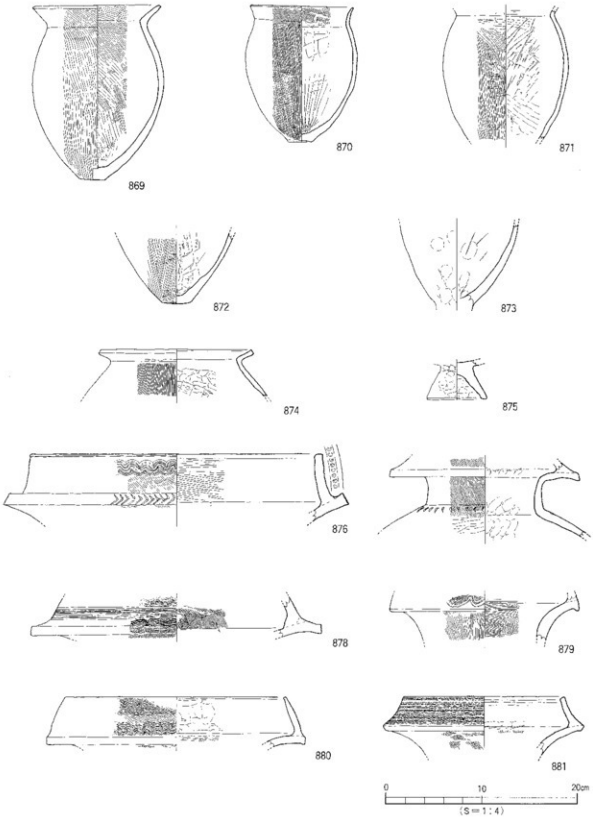
時期：出土した須恵器の年代から古墳時代中期とする。



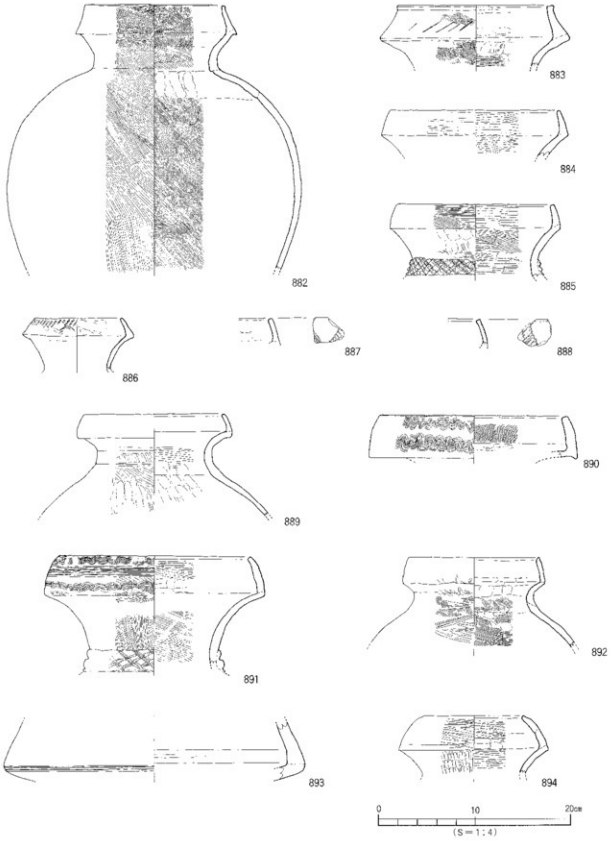
第77図　SR1②層出土遺物実測図（44）



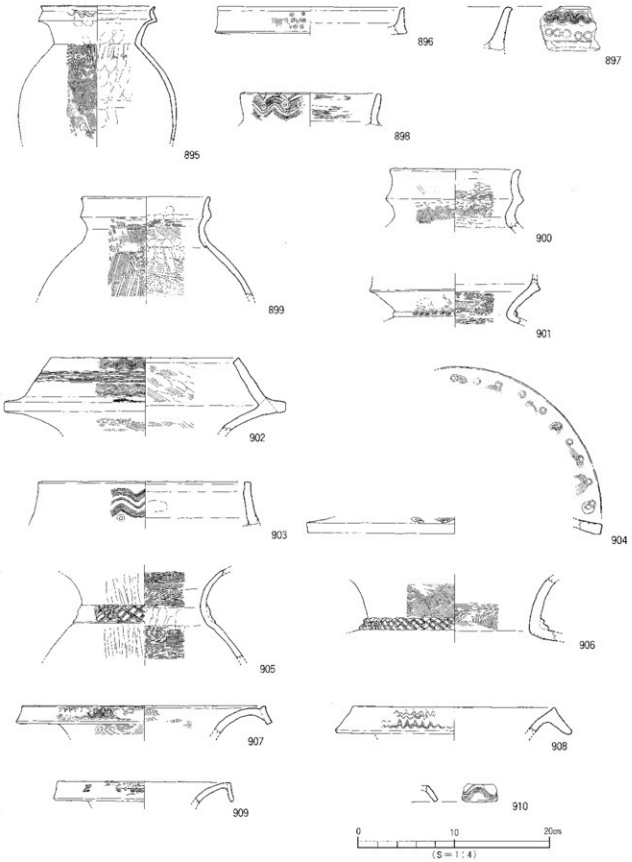
第78図　SR1②層出土遺物実測図（45）



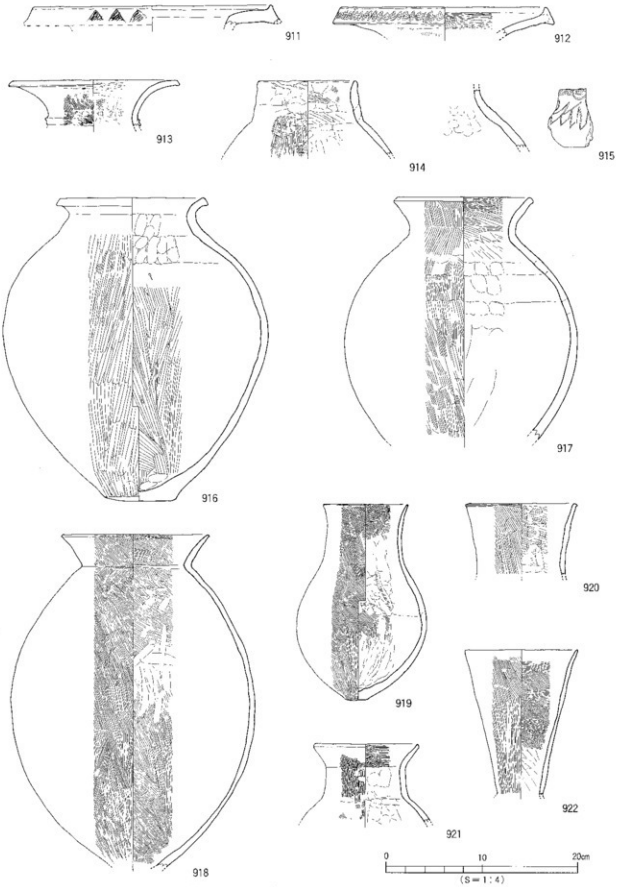
第79図　SR1②層出土遺物実測図（46）



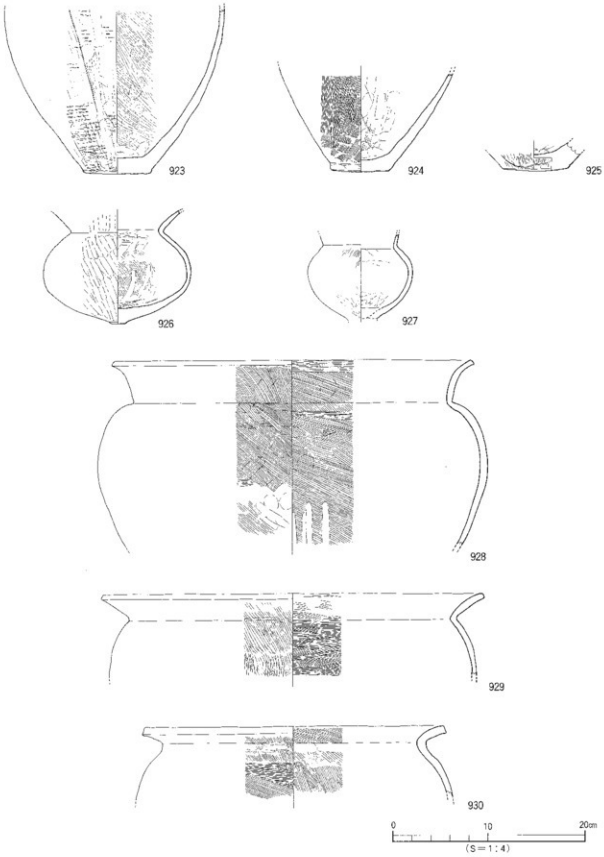
第80図　SR1②層出土遺物実測図（47）



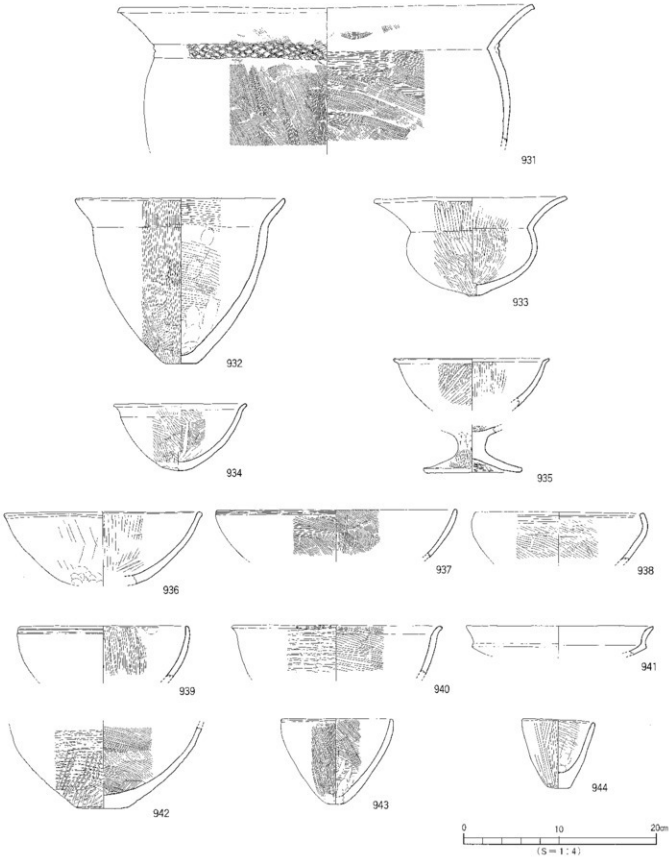
第81図　SR1②層出土遺物実測図（48）



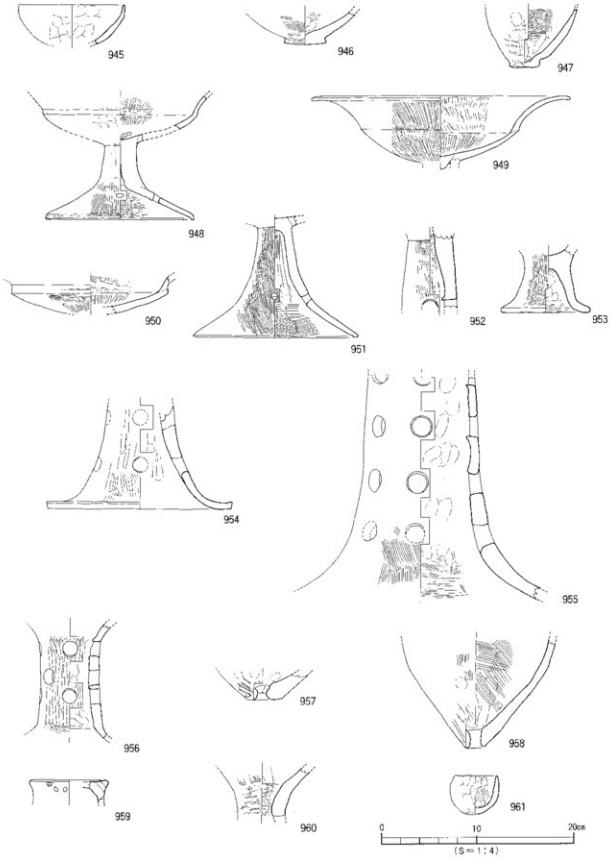
第82図　SR1②層出土遺物実測図（49）



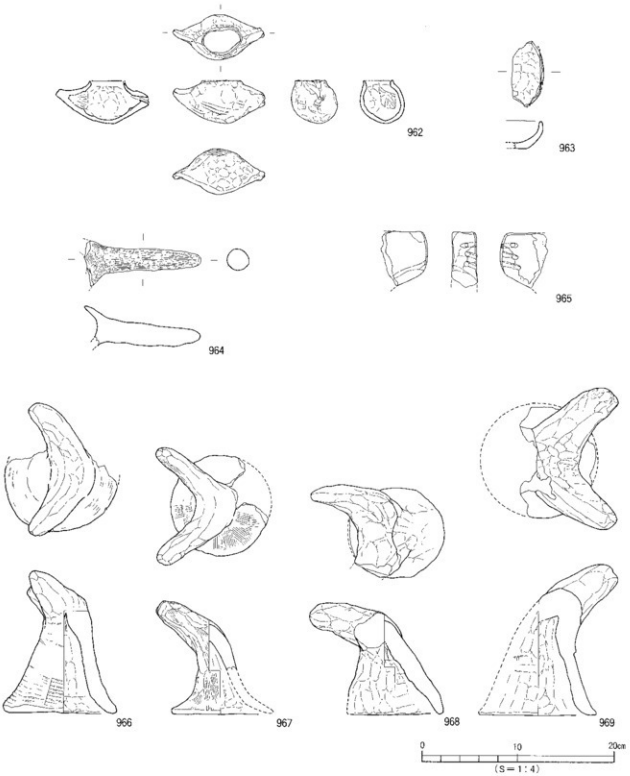
第83図　SR1②層出土遺物実測図（50）



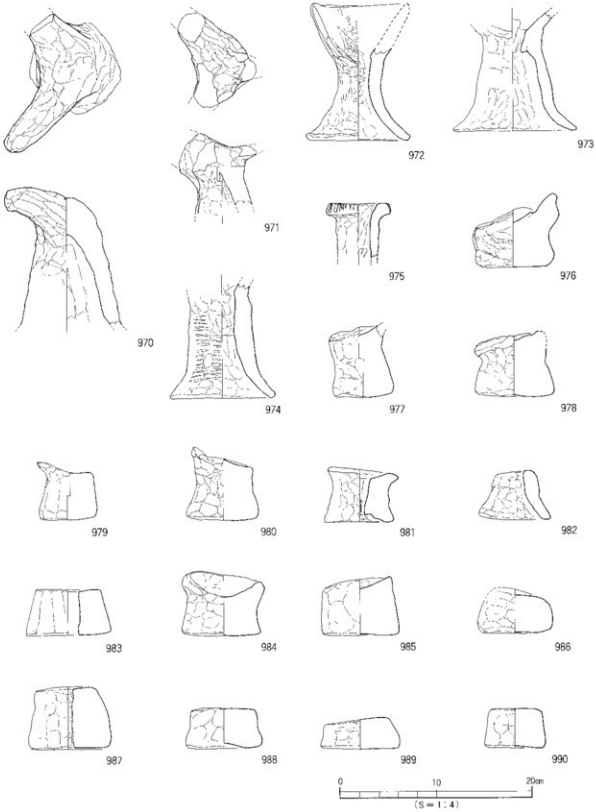
第84図　SR1②層出土遺物実測図（51）



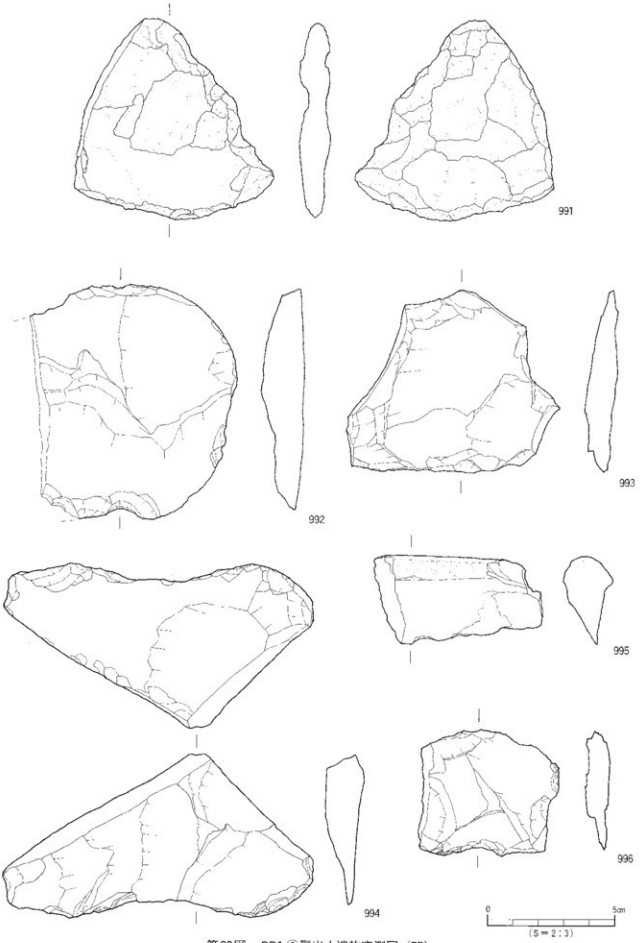
第85図　SR1②層出土遺物実測図（52）



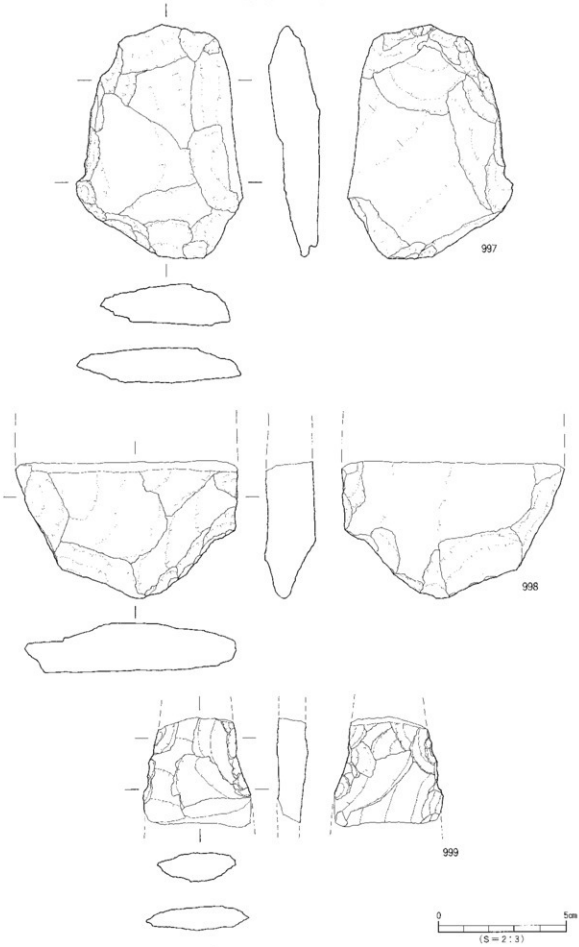
第86図　SR1②層出土遺物実測図（53）



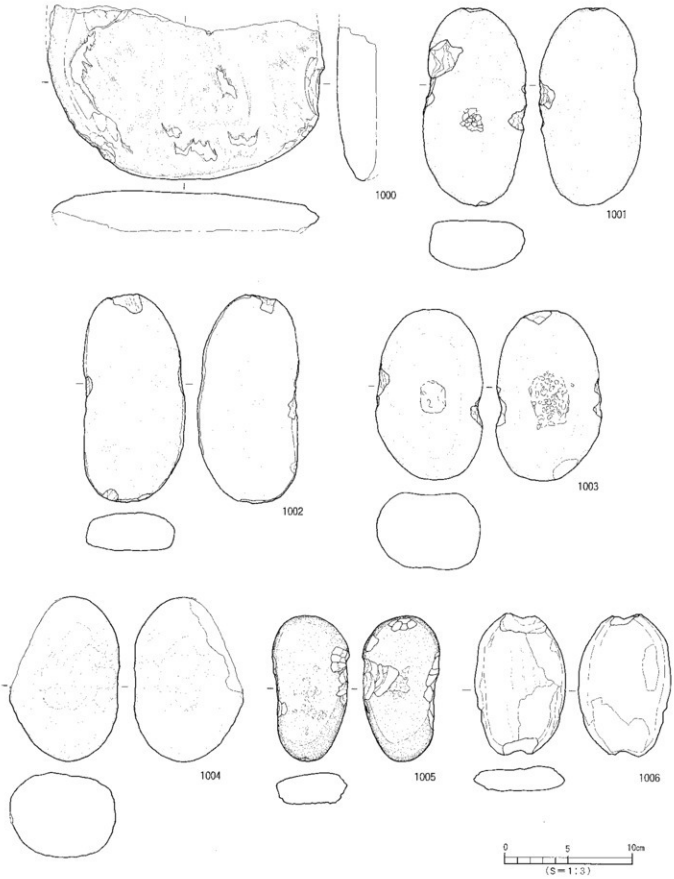
第87図　SR1 ②層出土遺物実測図（54）



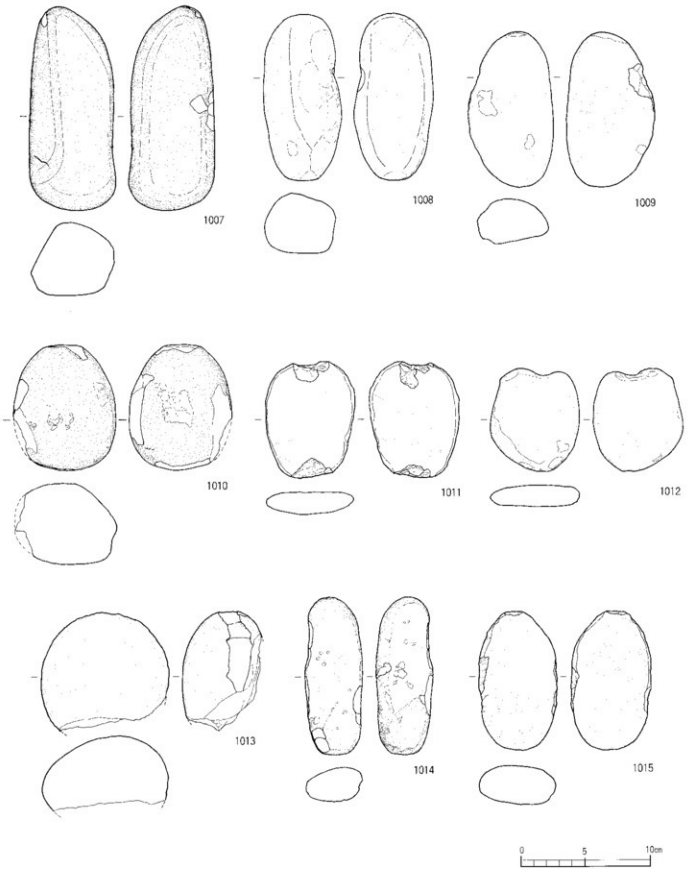
第88図　SR1②層出土遺物実測図（55）



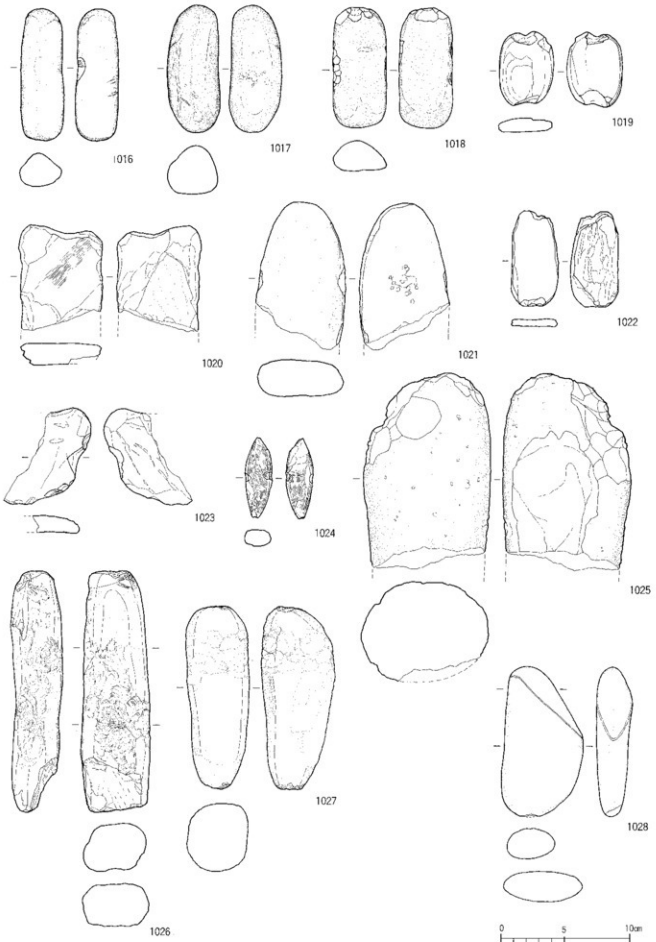
第89図　SR1②層出土遺物実測図（56）



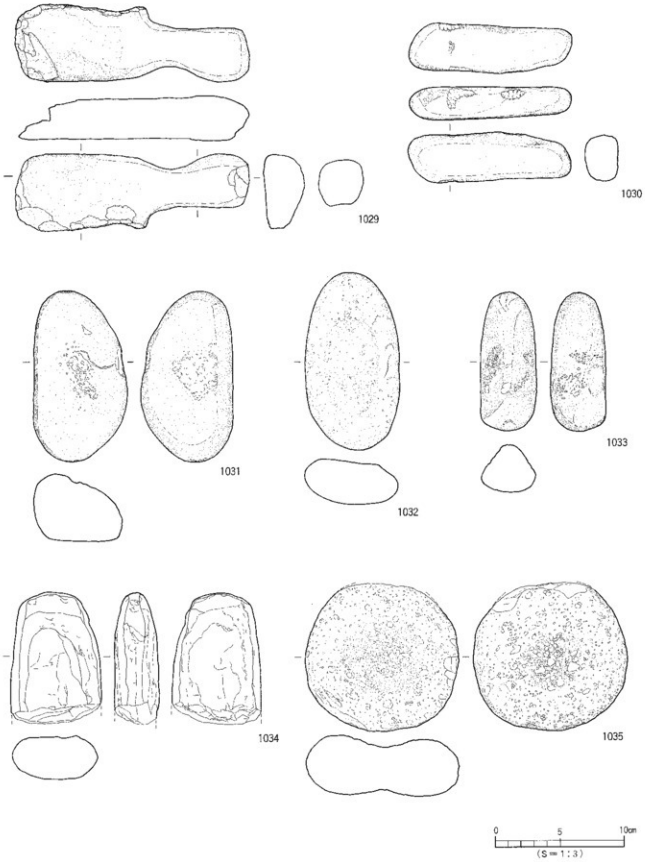
第90図　SR1②層出土遺物実測図（57）



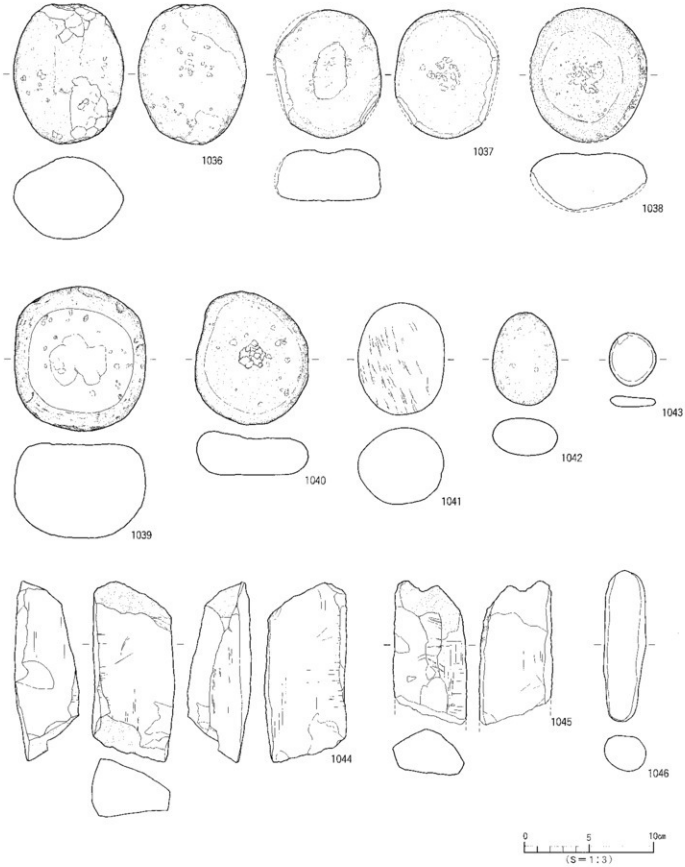
第91図　SR1②層出土遺物実測図（58）



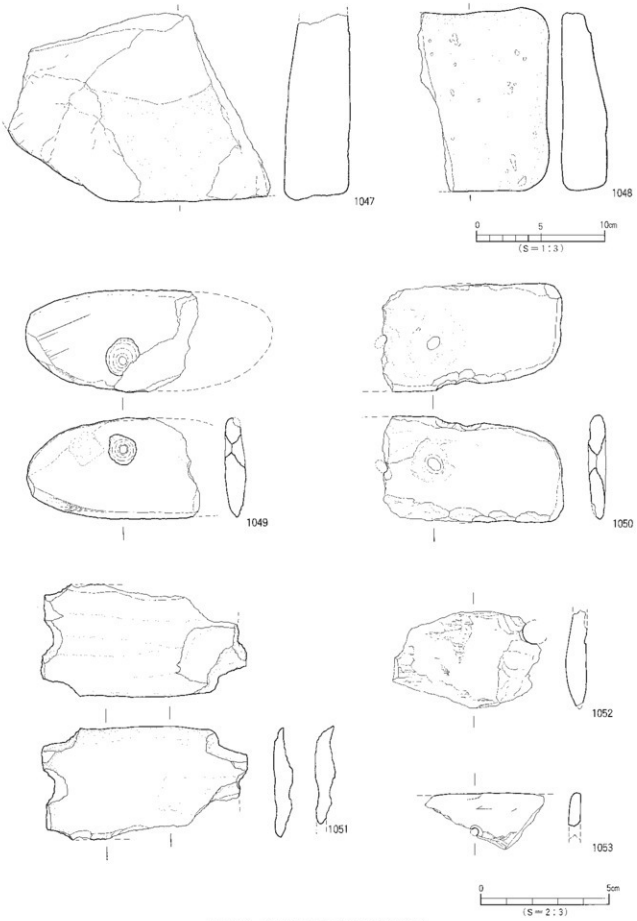
第92図　SR1②層出土遺物実測図（59）



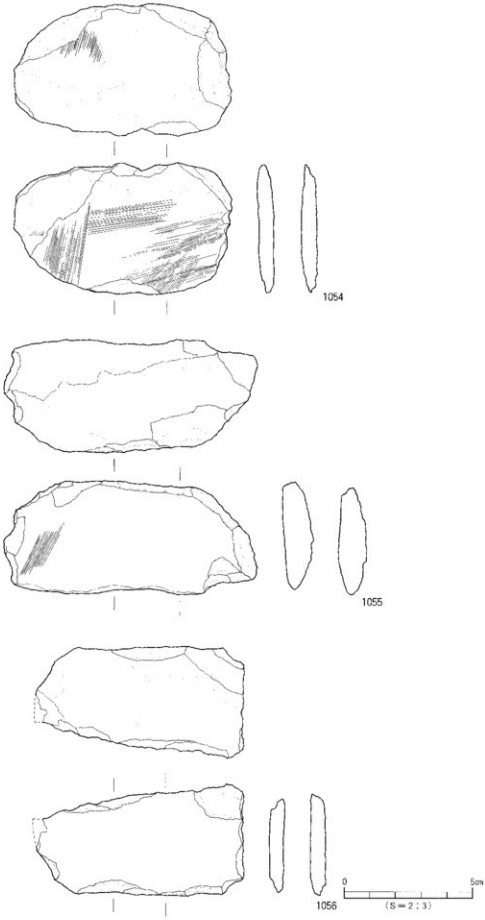
第93図　SR1②層出土遺物実測図（60）



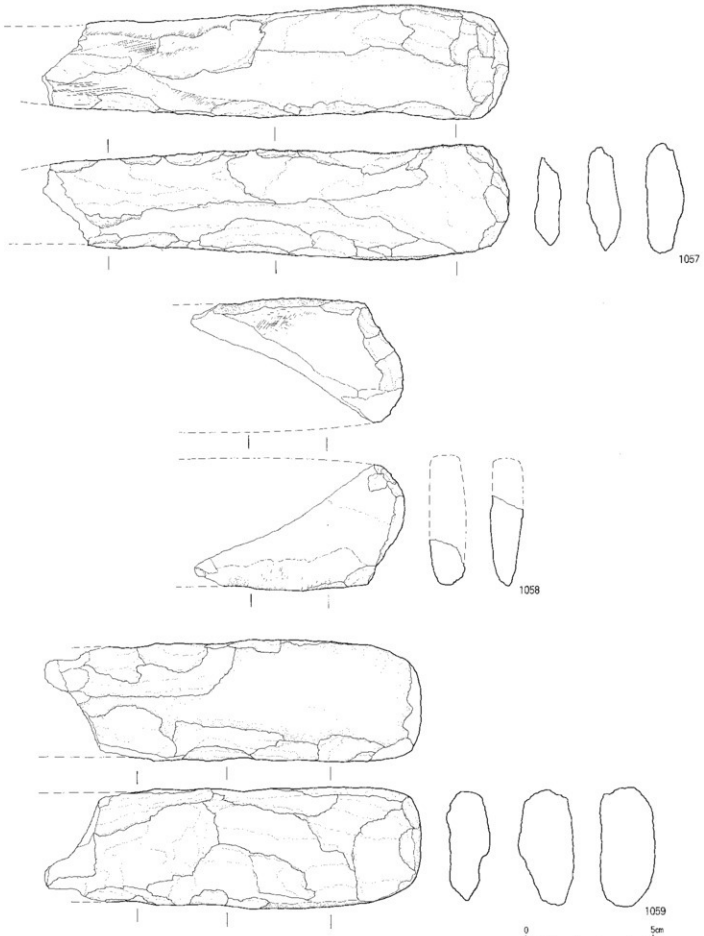
第94図　SR1②層出土遺物実測図（61）



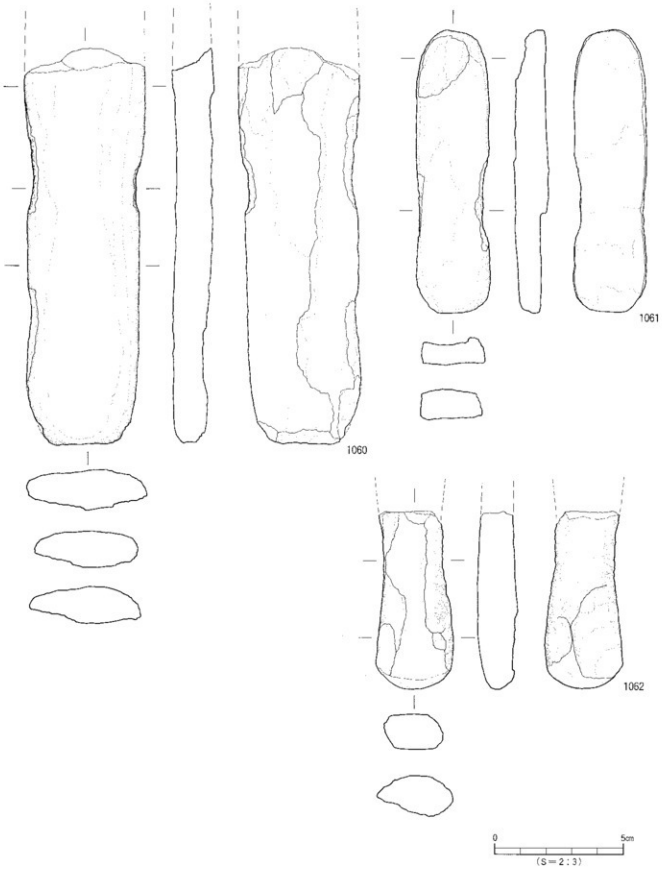
第95図　SR1②層出土遺物実測図（62）



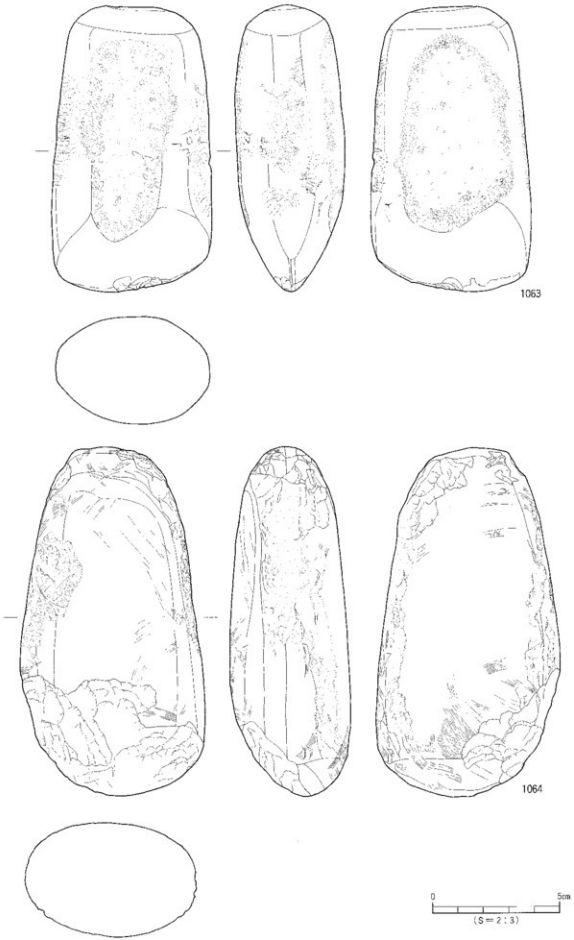
第96図　SR1②層出土遺物実測図（63）



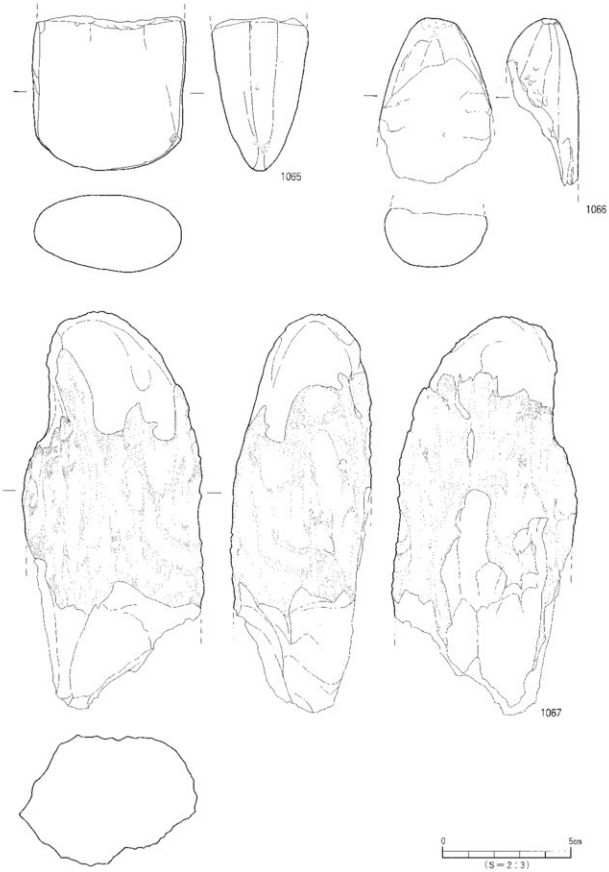
第97図　SR1②層出土遺物実測図（64）



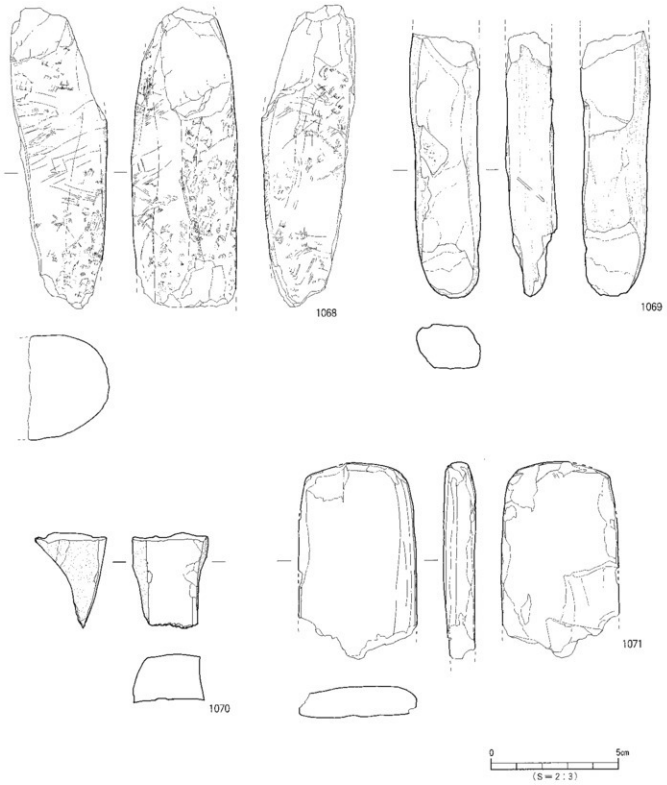
第98図　SR1②層出土遺物実測図（65）



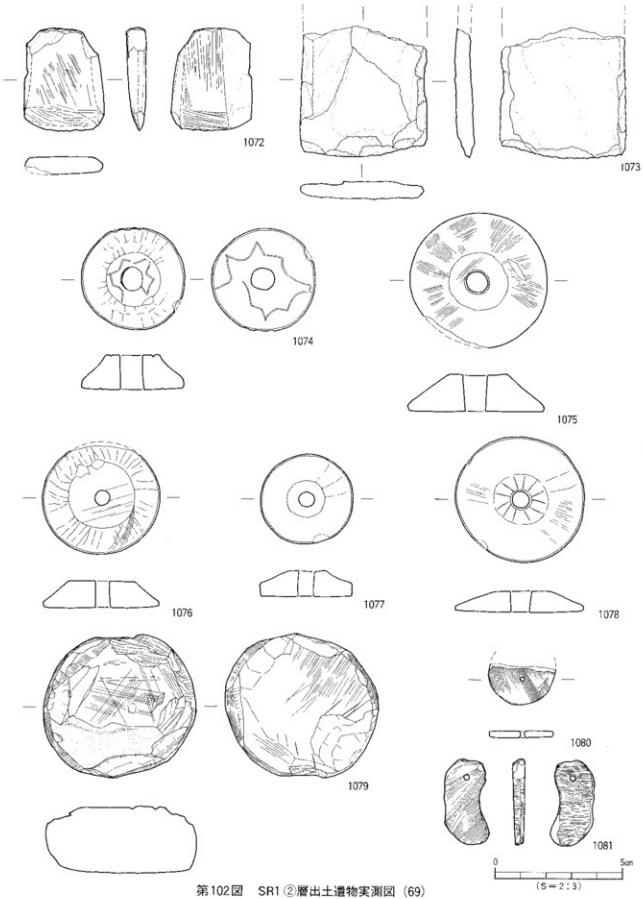
第99図　SR1②層出土遺物実測図（66）



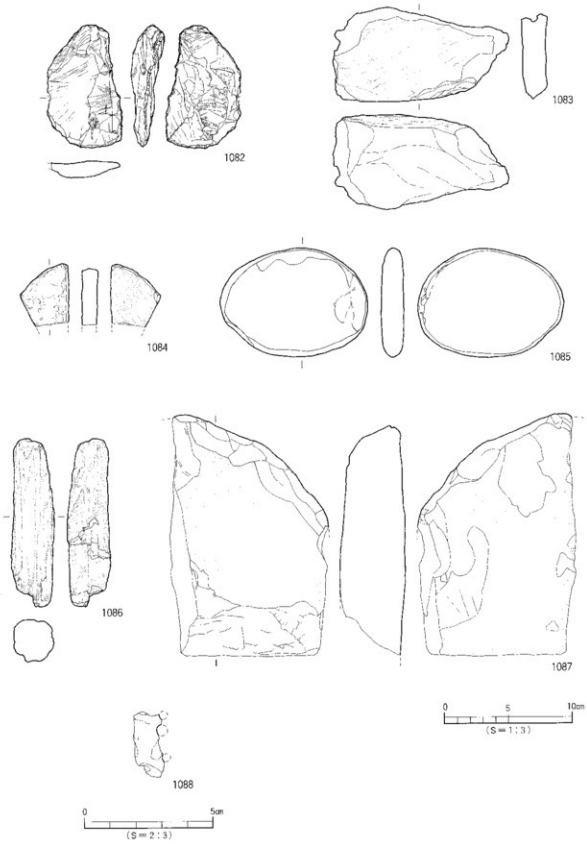
第100図　SR1 ②層出土遺物実測図（67）



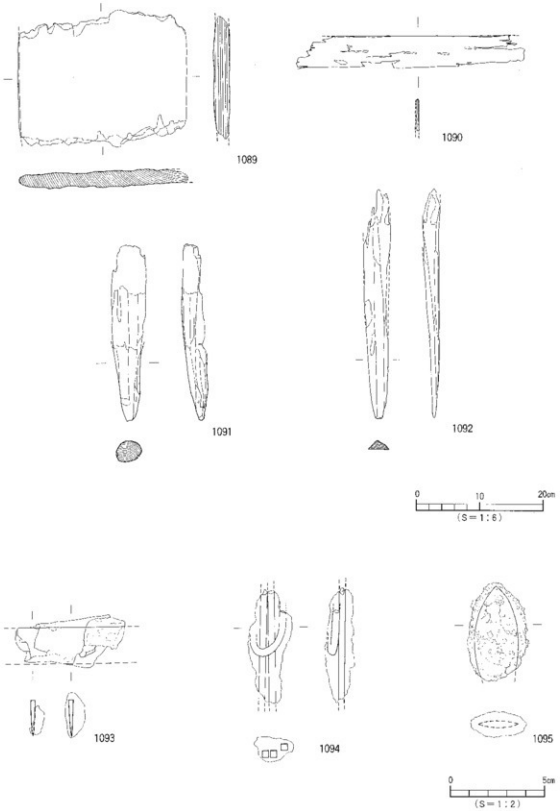
第101図　SR1②層出土遺物実測図（68）



第102図　SR1②層出土遺物実測図（69）



第103図　SR1②層出土遺物実測図（70）



第104図　SR1②層出土遺物実測図（71）

ＳＲ１①層（第105図）

①層の範囲はＦ４・５・６・13区を中心に流路の最上層に深さ５～15㎝の厚さで堆積している。出土遺物は土師器と須恵器、石製品がある。

出土遺物〔1096～1222〕（第106～117図）

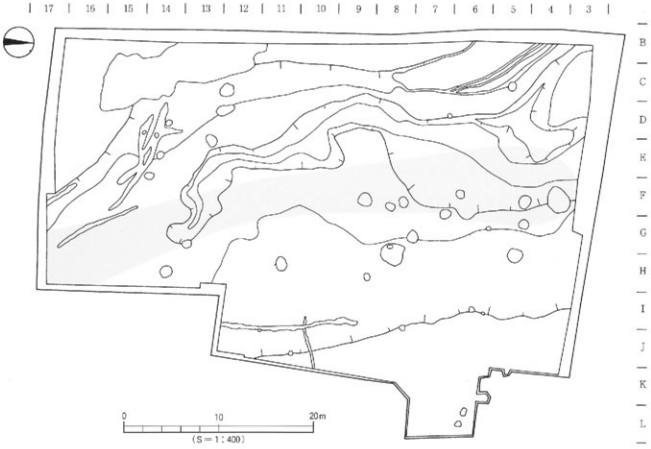
須恵器〔1096～1181〕1096～1105は坏蓋。1106～1114は坏身。1115～1117は高坏蓋。1118～1140は高坏。1141～1152は甕形土器。1153～1167は壺形土器。1153は三耳壺。1168～1174は鼎形土器。1175は横瓶。1176・1177は提瓶。1178は瓶。1179・1180・1181は器台。

土師器〔1182～1200〕1182・1183は壺形土器。1183は手捏形土器。1184は鉢形土器。1185～1188は高坏形土器。1189は甑形土器の把手。1190は製塩土器。1191～1195は軟質土器の小片。1196・1197はふいご（羽口）。1198～1200は土錘。

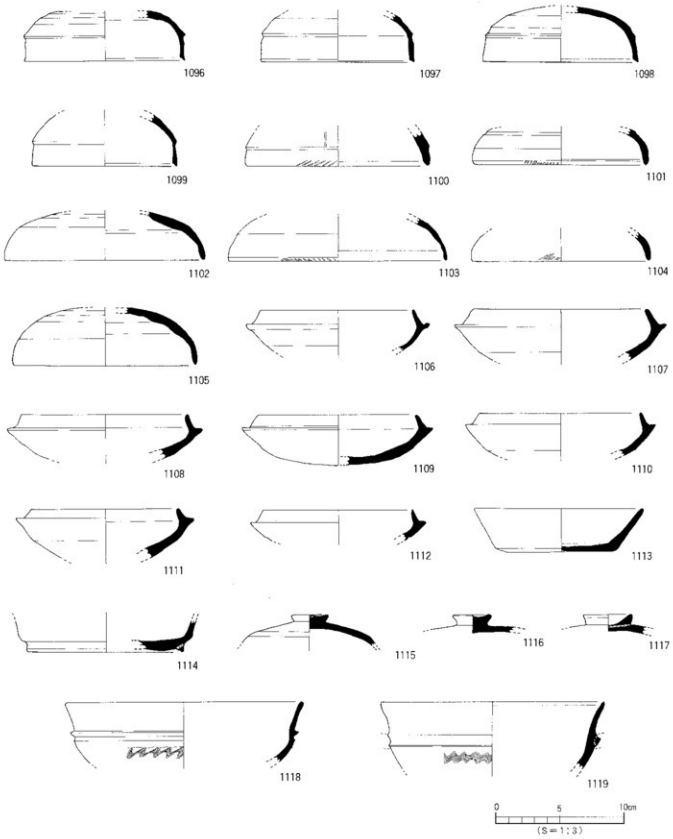
弥生土器〔1201～1203〕1201は小型の分銅形土製品（前期）。1202は壺形土器。1203は甕形土器（山陰系）。

石製品〔1204～1222〕1204はスクレイパー。1205は石錘。1206は石棒。1207・1208は敲石。1209は磨石。1210は砥石。1211は台石。1212は残核。1213は石核。1214は素材。1215は石庖丁。1216～1220は石斧。1216・1217は両刃石斧。1216は伐採斧、欠損後楔として再利用か。1218・1219は扁平片刃石斧。1220は柱状片刃石斧。1221は紡錘車。1222は勾玉。1221・1222の材質は滑石。

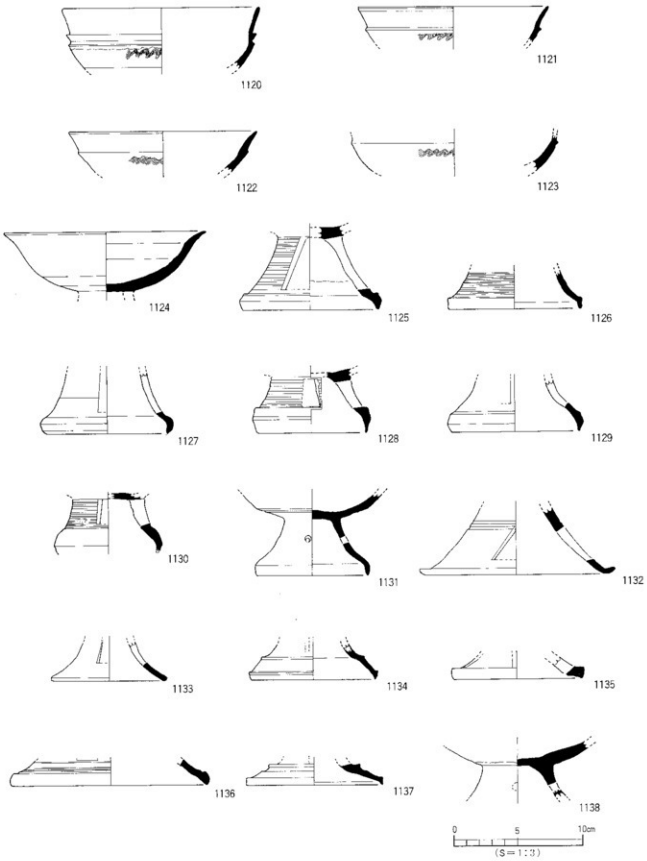
時期：出土した須恵器の年代から古墳時代後期と考えられる。



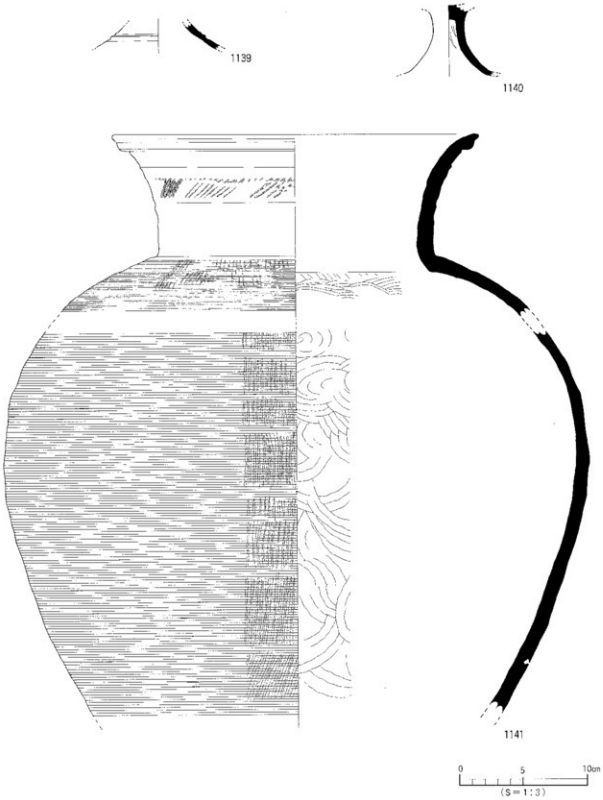
第105図　SR1①層の範囲



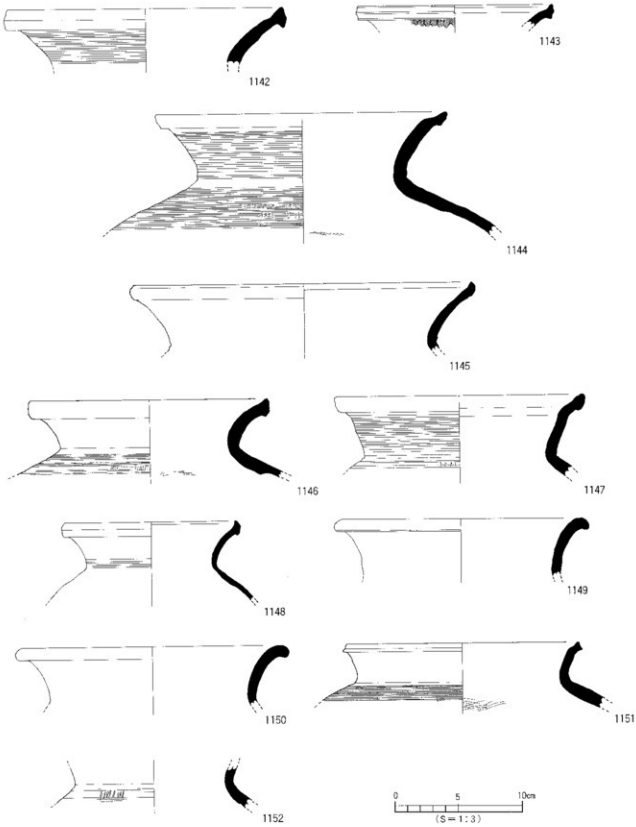
第106図　SR1①層出土遺物実測図（1）



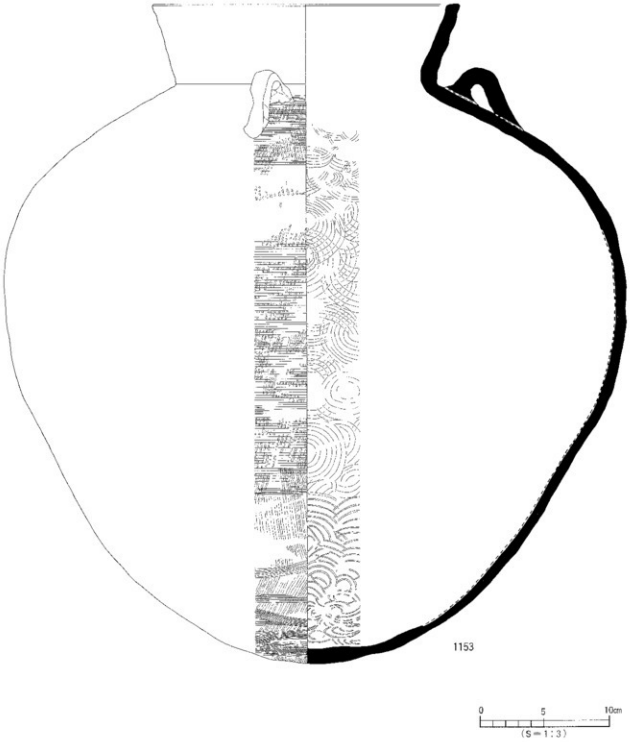
第107図　SR1①層出土遺物実測図（2）



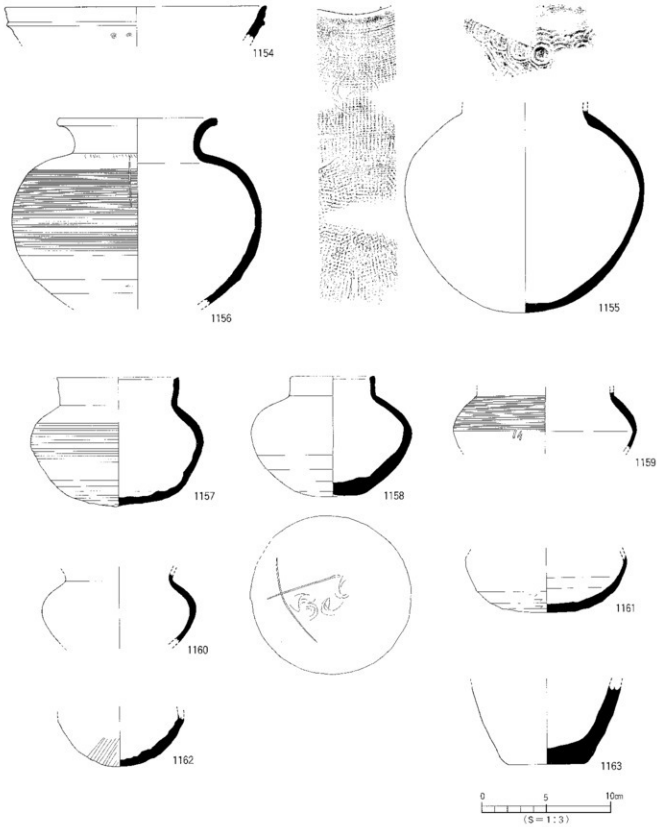
第108図　SR1①層出土遺物実測図（3）



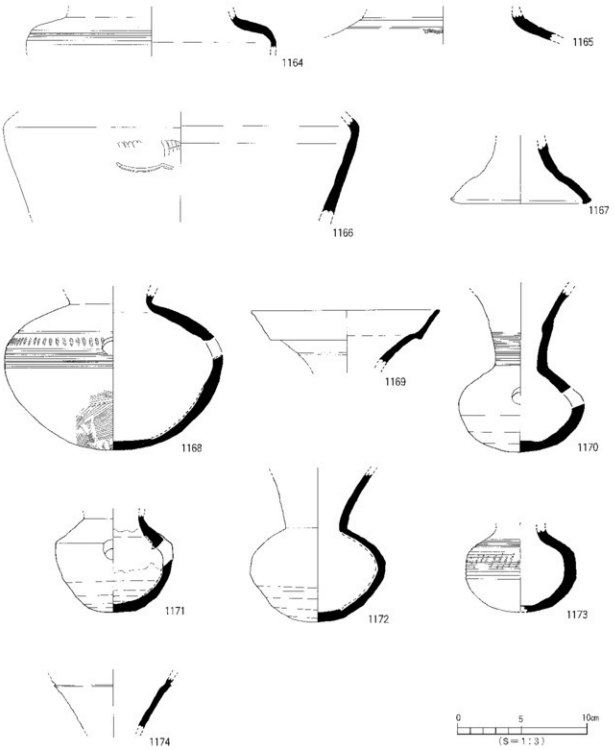
第109図　SR1①層出土遺物実測図（4）



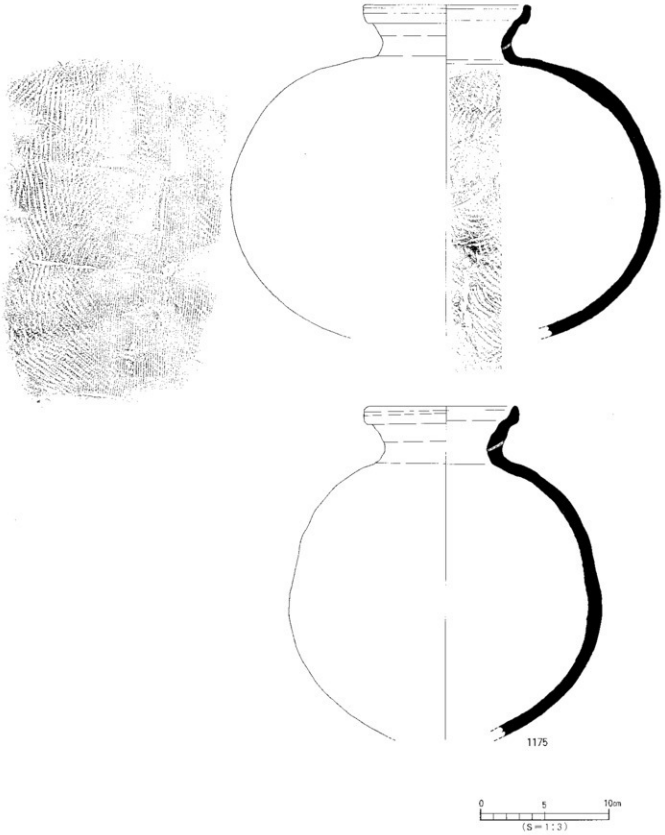
第110図　SR1①層出土遺物実測図（5）



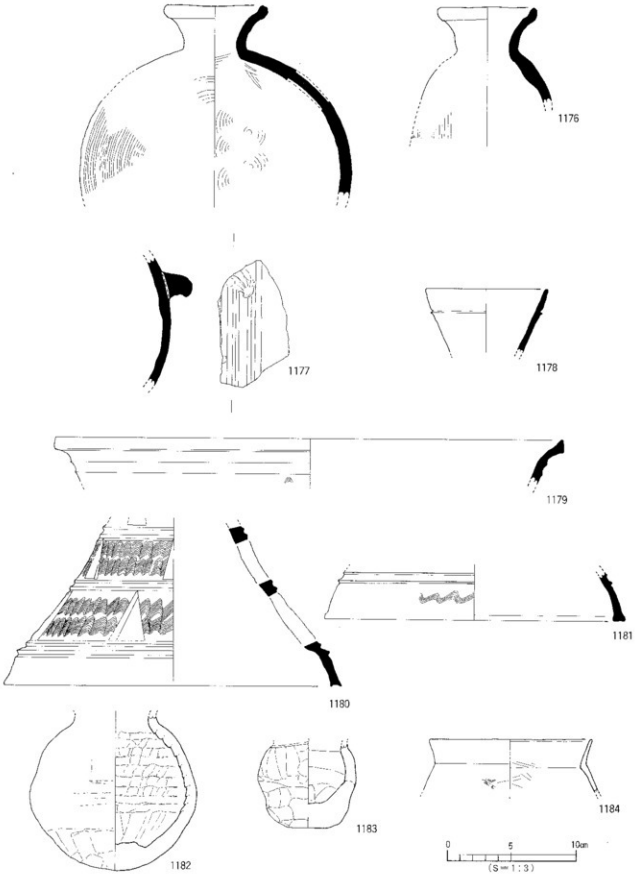
第111図　SR1①層出土遺物実測図（6）



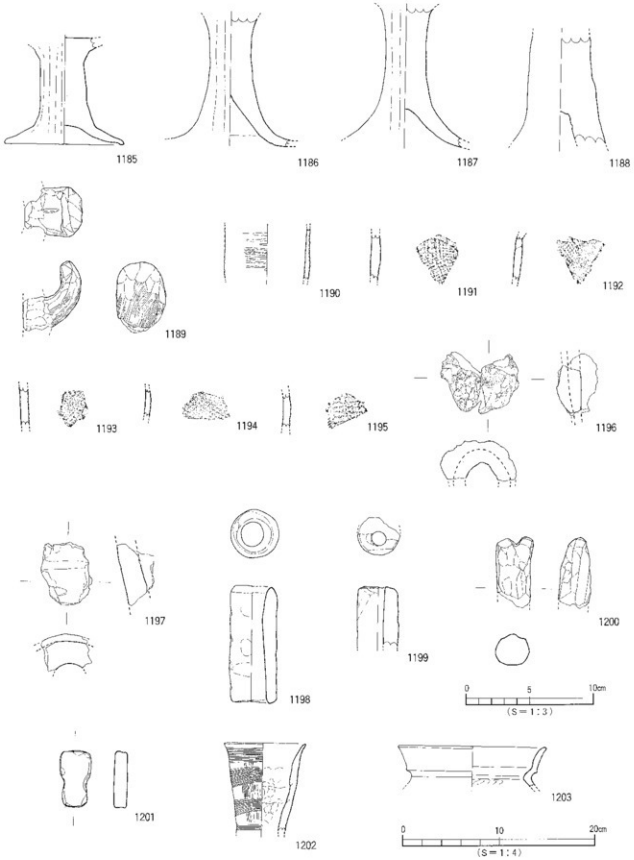
第112図　SR1 ①層出土遺物実測図（7）



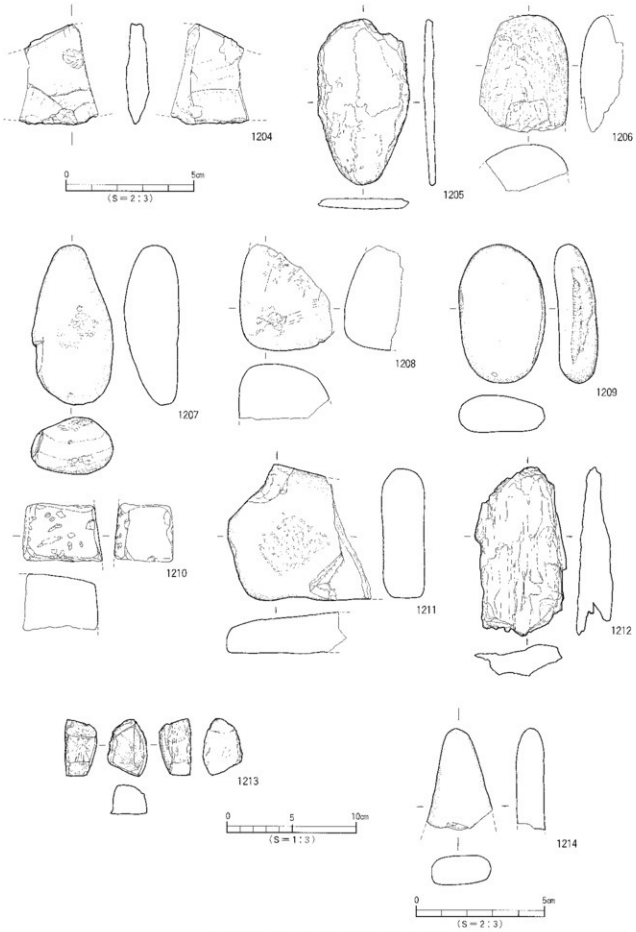
第113図　SR1 ①層出土遺物実測図（8）



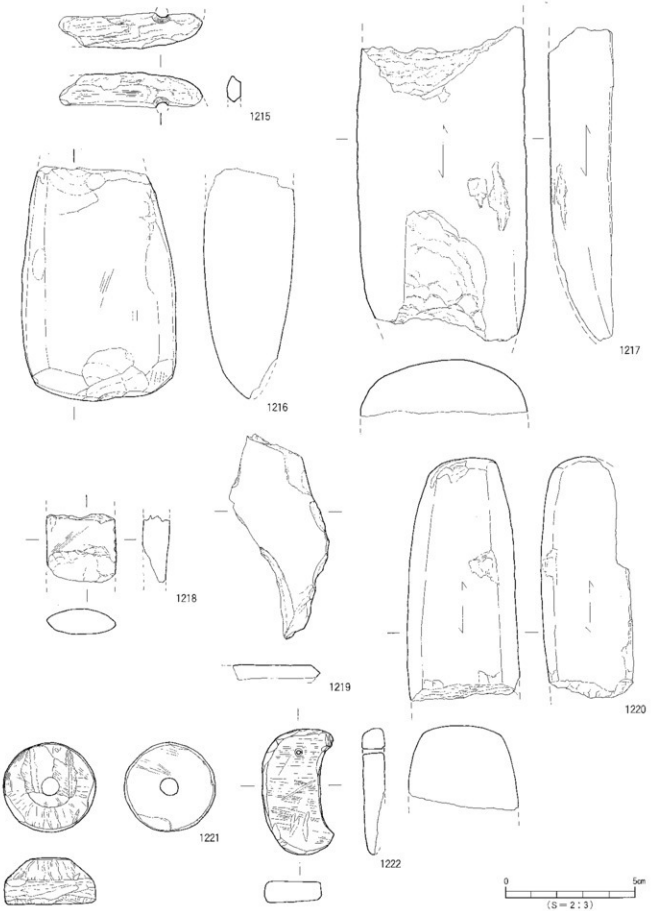
第114図　SR1①層出土遺物実測図（9）



第115図　SR1①層出土遺物実測図（10）



第116図　SR1①層出土遺物実測図（11）



第117図　SR1①層出土遺物実測図（12）

2．弥生時代前期

当該期の遺構は、土坑２基がある。検出した２基は性格が判明している。ＳＫ１は井戸または集水施設、ＳＫ10は土器棺である。平面形態は円形が１基（ＳＫ１）、楕円形が１基（ＳＫ10）である。

(1) 土坑（ＳＫ）

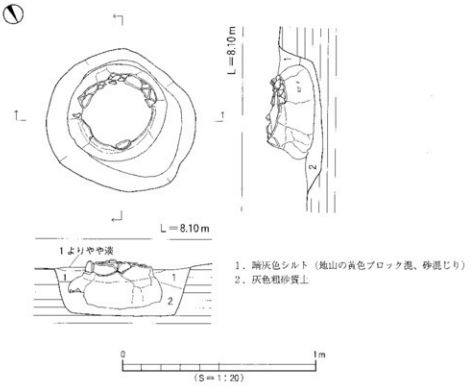
ＳＫ１（第118図）

調査区南部のＥ14区に位置する。ＳＲ１②層に上部が削平される。平面形態は円形である。規模は東西0.74ｍ、南北0.74ｍ、深さ25㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層暗灰色シルト（黄色ブロック混じり）、２層灰色粗砂質土である。床は砂地である。出土遺物は井戸枠に使用した弥生土器の壺形土器がある。出土状態は、ＳＲの層部に第Ⅷ層地山を円形に掘り込み、掘り方一杯に正位置で据え置かれていた。壺形土器は意図的に底部を打ち割っている。遺構の性格は出土状況から井戸または集水施設と考えられる。土器内からの出土遺物はない。

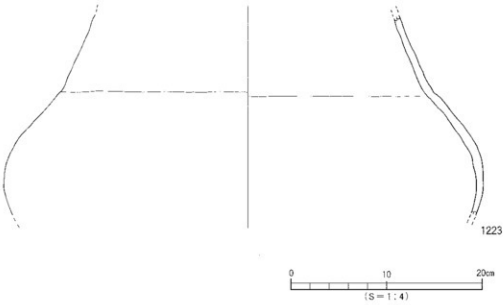
出土遺物（第119図）

壺形土器（1223）胴部と口縁部を分ける頸部に段を持ち、口縁部は内傾する。底部は井戸枠として使用するために打ち欠いている。

時期：出土した壺形土器の形態から弥生時代前期（Ⅰ－２様式）と考えられる。



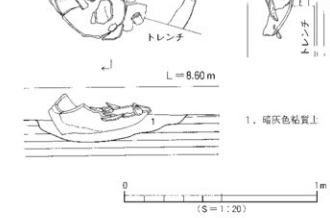
第118図　SK1 測量図



第119図　SK1 出土遺物実測図

ＳＫ10（第120図）

調査区中央部のＨ９区に位置する土器棺である。上部をＳＲ１②層に、南側をトレンチに削平される。残存する墓坑の平面形態は楕円形である。規模は長径0.75ｍ、残存短径0.39ｍ、深さ13㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は暗灰色粘質土である。出土遺物は弥生土器の壺形土器と鉢形土器がある。出土状態は、墓坑の掘り方一杯に壺形土器（棺身）の底部を下にして斜倒状に据え置き、口縁部を東向きにし鉢形土器（棺蓋）で覆い被せた組合せ式の土器棺と考えられるが、上部は削平され棺身と棺蓋が破損している。棺内からの出土遺物は棺に使用された壺形土器と鉢形土器の破片がある。

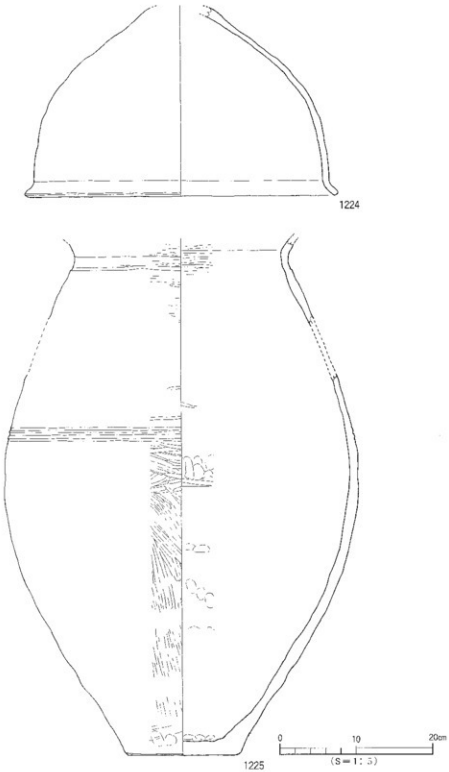


第120図　SK10測量図

出土遺物（第121図）

1224は棺蓋（鉢形土器の転用品）。 口縁部を外上方に緩やかに折り曲げる。1225は棺身の壺形土器。内傾する頸部に１条の沈線文、胴部に３条の沈線文を施す。

時期：出土した鉢形土器と壺形土器の形態から弥生時代前期（Ⅰ－３様式）と考えられる。



第121図　SK10出土遺物実測図

3．弥生時代中期

遺構は、溝２条、土坑２基である。溝２条はＳＲ１③層が溜まる以前に機能していた自然の流路であるためＳＲ１内のSD1・SD3とした。土坑は平面形態が楕円形１基（ＳＫ12）と不整形１基（ＳＫ11）である。

（1）溝（ＳＲ1-ＳＤ）

ＳＲ１-ＳＤ１（第４図）

調査区南部のＦ15～Ｇ16区に位置する。ＳＲ１の床面からの検出である。規模は、検出長9.51ｍ、幅0.3～0.37ｍ、深さ15㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈する。埋土は黒色粗砂質土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第122図）

1226は甕形土器の底部。

時期：出土した甕形土器の形態から弥生時代前期末～中期初頭（Ｉ－４様式）と考えられる。

第122図　SR1-SD1出土遺物実測図

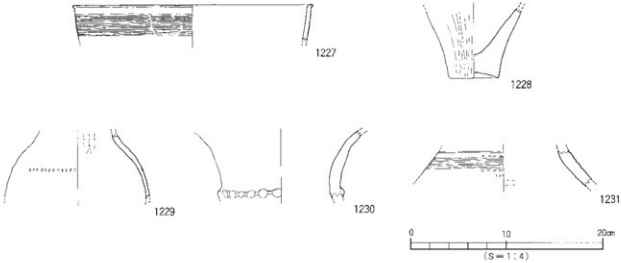
ＳＲ１-ＳＤ３（第４図）

調査区南部のＤ14～Ｆ15区に位置する。ＳＲ１の床面からの出土である。規模は、検出長12.85ｍ、幅0.3～1.02ｍ、深さ11㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状を呈する。埋土は黒色粗砂質土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第123図）

1227・1228は甕形土器。1229～1231は壺形土器。

時期：出土した甕形土器の形態より弥生時代中期（Ⅱ様式）と考えられる。



第123図　SR1-SD3出土遺物実測図

(2) 土坑（ＳＫ）

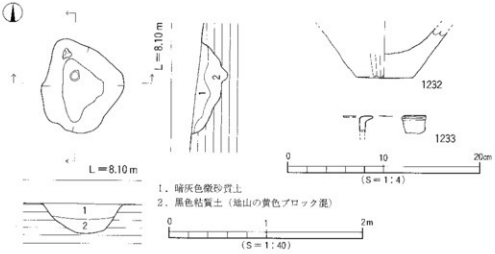
ＳＫ11（第124図）

調査区南部のE14～F15区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は不整形である。規模は長径1.01ｍ、短径0.85ｍ、深さ32㎝を測る。断面形態は擂鉢状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層暗灰色微砂質土、２層黒色粘質土（黄色ブロック混じり）である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第124図）

1232は壺形土器の底部片。1233は鉢形土器、口縁部は短く水平に折り曲げる。

時期：出土した鉢形土器の年代から弥生時代中期（Ⅱ様式）と考えられる。

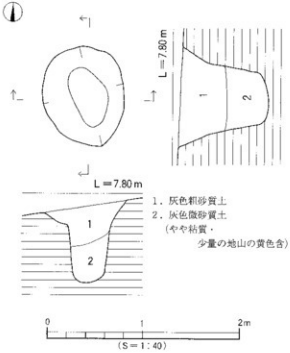


第124図　SK11測量図・出土遺物実測図

ＳＫ12（第125図）

調査区南東部のＧ13・14区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.07ｍ、短径0.84ｍ、深さ77㎝を測る。断面形態は上部が広い「Ｕ」字状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層灰色粗砂質土、２層灰色微砂質土（黄色土少量混じり）である。ＳＫ12は、土坑としたが断面形態と深さ、検出位置、床面が砂地であること、堀土掘削後の水の湧き方から井戸とする。出土遺物は弥生土器があるが小片のため図化していない。

時期：出土した弥生土器の年代から弥生時代中期（Ⅱ様式）と考えられる。



第125図　SK12測量図

4．弥生時代後期

当該期の遺構は、溝１基、土坑11基がある。溝（ＳＲ１-ＳＤ２）は、ＳＲ１の床面からの検出である。土坑13基の平面形態は、円形が４基（ＳＫ15・17・19・21）、楕円形が６基（ＳＫ４・５・７・９・13・20）、隅丸方形が１基（ＳＫ18）である。

(1) 溝（ＳＲ１-ＳＤ）

ＳＲ１-ＳＤ２（第4図）

調査区南部のＦ16・17区に位置する。ＳＲ１の肩部の床面からの検出である。南側は調査区外に続く。規模は、検出長4.16ｍ、幅0.54ｍ、深さ13㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器の壺形土器がある。

出土遺物（第126図）

1234～1236は壺形土器。

時期：出土した壺形土器の形態から弥生時代後期（Ｖ－１・２様式）と考えられる。

第126図　SR1-SD2 出土遺物実測図

(2) 土坑（ＳＫ）

ＳＫ９（第127図）

調査区中央部のＦ10区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.11ｍ、短径0.75ｍ、深さ24㎝を測る。断面形態は２段堀で西側が浅く皿状で東側が深い擂鉢状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層暗灰色微砂質土である。出土遺物は１層と２層で時期の異なる弥生土器が出土している。そのため、ここでは２層（下層）出土の土器を土坑埋没時の遺物と考える。

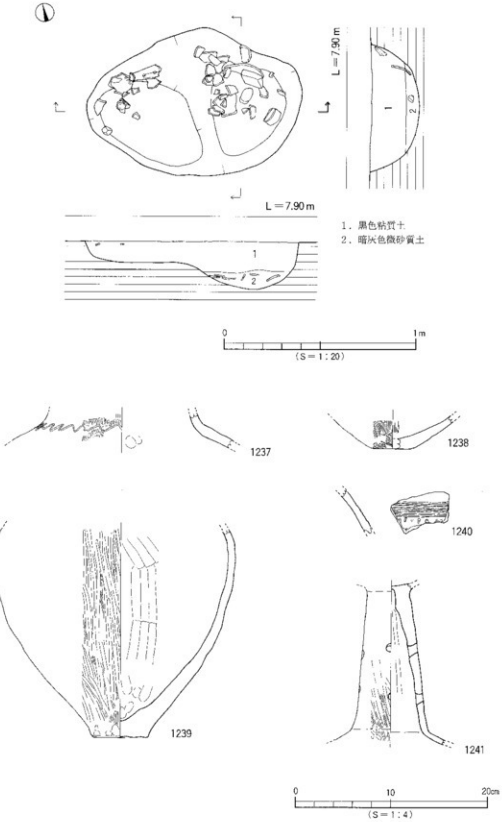
出土遺物（第127図）

甕形土器（1237・1238）1237は頸部に１本の波状文を施す。1238は底部。壺形土器（1239・1240）1239は平底の底部から胴部。1240は胴部、外面に沈線と刺突文を施す。高坏形土器（1241）柱部、円形の透かしを２段４方向に施す。

時期：出土した甕形土器の形態から弥生時代後期（Ｖ－１様式）と考えられる。

ＳＫ４（第128図）

調査区西部のＤ12・13区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.95ｍ、短径1.00ｍ、深さ21㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層暗灰色微砂質土（黄色ブロック混じり）である。出土遺物は弥生土器と磨石がある。



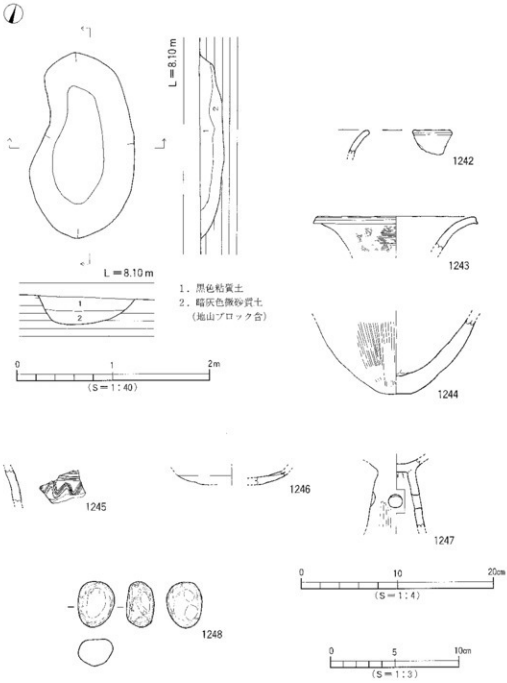
第127図　SK9 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第128図）

甕形土器（1242）口縁部の小片。壺形土器（1243～1245）1243は口縁部片。1244は底部。1245は胴部片、外面に波状文と沈線文を施す。高坏形土器（1246・1247）。

石製品（1248）磨石。

時期：出土した弥生土器の形態から弥生時代後期（Ⅴ－3・4様式）と考えられる。



第128図　SK4測量図・出土遺物実測図

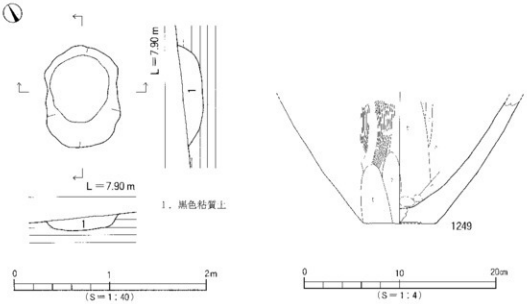
ＳＫ18（第129図）

調査区中央部のＦ８区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は隅丸方形である。規模は長径1.08ｍ、短径0.74ｍ、深さ14㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第129図）

壺形土器（1249）底部。

時期：出土した壺形土器の形態から弥生時代後期（Ｖ－３・４様式）と考えられる。



第129図　SK18測量図・出土遺物実測図

ＳＫ７（第130図）

調査区中央部のＦ９区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.30ｍ、残存短径1.28ｍ、深さ42㎝を測る。断面形態は擂鉢状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層暗灰色微砂質土（黄色ブロック混じり）である。出土遺物は弥生土器、石器、木製の農具（泥よけ）未製品がある。木製品の出土状況は土坑の床面直上から出土した。

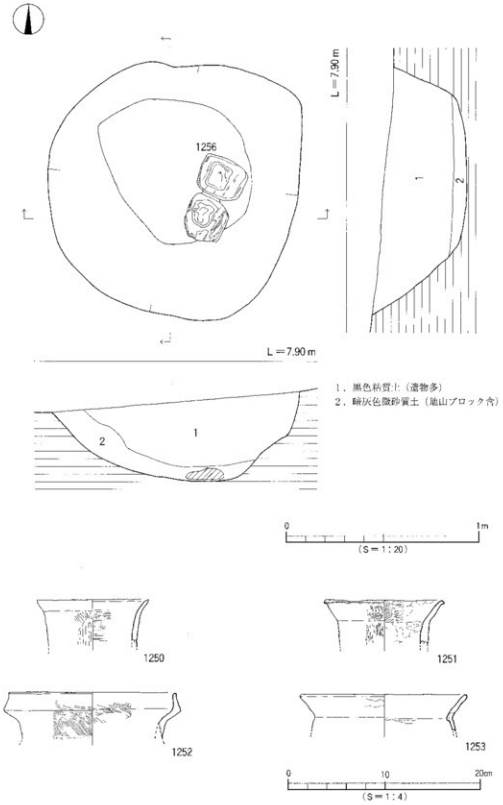
出土遺物（第130・131図）

壺形土器（1250～1252）1250・1251は長頸壺、口縁部手前で外傾する。1252は複合口縁壺。甕形土器（1253）口縁部片。

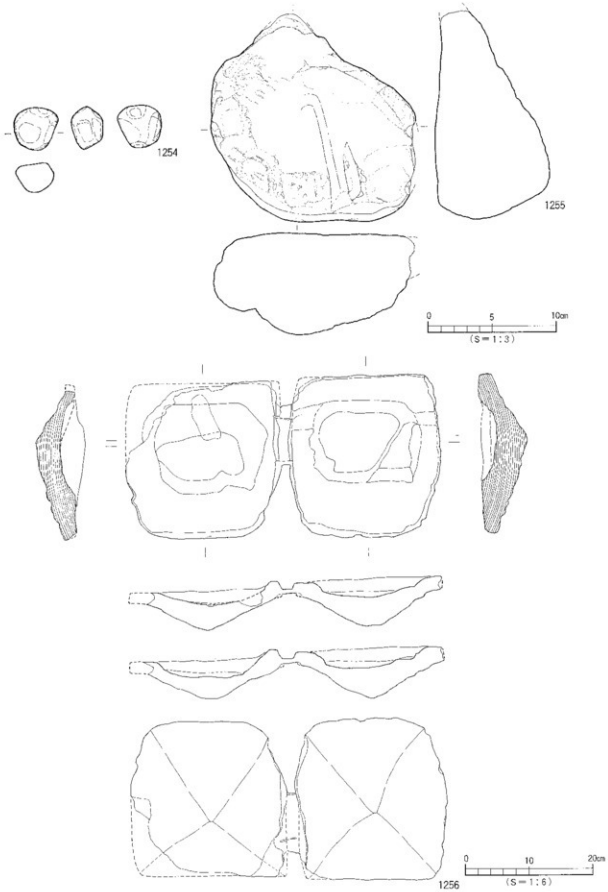
石製品（1254・1255）1254は磨石。1255は台石。

木製品（1256）泥よけの未製品、断面をＶ字状に加工し２個体分が連なっている。

時期：出土した弥生土器の形態から弥生時代後期（Ｖ－３様式）と考えられる。



第130図　SK7 測量図・出土遺物実測図（1）



第131図　SK7出土遺物実測図（2）

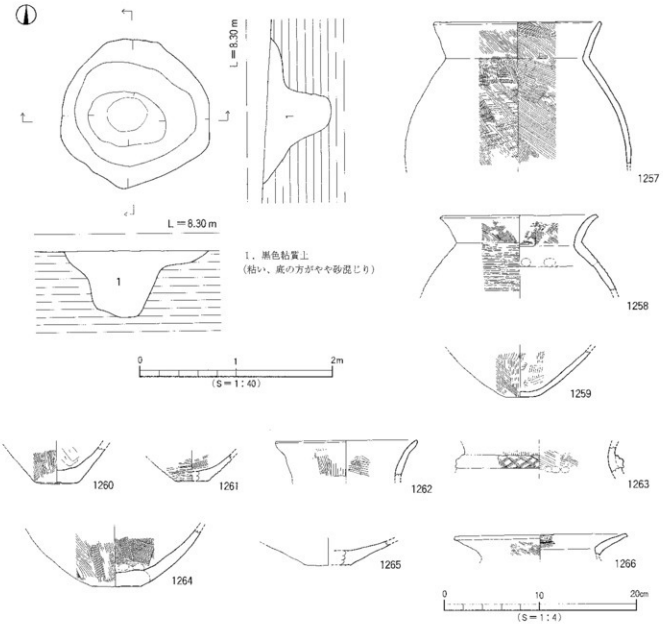
ＳＫ15（第132図）

調査区北部のＧ５～Ｈ５区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は円形である。規模は長径1.51ｍ、短径1.55ｍ、深さ69㎝を測る。断面形態は上部が広く段をもつ擂鉢状を呈する。埋土は黒色粘質土（下層にいくほど砂混じり）である。ＳＫ15は土坑としたが断面形態と深さ、検出位置、床面が砂地であること、水の湧き方から井戸とする。出土遺物は弥生土器がある。

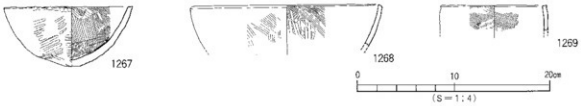
出土遺物（第132・133図）

甕形土器（1257～1261）1257・1258は口縁部。1259～1261は底部。壺形土器（1262～1265）1262は口縁部。1263は頸部に１条の凸帯。1264・1265は底部。鉢形土器（1266～1269）1266は外反口縁。1267～1269は直口口縁。

時期：出土した甕形土器の形態から弥生時代後期（Ⅴ－４様式）と考えられる。



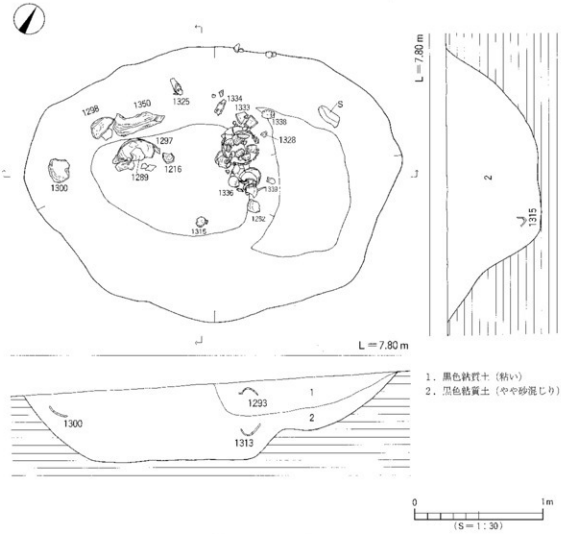
第132図　SK15測量図・出土遺物実測図（１）



第133図　SK15出土遺物実測図（2）

ＳＫ13（第134図）

調査区北部のＦ４区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径2.90ｍ、短径2.15ｍ、深さ63㎝を測る。断面形態は段をもつ逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土（２層より粘質が強い）、２層黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器、土師器、石製品、ナスビ形木製品がある。



第134図　SK13測量図

出土遺物（1270～1350）（第135～140図）

弥生土器（1270～1328）（第135～138図）

甕形土器（1270～1282）1270～1278は口縁部片。1279・1280は小さな平底から緩やかに立ち上がる胴部。1281・1282は小さな平底。

壺形土器（1283～1300）1283は長めの胴部に内湾気味に直線的に立ち上がる口縁部。1284は肩の張る胴部。1285・1286は外反する口縁部。1287は直立する短い口縁部。1288・1289は長頸壺。1290は頸部に凸帯を巡らす。1291は口縁部端部を拡張し波状文を施す。1292は複合口縁壺。1293は球形の胴部。1294は口縁部の小片。1295は複合口縁壺の口縁部。1296は貝殻による弧文を施す。1297はわずかに突出する底部。1298は丸みのある底部。1299・1300は厚みのある底部。

鉢形土器（1301～1322）1301～1303は外反する口縁部。1304は1条の凸帯を頸部に貼り付ける。1305は外反する口縁部。1306は外反する短い口縁部。1307は外反する長い口縁部。1310～1312は直口口縁。1313は完形品。丸味のある底部、口縁部は短くわずかに外反。1314・1315は直口口縁。1314の底部は突出する。1316は上げ底状の底部。1317・1318は突出する底部。1319は尖底状の底部。1320は小さく突出する底部。1321は丸底。1322は櫛描き沈線文と刺突文を施す。

高坏形土器（1323～1325）1323は大きく開く裾部。1324・1325は円孔を持つ柱部。

甑形土器（1326）頸部がわずかに屈曲する。

支脚形土器（1327・1328）1327は脚部。1328は角部。

土師器（1329～1342）（第139図）

甕形土器（1329・1330）1329は口縁端部が内径する。1330は球形の胴部、口縁部は直立気味にわずかに内湾する。

壺形土器（1331）球形の胴部。

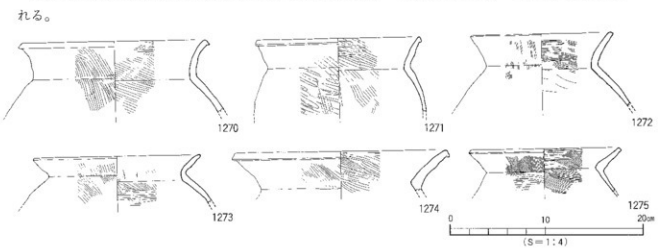
高坏形土器（1332～1335）1332～1334は段を持ち外上方に開く坏部。1335は脚部。

ミニチュア土器（1336～1342）1336・1337は壺形。1338・1339は壺形の手捏土器。1340～1342は鉢形の手捏土器。

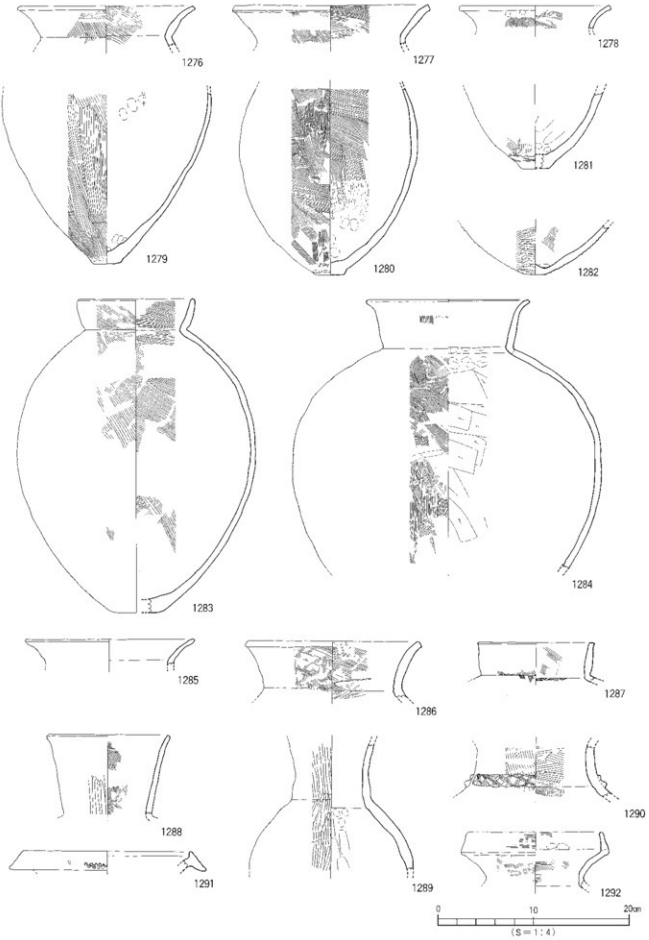
石製品（1343～1347）1343は敲石の完形品。1344は石鏃。1345は砥石の完形品。1346・1347は残核。

木製品（1348～1350）1348・1349は茄子形の鍬である。1350は不明品。

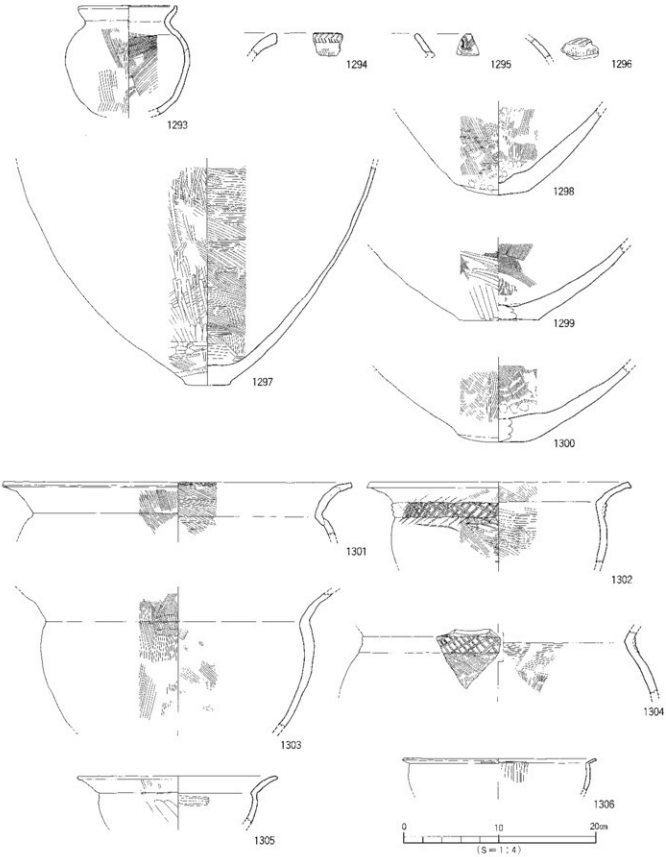
時期：出土した弥生土器と土師器の形態から弥生時代後期・古墳時代初頭（Ⅴ－4様式）と考えられる。



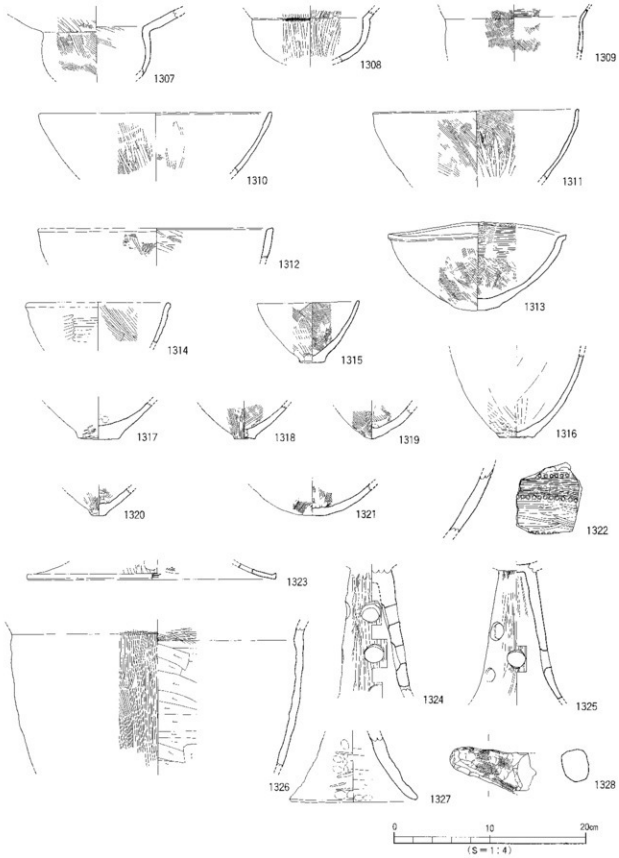
第135図　SK13出土遺物実測図（1）



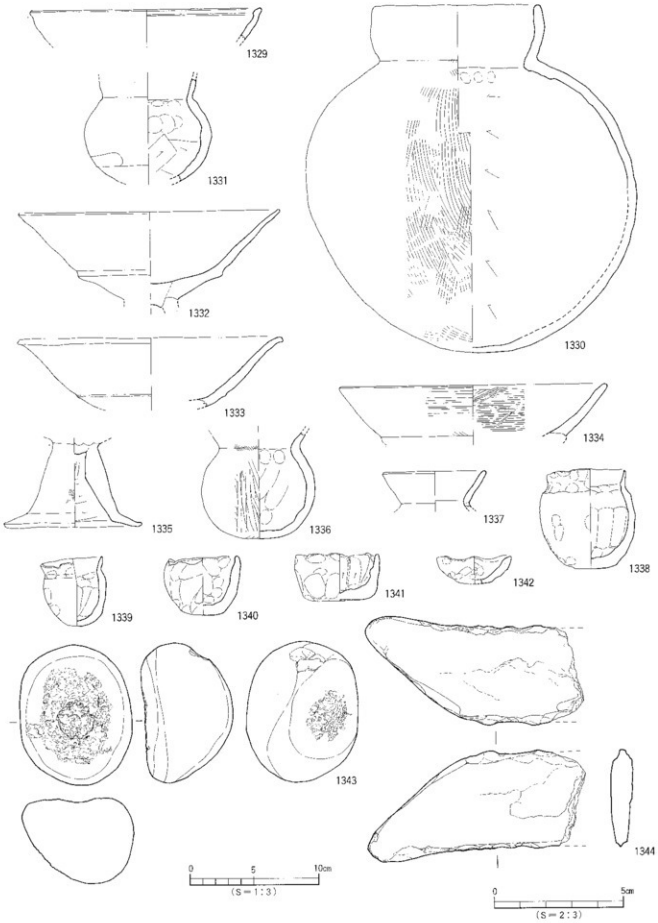
第136図　SK13出土遺物実測図（2）



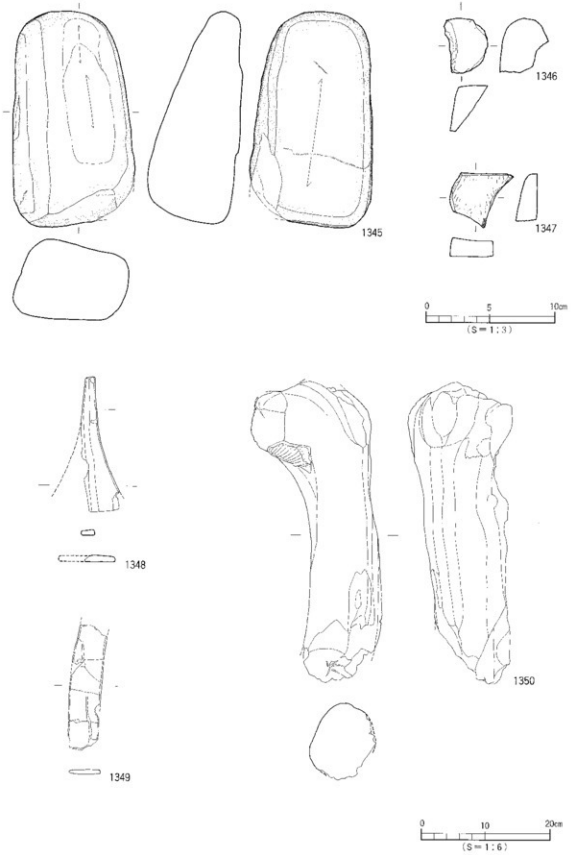
第137図　SK13出土遺物実測図（3）



第138図　SK13出土遺物実測図（4）



第139図　SK 13出土遺物実測図（5）



第140図　SK13出土遺物実測図（6）

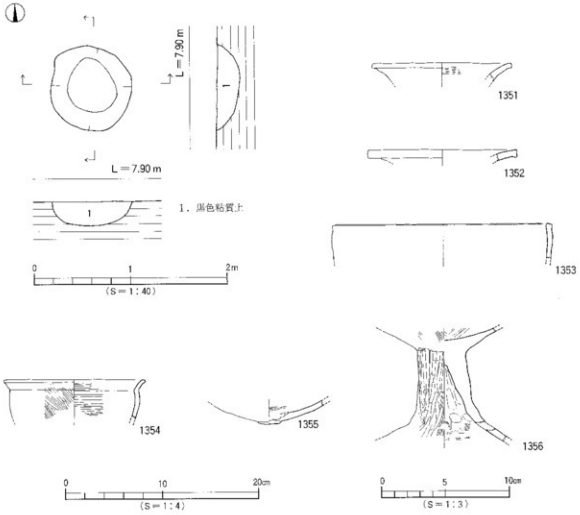
ＳＫ19（第141図）

調査区北部のＦ６区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は円形である。規模は長径0.90ｍ、短径0.82ｍ、深さ16㎝を測る。断面形態は擂鉢状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第141図）

壺形土器（1351・1352）口縁部。鉢形土器（1353～1355）1353は直口口縁。1354はわずかに外反する口縁。1355はボタン状に突出する底部。高坏形土器（1356）円孔のある柱部。

時期：出土した弥生土器の形態から弥生時代後期（Ⅴ－４様式）と考えられる。



第141図　SK19測量図・出土遺物実測図

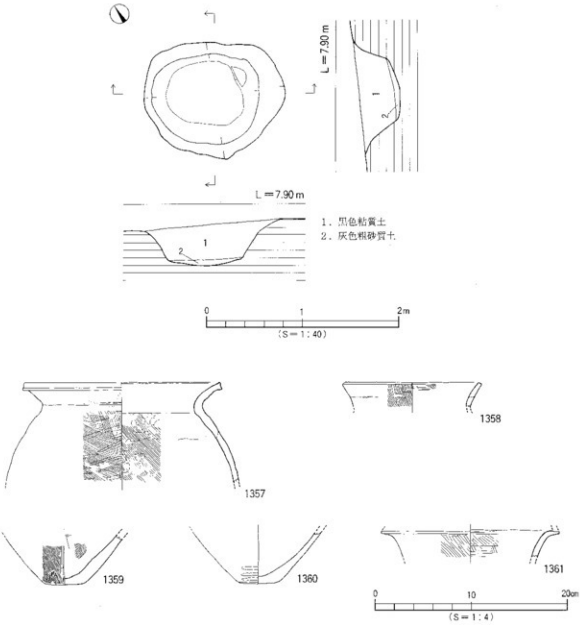
ＳＫ20（第142図）

調査区北部のＦ５区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.43ｍ、短径1.21ｍ、深さ36㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層灰色粗砂質土である。出土遺物は弥生土器がある。

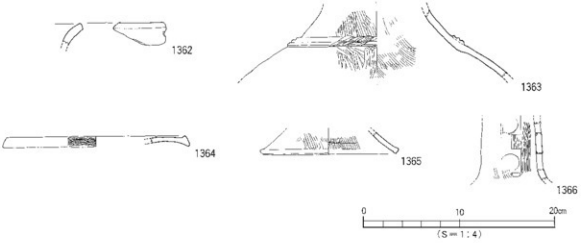
出土遺物（第142・143図）

甕形土器（1357～1360）1357・1358は外反する口縁部。1359・1360は丸味をもつ平底。**壺形土器**（1361～1363）1361は複合口縁壺。1362は外反する口縁部。1363は頸部に凸帯を１条巡らす。高坏形土器（1364～1366）1364は坏口縁部。1365は脚裾部。1366は柱部、円形透かしが２段に残る。

時期：出土した弥生土器の甕形土器の形態から弥生時代後期（Ｖ－４様式）と考えられる。



第142図　SK20測量図・出土遺物実測図（１）

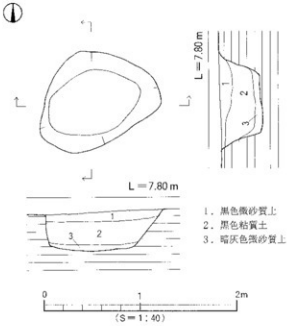


第143図　SK20出土遺物実測図（2）

ＳＫ５（第144図）

調査区西部のＤ13～Ｅ13区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径1.30ｍ、短径0.95ｍ、深さ42㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層黒色微砂質土、２層黒色粘質土、３層暗灰色微砂質土である。出土遺物は弥生土器がある。

時期：埋土がＳＫ４に類似していることとＳＲ１③層が上層を覆うことから弥生時代後期と考えられる。

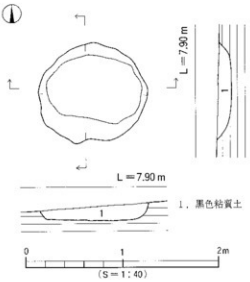


第144図　SK5測量図

ＳＫ17（第145図）

調査区中央部のＦ８区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は円形である。規模は長径1.10ｍ、短径1.00ｍ、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器がある。出土した弥生土器は小片のため図化していない。

時期：出土した弥生土器の形態と埋土から弥生時代後期と考えられる。



第145図　SK17測量図

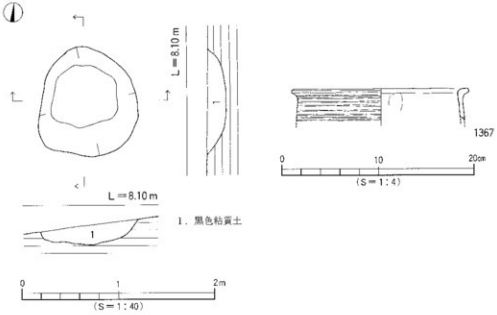
ＳＫ21（第146図）

調査区中央部のＦ７～Ｇ７区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は円形である。規模は長径1.17ｍ、短径1.00ｍ、深さ24㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器がある。図化した弥生土器は流入品と思われる、他の遺物は小片のため図化していない。

出土遺物（第146図）

甕形土器（1367）折り曲げ口縁、外面にヘラ描沈線文。

時期：出土した弥生土器と埋土から弥生時代後期と考えられる。



第146図　SK21測量図・出土遺物実測図

5．古墳時代前期

当該期の遺構は、土坑7基である。

(1) 土坑（ＳＫ）

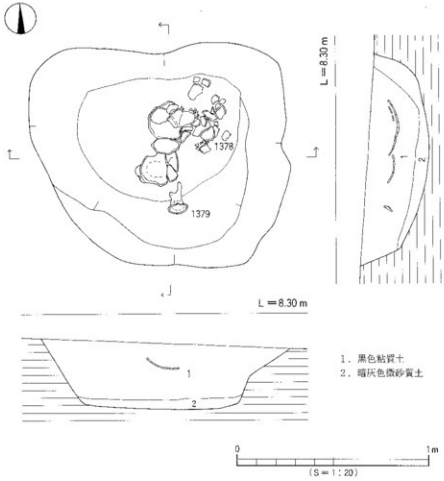
ＳＫ６（第147図）

調査区西部のＣ12・13区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は円形である。規模は長径1.75ｍ、短径1.40ｍ、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層暗灰色微砂質土である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器がある。

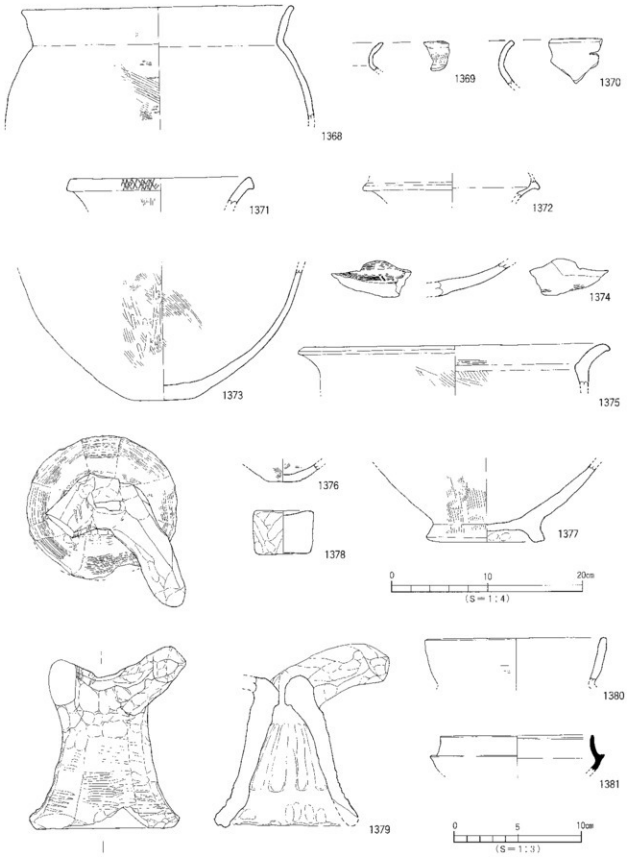
出土遺物（第148図）

甕形土器（1368～1370）1368は肩の張らない胴部、口縁部は外反する。1369・1370は外反する口縁部。壺形土器（1371～1374）1371は外反する口縁部。1372は複合口縁壺。1373・1374は底部。鉢形土器（1375～1377）1375は外反する口縁部。1376は底部。1377は高台状の短い台部。支脚形土器（1378・1379）1378は中実。底部と受部はやや凹む。1379は２本の角部をもつ。1380は土師器の甕形土器。1381は須恵器の坏身。

時期：出土した土師器の形態から古墳時代前期初頭と考えられる。



第147図　SK6 測量図



第148図　SK6 出土遺物実測図

ＳＫ８（第149図）

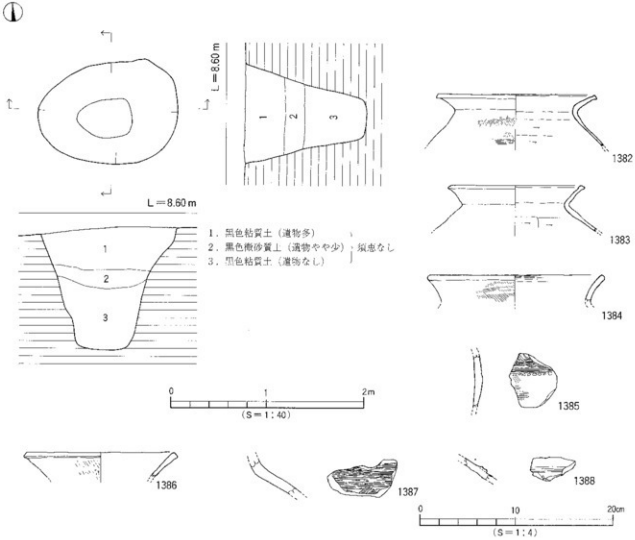
調査区中央部のＨ11区に位置する。ＳＲ１③層に削平される。平面形態は楕円形である。規模は長径0.71ｍ、短径0.53ｍ、深さ1.26ｍを測る。断面形態は上部が広い「U」字状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層黒色粘質土、２層黒色微砂質土、３層黒色粘質土（１層より粘質が強い）である。出土遺物は弥生土器、土師器、磨石がある。ＳＫ８は土坑としたが断面形態が直線的な「U」字状であること、深さが深いこと、検出位置が河岸にあること、床面が砂地であること、水が湧くこと、これらのことから井戸とする。

出土遺物（第149・150図）

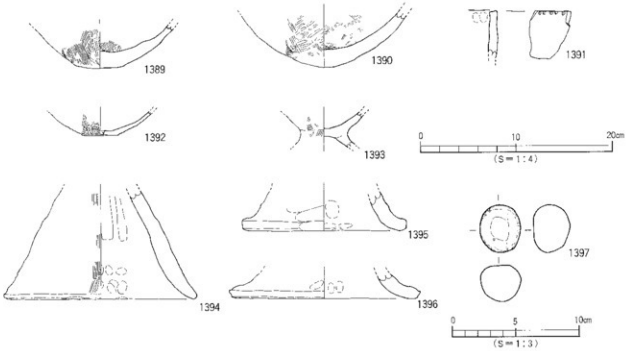
甕形土器（1382～1385）1382～1384は口縁部。1385は胴部、外面に刺突文・沈線文・波状文を施す。壺形土器（1386～1390）1386は口縁部。1387・1388は胴部。1387は櫛による沈線文を施す。1388は断面「M」字状の凸帯を貼り付ける。1389・1390は丸味をもつ底部。鉢形土器（1391～1393）1391は直口口縁、端部に刻目を施す。1392は底部。1393は脚付き。支脚形土器（1394～1396）「ハ」の字状の脚部。

石製品（1397）磨石。

時期：出土した土師器の甕形土器の形態から古墳時代初頭と考えられる。



第149図　SK8 測量図・出土遺物実測図（１）



第150図　SK8出土遺物実測図（2）

ＳＫ14（第151図）

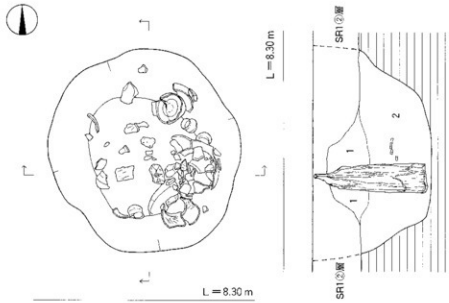
調査区北部のＧ５区に位置する。ＳＲ１②下層と③層を切る。平面形態は円形である。規模は長径1.07ｍ、短径1.00ｍ、深さ62㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層暗褐色粘質土、２層黒色粘質土・３層黒色粘質土（粘質強）である。出土遺物は土師器、朝鮮系軟質土器、木柱がある。出土状況は、土坑のほぼ中央に丸材が立てられていた。木柱の周囲からは完形品の土師器の甕形土器や小型丸底壺、製塩土器、軟質土器が出土した。

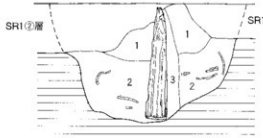
出土遺物（第151～153図）

甕形土器（1398～1406）1398は大型品、球形の胴部。1399は中型品、球形の胴部に外傾する口縁部。1400は肩の張らない胴部、口縁部は直立気味に立ち上がる。1401～1403は口縁部。1404～1406は丸い底部。壺形土器（1407～1413）1407～1412小型品。1407・1408は球形の胴部。1409は丸い底部に頸部は広く口縁部は外傾する。1410は扁球形の胴部に直立する口縁部。1411は外傾する口縁部。1412は直線的に伸びる長い口縁部。1413は外反する口縁部。高坏形土器（1414）段をもち外上方に伸びる坏部。鉢形土器（1415）短く外反する口縁部。製塩土器（1416）直立する口縁部。1417・1418は朝鮮系軟質土器の脚部片。1419は弥生土器。壺形土器の底部、外面に記号あり。

木製品（1420）木柱は角材で小口から表面には手斧と思われる加工痕が顕著にあり、小口は水平である。

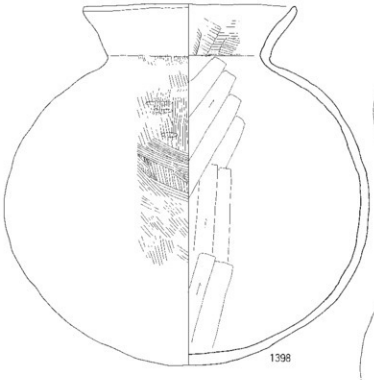
時期：出土した土師器の甕形土器、壺形土器の形態から古墳時代前期と考えられる。

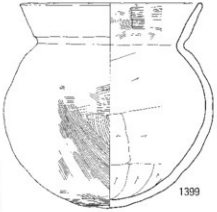


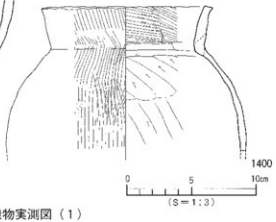


1．暗褐色熱質土（ややボサボサ、土器混）
2．黒色粘質土（粘い）
3．黒色粘土（粘質強・水がやせた部分）

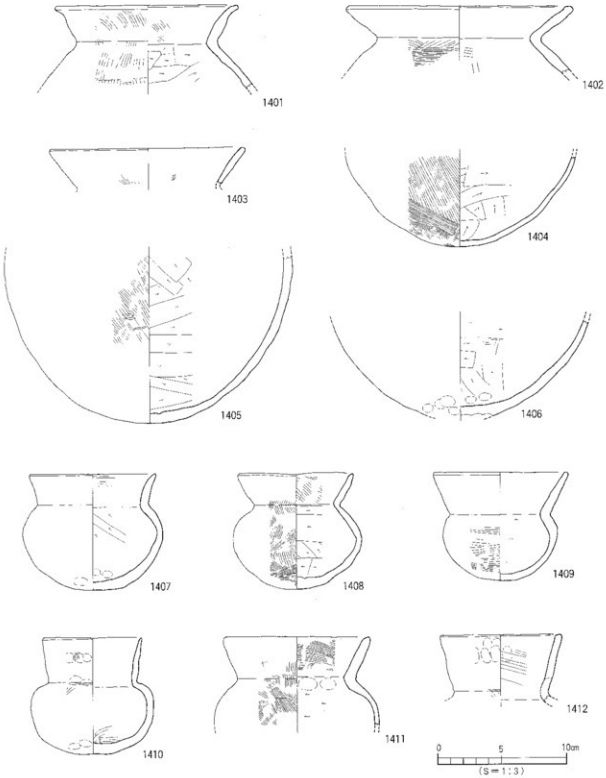
0　1m
（S＝1：20）



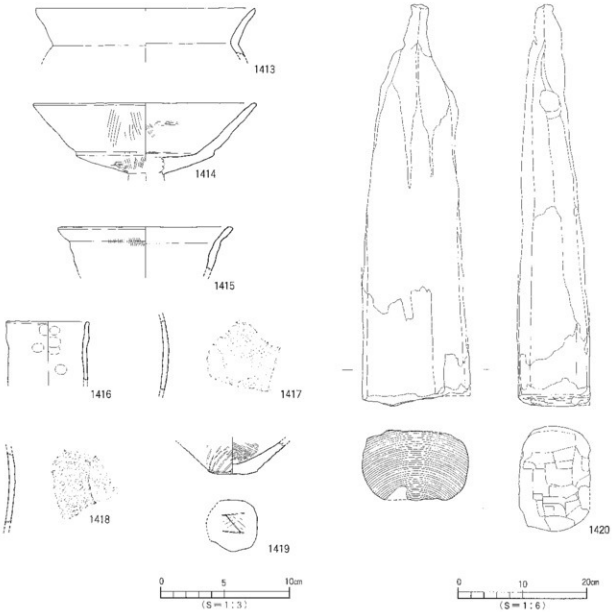




第151図　SK14測量図・出土遺物実測図（1）



第152図　SK14出土遺物実測図（2）



第153図　SK14出土遺物実測図（3）

ＳＫ22（第154図）

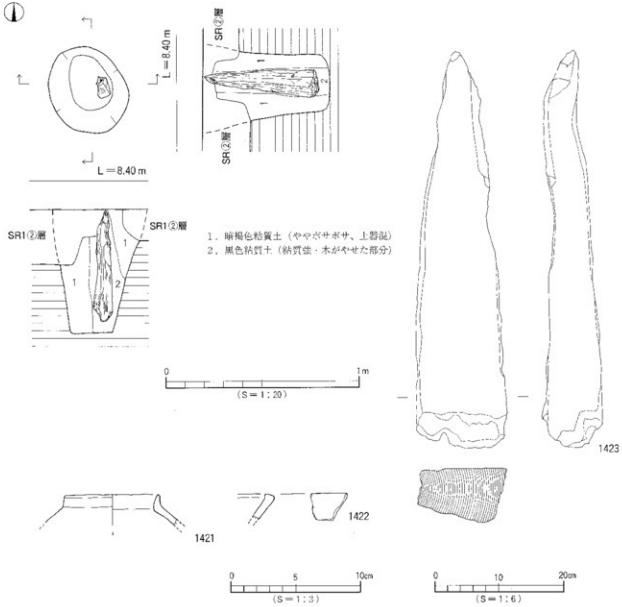
調査区北部のＧ６区に位置する。ＳＲ１②下層と③層を切る。平面形態は楕円形である。規模は長径0.47ｍ、短径0.38ｍ、深さ65㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層暗褐色粘質土、２層黒色粘質土（粘質強）である。出土遺物は土師器と木柱がある。出土状況はＳＫ14と同様に、土坑のほぼ中央に角材が立てられていた。しかしＳＫ14とは異なり、木柱の周囲からの出土遺物は土師器小片のみである。

出土遺物（第154図）

壺形土器（1421）短く直立する口縁部。甕形土器（1422）外傾する口縁部。

木製品（1423）角材の表面に手斧と思われる加工痕が顕著にあり、小口は水平に削っているが腐食している。

時期：出土した土師器の年代と、木柱の出土状況がＳＫ14と似ているため古墳時代前期と考えられる。



第154図　SK22測量図・出土遺物実測図

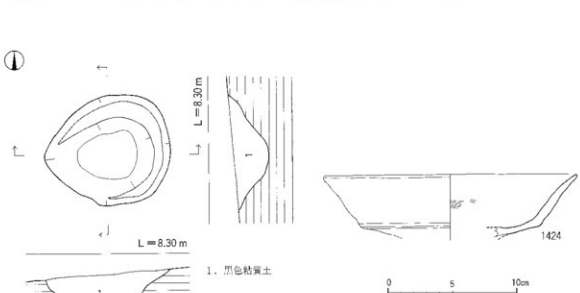
ＳＫ16（第155図）

調査区中央部のＧ７・８区に位置する。ＳＲ１③層を切る。平面形態は円形である。規模は長径1.30ｍ、短径1.15ｍ、深さ42㎝を測る。断面形態は擂鉢状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器の高坏形土器がある。

出土遺物（第155図）

高坏形土器（1424）段をもちわずかに外反気味に伸びる坏口縁部。

時期：出土した土師器の高坏形土器の形態から古墳時代前期と考えられる。



第155図　SK16測量図・出土遺物実測図

ＳＫ23（第156図）

調査区北西部のＣ５区に位置する。ＳＲ１③層を切る。平面形態は楕円形である。規模は長径1.07ｍ、短径0.90ｍ、深さ31㎝を測る。断面形態は擂鉢状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器がある。

出土遺物（第156図）

高坏形土器（1425）脚裾部。埦形土器（1426）内湾する口縁部端部は尖り気味に丸い。

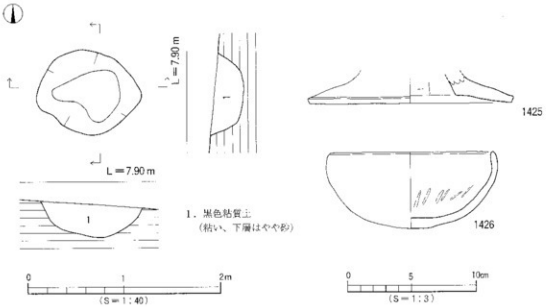
時期：出土した土師器の埦形土器の形態から古墳時代前期と考えられる。

ＳＫ３（第157図）

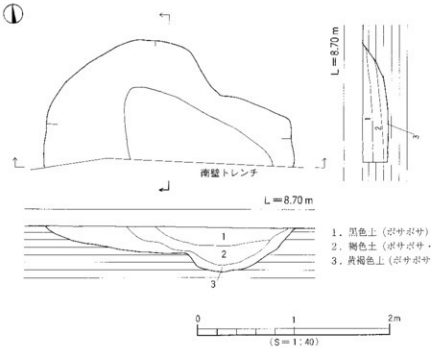
調査区南部のＥ16～Ｆ17区に位置する。ＳＤ２とトレンチに切られる。平面形態は不整形である。規模は長径2.56ｍ、残存短径1.25ｍ、深さ45㎝を測る。断面形態は２段掘りを呈する。埋土は３層に分かれ、１層黒色土（ボサボサ）、２層褐色土（黄灰色混じり地山ボサボサ）、３層黄褐色土（ボサボ

サ）である。出土遺物は弥生土器と土師器がある。埋土の状況から倒木痕と考えられる。

時期：土師器が出土していることと、ＳＤ２に切られていることから古墳時代前期の倒木痕と考えられる。



第156図　SK 23測量図・出土遺物実測図



第157図　SK 3測量図

6．古墳時代中期

検出遺構は、掘立柱建物２棟、土坑２基、溝３条、柵列１基、杭列２基である。

(1) 掘立柱建物（掘立）

掘立３（第159図）

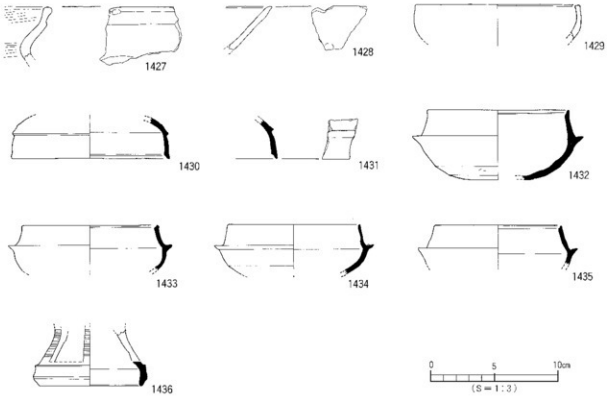
調査区北東部のＩ５～Ｊ６区に位置し、ＳＲ１②下層を切り、掘立２に切られる。南北棟で４間×２間であるが北西部の柱穴が１基なく西側は３間である。規模は桁行長6.50ｍ、梁行長3.40ｍを測る。主軸は桁行方向でN-5°-Wである。柱穴の平面形態は円形または楕円形である。規模は直径30～80㎝、深さ15～40㎝を測る。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層黄色混じりの暗褐色粘質土である。柱穴３基から柱痕を検出した。柱穴内部からの出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（第158図）

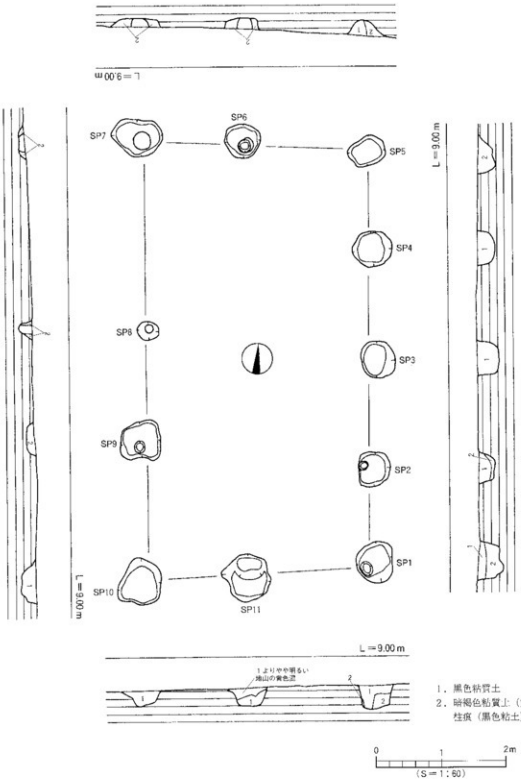
土師器（1427～1429）1427は甕形土器。口縁部手前で段をもつ。1428は高坏形土器。坏部の小片。1429は壺、内湾する口縁部。

須恵器（1430～1436）1430・1431は坏蓋。口縁端部は内径する面をもつ。1432～1435は坏身。1432～1434は水平に伸びる受部、立ち上がりは内傾する。1435は外上方に伸びる受部。1436は高坏形土器。短い脚部の裾部は段をもち内傾する。

時期：出土した須恵器の坏身、坏蓋の形態から、５世紀後半とする。



第158図　掘立３出土遺物実測図



第159図　掘立３測量図

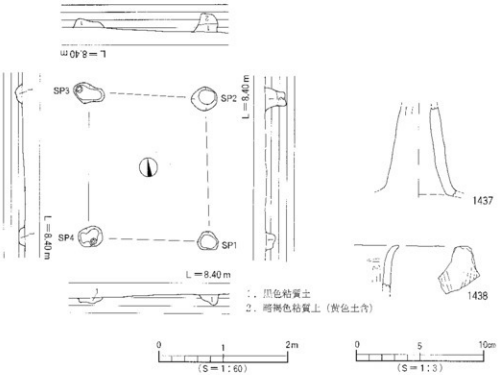
掘立５（第160図）

調査区北部のＧ４～Ｈ４区に位置し、ＳＲ１②下層を切る。南北棟で１間×１間である。規模は桁行長2.26ｍ、梁行長1.84ｍを測る。主軸は桁行方向でN-2°-Eである。柱穴の平面形態は楕円形である。規模は直径30～48㎝、深さ７～30㎝を測る。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層黄色混じりの暗褐色粘質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器がある。

出土遺物（第160図）

高坏形土器（1437）柱部。鉢形土器（1438）口縁部の小片。

時期：出土した土師器の高坏形土器の形態から、５世紀中半以降とする。



第160図　掘立５測量図・出土遺物実測図

(2) 土坑

ＳＫ24とＳＫ2は調査行程を記述する。

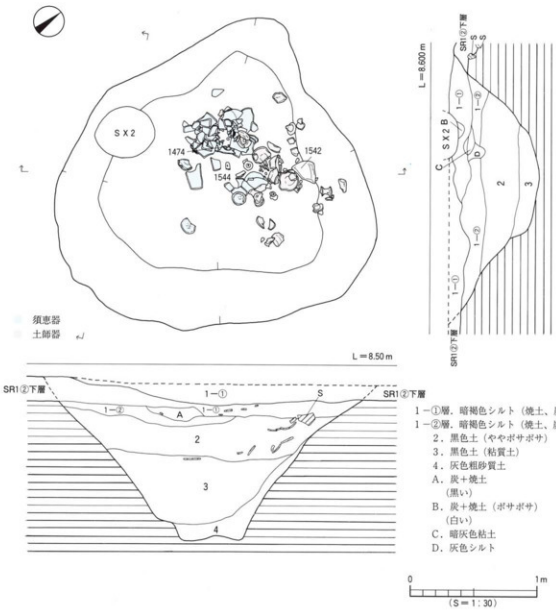
（ＳＫ24調査行程）

ＳＫ24の検出はＳＸ２調査中に検出した。ＳＫ24の上部にはＳＸ２があり、ＳＸ２の堀方を確認するため東西方向にトレンチ掘削時に地山が大きく掘り込まれた遺構を確認した。初めは、ＳＸ２の堀方と考えたが土層確認の結果、別の遺構であることを確認したため、遺構名をＳＫ24とした。

ＳＫ24はトレンチの断面土層ではＳＲ１②下層を切る遺構である。しかし、ＳＲ１②下層では平面形態が確認できなかったため、平面形態は地山での検出となった。

遺構の掘り下げは、ＳＸ２確認時のトレンチに直行するベルトを設定し北東、北西に分けて掘り下げを行った。ベルト北東側からは土師器の高坏や須恵器の坏が出土し、北西側からは木製品の一部が

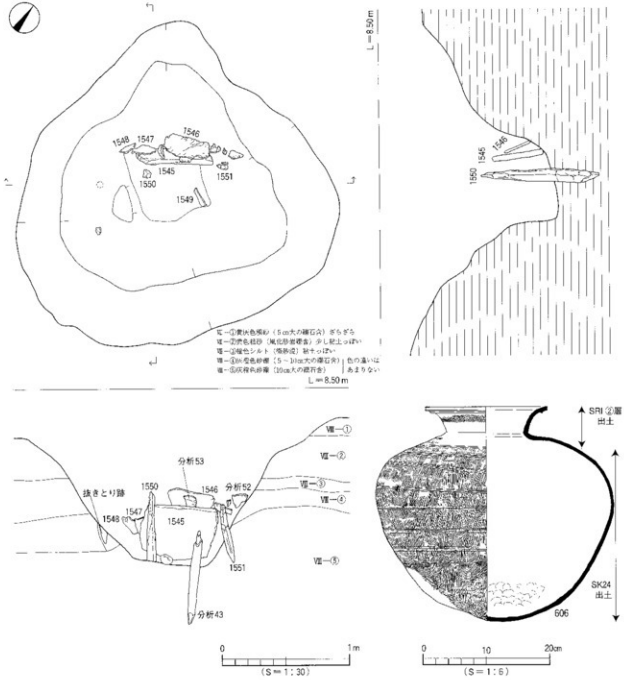
出土した。遺構は深く遺物とベルトを撤去しないと掘り下げが出来ないため、測量と取り上げを行いベルトの土層を測量し撤去を行う。床面までの掘り下げを開始したが、北西側の木製品の続きが北東側から出土した。木製品は、厚みのある板状のものと板を支える杭であった。板状木製品と杭の出土により遺構の性格を明確にするため遺構の検討と調査指導を請いた。検討結果は、木製品は井戸枠の可能性が考えられ井戸枠は構築方法の解明が必要であると指導をいただいた。構築方法解明のため土坑の東側を大きく重機により掘削を行い、側面からの写真撮影と展開図の測量を行い慎重に取り上げを行った。



第161図　SK24測量図（1）

ＳＫ24（第161・162図）

調査区中央部のＧ８～Ｈ８区に位置する。ＳＲ１②下層を切り、掘立１とＳＸ２に切られる。平面形態は円形で北西側が突出する形態である。規模は長径2.41ｍ、短径2.14ｍ、深さ1.05ｍを測る。断面形態は擂鉢状で南側に段をもつ。埋土は４層に分かれ、最上層暗褐色土、１層暗褐色土（焼土含）、２層黒色土（ややボサボサ）、３層黒色粘質土、４層灰色粗砂質土である。出土遺物は土師器、須恵器、ミニチュア土製品、土製勾玉、軟質土器、石鹿丁、白玉、木製品（井戸枠・杭）がある。出土状況は、最上層の北東側に遺物が集中する土器溜まりがあり、規模は長径0.85ｍ、短径0.60ｍの楕円形状に土師器の高坏形土器や甕形土器などがまとまって出土した。周辺には焼土を検出した。当初は、



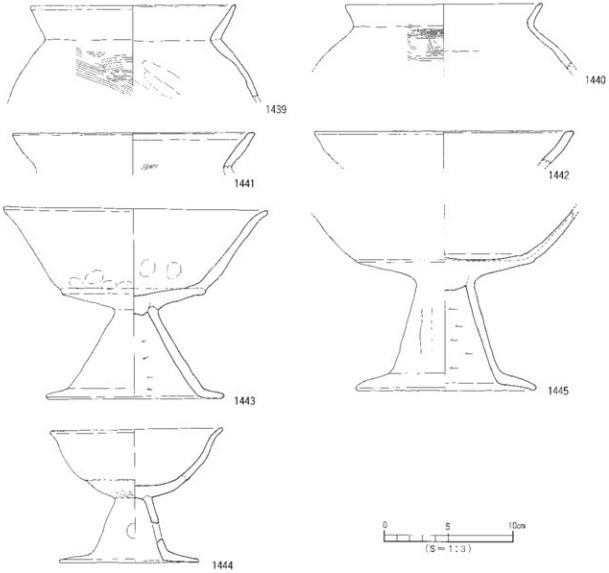
第162図　SK24測量図（２）・出土遺物実測図

ＳＸ１として取り上げを行ったが土層確認の結果、土器溜まり（ＳＸ１）はＳＫ24の遺物であることが判明したため土器溜まり（ＳＸ１）は、ＳＫ24の最上層出土遺物として取り扱った。１層から２層中では、完形品に近い土師器や須恵器、ミニチュア土製品、石庖丁、白玉が土坑の北東部掘り方から土坑中央へ向けて斜傾状に折り重なるように出土した。また、須恵器の甕形土器がＳＲ１②層Ｅ９区出土（606）の口縁部と復元できた。３層では、土師器の埴形土器が１点出土した。木製品は四方に木杭を打ち込み、その外側に立て掛けるように長方形の板材（井戸枠）１枚と薄い板材が残っていた。

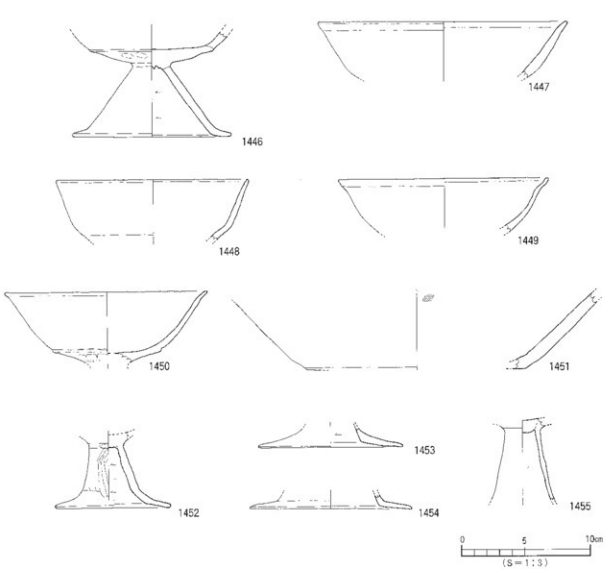
出土遺物（第163～172図）

最上層出土遺物（1439～1458）（第163・164図）

土師器（1439～1455）1439～1442は甕形土器。外傾する口縁部。1439・1441の口端面は内傾し、1442は水平である。高坏形土器（1443～1455）1445は脚部から坏部。坏部は段をもち、脚部は「ハ」の字状に開き内面にシャープな稜をもち屈曲する。1447～1450は坏部。1451は段をもつ坏部の大型品。弥生土器（1456～1458）1456は甕形土器。胴部にヘラによる沈線文と２列の刺突文を施す。1457・1458は壺形土器。1457は下垂口縁の小片。外面にヘラと櫛による波状文６条を施す。1458は平底の底部。



第163図　SK24最上層出土遺物実測図（１）



第164図　SK 24最上層出土遺物実測図（2）

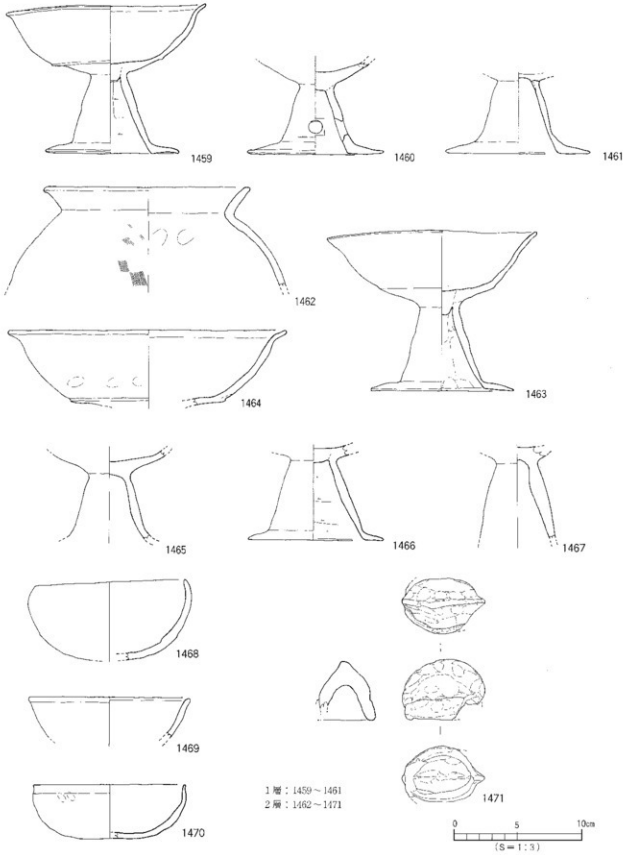
1層出土遺物（1459～1461）（第165図）

高坏形土器（1459～1461）1459は完形品。段をもつ坏部、脚部は「ハ」の字状に開き裾部手前で屈曲する。1460は脚裾部が水平に伸び、柱部に2方向の円孔を施す。1461は脚裾部は水平に伸びる。

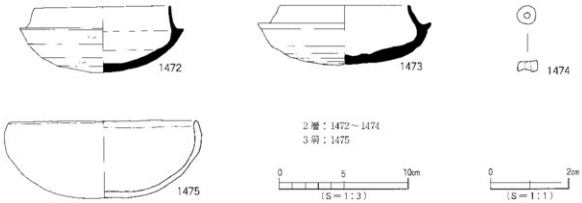
2層出土遺物（1462～1474）（第165・166図）

甕形土器（1462）わずかに外反する口縁部。高坏形土器（1463～1467）1463は完形品。坏部は段をもち外反する口縁部、脚部は「ハ」の字状に開き裾部で屈曲する。埦形土器（1468～1470）1471は胴。手捏による成形、裾部に凸帯を貼付、底部を作る。1472・1473は須恵器の坏身。1474は小玉。

3層出土遺物（1475）（第166図）埦形土器。内湾する口縁部、外面に2次焼成の痕跡か。



第165図　SK24出土遺物実測図（1）



第166図　SK 24出土遺物実測図（2）

層位不明遺物（1476～1550）（第167～170図）

上師器（1476～1496）甕形土器（1476～1482）。壺形土器（1483）。高坏形土器（1484～1490）。椀形土器（1491～1493）。甑形土器（1494）。ミニチュア土器（1495・1496）。1496は甞。手捏による成形、裾部に凸帯を貼付、底部を作る。1497は軟質土器。斜格子タタキ。

須恵器（1498～1503）1498は坏蓋。1499は坏身。1500～1503は高坏形土器。

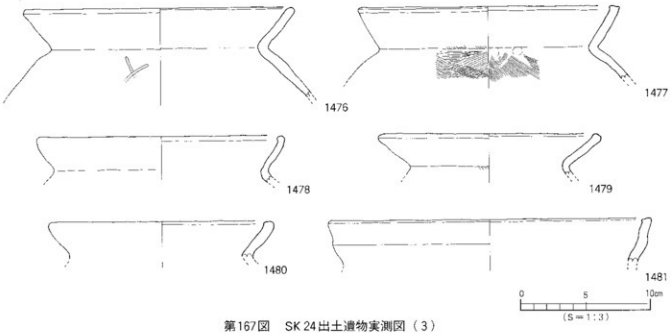
弥生土器（1504～1508）1504は壺形土器の口縁部片。1505は支脚形土器。中空で受部は斜状である。1506は把手。1507は高坏形土器の裾部に線刻。1508は不明土器。外面に線刻。

装身具（1509～1538）1509は土製の勾玉。1510～1538は臼玉。

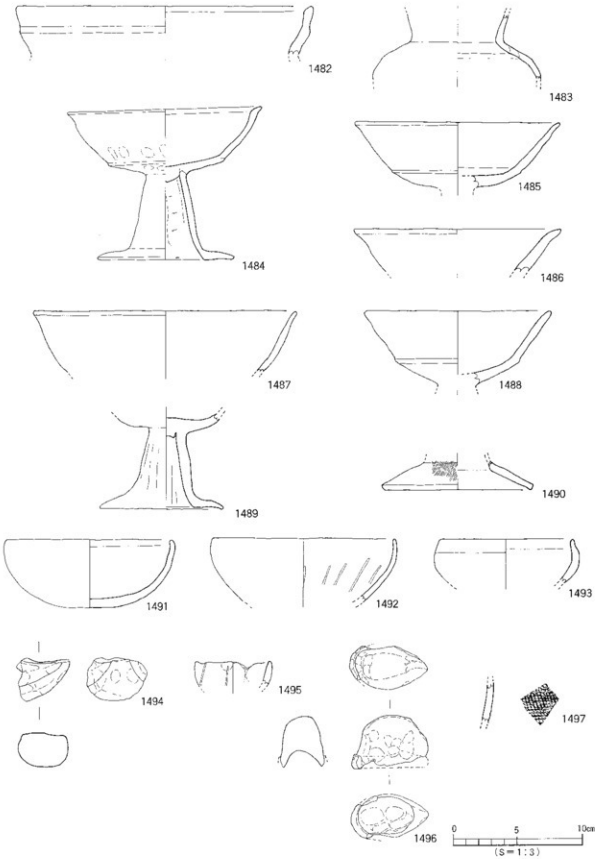
石製品（1539～1544）1539・1540は敲石。1541～1543は台石。1544は石鹿子。

木製品（1545～1552）1545は井戸枠。1546～1548は板材。1549は不明木製品。1550・1551は杭材。1552は杭。

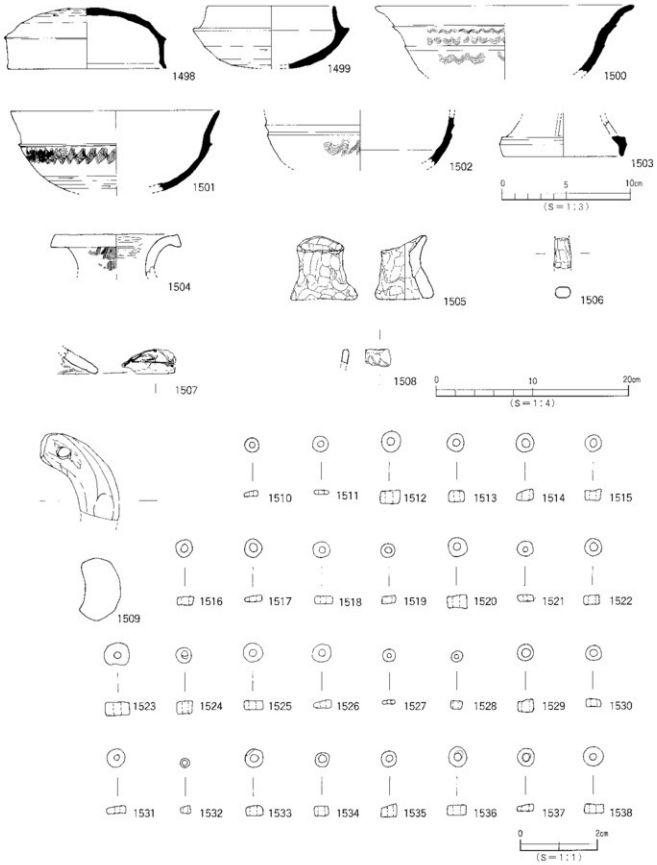
時期：出土した土師器と須恵器の形態から古墳時代中期とする。これらの出土状況から、井戸が廃棄した際に井戸枠を抜き取り、その上層で何らかの祭祀を行い土器などを廃棄したものと推定される。



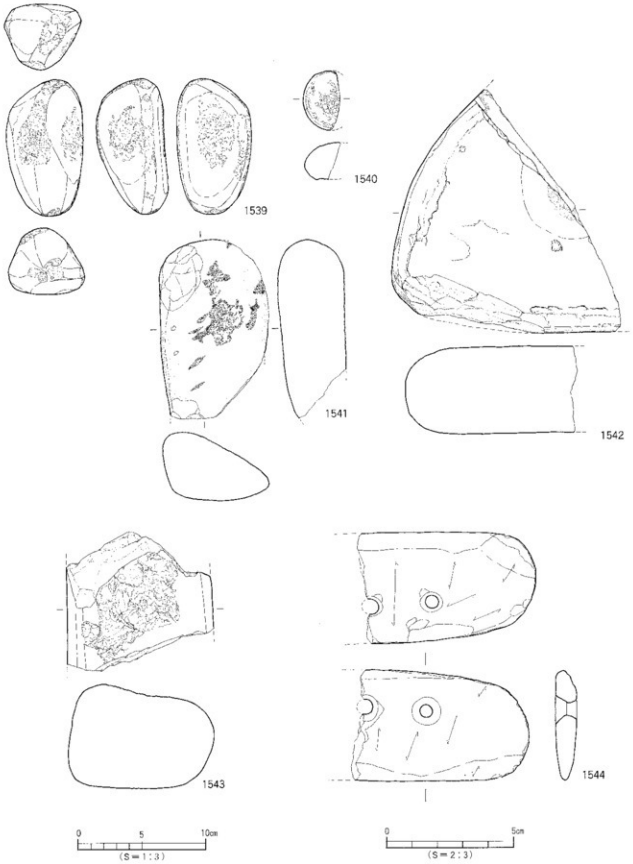
第167図　SK 24出土遺物実測図（3）



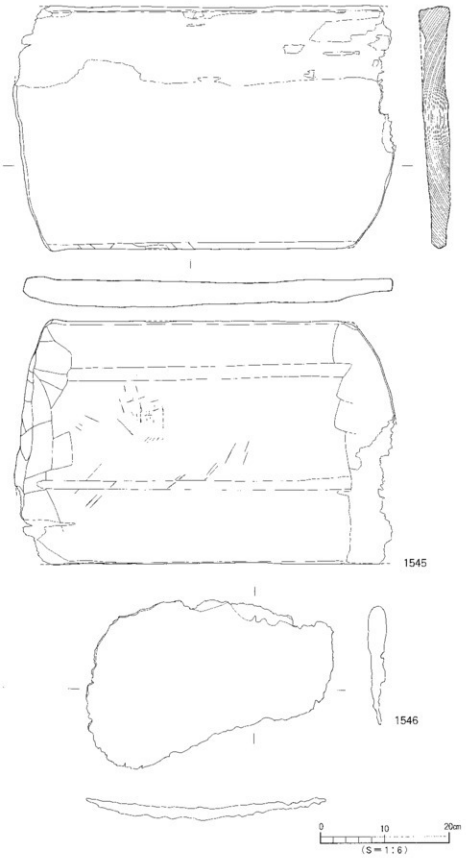
第168図　SK24出土遺物実測図（4）



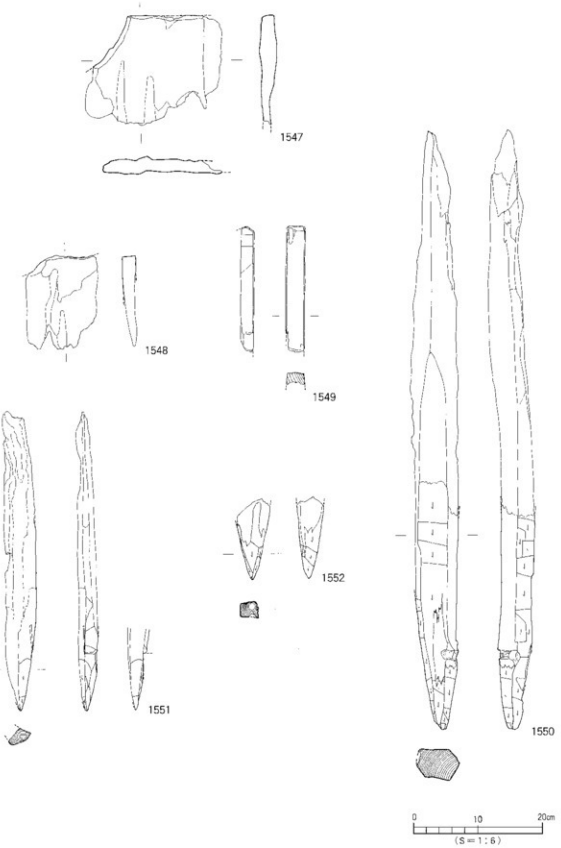
第169図　SK 24出土遺物実測図（5）



第170図　SK24出土遺物実測図（6）



第171図　SK24出土遺物実測図（7）



第172図　SK 24出土遺物実測図（8）

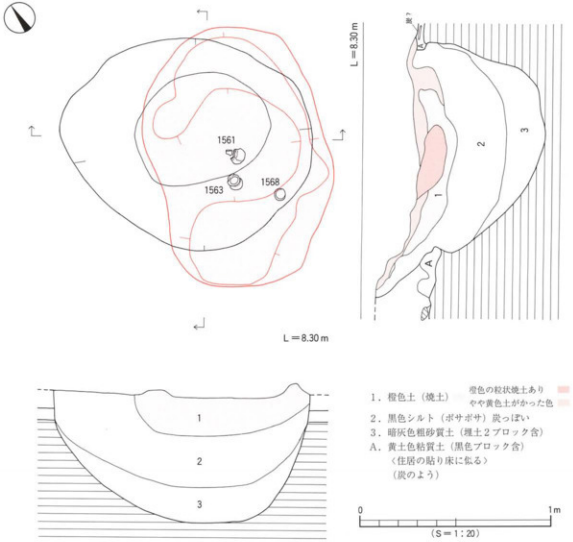
（ＳＫ２調査行程）

ＳＫ2の検出は、ＳＲ１②層Ｈ14区の掘り下げ中に焼土の広がりを検出したため、焼土を残しＳＲ１②層の掘り下げを行った。焼土の範囲を測量し特に焼土が集中する箇所には、長軸（南北）方向でトレンチを入れ堆積状況（厚さ）の確認を行った。土層結果からは、焼土の下にはＳＲ１の床面が検出されず深い遺構があることが分かった。焼土は流路中の堆積物ではなくＳＲ１②層より掘り込まれた遺構埋土の上層部分であることを確認しＳＫ２とした。しかし、平面形態はＳＲ１②層中からは確認できず地山での確認となった。

ＳＫ２の掘り下げはトレンチの西側を半截し埋土の堆積状況の確認を行った。埋土は、３層に分層でき１層は焼土、２層は水分を含んだ灰のようであり、３層は暗灰色粗砂質土である。土層は記録保存のため剥ぎ取りを行った。

ＳＫ２（第173図）

調査区南東部のＨ14区に位置する。ＳＲ１②（下）層を切る。平面形態は楕円形である。規模は長径1.30ｍ、短径1.15ｍ、深さ62㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層橙色土（焼土）、２層黒色シルト（ボサボサ）、３層暗灰色粗砂質土（２層をブロックで含）である。出土遺物は土師器、須恵器、製塩土器、石器がある。出土した遺物（土器・石器）は２次的焼成を受け赤く焼けている（巻頭図版７）。



第173図　SK2測量図

1層出土遺物

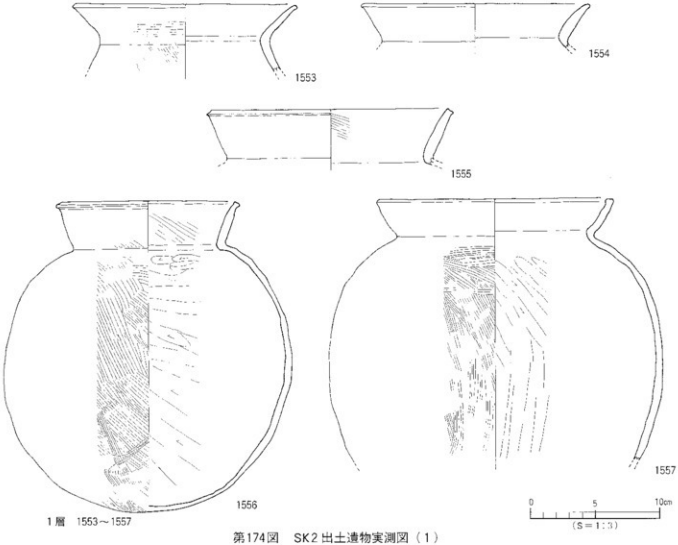
甕形土器（1553～1559）1553～1555は外傾する口縁部。1556は球形の胴部に丸底の底部、口縁部は直線的に立ち上がる。1557は肩の張る胴部、口縁部は内湾気味に立ち上がる。1558は直線的に立ち上がる口縁部。1559は内湾する口縁部。壺形土器（1560～1563）1560は扁球形の胴部。1561は球形な胴部、口縁部は直線的に立ち上がる。1562は肩の張る胴部に直線的に立ち上がる口縁部。1563は肩の張らない胴部に直線的に立ち上がる口縁部。高坏形土器（1564～1566）1564は「ハ」の字状に開く脚部は屈曲して水平に伸びる。1565は「ハ」の字状に開く脚部は屈曲する裾部をもつ。1566は屈曲する脚裾部。1567は製塩土器。わずかに内湾気味に直立する口縁部。1568はミニチュア土器。尖り気味の底部、口縁部は指頭押圧により作り出す。1569は甑形土器。把手部、端部は平坦面をもつ。

2層出土遺物

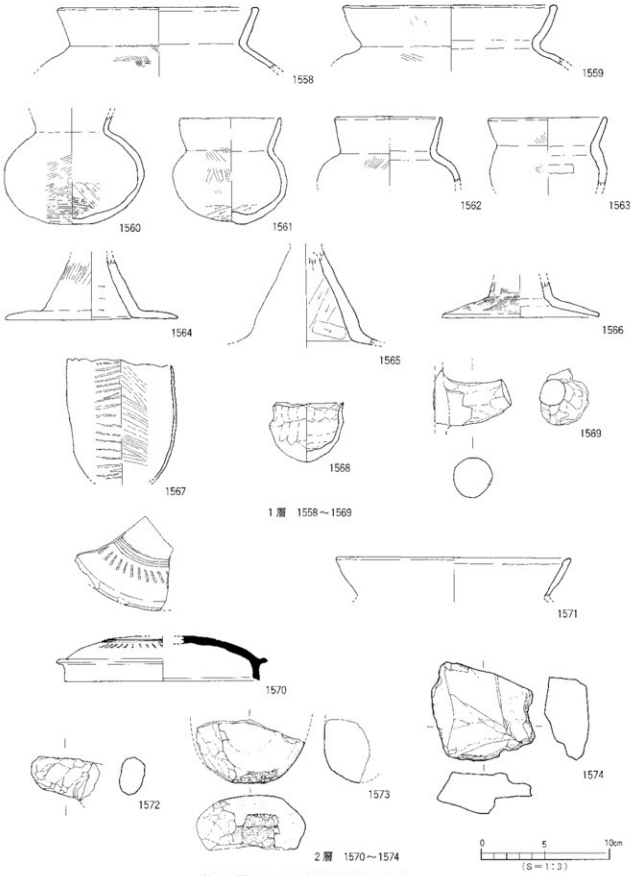
1570は須恵器の坏蓋。水平気味の天井部に刺突列点文を施す。1571は土師器の甕形土器の口縁部。1572は弥生土器の支脚形土器の角部。

石製品1573は敲石。1574は残核。

時期：出土した土師器と須恵器の形態から古墳時代中期とする。



第174図　SK2出土遺物実測図（1）



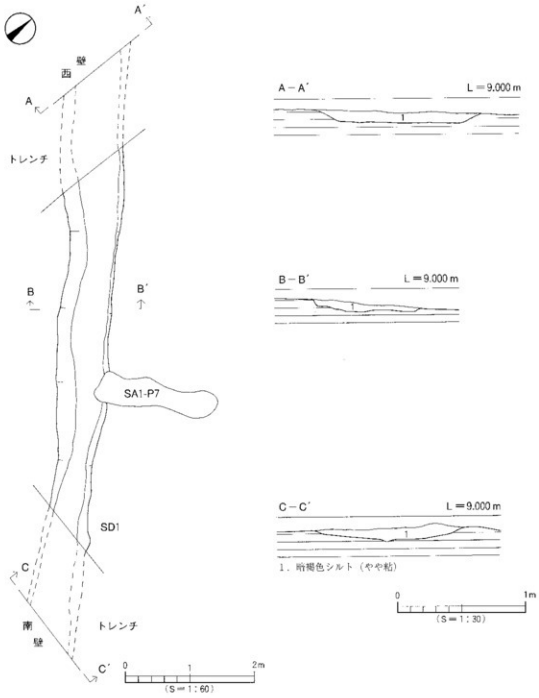
第175図 SK2出土遺物実測図（2）

(3) 溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第176図）

調査区南西部のＢ16～Ｃ17区に位置し、ＳＡ１とトレンチに切られる。西側と南側は調査区外に続く。規模は検出長5.60ｍ、上場幅0.70～0.90ｍ、深さ７㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土はやや粘質の暗褐色シルトである。出土遺物は土師器がある。小片のため図化していない。

時期：出土した土師器の形態から、５世紀代とする。

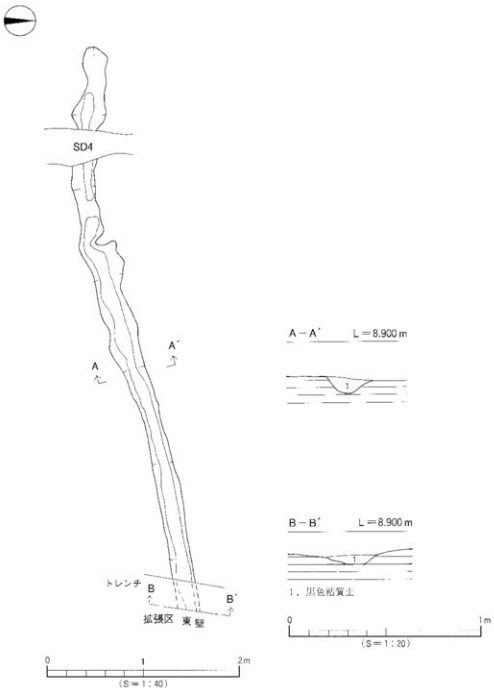


第176図　SD1 測量図

ＳＤ３（第177図）

調査区東部のＩ10～Ｋ10区に位置し、ＳＤ４とトレンチに切られる。東側は調査区外に続く。規模は検出長5.06ｍ、上場幅0.25～0.35ｍ、深さ８㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器がある。小片のため図化していない。

時期：出土した土師器の形態から、５世紀以降とする。

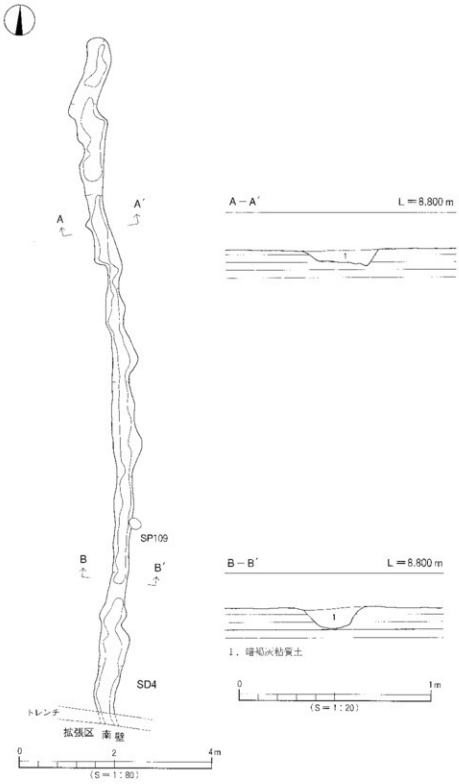


第177図　SD3測量図

ＳＤ４（第178図）

調査区東部のＩ９～Ｊ12区に位置し、ＳＤ３を切り、ＳＡ２とＳＡ３に切られる。南側は調査区外に続く。規模は検出長14.10ｍ、上場幅0.20～0.50ｍ、深さ９㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は土師器がある。小片のため図化していない。

時期：ＳＤ３を切っていることから、５世紀以降とする。



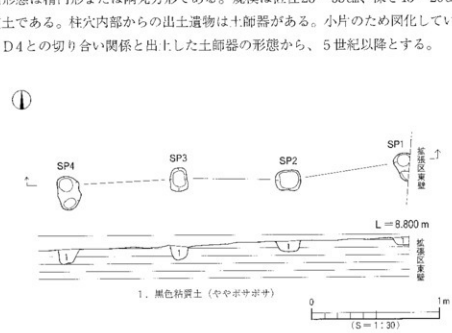
第178図　SD4測量図

(4) 柵列（ＳＡ）

ＳＡ３（第179図）

調査区東部のＩ11～Ｊ11区に位置し、ＳＤ４を切り、ＳＡ２に切られる。東側は調査区外に続くものと思われる。規模は３間分を検出し、検出長5.40ｍを測る。主軸は東西方向でW-3°-Sである。柱穴の平面形態は楕円形または隅丸方形である。規模は直径25～55㎝、深さ13～20㎝を測る。埋土は黒色粘質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器がある。小片のため図化していない。

時期：ＳＤ４との切り合い関係と出土した土師器の形態から、５世紀以降とする。



第179図　SA3 測量図

(5) 杭列

杭列１（第４図）

調査区南部のＳＲ１内Ｅ～Ｇ13区に東西方向に位置する。杭は、１１本が出土しＳＲ１②下層上面より打ち込まれ地山まで到達している。杭は、上部が腐食し３層で検出した杭３点（分析番号20・9・6）と、下部が腐食し上部だけが１層から出土した杭が１点（分析番号13）ある。

出土遺物（第180図）

杭１１本の内残りが良い８本1575～1582（分析番号13・20・14・19・4・9・7・6）の樹種同定結果からは５本がヒノキ、２本がコウヤマキ、１本がマツ属である。

時期：ＳＲ１②下層上面から打ち込まれているため古墳時代中期とする。

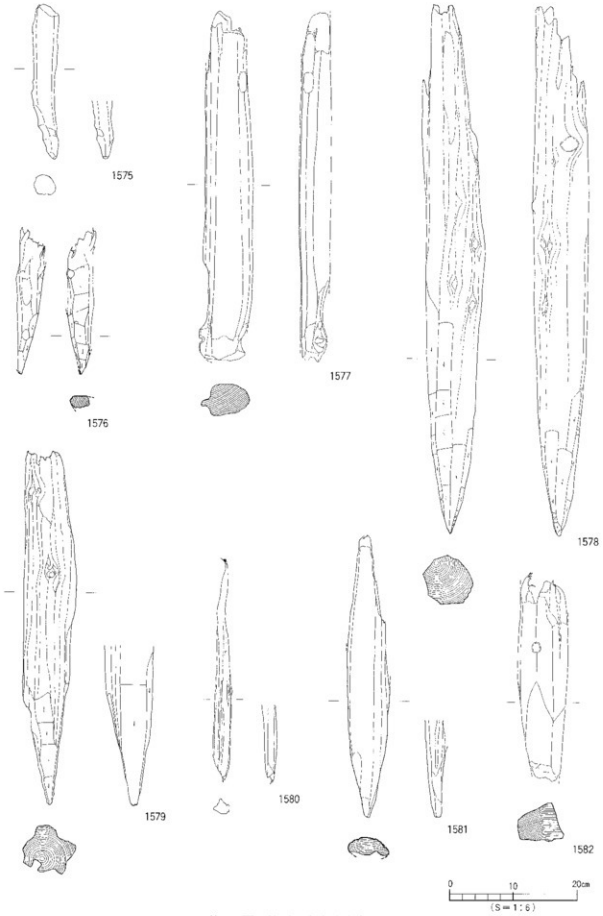
杭列２（第４図）

調査区北部のＳＲ１内Ｃ５～Ｆ４区に東西方向に位置する。杭は、６本が出土しＳＲ１②下層上面より打ち込まれ地山まで到達している。

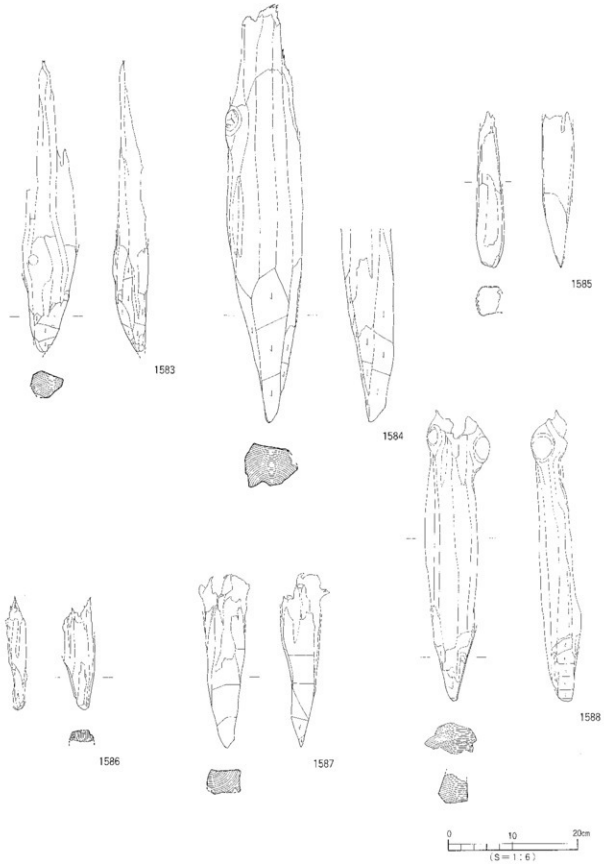
出土遺物（第181図）

杭６本1583～1588（分析番号28・11・10・16・15・17）の樹種同定結果からは５本がヒノキ、１本がカヤである。

時期：ＳＲ１②下層上面から打ち込まれているため古墳時代中期とする。



第180図　杭列1出土遺物実測図



第181図　杭列２出土遺物実測図

7．古墳時代後期

当該期の遺構は、掘立柱建物４棟、竪穴式住居址１棟、土坑２基、溝１条、柵列２条、性格不明遺構１基がある。

(1) 掘立柱建物（掘立）

掘立１（第182図）

調査区東部のＧ７～Ｉ11区に位置し、ＳＫ24とＳＲ１②層を切り、掘立４に切られる。規模は８間×３間で桁行長14.70ｍ、梁行長4.40ｍを測る南北棟である。西側が東側より狭く柱穴の配列にも違いがある。主軸は桁行方向でN-６°-Wである。柱穴の平面形態は円形、楕円形、隅丸方形である。規模は直径22～52㎝、深さ26～60㎝を測る。埋土は３層に分かれ、１層やや砂混じりの暗灰色粘質土、２層暗灰褐色粘質土、３層黄褐色粗砂質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器・須恵器・朝鮮系軟質土器・製塩土器、ＳＰ１・２・４・５・６から柱材がある。

出土遺物（第183図）

土師器（1589～1600）甕形土器1589～1591は外傾する口縁部、端部は円む。高坏形土器1592～1596。1592～1594は坏部。1595・1596は柱部。鉢形土器1597は平底。埦形土器1598は口縁端部は内湾する。製塩土器1599・1600。1599は平底。1600は直線的に立ち上がる口縁部。

弥生土器1601は壺形土器、外面に沈線と竹管文を施す。

須恵器1602～1604。1602は高坏（市場系）。口縁部と体部を断面三角形状の凸帯で分ける。1603は坏身（陶質土器か）。1604は蓋。外面に波状文。

木製品1605～1608。1605（分析番号30）ＳＰ１はカヤ、1606（分析番号31）ＳＰ２はカヤ、1607（分析番号32）ＳＰ４はカヤ、1608（分析番号33）ＳＰ６はコナラ属コナラ節。

時期：出土した土師器の形態から、６世紀前半以降とする。

掘立２（第184図）

調査区東部のＨ４～Ｊ８区に位置し、掘立３とＳＲ１②層を切り、掘立４に切られている。規模は８間×２間で桁行長16.40ｍ、梁行長4.30ｍを測る南北棟である。主軸は桁行方向でN-８°-Wである。柱穴の平面形態は隅丸方形または楕円形である。規模は直径36～80㎝、深さ５～32㎝を測る。埋土は２層に分かれ、１層暗褐色粘質土、２層黄褐色粗砂質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器と須恵器がある。

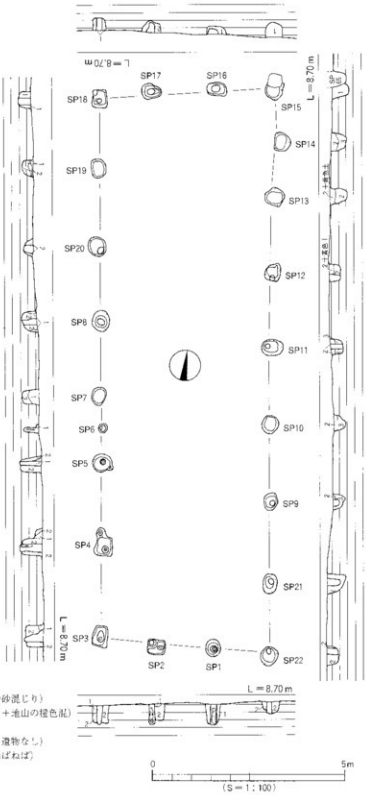
出土遺物（第185図）

甕形土器1609～1611。口縁部片。1612は製塩土器の小片。1613・1614は弥生土器の甕形土器。1615～1618は坏蓋。1619～1621は坏身。1622は高坏形土器。1623は埦形土器。

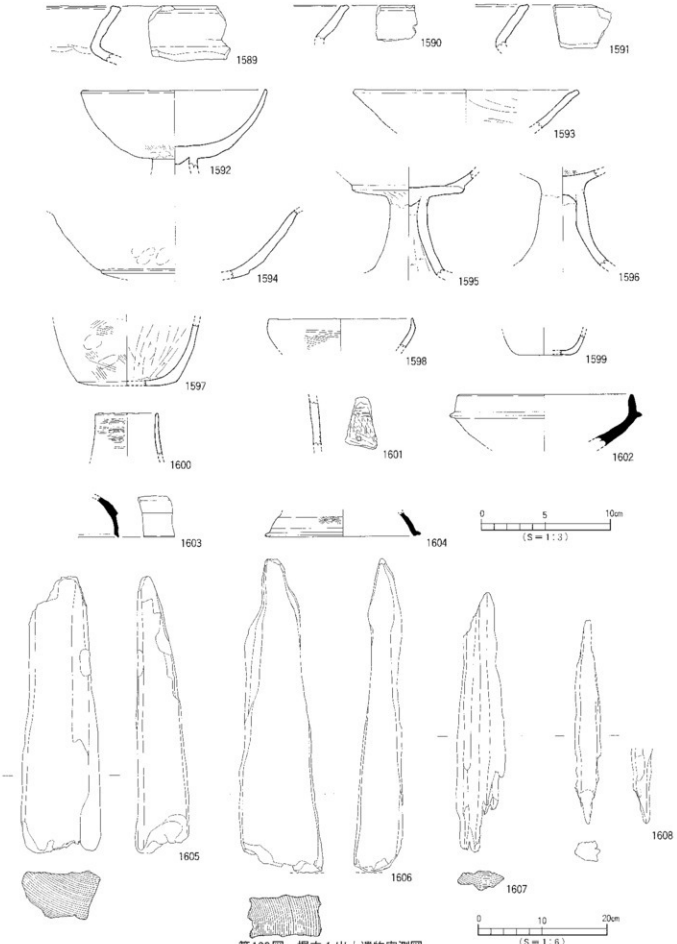
時期：出土した土師器の形態から、５世紀末～６世紀中葉とする。

掘立４（第186図）

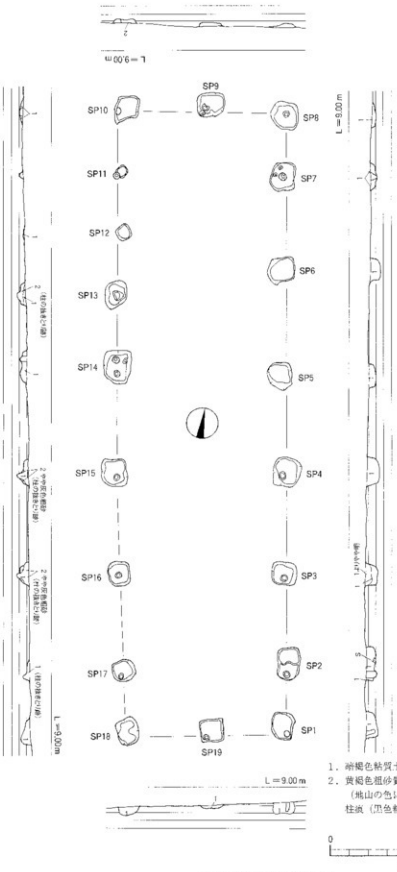
調査区東部のＨ８～Ｊ９区に位置し、掘立１・２とＳＲ１②層を切る。建物は東西棟で２間×２間である。北側は柱穴がなく１間である。規模は桁行長4.30ｍ、梁行長3.30ｍを測る。主軸は梁行方向でN-11°-Wである。柱穴の平面形態は方形または楕円形である。規模は直径55～65㎝、深さ10～20



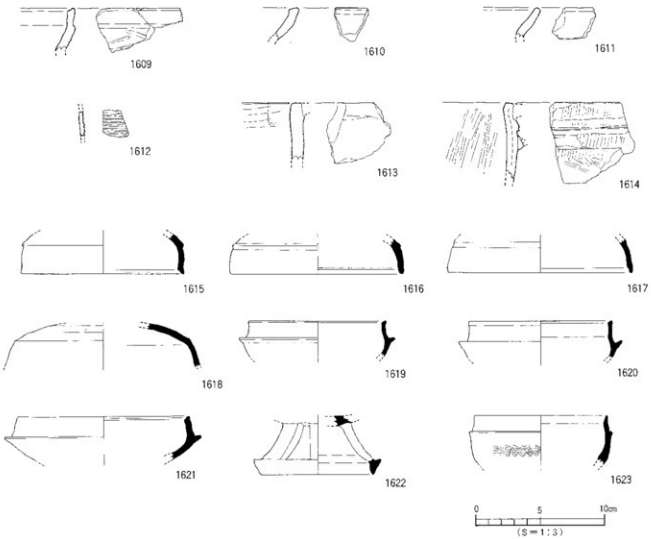
第182図　掘立1測量図



第183図　掘立１出土遺物実測図



第184図　掘立２測量図



第185図　掘立２出土遺物実測図

cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層暗褐色粘質土、２層灰色粗砂質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（第186図）

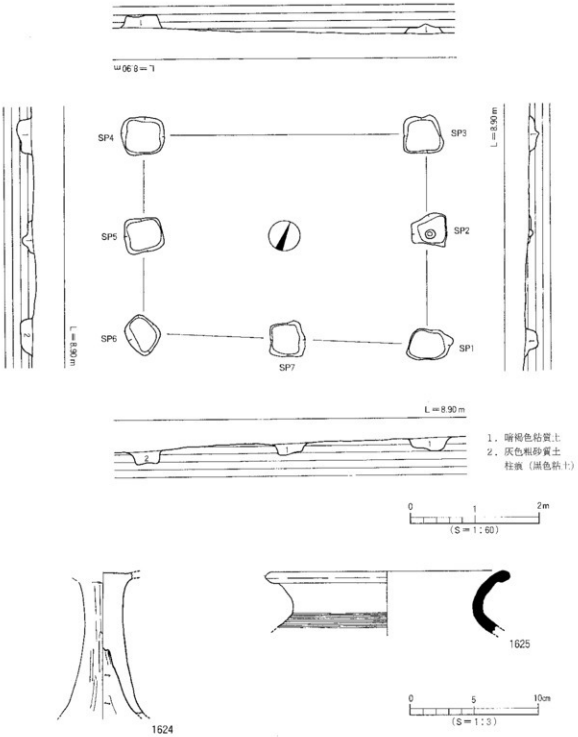
1624は土師器の高坏形土器。1625は須恵器の壺形土器。

時期：出土した土師器の形態から、７世紀初頭とする。

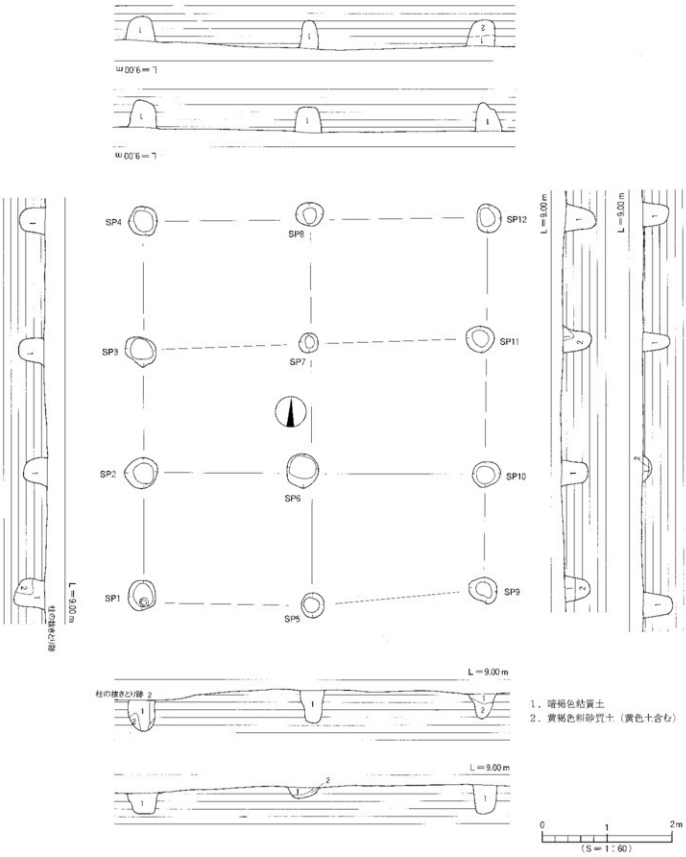
掘立６（第187図）

調査区東部のＫ６～Ｌ７区に位置し、ＳＢ１を切る。建物は南北棟で３間×２間の総柱建物である。規模は桁行長6.00ｍ、梁行長5.30ｍを測る。主軸は桁行方向でN-2°-Wである。柱穴の平面形態は円形または楕円形である。規模は直径30～50cm、深さ35～50cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層暗褐色粘質土、２層黄褐色粗砂質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器と須恵器がある。

時期：出土した土師器の形態と６世紀中葉のＳＢ１を切ることから、６世紀中葉以降とする。



第186図　掘立4測量図・出土遺物実測図



第187図　振立６測量図

(2) 竪穴式住居址（ＳＢ）

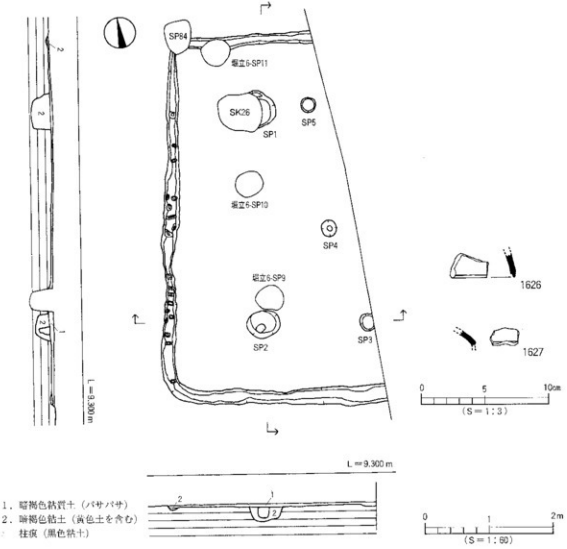
ＳＢ１（第188図）

調査区東部のＬ６～８区に位置しＳＫ25を切り、掘立６、ＳＫ26、ＳＰ84に切られ、東隅は調査区外に続く。平面形態は２カ所のコーナー部を検出したため方形と考えられる。規模は長軸5.76ｍ、残存短軸3.30ｍ、深さ５㎝を測る。埋土は暗褐色粘質土（バサバサ）である。内部施設には主柱穴と周壁溝がある。主柱穴は２本を検出し、ＳＰ２からは柱痕を検出した。柱穴の平面形態は楕円形である。規模は径40～55㎝、深さ20～25㎝を測る。柱穴埋土は暗褐色粘土（黄色土を含む）、柱痕は黒色粘土である。周壁溝は壁体に沿って巡り、部分的に小ピットを検出した。規模は残存良好な部分で幅10～30㎝、深さ２～８㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。周壁埋土は暗褐色粘土（黄色を含む）である。出土遺物は周壁溝と埋土中から土師器と須恵器が出土した。

出土遺物（第188図）

1626・1627は坏蓋。

時期：出土した土師器と須恵器の形態から６世紀中葉とする。



第188図　SB1 測量図・出土遺物実測図

(3) 土坑（ＳＫ）

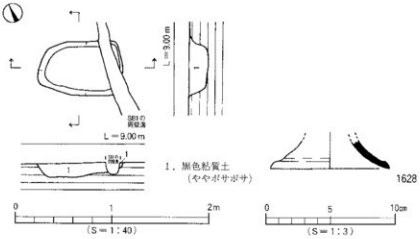
ＳＫ25（第189図）

調査区東部のＬ６区に位置し、ＳＢ１と掘立６に切られる。平面形態は長方形である。規模は長径0.86ｍ、短径0.57ｍ、深さ11㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（第189図）

1628は須恵器の高坏形土器。

時期：出土した土師器と須恵器の形態から６世紀前半とする。



第189図　SK25測量図・出土遺物実測図

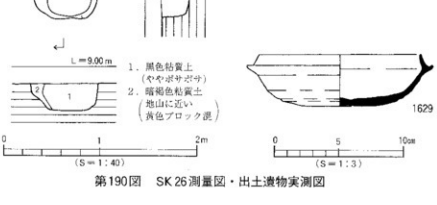
ＳＫ26（第190図）

調査区東部のＬ６区に位置し、ＳＢ１を切る。平面形態は楕円形である。規模は長径0.88ｍ、短径0.59ｍ、深さ24㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘質土、２層黄色ブロック混じりの暗褐色粘質土である。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（第190図）

1629は須恵器の坏身。

時期：出土した須恵器の年代から６世紀後半とする。



第190図　SK26測量図・出土遺物実測図

（4）溝（SD）

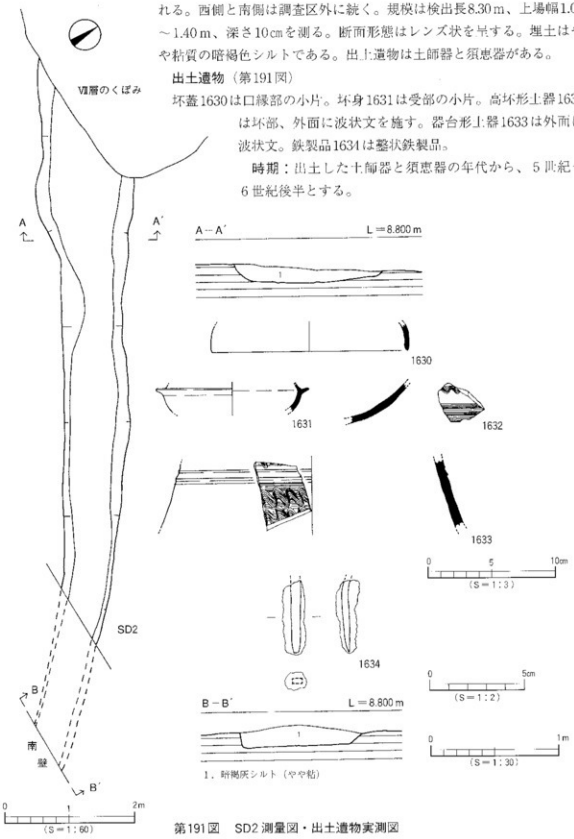
SD2（第191図）

調査区南西部のC16～E17区に位置し、SK3を切り、第Ⅶ層に切られる。西側と南側は調査区外に続く。規模は検出長8.30m、上場幅1.00～1.40m、深さ10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土はやや粘質の暗褐色シルトである。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（第191図）

坏蓋1630は口縁部の小片。坏身1631は受部の小片。高坏形土器1632は坏部、外面に波状文を施す。器台形土器1633は外面に波状文。鉄製品1634は鑿状鉄製品。

時期：出土した土師器と須恵器の年代から、5世紀～6世紀後半とする。



第191図　SD2測量図・出土遺物実測図

(5) 柵列（ＳＡ）

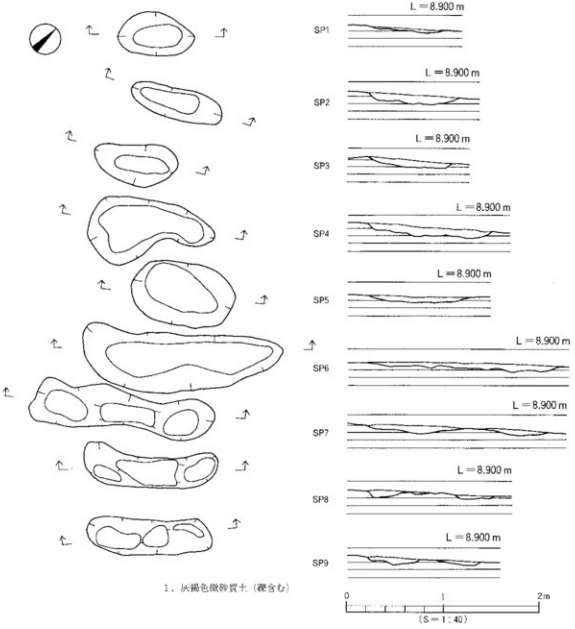
ＳＡ１（第192図）

調査区南西部のＢ15～Ｃ16区に位置し、ＳＤ１を切り南東方向は調査区外に続くと思われる。規模は８間分を検出し、検出長5.40ｍを測る。柱穴の平面形態は長楕円形である。規模は長径80～210㎝、短径20～63㎝、深さ４～10㎝を測る。埋土は礫を含む灰褐色微砂質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器と須恵器がある。

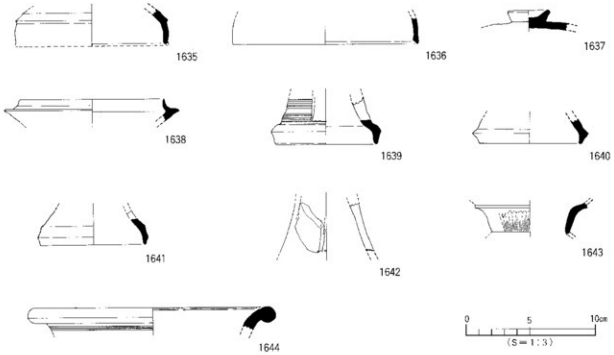
出土遺物（第193図）

坏蓋1635・1636は口縁部の小片。1637は高坏形土器の蓋。中央部が凹む摘み部。1638は坏身。短く水平に伸びる受部。高坏形土器1639～1642は脚部の小片。1639・1641・1642は透かしをもつ。1643は鼓形土器。頸部に波状文を施す。1644は壺形土器。口縁部の小片。

時期：出土した須恵器の年代から、６世紀末～７世紀初頭とする。



第192図　SA1 測量図

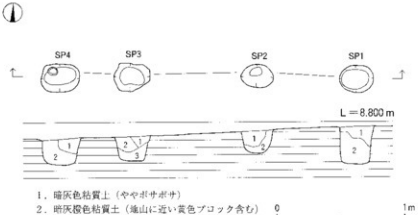


第193図　SA1 出土遺物実測図

ＳＡ２（第194図）

調査区東部のＩ11～Ｊ11区に位置し、ＳＤ４、ＳＡ３を切る。東側は調査区外に続くと思われる。規模は３間分を検出し、検出長は4.80ｍを測る。主軸は東西方向でW-1°-Nである。柱穴の平面形態は楕円形である。規模は直径20～30㎝、深さ20～30㎝を測る。埋土は２層に分かれ、第１層暗灰色粘質土（やや砂混じり）、第２層暗灰橙色粘質土である。柱穴内部からの出土遺物は土師器がある。小片のため図化していない。

時期：出土した土師器の年代から、６世紀前半とする。



第194図　SA2 測量図

(6) 性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ２

調査行程：ＳＸ２の検出は、重機により第Ⅶ層を掘削中に須恵器の底部と土師器の把手付鍋が重なり合って正位置の状態で出土した。調査は、ＳＲ１①層上面で遺物周辺の精査を行い堀方の検出を行ったが、明瞭な堀方が検出できなかったため、土器を中心として２m四角でＳＲ１①層の埋土を残した。鍋の把手を結ぶ方向に半截を行い堀方の確認を土層断面で行った。半截の結果土層断面にて土器に沿って堀方を確認した。遺物の測量と写真撮影を行い、取り上げは遺物内の土壌も同時に取り上げ洗浄を行うこととした。

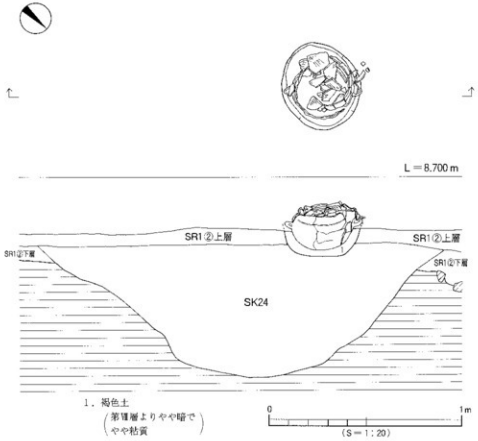
ＳＸ２（第195図）

調査区中央部のＧ８区に位置し、ＳＫ24の上層に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径45cm、短径35cm、深さ15cmを測る。埋土はやや粘質の褐色土である。出土遺物は土師器の把手付鍋と口縁部が打ち欠かれた須恵器の壺形土器である。遺物の出土状況は把手付鍋を土坑の据り方一杯に正位置で据え置き、壺形土器の底部を上にして把手付鍋に覆い被せていた。土器内部の土壌洗浄から歯牙が１点出土した。

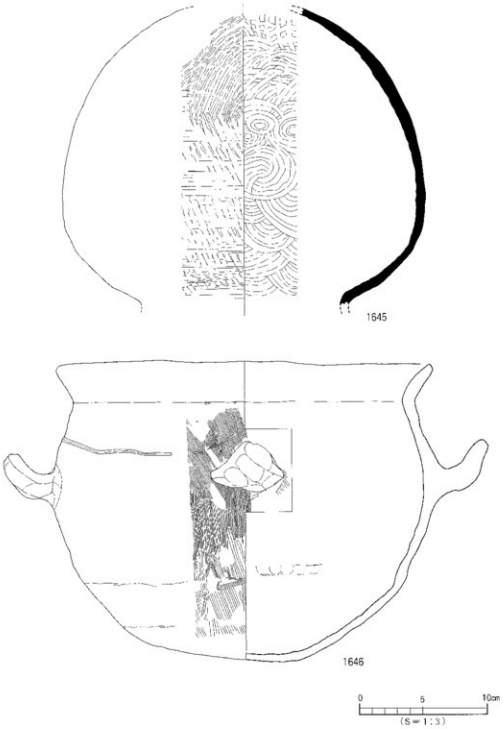
出土遺物（第196図）

1645は須恵器の壺形土器、球形の胴部。1646は把手付鍋の完形品。丸味をもつ底部から胴部、口縁部は短く外反する。胴上部に沈線が半周し沈線下部に舌状の把手がつく。

時期：出土した土師器の年代より、６世紀前半とする。



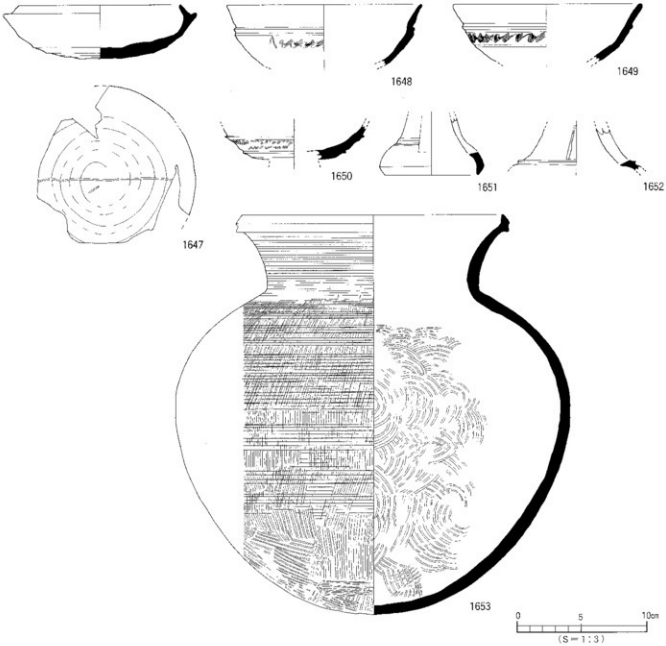
第195図　SX2 測量図



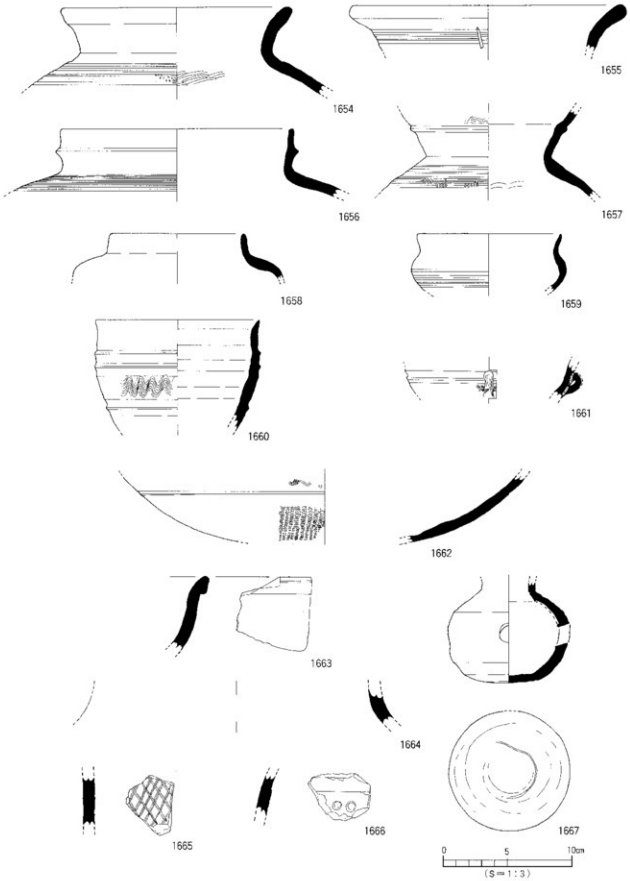
第196図　SX2 出土遺物実測図

8．第Ⅶ層出土遺物（第197～206図）

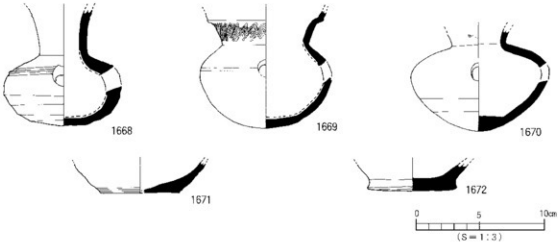
須恵器（1647～1672）1647は坏身。底部にヘラ記号あり。1648～1652は高坏。1648～1650は坏部、外面に波状文と段を持つ。1651・1652は脚部。1653・1654は甕形土器。1653は復元完形品である。1654は口縁部。1655～1659は壺形土器。1655は口縁部外面にヘラ記号あり。1656は口縁部外面に段を持つ（出作系）。1657は口縁部外面に段を持つ。1658・1659は短頸壺である。1660・1661は把手付椀。1660は外面に凸帯と波状文を持つ。1661は小さな把手を持つ。1662～1666は器台形土器。1662は外面に沈線とタタキを施す。1663は口縁部。1664は脚部。1665・1666は坏部外面に斜格子文と竹管文を施す。1667～1670は甑形土器。1667は底部にヘラ記号あり。1671・1672は坏。



第197図　第Ⅶ層出土遺物実測図（1）



第198図　第Ⅶ層出土遺物実測図（２）



第199図　第Ⅶ層出土遺物実測図（3）

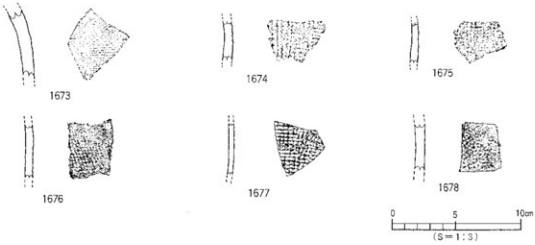
軟質土器（1673～1678）1673は縄席文。1677・1678は陶質土器か。

土師器（1679～1706）1679は壺形土器。1680は台付埦。1681・1682は高坏形土器。1683・1684は坏。1685・1686は甑形土器。1687・1688はカマド。1689～1694はミニチュア土器。1695～1699は製塩土器。1700～1702は土製の模造品。1700は冑。1701は盾。1702は鏡。1703・1704は紡錘車。1705・1706は土錘。

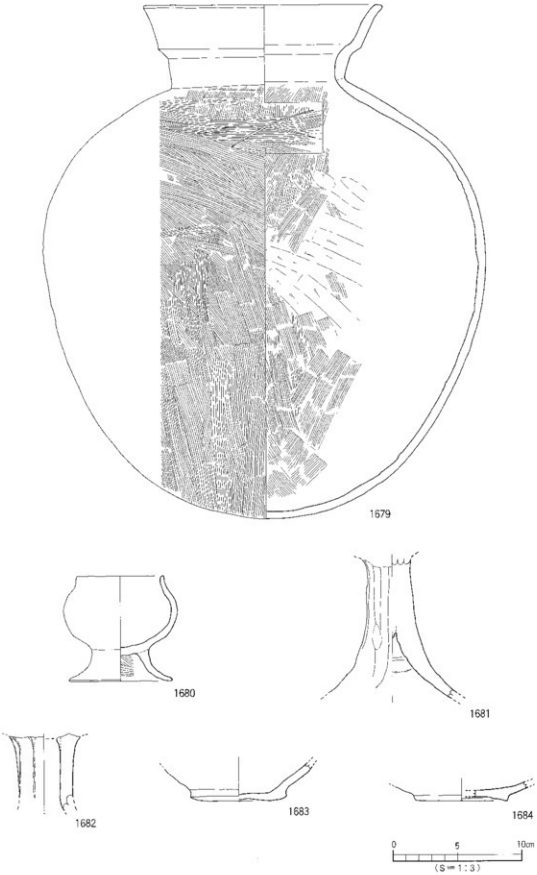
弥生土器（1707～1717）1707は甕形土器。1708～1710は壺形土器（前期末）。1711は甕形土器。1712は壺形土器。1713は分銅形土製品（中期）。1714は複合口縁壺。1715は鉢形土器。1716は器台形土器。1717は甑形土器（後期）。

鉄製品　1718は小型の鉄鏃。

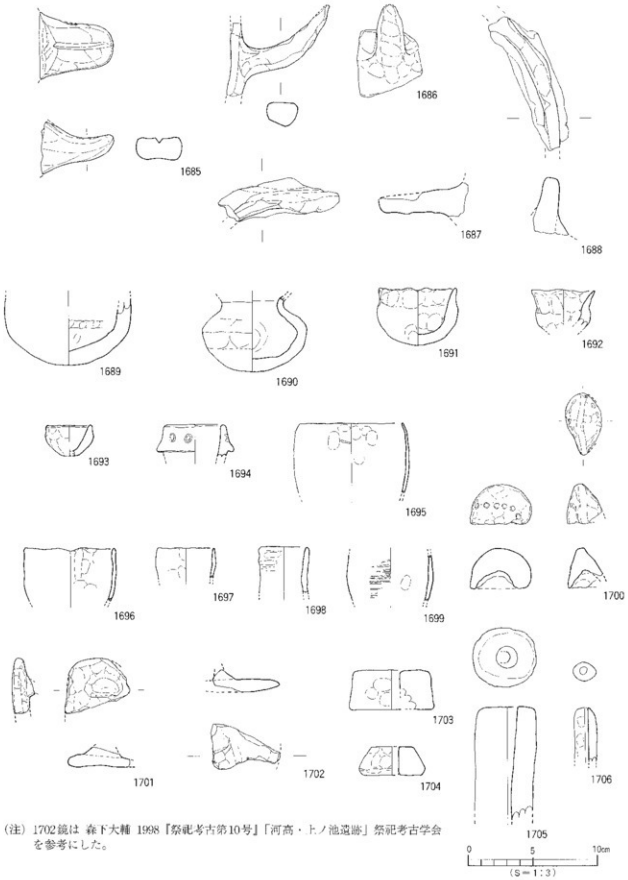
石製品（1719～1744）1719・1720は石鏃。1721は粗製剥片刃器。1722～1725は石錘。1726・1727は敲石。1728は敲・磨石。1729は砥石。1730～1732は石庖丁。1733は柱状片刃石斧。1734は両刃石斧。1735～1738は扁平片刃石斧。1739・1740は管玉。1741は勾玉。1742は石核。1743は原石。1744は鋳型か。



第200図　第Ⅶ層出土遺物実測図（4）

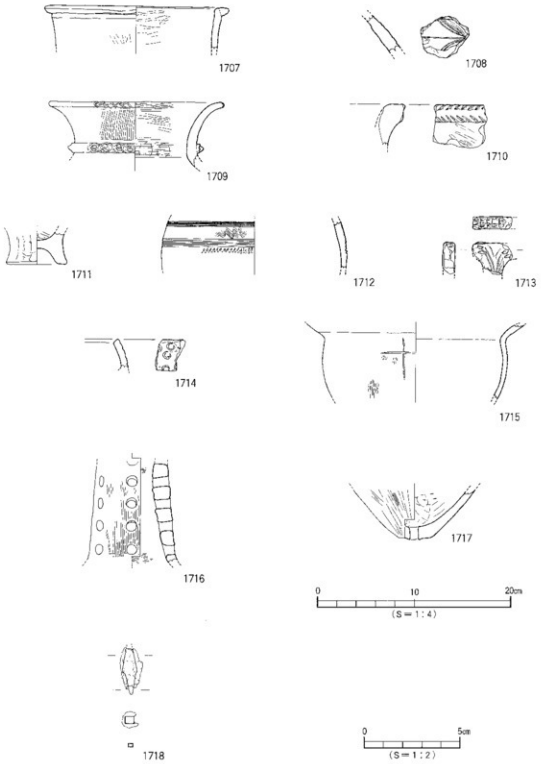


第201図　第Ⅶ層出土遺物実測図（5）

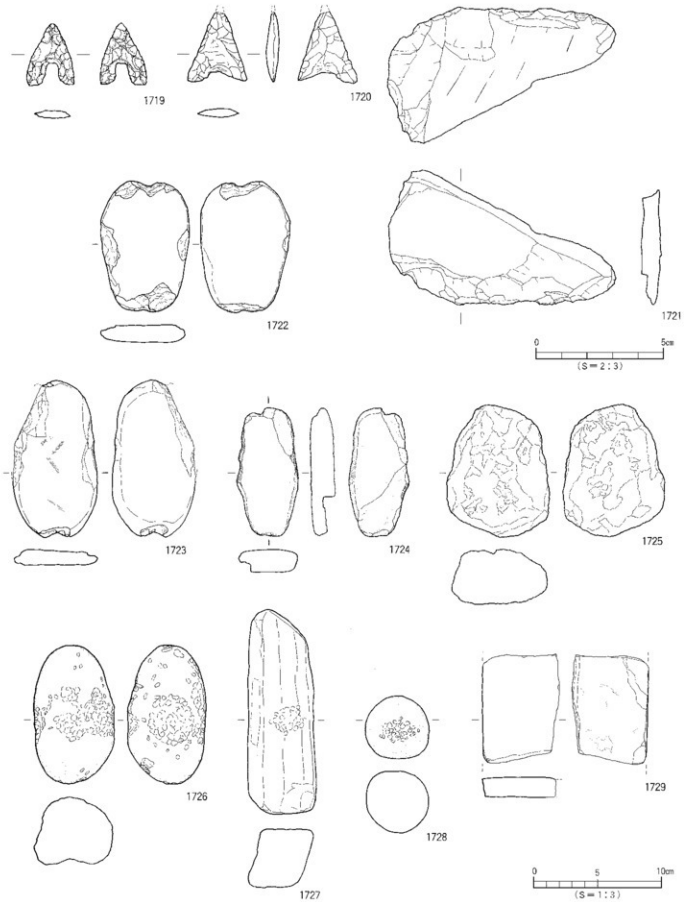


(注) 1702 図は 森下大輔 1998『祭祀考古第10号』「河高・上ノ池遺跡」祭祀考古学会を参考にした。

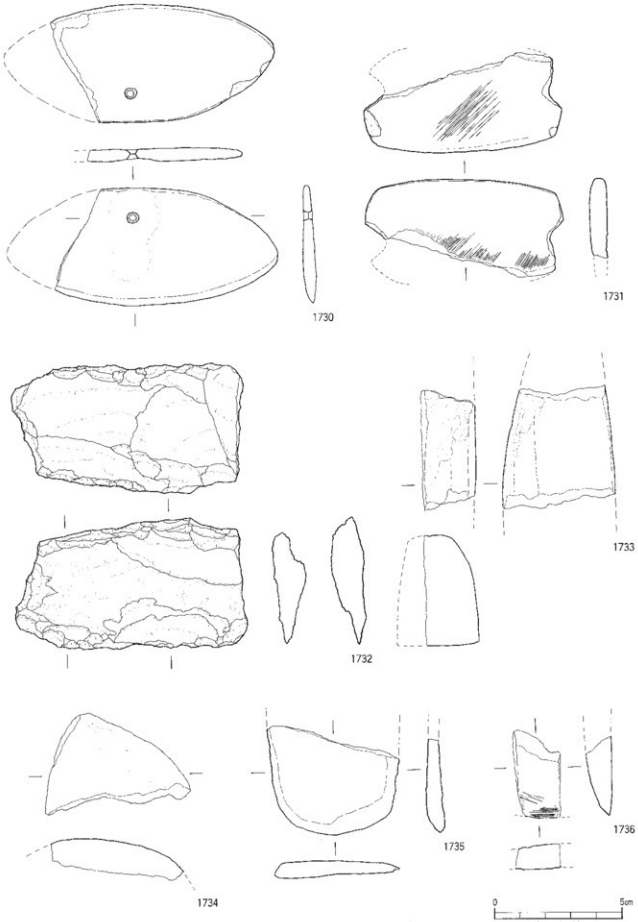
第202図　第Ⅶ層出土遺物実測図（6）



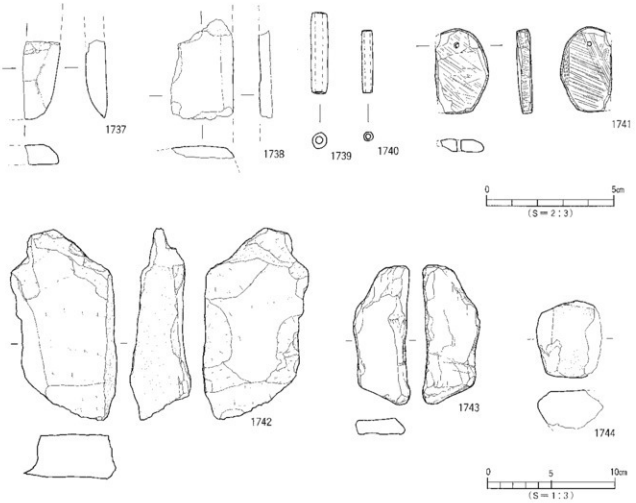
第203図　第Ⅶ層出土遺物実測図（7）



第204図　第Ⅶ層出土遺物実測図（８）



第205図　第Ⅶ層出土遺物実測図（9）



第206図　第Ⅶ層出土遺物実測図（10）

9．出土地点不明遺物（排土内採集遺物）（第207～211図）

弥生土器（1745～1748）壺形土器。

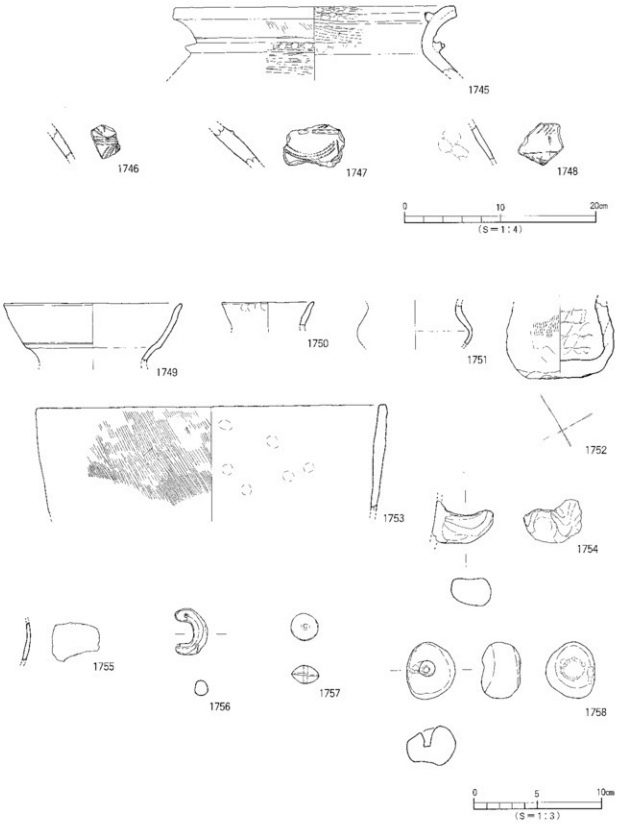
土師器（1749～1758）1749～1752は甕形土器。1753・1754は甑形土器。1755は製塩土器。1756は勾玉。1757は土玉。1758は不明土製品。

須恵器（1759～1763）1759・1760は坏蓋。1761は蓋。1762は坏身。1763は器台。

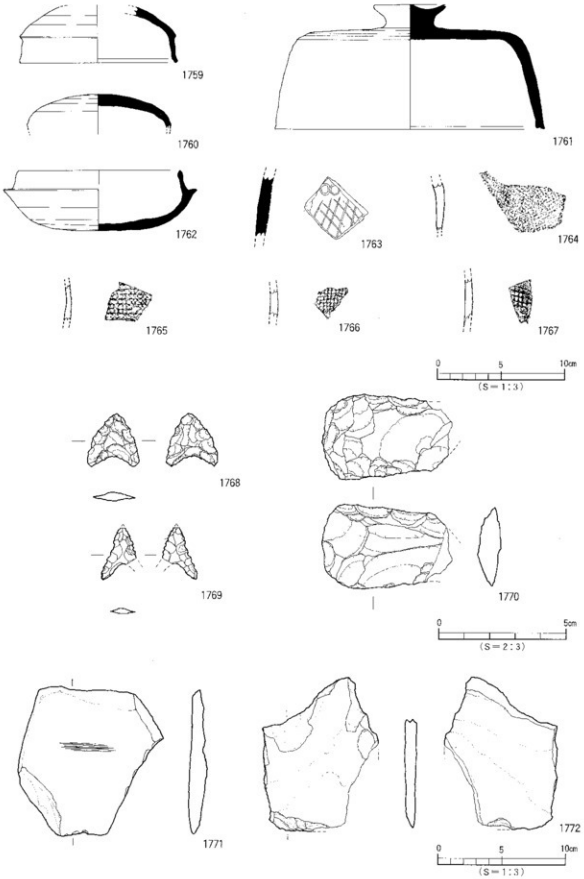
軟質土器（1764～1767）胴部片。

石製品（1768～1805）1768・1769は石鏃。1770・1772はスクレイパー。1773～1775は石錘。1776～1778は石棒。1779は男根状石製品。1780～1784は敲石。1785～1787は砥石。1788は鋳型か。1789は石庖丁。1790は石鎌。1791は両刃石斧。1792・1793は柱状片刃石斧。1794は鑿状片刃石斧。1795・1796は紡錘車。1797～1805は原石。

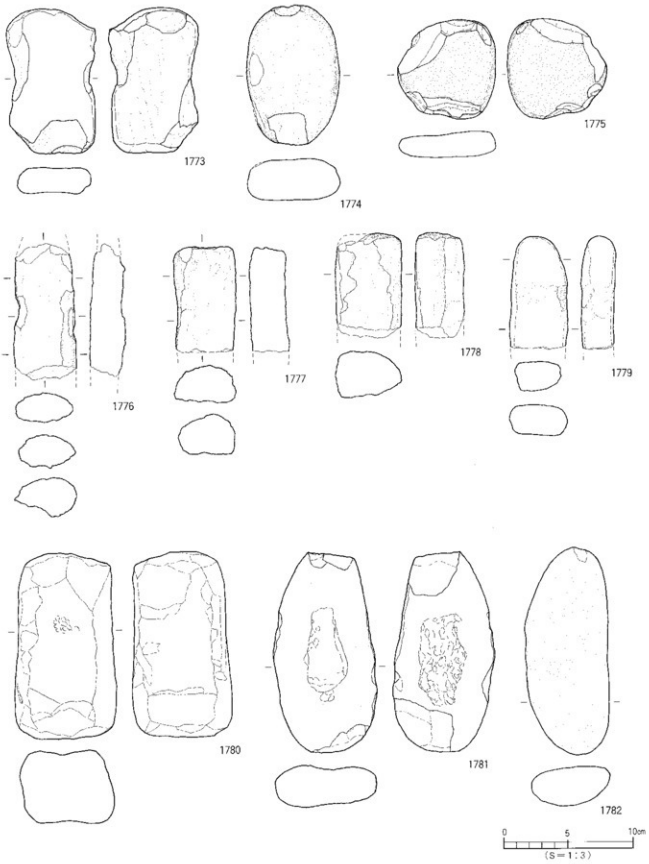
出土遺物の分類、編年では、弥生土器は梅木謙一、水口あをい、須恵器は宮内慎一、山之内志郎、石器は加島次郎の各氏には多大な協力得た。記して感謝いたします。



第207図　出土地点不明出土遺物実測図（1）

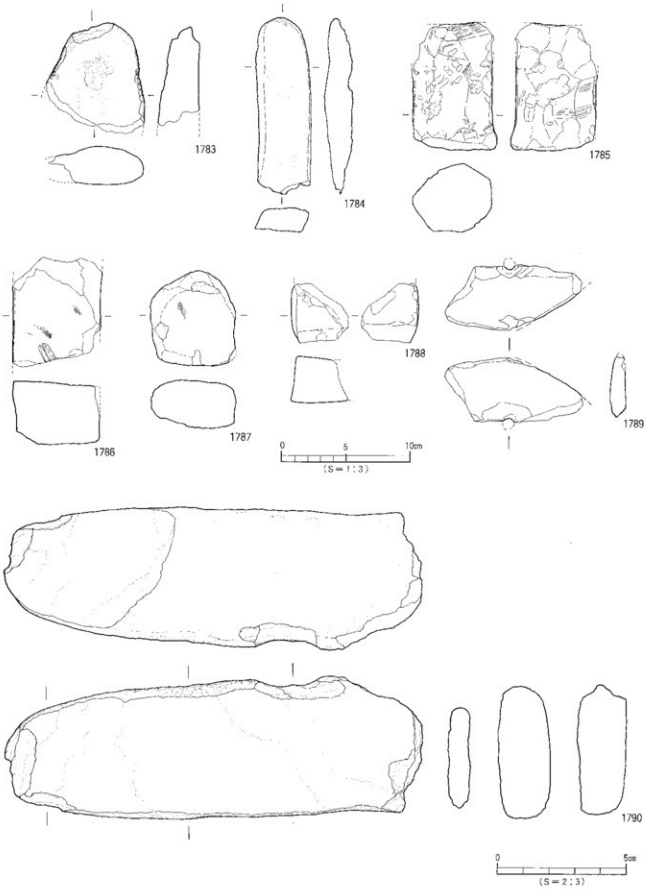


第208図　出土地点不明出土遺物実測図（2）

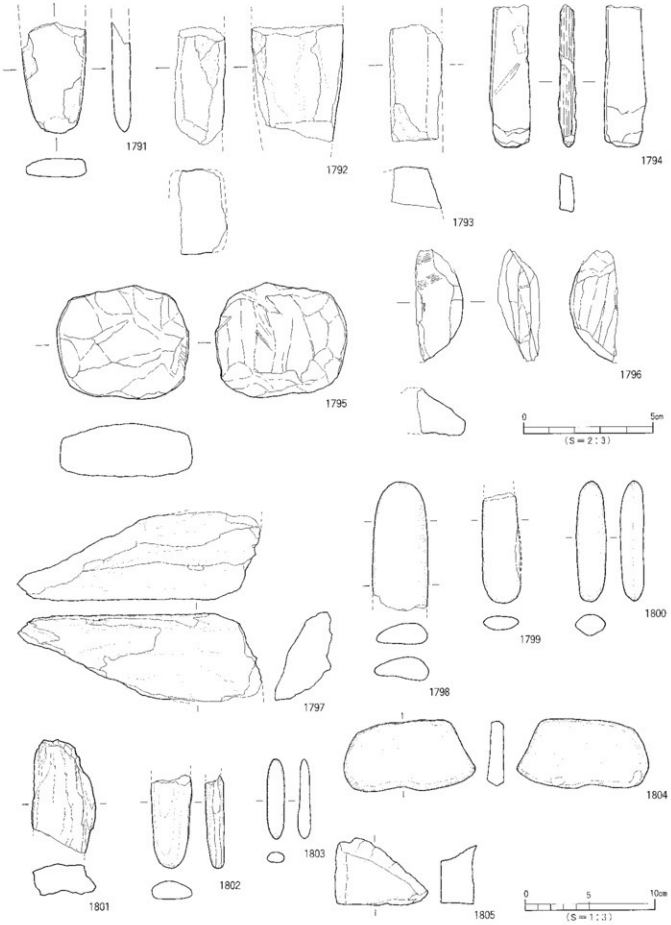


第209図　出土地点不明出土遺物実測図（3）

出土地点不明遺物



第210図　出土地点不明出土遺物実測図（4）



第211図　出土地点不明出土遺物実測図（5）

遺構一覧

以下の表は、本調査地検出の遺構の計測値である。遺構一覧は高尾が作成した。

表1　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B 3～H 17	レンズ状	56×28～30×0.92	南　北	①暗灰色粗砂質土 ②黒色粘質土 ③黒色粗砂質土	弥生土器、土師器 須恵器、陶質土器 石器、骨、木器、鉄器	①古墳後期 ②古墳中期 ③弥生後～古墳初	調査区外に続く

表2　自然流路内溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
SR1-SD1	F 15～G 16	U字状	9.51×0.30～0.37×0.15	北西～南東	黒色粗砂質土	弥生土器	弥生中期	
SR1-SD2	F 16・17	U字状	4.16×0.54×0.13	北西～南東	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	調査区外に続く
SR1-SD3	D 14～F 15	U字状	12.85×0.30～1.02×0.11	北西～南東	黒色粗砂質土	弥生土器	弥生中期	

表3　土坑一覧

(1)

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	E 14	円　形	逆台形状	0.74×0.74×0.25	暗灰色シルト	弥生土器	弥生前期	土器を井戸囲に使用
2	H 14	楕円形	レンズ状	1.30×1.15×0.62	橙色土	土師器 須恵器 製塩器、石器	古墳中期	2次焼成
3	E 16～F 17	不整形	2段掘り	2.56×(1.25)×0.45	黒色土	土師器	古墳前期	SD2に切られる 倒木痕 調査区外に続く
4	D 12・13	楕円形	レンズ状	1.95×1.00×0.21	黒色粘質土	弥生土器 石器	弥生後期	
5	D 13～E 13	楕円形	逆台形状	1.30×0.95×0.42	黒色微砂質土	弥生土器	弥生後期	
6	C 12・13	円形	逆台形状	1.75×1.40×0.25	黒色粘質土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳前期	
7	F 9	楕円形	擂鉢状	1.30×(1.28)×0.42	黒色粘質土	弥生土器 石器 木製品	弥生後期	
8	H 11	楕円形	U字状	0.71×0.53×1.26	黒色粘質土	弥生土器 土師器 石器	古墳前期	井戸
9	F 10	楕円形	皿　状	1.11×0.75×0.24	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	
10	H 9	楕円形	レンズ状	0.75×(0.39)×0.13	暗灰色粘質土	弥生土器	弥生前期	土器棺 トレンチに切られる
11	E 14～F 15	不整形	擂鉢状	1.01×0.85×0.32	暗灰色 微砂質土	弥生土器	弥生中期	
12	G 13・14	楕円形	U字状	1.07×0.84×0.77	灰色粗砂質土	弥生土器	弥生中期	
13	F 4	楕円形	逆台形状	2.90×2.15×0.63	黒色粘質土	弥生土器 土師器 石器、木製品	弥生後期	
14	G 5	円　形	逆台形状	1.07×1.00×0.62	暗褐色粘質土	土師器 軟質土器	古墳前期	SR1②ド層を切る 製塩土器、柿
15	G 5～H 5	円　形	擂鉢状	1.51×1.36×0.69	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	井戸
16	G 7・8	円　形	擂鉢状	1.30×1.15×0.42	黒色粘質土	土師器	古墳前期	SR1②ド層を切る
17	F 8	円　形	皿　状	1.10×1.00×0.12	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	
18	F 8	隅丸方形	レンズ状	1.08×0.74×0.14	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	
19	F 6	円　形	擂鉢状	0.90×0.82×0.16	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	
20	F 5	楕円形	逆台形状	1.43×1.21×0.36	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	

土坑一覧

(2)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
21	F 7～G 7	円形	逆台形状	1.17×1.00×0.24	黒色粘質土	弥生土器	弥生後期	
22	G 6	楕円形	逆台形状	0.47×0.38×0.65	暗褐色粘質土	土師器	古墳前期	SR1②下層を切る。柱
23	C 5	楕円形	擂鉢状	1.07×0.90×0.31	黒色粘質土	土師器	古墳前期	SR1①下層を切る。
24	G 8～H 8	円形	擂鉢状	2.41×2.14×1.05	暗褐色土	須恵器、土師器、弥生土器、土師器、石製品	古墳中期	柵列1、SK2を切られる。SK12の下層を切る。焼土有り、井戸
25	L 6	長方形	皿状	0.86×0.57×0.11	黒色粘質土	須恵器 土師器	6 C前半	SB1、掘立6に切られる。
26	L 6	楕円形	逆台形状	0.88×0.59×0.24	黒色粘質土	須恵器 土師器	6 C後半	SB1を切る。

表4　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設 高床	内部施設 土坑	内部施設 炉	内部施設 カマド	周壁溝	備考
1	6 C中葉	方形	5.76×(3.30)×0.05	暗褐色粘質土	(19.00)	(2)					○	掘立6、SK26、SP84に切られる。SK25を切る。調査区外に続く

表5　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方位	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	桁行	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	方位	床面積(㎡)	時期	備考
1	7～8×3	南北棟	14.70	1.40・1.40・2.10・1.80・2.00 2.30・2.00・1.90・1.80・2.30 1.90・1.96・0.80・0.90・2.30・2.30	4.40	1.50・1.60・1.30 1.40・1.60・1.30	N 6°W	64.68	6c前半以降	掘立4に切られる。SK24、SR1②を切る。柱材	
2	7～8×3	南北棟	16.40	1.60・2.66・2.56・2.86・1.94 1.68・1.50・1.58・2.64・2.64 2.50・2.80・2.40・1.62・1.68	4.30	2.00・2.30・2.06 2.04	N 8°W	69.52	5c末～6c中葉	掘立3、SR1②を切る。掘立4に切られる。	
3	4×2	南北棟	6.50	1.50・1.76・1.70 1.74・2.20・1.70	3.40	1.92・1.48・1.90 1.50	N 5°W	22.10	5c後半	掘立2に切られる。SR1②を切る。	
4	2×2	東西棟	4.30	2.14・2.16	3.30	1.54・1.76・1.64 1.58	N 70°E	14.19	7c初	掘立1、2、SR1②を切る。	
5	1×1	南北棟	2.26	2.26・2.24	1.84	1.84・1.80	N−2°−E	4.16	5c中以降	SR1②を切る。	
6	3×2	南北棟	6.00	2.00・1.96・2.04 1.90・2.14・1.80	5.30	2.60・2.70・2.60 2.66	N−2°−W	31.80	6c中葉～以降	SR1を切る。	

表6　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B 16～C 17	皿状	5.60×0.70～0.90×0.07	北西～南東	暗褐色シルト	土師器	5 c代	SA1に切られる。調査区外に続く。
2	C 16～E 17	レンズ状	8.30×1.00～1.40×0.10	北西～南東	暗褐色シルト	須恵器 土師器	5 c～6 c後半	旅籠間に切られる。SK3を切る。
3	I 10～K 10	レンズ状	5.06×0.25～0.35×0.08	東西	黒色粘質土	土師器	5 c以降	SD4に切られる。調査区外に続く。
4	I 9～J 12	レンズ状	14.10×0.20～0.50×0.09	南北	暗褐色粘質土	土師器	5 c以降	SD3を切る。SA2、3に切られる。

表7　柵列一覧

柵列(SA)	規模(間)	方向	実長(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模 径×深さ(m)	時期	備考
1	8	北西～南東	5.4	(P1～P2)0.70・(P2～P3)0.75・(P3～P4)0.60・(P4～P5)0.60・(P5～P6)0.60・(P6～P7)0.60・(P7～P8)0.66・(P8～P9)0.68	0.80～2.10×0.04～0.10	6 c末～7 c初	SD1を切る。調査区外に続く。
2	3	東西	4.8	(P1～P2)1.53・(P2～P3)1.90 (P3～P4)1.22	0.20～0.30×0.20～0.30	6 c前半	SD4、SA3を切る。調査区外に続く？
3	3	東西	5.4	(P1～P2)1.81・(P2～P3)1.68 (P3～P4)1.73	0.27～0.54×0.12～0.23	5 c以降	SA2に切られる。SD4を切る。調査区外に続く

表8　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
2	G 8	楕円形	U字状	0.45×0.35×0.15	褐色土	土師器 須恵器	6 c前半	SR1を切っている。

SX1は欠番

第Ⅴ章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

1．船ヶ谷遺跡４次調査における樹種同定

〔1〕はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

〔2〕試料

試料は、船ヶ谷遺跡４次調査で出土した木材53点および炭化材１点の計54点である。試料の詳細を表９に示す。

〔3〕方法

木材は、カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。炭化材は、割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

〔4〕結果

結果を表９に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す（第212～215図）。以下に同定根拠となった特徴を記す。

カヤ　*Torreya nucifera Sieb. et Zucc.*　イチイ科（第212図１）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25ｍ、径90ｃｍに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え保存性が高い。弓などに用いられる。

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科（第212図２）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成され

る針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica D.Don* スギ科（第212図3）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.* コウヤマキ科（第213図4）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa Endl.* ヒノキ科（第213図5・6）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヒノキ科　Cupressaceae

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び1分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

針葉樹　conifer

横断面、放射断面、接線断面共に保存状態が悪いが、針葉樹の特徴を示す。樹脂細胞の存在が確認できることから、スギまたはヒノキ科の可能性が高い。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科（第214図7）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片で広範囲の観察が困難であったことから、シイ属の同定にとどめた。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect. Prinus*　ブナ科（第214図8）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科（第214図9）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあ

り、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科（第215図10）

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

クスノキ *Cinnamomum camphora Presl* クスノキ科（第215図11）

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、油を含みしばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できる。本試料は道管径以外の点が不明瞭なことからクスノキ科の同定にとどめたが、道管径の大きさからクスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

アワブキ属 ***Meliosma*** アワブキ科（第215図12）

横断面：小型の道管が、単独ないしその複合部に１～２個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって２～４個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木～高木である。

〔５〕所見

樹種同定の結果、船ヶ谷遺跡４次調査で出土した木材は、ヒノキ13、ヒノキ科９、カヤ７、コナラ属アカガシ亜属６、コウヤマキ４、マツ属複維管束亜属３、針葉樹、コナラ属コナラ節、クスノキ各２、スギ、シイ属、コナラ属クヌギ節、クスノキ科、アワブキ属各１であった。また、炭化材（試料２）はコナラ属クヌギ節と同定された。

ヒノキやカヤは、温帯中部から下部に分布する常緑針葉樹である。コナラ属アカガシ亜属、クスノキ、シイ属、コナラ属クヌギ節、アワブキ属などは、温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の構成要素である。また、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節などは二次林要素である。いずれの樹種も、本遺跡の周辺地域に分布していたと考えられる。

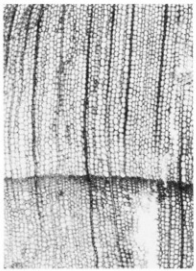
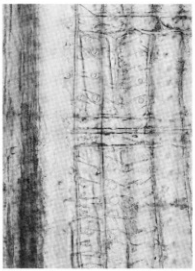
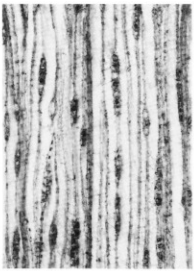
〔文献〕

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表9　船ヶ谷遺跡４次調査における樹種同定結果

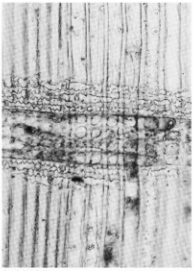
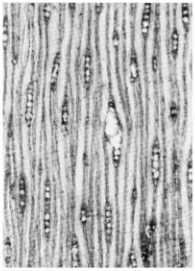
報告書番号	資料番号	器種	遺構・層位		結果（和名／学名）	
1091	1	杭	SR1②層G14区		ヒノキ科	Cupressaceae
	2	建築部材	SR1③層G17区	炭No. 1	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. Aegilops
	3	杭?	SR1③層G12区	WNo. 1	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl..
1579	4	杭	SR1②層F13区	WNo. 1	ヒノキ科	Cupressaceae
	5	杭	SR1③層F12区	WNo. 1	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1582	6	杭	SR1③層F12区	No. 2	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
1581	7	杭	SR1③層F13区	WNo. 2	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
	8	杭	SR1③層F13区	No. 3	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1580	9	杭	SR1③層F13区	No. 4	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1585	10	杭	SR1③層D5区	WNo. 1	ヒノキ科	Cupressaceae
1584	11	杭	SR1②層D5区	No. 2	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
	12	板状	SR1②層D13区	WNo. 4	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
1575	13	杭	SR1①層D12区	WNo. 1	マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*
1577	14	杭	SR1②層E13区	WNo. 1	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
1587	15	杭	SR1②層E4区	WNo. 1	カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1586	16	杭	SR1②層E4区	No. 2	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1588	17	杭	SR1②層E4区	No. 3	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1089	18	板材	SR1②層E12区	WNo. 1	コウヤマキ	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.
1578	19	杭	SR1②層E12区	No. 2	ヒノキ科	Cupressaceae
1576	20	杭	SR1③層E13区	WNo. 2	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
	21	板材	SR1②層C5区	WNo. 2	マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*
	22	板状	SR1②層C5区	No. 4	ヒノキ科	Cupressaceae
	23	板材	SR1②層C5区	No. 5	針葉樹	conif er
	24	板状	SR1②層C5区	No. 6	針葉樹	conifer
	25	板材	SR1②層C5区	No. 7	コナラ属クヌギ節	*Quercus* sect. *Aegilops*
	26	板状	SR1②層C5区	No. 8	マツ属複維管束亜属	*Pinus subgen. Diploxylon*
1090	27	板材	SR1②層C5区	No. 9	ヒノキ科	Cupressaceae
1583	28	杭	SR1②層C5区	No.13	ヒノキ科	Cupressaceae
1092	29	杭	SR1層位不明H17区		ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1605	30	柱	堀立1　SP1		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1606	31	柱	堀立1　SP2		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1607	32	柱	堀立1　SP4		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1608	33	柱	堀立1　SP6		コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
	34	柱	堀立1　SP5		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1256	35	混よけ	SK7	WNo. 1	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis
1350	36	不明	SK13	WNo. 2	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis
1349	37	獣	SK13	No. 3	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis
1348	38	獣	SK13		コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis
1420	39	柱材	SK14		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1423	40	柱材	SK22		カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.
1546	41	板材	SK24	WNo. 1	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
1549	42	不明	SK24	WNo. 3	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. Cyclobalanopsis
	43	枝材	SK24	WNo.11	クスノキ科	Lauraceae
1550	44	枝材	SK24	WNo. 9	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1551	45	枝材	SK24	WNo.10	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1545	46	井戸枠	SK24	WNo. 4	スギ	*Cryptomeria japonica* D.Don
	47	不明	SK24		ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
	48	杭	SK24	WNo. 5	コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
1552	49	杭	SK24	WNo.12	アワブキ属	*Meliosma*
1547	50	板材	SK24	WNo. 6	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
1548	51	板材	SK24	WNo. 7	シイ属	*Castanopsis*
	52	板材	SK24	WNo. 8	ヒノキ科	Cupressaceae
	53	板材?	SK24	WNo. 2	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
	54	不明?	SK24		ヒノキ科	Cupressaceae

第212図　船ヶ谷遺跡４次調査の木材Ⅰ

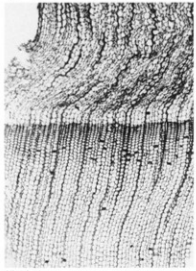
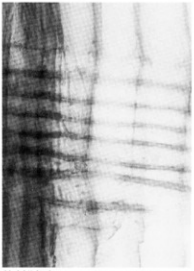
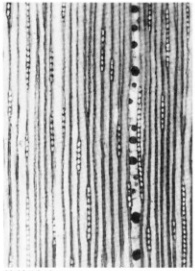
横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.1㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

１．No.30　カヤ

横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.1㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

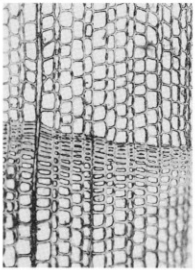
２．No.21　マツ属複維管束亜属

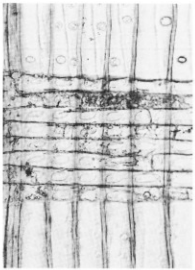
横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.1㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

３．No.46　スギ

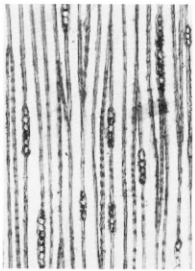
第213図　船ヶ谷遺跡４次調査の木材Ⅱ



横断面 ―――― ：0.2㎜

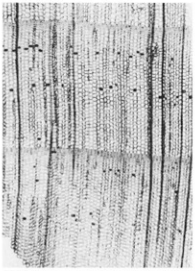


放射断面 ―――― ：0.1㎜

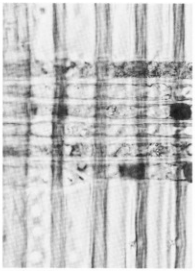


接線断面 ―――― ：0.2㎜

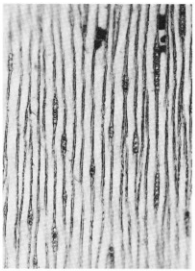
４．No.18　コウヤマキ



横断面 ―――― ：0.5㎜

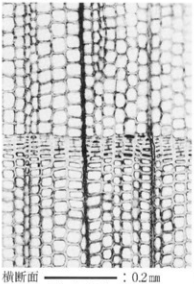


放射断面 ―――― ：0.05㎜

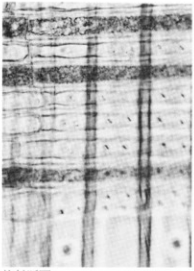


接線断面 ―――― ：0.2㎜

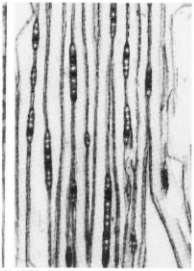
５．No.8　ヒノキ



横断面 ―――― ：0.2㎜



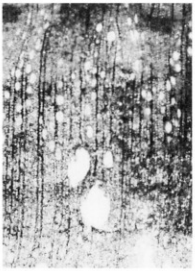
放射断面 ―――― ：0.05㎜



接線断面 ―――― ：0.2㎜

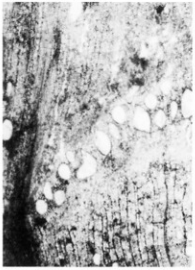
６．No.29　ヒノキ

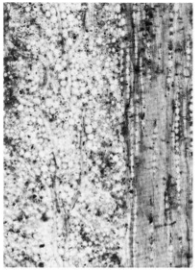
第214図　船ヶ谷遺跡４次調査の木材Ⅲ



横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

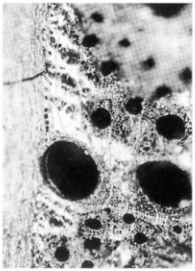
7．No.51　シイ属





横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

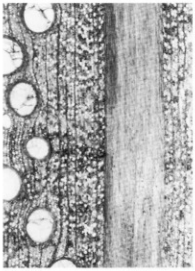
8．No.48　コナラ属コナラ節



横断面 ―――― ：0.4㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

9．No.2　コナラ属クヌギ節

第215図　船ヶ谷遺跡４次調査の木材Ⅳ

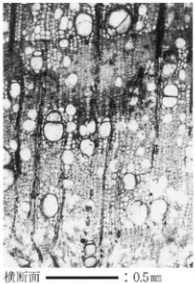


横断面 ―――― ：0.5㎜

放射断面 ―――― ：0.2㎜

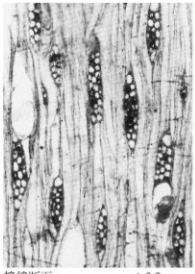
接線断面 ―――― ：0.2㎜

10. No.37　コナラ属アカガシ亜属



横断面 ―――― ：0.5㎜

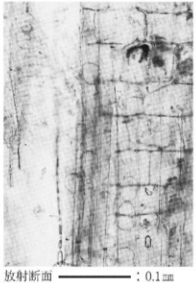
放射断面 ―――― ：0.2㎜



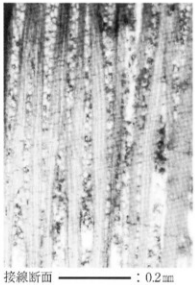
接線断面 ―――― ：0.2㎜

11. No.53　クスノキ

横断面 ―――― ：0.5㎜



放射断面 ―――― ：0.1㎜



接線断面 ―――― ：0.2㎜

12. No.49　アワブキ属

2．船ヶ谷遺跡４次調査における種実同定

〔１〕はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

〔２〕試料

試料は、ＳＲ１②層E15区（試料１）、②層Ｆ13区（試料２）、①層Ｆ13区（試料３）、ＳＫ４（試料４）、ＳＫ24（試料５、６、７、８、９、10、11、12）、第Ⅶ層（試料13）から採取された計13点の種実である。

〔３〕方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

〔４〕結果

分析の結果、種実はすべてモモ（核）と同定された。学名、和名および計測値（長さ・幅・厚さ）を表10に示し、分種実の写真を示す（第216図）。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ　*Prunus persica Batsch*　核　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

〔５〕種実同定から推定される植生と農耕

モモは中国原産で、日本には縄文時代末から弥生時代にかけて伝来した。日本では弥生時代以降の遺跡から一般的に出土し、古くより栽培されていた果樹である。本遺跡では、モモが栽培され利用されていたと考えられる。

〔文献〕

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ．雄山閣出版株式会社，p.165-174.
南木睦彦（1993）穀・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15-19.

表10　船ヶ谷遺跡４次調査における種実同定結果

試料番号	分類群（和名／学名）		部位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）
1	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	24.61	18.93	12.90
2	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	15.35	12.78	12.34
3	モモ	*Prunus persica Batsch*	1/2核	18.36	16.21	－
4	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	18.59	14.47	
5	モモ	*Prunus persica Batsch*	1/2核	21.97	－	－
6	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	22.61	－	－
7	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	26.78	20.60	14.73
8	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	21.36	17.57	11.73
9	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	25.97	－	14.20
10	モモ	*Prunus persica Batsch*	1/2核	23.99	－	－
11	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	19.67	－	12.29
12	モモ	*Prunus persica Batsch*	1/2核	21.70	16.57	－
13	モモ	*Prunus persica Batsch*	核	19.16	16.66	16.41

第216図　船ヶ谷遺跡４次調査の種実

3．船ヶ谷遺跡4次調査における花粉分析

〔1〕はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

〔2〕試料

分析試料は、試料1（第Ⅶ層、暗灰色粘質土）、試料2（①層、暗灰色粗砂質土）、試料3（②層上部、黒色粘質土）、試料4（②層下部、黒色粘質土）、試料5（③層、黒色粗砂質土）の5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す（表12）。

〔3〕方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

〔4〕結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計48である。分析結果を表11に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した（表12）。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（第217図）。以下に出現した分類群を記す。

［樹木花粉］

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属

アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、キハダ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ハイノキ属

［樹木花粉と草本花粉を含むもの］

クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科

［草本花粉］

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

［シダ植物胞子］

単条溝胞子、三条溝胞子

〔5〕花粉群集の特徴

③層（試料5）では、草本花粉の出現率が樹木花粉よりも高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、シイ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が多く出現し、ヨモギ属、キク亜科、アカザ科－ヒユ科などが低率に伴われる。また、セリ亜科、ミズアオイ属なども出現する。

②層（試料3、4）では、草本花粉の出現率が樹木花粉よりも高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属の出現率がやや高く、シイ属、マツ属複維管束亜属、スギなどが伴われる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が多く出現し、ヨモギ属、アブラナ科などが伴われる。また、ガマ属－ミクリ属、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ亜科も低率に出現する。アブラナ科、アカザ科－ヒユ科は上層に向かって増加しており、樹木花粉の出現率は減少している。

①層（試料2）では、草本花粉の出現率が樹木花粉よりも高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、モミ属、コナラ属コナラ亜属などがやや低率に出現する。草本花粉では、イネ科が増加し、高い割合を占める。他に、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われ、ミズアオイ属、オモダカ属、イネ属型も低率に出現する。

第Ⅶ層（試料1）では、草本花粉の出現率が樹木花粉よりも高い。樹木花粉では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、エノキ属－ムクノキ、ブドウ属などが低率に出現する。草本花粉では、イネ科が高い割合を占め、ヨモギ属、アブラナ科、カヤツリグサ科などが伴われる。

〔6〕花粉分析から推定される植生と環境

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる③層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科を主として、セリ亜科、ミズアオイ属なども生育する湿地の環境であったと考えられ、周囲はヨモギ属、キク亜科、アカザ科－ヒユ科などが生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと推定される。また、周辺地域にはカシ類やシイ属などの照葉樹林が分布し、マツ類やスギなどの針葉樹も見られたと推定される。

古墳時代中期とされる②層の堆積当時も、③層と同様の湿地の環境であったと考えられるが、イネ属型が検出されることから、周辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。また、アブラナ科、

アカザ科－ヒユ科などの人里植物ないし耕地雑草が増加することから、周辺で畑などの人為環境が拡大したと推定される。なお、この時期には周辺地域でカシ類などの照葉樹林が縮小したと推定される。

古墳時代後期とされる①層から古墳時代後期～古代とされる第Ⅶ層にかけては、イネ属型を含むイネ科が増加していることから、周辺で水田が拡大した可能性が考えられる。また、周辺地域には、シイ属、カシ類、マツ類、エノキ属－ムクノキ、ブドウ属などを構成要素とする森林が分布していたと推定される。

〔文献〕

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

4．船ヶ谷遺跡4次調査における植物珪酸体分析

〔1〕はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

〔2〕試料

分析試料は、花粉分析に用いられたものと同一である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す（表14）。

〔3〕分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300w・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

〔4〕分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表13および表14に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（第218図）。

［イネ科］

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

［イネ科ータケ亜科］

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、木分類等

［イネ科ーその他］

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、木分類等

［樹木］

ブナ科（シイ属）

〔5〕考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

Ⅶ層（試料1）から③層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅶ層（試料1）、①層（試料2）、②上層（試料3）からイネが検出された。このうち、Ⅶ層（試料1）と①層（試料2）では、密度が3,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。②上層（試料3）では、密度が2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、上層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

（3）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。③層から①層にかけては、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ヨシ属なども少量検出された。また、①層ではブナ科（シイ属）も検出された。Ⅶ層ではメダケ節型が減少している。おもな分類群の推定生産量によると、③層から①層にかけてはメダケ節型やネザサ節型が卓越しており、Ⅶ層ではネザサ節型が卓越していることが分かる。

以上の結果から、弥生時代後期～古墳時代初頭とされる③層から古墳時代後期とされる①層にかけ

ては、メダケ節やネザサ節などのタケ亜科を主体としたイネ科植生が継続されていたと推定される。花粉分析では、湿地の環境が推定されていることから、これらのタケ亜科は自然流路の周囲に分布していたと考えられる。これらのタケ亜科植物は、住居の建築材や屋根材、燃料、道具などとして盛んに利用されていたと考えられる。花粉分析ではタケ亜科が把握されていないが、これは竹笹類が数十年に一度しか開花しないことや、花粉ではイネ科の細分が困難なことに起因している。古墳時代後期～古代とされる第Ⅶ層の時期には、調査地点で稲作が行われていたと考えられ、周囲にはネザサ節などのタケ亜科が多く分布していたと推定される。

〔6〕まとめ

植物珪酸体分析の結果、古墳時代後期～古代とされる第Ⅶ層および古墳時代後期とされる①層からは、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、古墳時代中期とされる②層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる③層から古墳時代後期とされる①層にかけては、自然流路の周囲などにメダケ節やネザサ節などのタケ亜科が多く分布していたと考えられ、古墳時代後期～古代とされる第Ⅶ層でも、ネザサ節が多く分布していたと推定される。

〔文献〕

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．宮士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

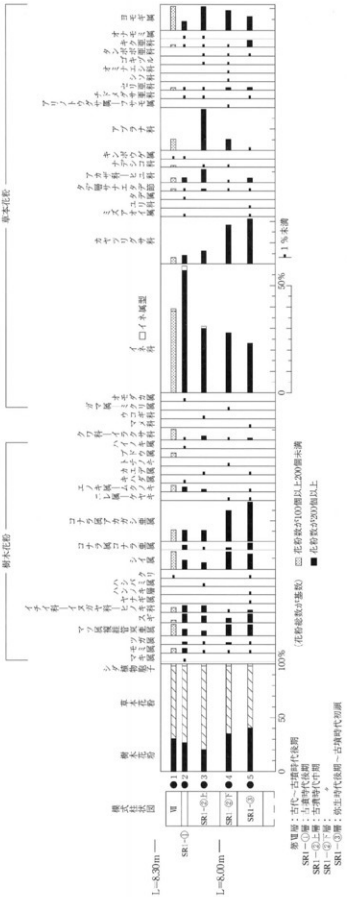
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

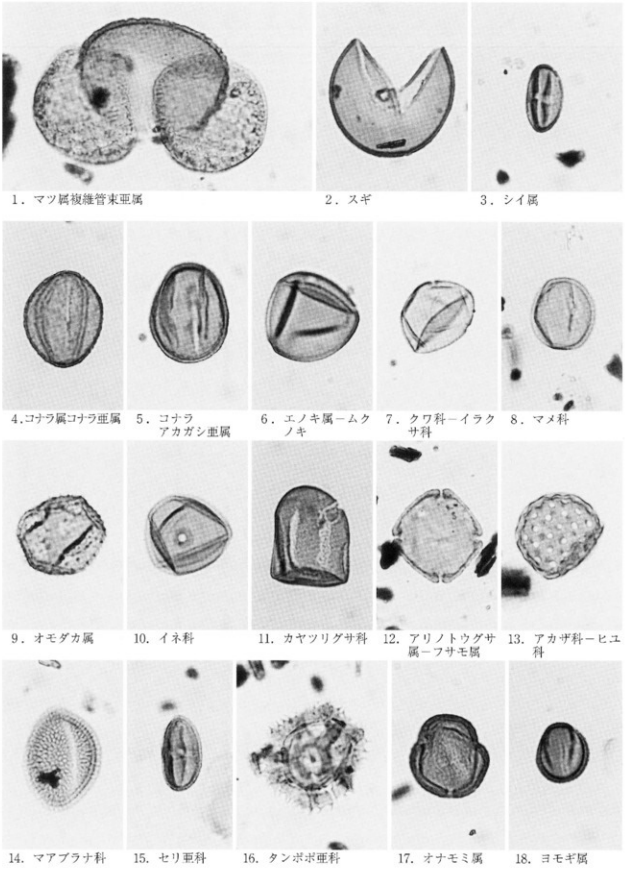
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表11　船ヶ谷遺跡４次調査における花粉分析結果

分類群		第VII層	①層	②層上	②層下	③層
学名	和名	1	2	3	4	5
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属		1			
Abies	モミ属	4	8	2	3	3
Tsuga	ツガ属		4	1	6	2
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	9	12	8	23	19
Cryptomeria japonica	スギ	2	17	11	9	15
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	12	11	2	5
Salix	ヤナギ属					1
Alnus	ハンノキ属					2
Corylus	ハシバミ属			1		
Castanea crenata	クリ	1				1
Castanopsis	シイ属	15	14	9	32	25
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		8	3	6	10
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	9	19	18	61	70
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ				1	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	5	6	5		2
Phellodendron	キハダ属		1			
Acer	カエデ属			1		1
Aesculus turbinata	トチノキ				1	
Vitis	ブドウ属	4				
Symplocos	ハイノキ属		1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	9	2	8	4	4
Leguminosae	マメ科					1
Araliaceae	ウコギ科			1		
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属				1	
Sagittaria	オモダカ属		1			
Gramineae	イネ科	69	221	108	118	88
Oryza type	イネ属型	2	7	2		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6	16	23	76	80
Monochoria	ミズアオイ属		1			1
Liliaceae	ユリ科					1
Polygonum	タデ属		1			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	2	3	5	1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	7	22	3	7
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2		3	3	
Ranunculus	キンポウゲ属	1	1			
Cruciferae	アブラナ科	9		68	22	1
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属				1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		2	1		1
Apioideae	セリ亜科	2	1	1	5	4
Labiatae	シソ科				1	
Valerianaceae	オミナエシ科				1	
Actinostemma lobatum	ゴキヅル			1	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科			3	2	1
Asteroideae	キク亜科	2	3	2	4	11
Xanthium	オナモミ属		1	3		
Artemisia	ヨモギ属	20	16	41	36	24
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	2	2	2		2
Trilate type spore	三条溝胞子	2	2	5	7	3
Arboreal pollen	樹木花粉	53	103	70	144	158
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	9	2	9	4	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	119	281	283	275	220
Total pollen	花粉総数	181	386	362	423	383
Unknown pollen	未同定花粉	1	8	5	5	3
Fern spore	シダ植物胞子	4	4	7	7	5
Helminth eggs	寄生虫卵					
Ascaris	回虫卵					1
Total	計	0	0	0	0	1
明らかな消化残渣		(−)	(−)	(−)	(−)	(−)


樹木花粉
草本花粉
層厚
試料位置
層位
層名
層相
種類
草本花粉
樹木花粉
イネ科
ヨシ属
ススキ属
ヒゲシバ
ヒエ属
ハコベ
ツユクサ属
ミズアオイ
ヤブガラシ
ヤブコウジ
ヤブツバキ
ヤブムラサキ
ヤブラン
ヤマノイモ
ヤマブドウ
ヤマモモ
ユキノシタ
ユズリハ
ユリ属
ヨモギ属
ヨメナ
ヨメナ属
ラン科
リンドウ
リンゴ属
ルリミノウルシ
レンゲ
ワラビ
ワレモコウ
ワレモコウ属
ワロニア
ワロニア属
ヤブコウジ
ヤブツバキ
ヤブムラサキ
ヤブラン
ヤマノイモ
ヤマブドウ
ヤマモモ
ユキノシタ
ユズリハ
ユリ属
ヨモギ属
ヨメナ
ヨメナ属
ラン科
リンドウ
リンゴ属
ルリミノウルシ
レンゲ
ワラビ
ワレモコウ
ワレモコウ属
ワロニア
ワロニア属
イネ科
ヨシ属
ススキ属
ヒゲシバ
ヒエ属
ハコベ
ツユクサ属
ミズアオイ
ヤブガラシ

第217図　船ヶ谷遺跡４次調査の花粉



1．マツ属複維管束亜属　2．スギ　3．シイ属

4.コナラ属コナラ亜属　5．コナラ アカガシ亜属　6．エノキ属－ムクノキ　7．クワ科－イラクサ科　8．マメ科

9．オモダカ属　10．イネ科　11．カヤツリグサ科　12．アリノトウグサ属－フサモ属　13．アカザ科－ヒユ科

14．マアブラナ科　15．セリ亜科　16．タンポポ亜科　17．オナモミ属　18．ヨモギ属

―：10μm

表13　船ヶ谷遺跡４次調査における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料 土層断面 1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*	33	33	21		
キビ族型	*Paniceae type*	7	7			
ヨシ属	*Phragmites (reed)*		7	10		7
ススキ属型	*Miscanthus type*		20		14	
ウシクサ族A	*Andropogoneae A type*	27			14	
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*					
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Medake*	13	166	240	216	358
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*	326	160	338	440	380
クマザサ属型	*Sasa (except Miyakozasa)*		20	26	79	21
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Miyakozasa*	13	13	16	29	
未分類等	Others	100	47	146	137	122
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	13	7	21	29	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	33	20	203	144	93
未分類等	Others	359	146	547	628	509
樹木起源	Arboreal					
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*		7			
植物珪酸体総数	Total	924	652	1567	1732	1497

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.98	0.98	0.61		
ヨシ属	Phragmites (reed)		0.42	0.66		0.45
ススキ属型	Miscanthus type		0.25		0.18	
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.15	1.93	2.78	2.51	4.16
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	1.56	0.77	1.62	2.11	1.82
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		0.15	0.2	0.6	0.16
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.04	0.04	0.05	0.09	

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	9	67	60	47	68
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	89	27	35	40	30
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)		5	4	11	3

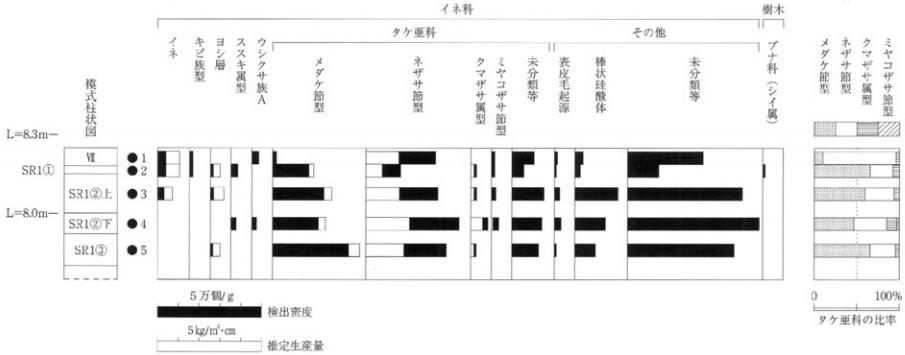
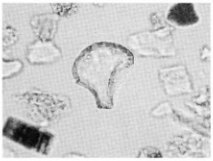
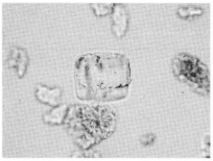


表14　船ヶ谷遺跡４次調査における植物珪酸体分析結果

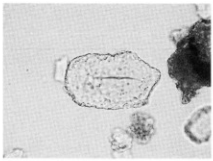
第218図　植物珪酸体の顕微鏡写真



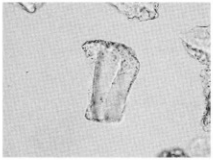
イネ
試料3



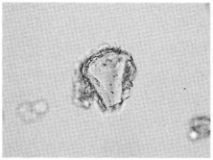
イネ（側面）
試料2



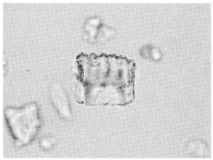
ヨシ属
試料2



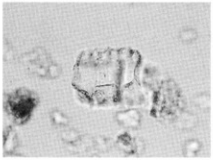
メダケ節型
試料1



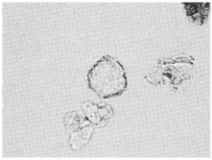
メダケ節型
試料2



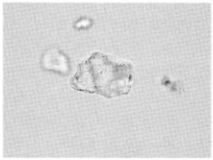
ネザサ節型
試料1



ネザサ節型
試料3



ミヤコザサ節型
試料2



ブナ科（シイ属）
試料2

―：150μm

5．船ヶ谷遺跡出土の硬質土器の蛍光X線分析

大谷女子大学　三辻利一

1）はじめに

5－6世紀代の須恵器生産の中心は和泉陶邑にあった。地方窯は限られた地域に数基ずつしか見つけられていない。そして、蛍光X線分析によって、各地の古墳から陶邑産の須恵器が多数検出されている。陶邑産の須恵器が各地の古墳から検出されることは、この時期には須恵器生産が和泉陶邑にあったことから理解できる。こうした背景から、各地の古墳から出土する須恵器の産地推定に地元産か、陶邑産かを問う2群間判別分析法の適用が有効であることは、これまでの分析データが示している。もう一つの問題は朝鮮半島から持ち込まれた陶質土器が検出されるかどうかである。この問いに答えるために、陶邑群と伽耶群間の2群間判別分析が適用される。本報告では、肉眼観察で非陶邑系とみられた硬質土器の蛍光X線分析の結果を報告する。

2）分析結果

分析データは表15にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準資料、JG－1による標準化値で示されている。このデータにもとずいて、K－Ca、Rb－Srの両分布図を作成した。その結果は第219図に示されている。この両図は大ざっぱに、産地を知る上に役立つ。第219図より、大部分の試料は陶邑領域に分布し、陶邑産の須恵器が含まれていることを示している。しかし、陶邑産でないことを示す不明A群と不明B群の試料があることも明らかである。そこで、伽耶群と陶邑群の2群間判別図に今回分析した試料をプロットした。その結果は第220図に示されている。D2（伽耶）とD2（陶邑）はそれぞれ、伽耶群、陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの分析値を使って計算された。表15に分析値とともに示している。また、第220図には伽耶群と陶邑群間の2群間判別図から得られた伽耶領域と陶邑領域が設定されている。13点の試料が陶邑領域に分布し、伽耶領域には3－5点の試料が分布する。重複領域｛D2(伽耶)＝1.5－30、D2(陶邑)＝3－100｝には13点ほどの試料が分布するが、不明領域には20点ほどの試料が分布する。この図で重複領域に分布した試料が陶邑産か伽耶産かを判断することは難しい。そこで、地元の母集団として、通谷窯群を選択した。通谷窯群は5－6世紀代の窯群ではないが、もし、未発見の古い窯が通谷窯群内にあるとすれば、通谷窯群の須恵器と同じ指紋を持つと考えられるからである。通谷窯群の須恵器の両分布図を第221図に示す。とくに、K－Ca分布図で陶邑領域とはずれる。陶邑群と通谷群間の2群間判別図を第222図に示す。陶邑領域は｛D2（陶邑）＜10、D2（通谷）＝6－100｝であり、通谷領域は｛D2（通谷）＜10、D2（陶邑）＝4－25｝である。重複領域は狭いので、両群の試料は分離しており、相互識別は十分可能であることが分かる。この判別図上に船ヶ谷遺跡出土の硬質土器をプロットしたのが第223図である。陶邑領域に分布した試料は20点近くある。通谷領域に分布したものは数点に過ぎない。不明瞭域にはあいかわらず、20点近い試料が分布する。つぎに、伽耶群と通谷群間の2群間判別分析を行った。その結果は第224図に示されている。伽耶領域は｛D2（伽耶）＜10、D2（通谷）＝2－100｝であり、通谷領域は｛D2（通谷）＜10、D2

（伽耶）＝0.7－20| である。中央に引かれた斜線は理想境界線であり、両群の指紋が類似すると、両群の試料は理想境界線に沿って混在して分布することになる。この場合、両群の試料は理想境界線沿いに分布しており、指紋は類似することを示している。両群の相互識別はやや、困難である。第225図は第224図の判別図上に船ヶ谷遺跡出土の硬質土器をプロットしたのである。通谷領域に分布する試料は殆どないことが分かる。不明瞭域に分布した試料以外のものは殆ど、伽耶領域と重複領域に分布した。第219図、第223図、第225図の３枚の図から、船ヶ谷遺跡出土の硬質土器の中には通谷窯群に対応するものは殆どないことがわかる。陶邑産の須恵器と伽耶地域からの搬入品と産地不明となったものの３群にほぼ分かれることがわかる。そこで、全試料について、陶邑群、伽耶群、通谷群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を比較した。その結果は表15に分析値とともに示してある。その中でＤ２値が最も小さいものを優先して産地とした。　その結果、陶邑産と推定されたものはNo.１，３，８，10，12，15，16，17，18，24，28，36，41，43，46の15点であり、陶質土器と推定されたものはNo.２，４，５，９，20，21，22，23，25，26，30，38，40，47，48，51の16点である。重複領域には陶質土器よりも陶邑産の須恵器が分布する場合が多いので、陶邑産の須恵器の中に陶質土器と誤判別されたものが含まれている可能性はある。しかし、陶質土器が含まれていることは第220図，第225図から明らかであろう。

つぎに、産地不明となった試料についてである。この中に、Ｋ量とRb量が多い試料があることは表15の分析値を比較すればすぐわかる。これらの試料の他の元素の分析も比較すると、いずれもよく類似していることがわかる。つまり、これらは同じ胎土であり、同じ産地の製品である。Ｋ、Rb量が多いものはNo.６，７，11，13，14，27，31，32，52の９点であり、これらを不明Ａ群とした。同様にして、他の産地不明を点検した結果、No.33，34，37，39，45，49，50の８点の試料も全因子で類似しており、同じ胎土の製品と考えられた。これらを不明Ｂ群とした。不明Ｂ群はCa量が多いという特徴をもつ。Ca量が多い割にはSr量は多くない。第219図に不明Ａ群と不明Ｂ群の分布位置を示してある。

これらの試料の産地は不明であるが、陶邑産ではないことは間違いない。また、No.19，29，42，53の４点の試料は陶邑産でないことは間違いないが、上記のどのグループにも対応しない。産地推定の結果も表15の最右欄に示してある。

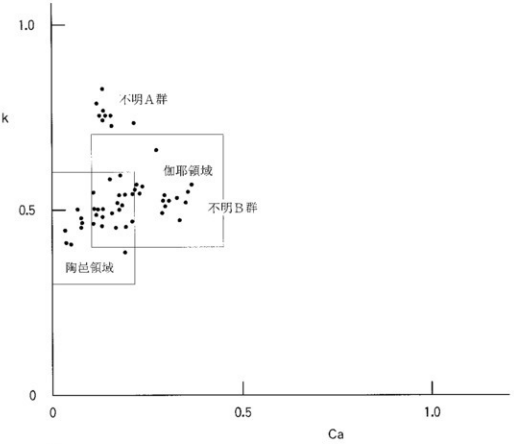
このように、肉眼観察で非陶邑系と推定された53点の分析結果の多くは非陶邑産の製品であることがわかった。それでも、陶邑産と推定された試料は15点あった。

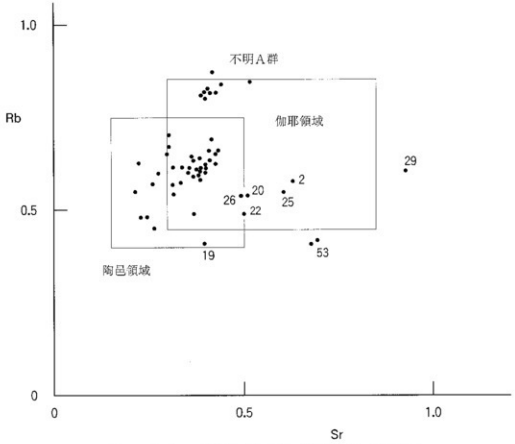
＊硬質土器の用言は筆者の原文のまま使用した。

表15　船ヶ谷遺跡４次調査出土陶質土器分析結果

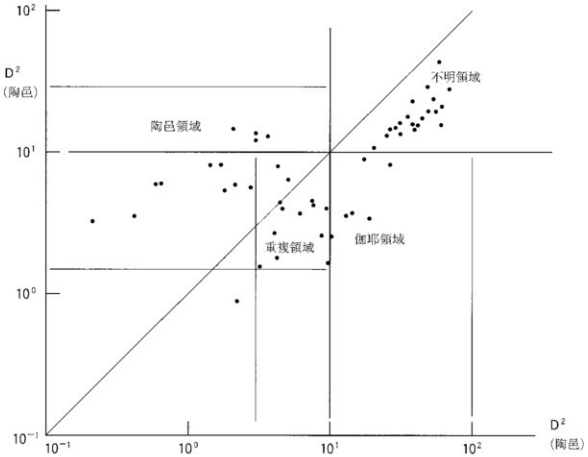
整理番号	資料番号	整理番号	(二次)	遺構名	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D¹(陶土)	D²(粘土)	D³(胎土)	推定産地	備考
1677	1	13-	2377	第層G7区	不明	0.411	0.052	2.05	0.479	0.230	0.184	2.0	15.1	50.3	陶邑	
609	2		2378	SR1②層F13区	壺	0.540	0.230	2.31	0.582	0.633	0.355	12.8	3.7	59.6	韓式	
520	3		2379	SR1②層G16区	坏身	0.477	0.111	1.98	0.540	0.320	0.340	0.60	6.1	21.9	陶邑	
517	4		2380	SR1②層G10区	坏身	0.577	0.185	2.24	0.613	0.378	0.360	4.1	2.5	4.5	韓式	
報告オミス	5		2381	SR1②層E12区	坏蓋	0.547	0.113	2.61	0.645	0.300	0.331	5.7	3.9	15.2	韓式	
602	6		2382	SR1②層H14区	高坏	0.825	0.135	2.34	0.870	0.417	0.418	46.2	29.9	64.2	不明A群	
564	7		2383	SR1②層F15区	高坏	0.753	0.131	2.60	0.823	0.400	0.467	29.5	17.0	40.0	不明A群	
563	8		2384	SR1②層G16区	高坏	0.504	0.111	2.89	0.598	0.283	0.286	2.7	5.8	18.0	陶邑	
1139	9		2385	SR1②層F13区	高坏	0.589	0.179	3.36	0.705	0.307	0.118	18.0	3.5	9.8	韓式	
730	10		2386	SR1②層H14焼土内	器台	0.491	0.164	3.28	0.570	0.323	0.142	4.9	6.6	10.3	陶邑	
693	11		2387	SR1②層H14区	坩	0.766	0.135	2.60	0.814	0.391	0.434	33.6	18.7	43.1	不明A群	
612	12		2388	SR1②層G16・F7区	甕	0.499	0.127	2.28	0.609	0.362	0.295	0.21	3.3	15.2	陶邑	
611	13		2389	SR1②層G15区	壺	0.733	0.136	2.68	0.803	0.403	0.422	24.7	13.7	33.0	不明A群	
686	14		2390	SR1②層E12区	甕	0.723	0.157	2.82	0.819	0.433	0.506	20.1	10.8	25.5	不明A群	
726	15		2391	SR1②層F4区	器台	0.445	0.036	2.08	0.541	0.221	0.173	2.9	12.5	49.6	陶邑	
621	16		2392	SR1②層E12・D13区	甕	0.480	0.138	2.20	0.577	0.387	0.343	0.42	3.6	18.2	陶邑	
623	17		2393	SR1②層D13区	壺	0.501	0.065	2.28	0.631	0.232	0.165	4.2	8.2	32.4	陶邑	
684	18		2394	SR1②層E12区	壺	0.483	0.124	1.83	0.492	0.371	0.220	2.1	6.0	25.6	陶邑	
685	19		2395	SR1②層H14区	壺	0.467	0.334	4.05	0.408	0.396	0.202	57.1	45.8	54.4	不明	
599	20		2396	SR1②層H14区	高坏	0.456	0.202	1.97	0.543	0.507	0.251	7.3	4.7	34.2	韓式	
516	21		2397	SR1②層F6区	蓋	0.544	0.188	3.19	0.669	0.437	0.220	2.2	0.90	5.1	韓式	
514	22		2398	SR1②層E14区	坏蓋	0.453	0.172	3.10	0.489	0.502	0.209	9.1	4.2	45.9	韓式	
515	23		2399	SR1②層F14区	坏蓋	0.585	0.157	3.00	0.689	0.419	0.246	3.2	1.6	10.0	韓式	
600	24		2400	SR1②層F13区	高坏	0.473	0.081	2.04	0.573	0.258	0.248	1.4	8.3	28.9	陶邑	
655	25		2401	SR1②層E13区	壺	0.562	0.239	2.63	0.550	0.512	0.410	10.2	2.6	47.0	韓式	
598	26		2402	SR1②層H14区	高坏	0.467	0.206	1.92	0.541	0.503	0.257	6.3	3.7	29.9	韓式	
740	27		2403	SR1②層C5区	器台	0.753	0.144	2.35	0.820	0.411	0.498	28.3	15.7	36.3	不明A群	
206	28		2404	SR1②層G7区	小型器台	0.500	0.118	1.74	0.668	0.308	0.157	1.8	5.4	13.7	陶邑	
205	29		2405	SR1②層G7区	小型器台	0.570	0.371	1.50	0.613	0.930	0.361	5.9	25.0	212	不明	
207	30		2406	SR1②層G6区	甕	0.536	0.175	2.09	0.642	0.370	0.227	4.1	1.8	3.6	韓式	
687	31		2407	SR1②層H14区	壺	0.784	0.122	2.29	0.825	0.409	0.483	36.7	24.2	53.6	不明A群	
610	32		2408	SR1②層E15区	甕	0.751	0.156	2.60	0.839	0.439	0.475	25.2	14.7	33.2	不明A群	
568	33		2409	SR1②層F8・H14区	高坏	0.541	0.303	2.24	0.602	0.398	0.357	38.8	15.3	22.4	不明B群	
567	34		2410	SR1②層D13区	高坏	0.526	0.308	2.29	0.593	0.373	0.375	46.7	20.1	30.3	不明B群	
566	35	13-	2411	SR1②層G11区	高坏	0.518	0.301	2.27	0.610	0.390	0.363	43.3	17.9	27.5	不明B群	
603	36		2412	SR1②層F5区	高坏	0.413	0.044	2.26	0.482	0.248	0.161	2.9	13.8	53.4	陶邑	
604	37		2413	SR1②層F12区	高坏	0.546	0.358	2.04	0.618	0.433	0.452	59.1	21.8	42.0	不明B群	
650	38		2414	SR1②層G17区	甑	0.517	0.183	2.30	0.623	0.339	0.303	7.5	4.4	5.4	韓式	
668	39		2415	SR1②層G10区	壺	0.529	0.305	2.40	0.610	0.931	0.375	40.7	16.0	24.4	不明B群	
666	40		2416	SR1②層H15区	壺	0.557	0.218	2.35	0.643	0.370	0.376	13.9	3.8	3.6	韓式	
658	41		2417	SR1②層E10区	壺	0.461	0.137	2.06	0.572	0.335	0.256	0.63	6.1	16.1	陶邑	
659	42		2418	SR1②層G16区	壺	0.659	0.275	1.99	0.630	0.406	0.523	39.0	16.2	20.4	不明	
661	43		2419	SR1②層G16区	壺	0.462	0.078	1.83	0.615	0.322	0.196	1.7	8.4	31.8	陶邑	
660	44		2420	SR1②層E12区	壺	0.496	0.180	2.38	0.612	0.357	0.249	4.5	4.4	6.2	未定	
614	45		2421	SR1②層D6区	甕	0.522	0.350	2.55	0.594	0.385	0.387	67.2	28.7	50.3	不明B群	
615	46		2422	SR1②層E5区	甕	0.449	0.069	2.60	0.445	0.274	0.159	3.5	13.5	43.4	陶邑	
648	47		2423	SR1②層E8区	把手付鍋	0.529	0.290	1.95	0.546	0.429	0.373	26.2	8.4	13.0	韓式	
649	48		2424	SR1②?	甑	0.559	0.220	1.86	0.655	0.407	0.340	9.5	1.7	1.4	韓式	
651	49		2425	SR1②層E5区	甑	0.491	0.290	2.00	0.610	0.403	0.351	30.3	13.9	19.6	不明B群	
607	50		2426	SR1②層E6区	甕	0.532	0.332	2.31	0.623	0.397	0.373	53.4	20.0	35.6	不明B群	
657	51		2427	SR1②層H13区	壺	0.541	0.211	2.06	0.635	0.389	0.361	8.7	2.6	2.3	韓式	
663	52		2428	SR1②層H14区	壺	0.729	0.221	2.27	0.844	0.521	0.557	17.0	9.3	22.0	不明A群	
1370	53		2429	SK2①層焼土	坏蓋	0.377	0.189	2.10	0.406	0.683	0.217	59.8	16.7	173	不明	

不明品のうち、No 33、34、35、37、39、45、50の７点の胎土は同じであり、同一産地の製品と推定される。
不明品のうち、No 6 、7、11、13、14、27、31、32、52の９点の胎土も同じであり、同一産地の製品と推定される。

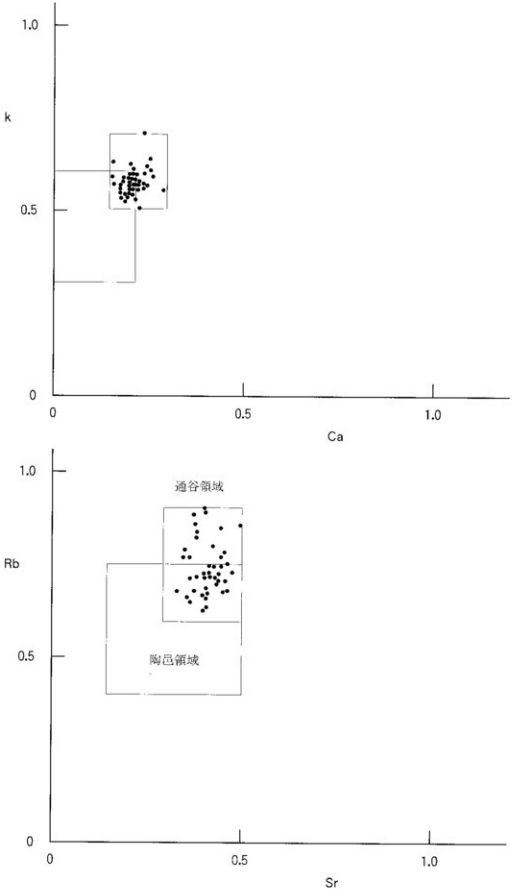




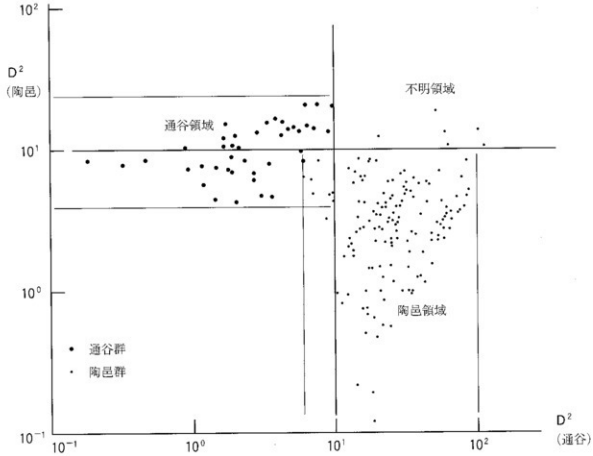
第219図　船ヶ谷遺跡4次調査出土陶質土器の両分布図



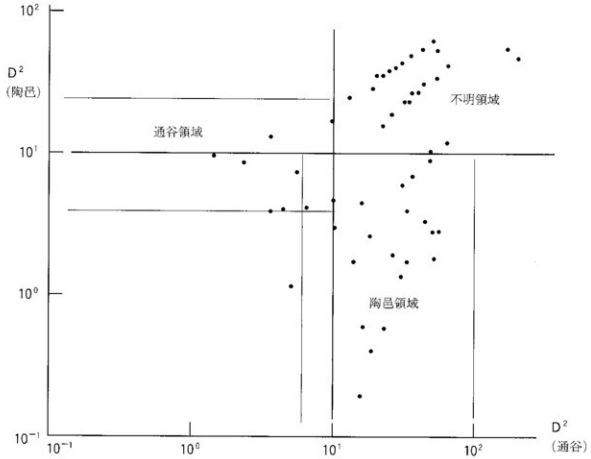
第220図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（1）



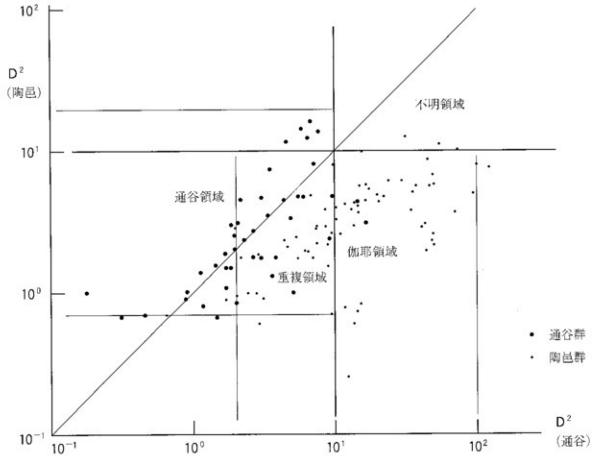
第221図　通谷窯出土須恵器の両分布図



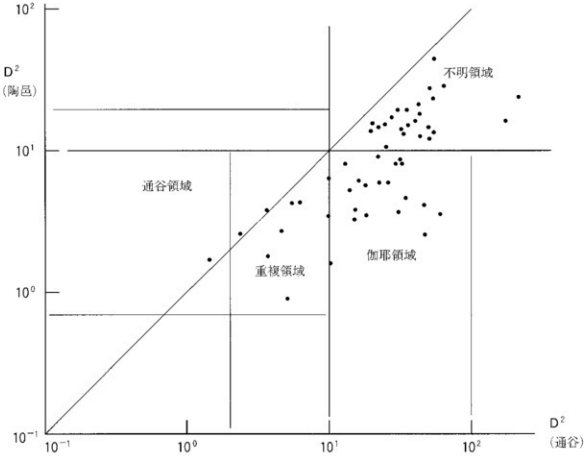
第222図　陶邑群と通谷群の相互識別



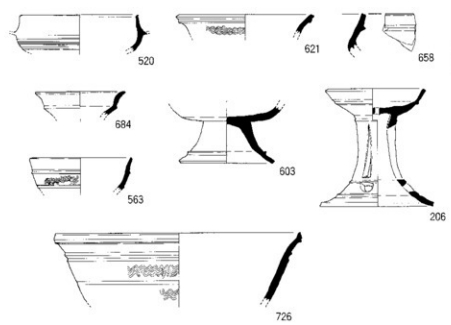
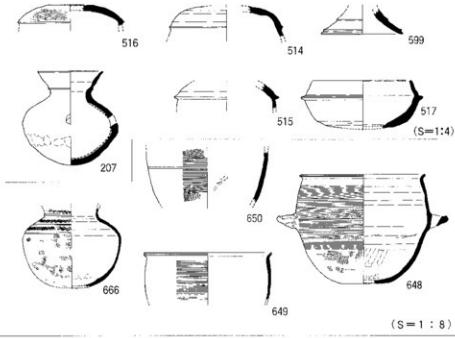
第223図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（2）



第224図　伽耶群と通谷群の相互識別

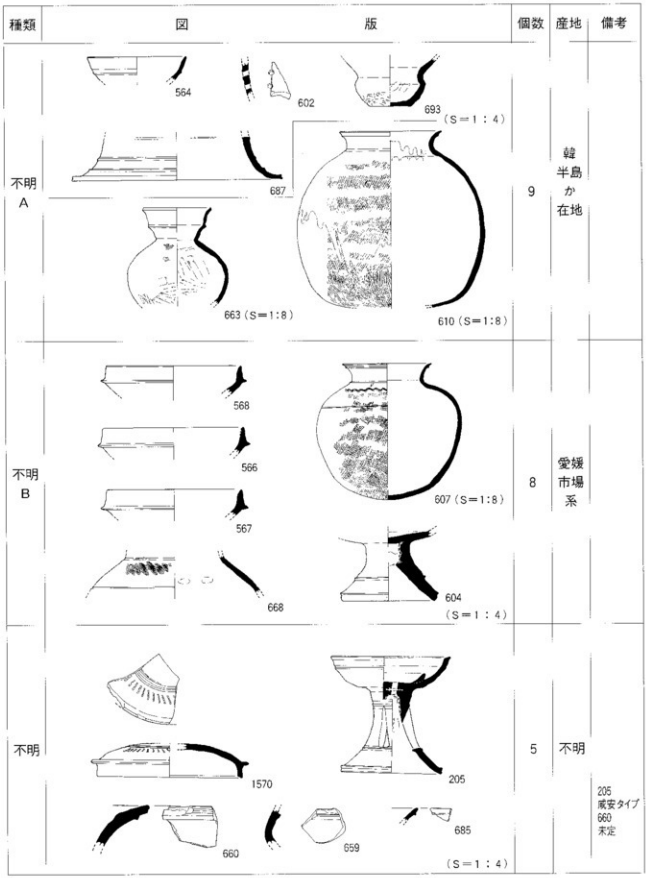


第225図　船ヶ谷遺跡4次調査出土硬質の産地推定（3）

種類	図版	個数	産地	備考
陶邑		15	大阪陶邑	206 威安タイプ
韓式		16	韓半島	516 富雲タイプ

第226図　船ヶ谷遺跡4次調査胎土分析による産地別出土遺物実測図（1）

※第226・227図は編集 高尾が作成した。



第227図　船ヶ谷遺跡4次調査胎土分析による産地別出土遺物実測図（2）

第Ⅵ章　まとめ

本調査は、弥生時代集落と古墳時代集落の範囲確認を主目的に行った。調査では、弥生時代前期から古墳時代後期までの遺構と遺物を多数検出した。ここでは、土層と主な遺構について、まとめを行なう。

1．地形の成り立ち

土層　本調査地の北壁土層と、西側に隣接する船ヶ谷遺跡２次調査地の北壁土層とは、東西にほぼ一直線上にあり、140ｍの土層図を作成することができる。土層は、４次調査第Ⅰ層と２次調査第Ⅰ・Ⅱ層は現代の水田耕作土、４次調査第Ⅱ層と２次調査第Ⅲ層は近現代の耕作土、４次調査第Ⅵ層と２次調査第Ⅳ①・②層（７世紀から８世紀の遺物を包含する）、４次調査第Ⅶ層と２次調査第Ⅴ層（７世紀代の遺物を包含する）、４次調査ＳＲ１②上・下層と２次調査ＳＲ１②層（古墳時代中期から後期）が各々で対応する。４次調査Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層は調査区の南東部で検出するが北西部にはなく、４次調査地に検出が限られる土層である。

土層からは、遺跡の地形が明らかになりつつある。

調査地の環境変化を見てみる。ＳＲ１は弥生時代前期以前に形成された流路で、弥生時代後期末に③層が堆積する。古墳時代後期には②層が堆積し、かつほぼ陸地化し、東側に建物が構築され、集落が形成される。その後①層とⅦ層は７世紀に堆積し、当地一帯は陸地となる。この変化を以下、詳細に記述したい。

下層となるＳＲ１③層の段階では、一帯は湿地である。船ヶ谷遺跡２次調査ＳＲ１②層の下部層は埋土が安定せずに、８つの土壌がブロック状に混合した状況であった。したがって、２次調査ＳＲ１は水が流れていたものでなく、沼のような状況が推測された。今回の調査の結果、２次調査地と４次調査地との間には黄色土のしっかりした土壌が形成されていることを確認したことから、集落は４次調査ＳＲ１③層堆積時までは、２次調査地と４次調査地の間から南西方向に展開することが考えられる。

中層となるＳＲ１②層では、周辺で水田稲作が行われ、畑の人為環境が拡大した環境であった。（第５章自然科学分析）②下層時になると４次調査の東側に集落が広がり、②上層時には２次調査地と４次調査地ともに陸地化する。また、２次調査地の西側には土坑、溝などを検出しているので、この時期に遺構の形成が確認できる。４次調査地にもＳＲ１の東備を中心に集落の広がりを確認し、２次調査地から４次調査地の広い範囲が生活面になることを想定したい。なお、４次調査ＳＲ１が２次調査地の北東部まで広がることを確認している。

上層となるＳＲ１①層～第Ⅶ層では、分析の結果（第５章）イネ科が増加しており、周辺で水田が拡大したものと推定される。よって、この時期にはＳＲ１はほぼ陸地化していたであっただろう。

2．集落の変遷

弥生時代前期（第229図－１）　この時期の遺構にはＳＫ１とＳＫ10の２基がある。ＳＫ１は自然流路ＳＲ１の低地部から若干小高くなった西岸に位置し、ＳＫ10は東岸の緩やかな傾斜地に位置している。

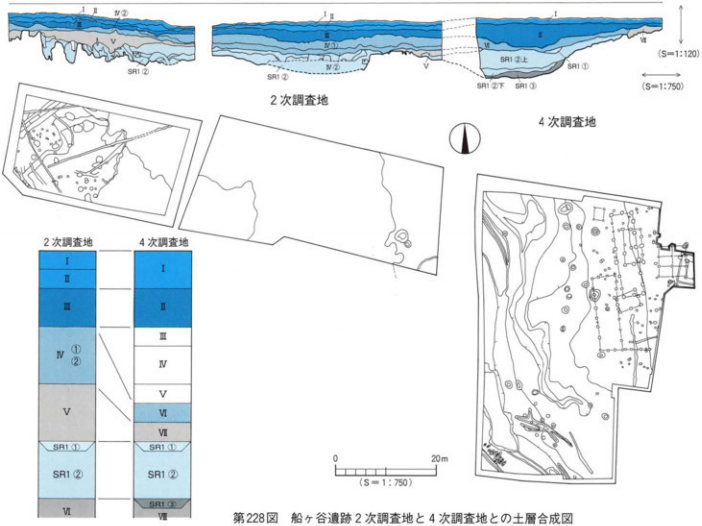
ＳＫ１は遺物の出土状態から、土器を井戸枠に利用した井戸または水を溜めるための集水施設と考

ま　と　め

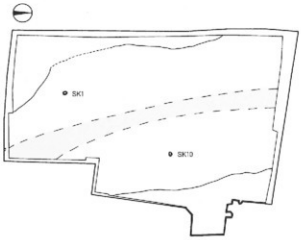
えられる。土器を井戸枠に利用した遺構の検出例は、県内では船ヶ谷遺跡（森光晴1975）があげられる。船ヶ谷遺跡例は報告書では第１号甕棺とされているが、今回資料調査を進める過程で、調査担当者から井戸の可能性があることを確認した。したがって、本遺跡の検出例は平野では２例目となる。

ＳＫ10は壺形土器と鉢形土器を組み合わせた土器棺である。この時期の松山平野での埋葬例は持田町３丁目遺跡（真鍋昭文1995）、西野遺跡（長井数秋ほか1975）、土壇原Ⅲ遺跡（長井数秋1986）、東石井小学校構内遺跡（梅木謙一1998）の４遺跡があり、持田町３丁目遺跡からは土坑墓24基と土器棺９基、西野遺跡からは土器棺２基を含む71基の墳墓、土壇原Ⅲ遺跡からは土坑墓７基、東石井小学校構内遺跡からは３基の土器棺が各々出土している。これ等４遺跡共通点は、埋葬形態が複数で、かつ墳墓群を形成することである。本遺跡では土器棺１基の検出に限られたが、遺構の堀方は床面がわずかに残る状況であり、かつ土器棺の上部が大きく削平されていることから、先の複数埋葬を基にすれば土器棺は本来複数存在していたと考えられる。

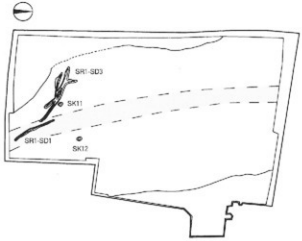
次に、当時の集落域を想定してみる。ＳＲ１の水量は少なく川底をわずかに流れていた状況で、ＳＲ１の西岸には井戸があり、東岸には土器棺墓がある。２次調査ＳＲ１からも弥生時代前期の遺物が出土し、２次調査地ＳＲ１と４次調査地ＳＲ１の間にわずかに平地部が広がることから、ＳＲ１の南西方向域に集落があったと推定される。



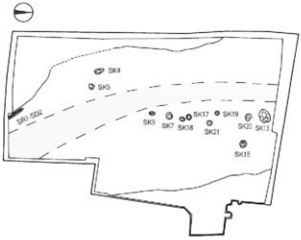
第228図　船ヶ谷遺跡２次調査地と４次調査地との土層合成図



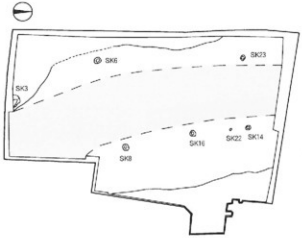
1．弥生時代前期



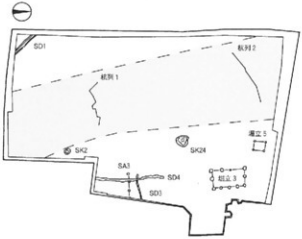
2．弥生時代中期



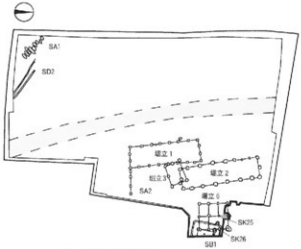
3．弥生時代後期



4．古墳時代前期



5．古墳時代中期



6．古墳時代後期

第229図　船ヶ谷遺跡４次調査検出遺構の変遷図

ま　と　め

弥生時代中期（第229図－２）　この時期の遺構には土坑２基と溝２条がある。土坑２基のうちＳＫ11はＳＲ１の低地部から若干小高くなった西岸に位置し、ＳＫ12は低地部付近の東岸に位置している。ＳＫ12は深さと断面形状、検出位置から井戸と考えられる。溝ＳＲ１-ＳＤ１・ＳＲ１-ＳＤ２はＳＲ１の南東部の床にあり、ＳＲ１の水量が少ない時期に、川底を流れていた小さな流路と考えられる。

集落はＳＲ１の東西で土坑を検出し、水量が少量であったことより、ＳＲ１を行き来できる状況であったと考えられ、ＳＲ１の東西域にあったと推定される。

弥生時代後期～古墳時代初頭（第229図－３）　この時期の遺構は土坑11基があり、うち３基がＳＲ１の西岸に位置し、８基が東岸に位置している。いずれもＳＲ１の緩やかな傾斜地に列をなして立地している。出土した遺物は、土器と木製品がある。特筆すべきものにはＳＲ１西岸に位置するＳＫ７から出土した泥除未製品が１点があげられる。出土状況からは、水漬けの状態にしていたものと考えられる。未製品を保管する遺構の検出例は、松山市釜ノ口遺跡９次調査地の溝（弥生時代後期中葉）が報告されている（梅木謙一・水本完児2001）。出土木製品には、製品の杓子状木製品や縦杵、未製品の鍬や泥除等があり、出土状況には本例と共通点がある。

一方、ＳＲ１では③層が堆積する。③層では、弥生時代後期までの遺物が出土していることより、③層は弥生時代後期までに堆積したことになる。この時期の河幅は狭く、水量は木製品を収納する土坑の上面をこえない、中位程度の水位で流れていたものと推定される。③層は分析から湿地の状況であったことが判明している（第Ⅴ章）。

集落は井戸と土坑がＳＲ１の東側に多く検出されることから、西側には小数集落、ＳＲ１の東側には多数の集落があったと推定される。

古墳時代前期（第229図－４）　この時期の遺構には土坑７基がある。７基の土坑のうち特筆すべきものとしてＳＫ14とＳＫ22の２基が上げられる。２基の土坑は、いずれも土坑中央に柱が立てられたまま出土し、ＳＫ14には柱のまわりに完形品の土師器甕形土器や小型丸底壺などが置かれていた。ＳＲ１は②下層が古墳時代初頭以前に堆積している。ＳＲ１②下層上面の中央部には、薄い砂層が部分的に堆積していることから、水量は少ないものと推定される。

集落は、土坑の検出によりＳＲ１の東側にあったとみられる。この時期には、２次調査地から祭祀遺構を検出していることより、２次調査地のＳＲ１西側にも集落があったとみられる。

古墳時代中期（第229図－５）　この時期の遺構には掘立柱建物址２棟、土坑２基、溝４条、杭列２基、柵列１条、性格不明遺構１基がある。これまでにみられなかった掘立柱建物や溝・柵列といった構築物が建てられ、居住域としての土地利用が本格的に始まる時期である。特にＳＲ１東岸では掘立５（１×１間）や掘立３（２×４間）といった小規模の掘立柱建物が建てられている。遺物では、ＳＫ24から高坏形土器や土製模造品・臼玉が出土し、出土状況からみて井戸の廃棄に伴う祭祀に使用されたと考えられる。

ＳＲ１②上層は古墳時代後期の掘立柱建物に切られること、古墳時代中期のＳＫ24出土の甕形土器とＳＲ１E9区出土の甕形土器（606）が復元できたことから、②上層は古墳時代中期以降に堆積したことになる。出土遺物は、完形品に近い陶質土器や滑石製品などのほか、十数点の須恵器の甕が口縁部を打ち割り底部を上にした状態で出土するなど、祭祀を行った状況も見受けられる。この時期ＳＲ１は河幅は広く、時々水が流れる程度の沼地化した状態である。

ま　と　め

集落は、掘立柱建物址、土坑、溝などがＳＲ１東側の陸地化した河岸に近い場所で構築され、一方２次調査ＳＲ１の西側にも溝、土坑など集落に関連する遺構を検出していることから、ＳＲ１を挟む両岸で集落展開が推定される。

古墳時代後期（第229図－６）　この時期の遺構には竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址４棟、土坑２基、溝列２条、性格不明遺構１基がある。掘立柱建物と竪穴式住居の関係は、掘立１（６ｃ中）があり、ほぼ同時期か少し時間をおき掘立２（６ｃ前～中）が構築される。次に、竪穴式住居ＳＢ１（６ｃ中）、その後は、ＳＢ１廃絶後に掘立６が構築され、つづいて掘立４が構築される。このように、ＳＲ１東岸には大型掘立柱建物や竪穴式住居が建てられていることから、古墳時代後期以降は、居住域が東方へ展開していく。

ＳＲ１①層は、②上層を覆い出土遺物に６ｃ代の須恵器を含むことから古墳時代後期以降に堆積したものである。ＳＲ１の河幅は、中央付近に狭く水量の少ない河川が存在し、埋没後は陸地化していたものとみられる。

３．井戸の変遷

集落の変遷は検出した井戸からも検証できる。

井戸はＳＫ１（弥生時代前期）、ＳＫ12（弥生中期前葉）、ＳＫ15（弥生後期）、ＳＫ８（古墳時代初頭）、ＳＫ24（古墳時代中期）の５基があり弥生時代前期から古墳時代中期まで継続してある。井戸の構造は、弥生時代前期のＳＫ１は壺形土器の底部を打ち欠いたものを井戸枠として使用し、弥生時代中期から古墳時代初頭までの３基は素掘で井戸枠がない、古墳時代中期のＳＫ24は木製の井戸枠を使用している。検出地点は、弥生時代前期のＳＫ１がＳＲ１の東岸で、以後のＳＫ12・８・15・24は西岸にある。また、井戸の検出位置からは河幅（水量）が想定でき、弥生時代前期から中期までは、ＳＫ１・12がＳＲ１中央の深い（③層）位置にあり、したがって河幅は狭いものであっただろう。弥生時代後期から古墳時代までは、弥生時代前期～中期に比べて河幅は広くなり、弥生時代後期が一番広く、その後は狭くなり、古墳前期～中期はあまり変わらない河幅になる。古墳時代後期には水量が少ない状態で、最終的には陸地化していたと推測される。

さて、ＳＫ12・８・15・24の位置は、ＳＲ１の東側でほぼ一直線上に12ｍの等間隔となる。水量と時代により井戸が作られたと考えられる。これは、井戸が弥生時代前期から古墳時代まで同一集落内で受け継がれ、井戸の東側が集落の生活場として長期にわたり使用されていたことを示すものである。

４．注目する遺物

（１）ＳＲ１出土の陶質土器・須恵器

ＳＲ１からは、重要な遺物が出土している。それは、渡来人が直接持ち込んだと思われる遺物、渡来人が間接的（技術）に持ち込んだ遺物の出土である。

渡来人が直接的に持ち込んだ遺物には、陶質土器の小型器台２点と坏蓋、間接的に持ち込んだ遺物には、軟質土器の甕、把手付鍋、平底壺が多数ある。

陶質土器の小型器台２点は、韓半島及び日本国内においても現在までに出土例のない大変貴重な遺物である。また、日常生活に使用する軟質土器が、破片ではあるが85点が出土し、この船ヶ谷遺跡内で渡来人が生活を行っていたことが明確になる資料である。（軟質土器出土＝渡来人　定森秀夫 1998

ま　と　め

初期須恵器と韓半島製陶質土器　京都文化博物館研究紀要　朱雀　第10集）の論文に準じる。

渡来人が間接的に持ち込んだ遺物には、市場系土器の高坏形土器、壺形土器、甕形土器と初期須恵器の坩、把手付埦、器台形土器がある。

市場系土器（三吉秀充2002）とは、松山平野南部にある須恵器生産窯の市場南組窯で焼かれた土器を指す。市場系土器の器種には、無蓋高坏、埦、甕、壺、甕、高坏形器台、筒形器台、鍋、土錘等がある。船ヶ谷遺跡４次調査地から出土した陶質土器と市場系土器・非陶邑系土器は、胎土の科学分析を行っている。

胎土分析は、肉眼観察により陶質土器、市場系土器、非陶邑系土器と思われる53点について科学的分析（第Ⅴ章）を行った。分析からは、陶邑・韓式・不明Ａ群・不明Ｂ群・不明の５分類された。その中で松山平野内の出作遺跡（1993相田則美）で出土している土器（市場系）と同じ形想の高坏４点が不明Ｂ群と判別された。出作遺跡出土の遺物も分析を行っており、分析データー（1993出作遺跡ｐ201、表17）No. 8（不明）は、今回分析の不明Ｂ群と同じ数値を示していることから、不明Ｂ群が地元窯で焼かれた市場系土器と考えられる。

また、不明Ａ群は市場系の窯でない地元窯か、現在までに発見されていない韓国国内の窯のものかと考えられる結果が得られた（第Ⅴ章三注）。この特定は、市場系以外の地元窯の発見により確実になろう。一方、分析により不明Ａ群と不明Ｂ群の領域が判別でき、不明Ｂ群が地元市場系と判別できたことは成果である。

しかし、肉眼観察から確実に陶質土器と思われる土器（206・試料28）が陶邑と判別された。現時点では、多くの研究者による陶邑・陶質土器の形式学的な分類研究がなされており、ここでは形式学を支持し206の小壺器台は陶質土器とする。

今後、より多くの資料の蓄積により分析の領域が細分されれば、胎土分析からより明確な製作地の判別がなされると考えられる。

船ヶ谷遺跡４次調査地からは、市場系土器（不明Ｂ群）と不明Ａ群があり、不明Ａ群が船ヶ谷遺跡独自のものと確認されれば、不明Ａ群の窯址が松山平野北部に存在するものと考えられる。このことを前提するならば、船ヶ谷遺跡は松山平野に陶質土器及び新しい焼き物技術を伝えた渡来人を受け入れた、松山平野北部の外交の窓口的地域であったとされよう。

（２）ＳＲ１出土の石製品

本調査からは石器が多数出土し、器種は24種に分類でき、数量は900点に達した。

石器には、器種により時期をおおまかに特定できるものがある。縄文時代晩期から弥生時代前期までに比定できるものは、石鏃、石錘、磨石、敲石、敲・磨石、磨石、砥石、台石で622点、69.1％になる。弥生時代前期末のものには石鎌７点と石剣３点があり、弥生時代前期末から弥生時代後期の器種には石庖丁18点がある。弥生時代に比定される器種は、男根状石製品３点と石斧40点があり、古墳時代の器種は石製模造品15点がある。

このほかには石核、剥片、スクレイパー、刃器、石鏃、石錐、素材（原石）、敲石、敲・磨石、磨石、砥石、台石があり、これらの石製品は製作に関連する石器になり、作業場が周辺で検出される可能性が高い。

また、一遺跡の出土量は松山平野でも多い遺跡となり、器種の多様さも注目される資料である。

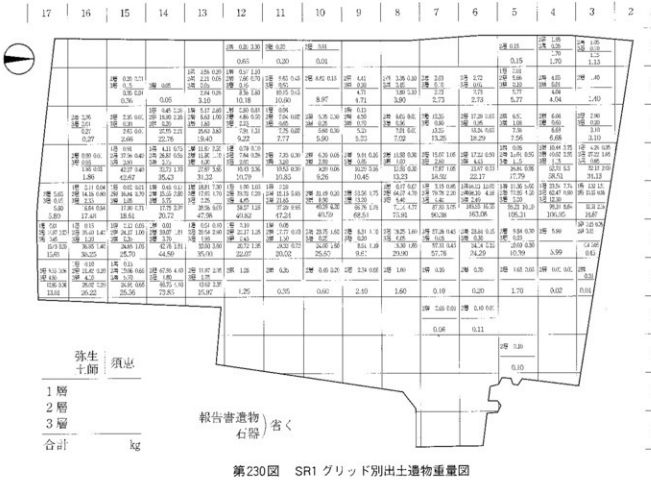
ま　と　め

（3）ＳＲ１出土の土製品

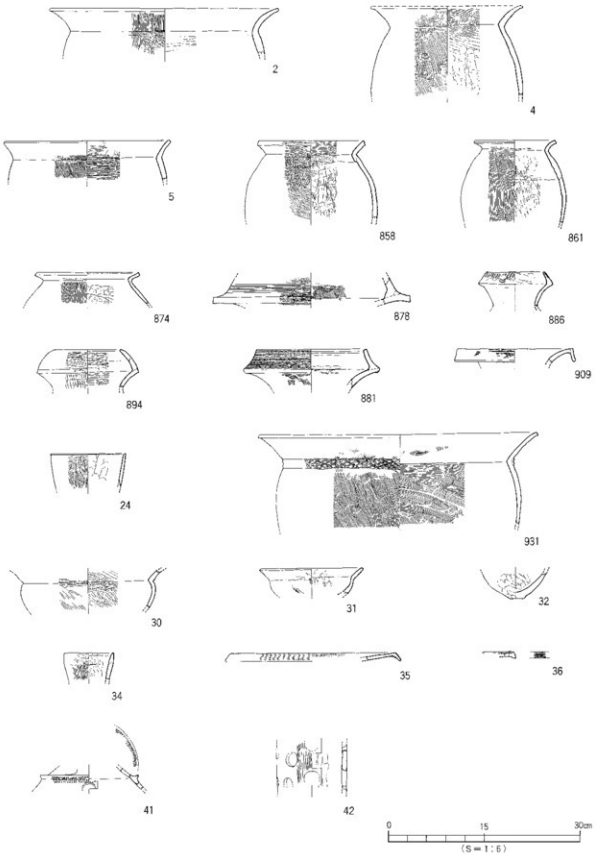
ＳＲ１出土土器はその出土量の多さより、河幅と流れた方向が推測される。出土した土器を①～③層かつ４ｍグリッドに分け、各地点での出土土器重量（実測図掲載遺物と石製品は省く）を計量した（第230図）。計量からはＦ６区が163kgで最重量を計り、つづいて、Ｆ４区・Ｆ５区が100kg以上を計る。ＳＲ１の東側に多く遺物が出土し、特にＦ区からの出土が多く出土する傾向にあり、ＳＲ１が南東より北西に流れ、そのコーナー部にあたることが起因しているだろう。河幅では、ＳＲ１③層はＦ区を中心に狭い範囲の出土で河幅は狭く、ＳＲ１②層はＣ区からＨ区までの広い範囲の出土で河幅は広く、ＳＲ１①層ではＦ区とＥ区の狭い範囲の出土で河幅は狭いと推測される。

また、ＳＲ１②層にある杭列１・２の北側では遺物の出土量が少なく、南側では遺物が多数出土することが判明した。グリッド出土遺物の内Ｆ４・５・６区には、特に弥生時代後期の遺物が多数出土しており、これ等は短時間内の廃棄遺物として取り扱うことが可能であり、グリッドごとに主な遺物を掲載してみた（第231～235図）。

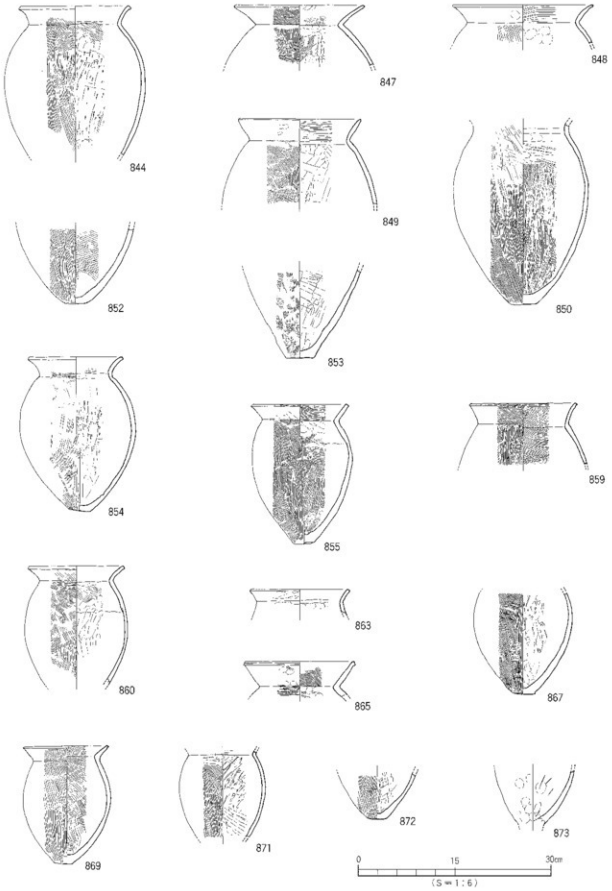
以上、調査結果についてまとめを行った。調査結果からは、弥生時代集落と古墳時代集落の範囲が確認できた。弥生時代の集落は、前期にはＳＲ１の南西域に集落が想定でき、中期にはＳＲ１東側に移る様相を示す。後期から古墳時代前期にはＳＲ１の東側にほぼ集中し、中期から後期には、完全にＳＲ１の東側に集落域が形成されることが明らかとなった。



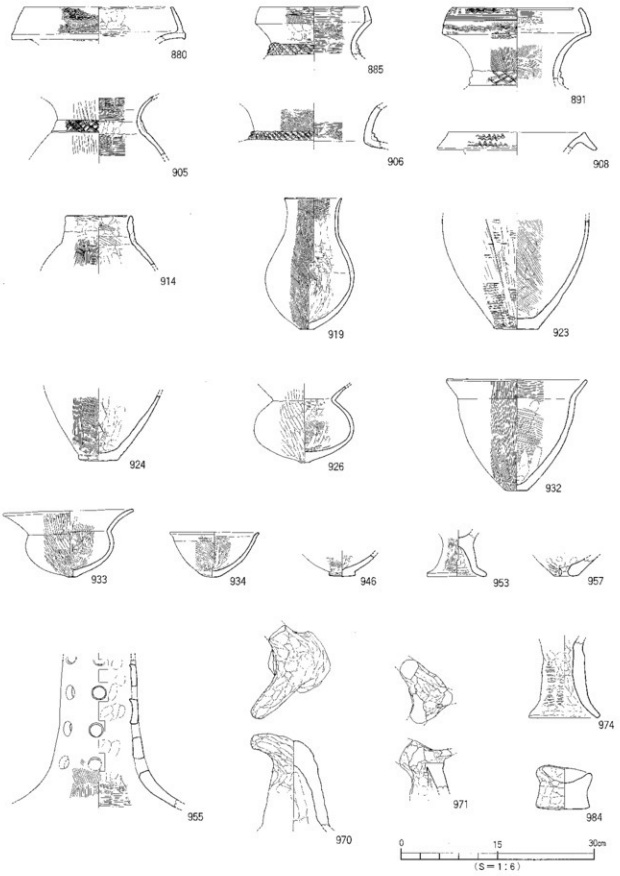
第230図　SR1 グリッド別出土遺物重量図



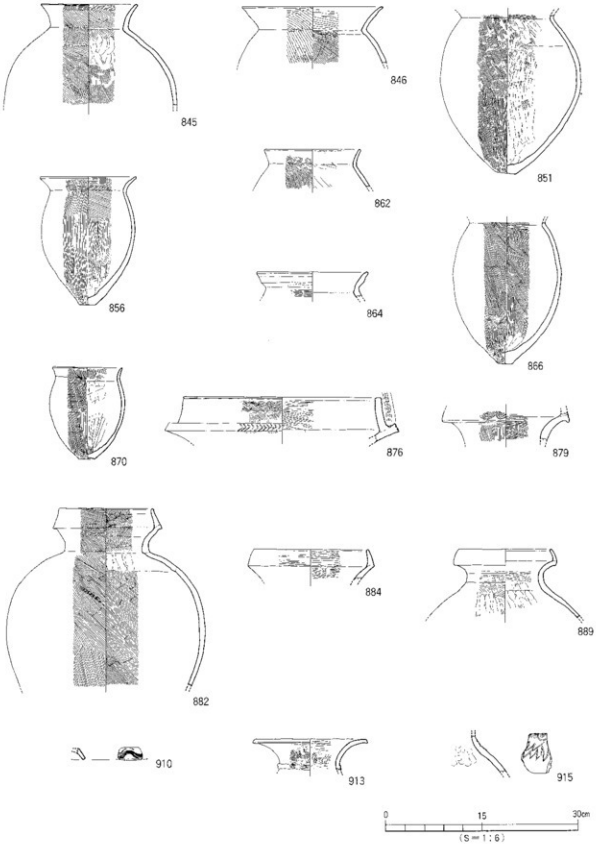
第231図　SR1 F4区出土遺物実測図



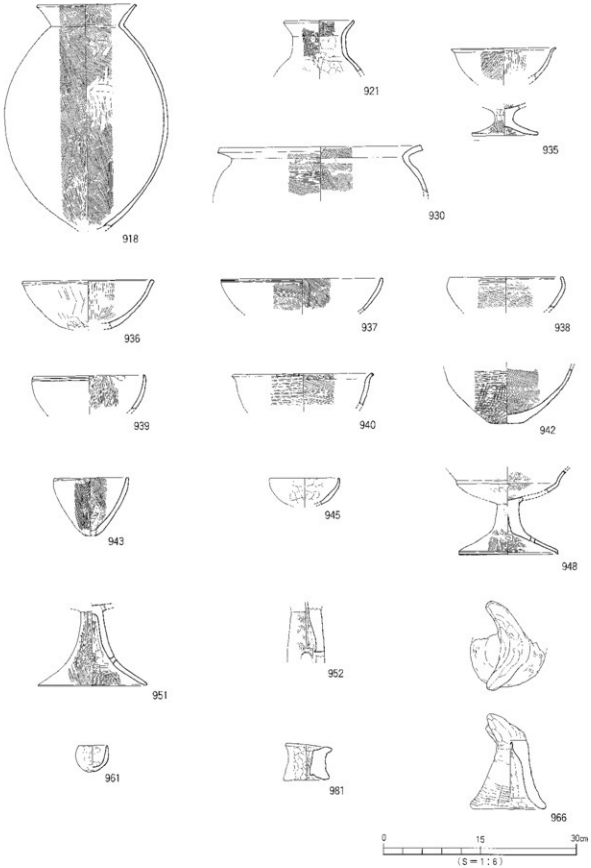
第232図　SR1 F5区出土遺物実測図（1）



第233図　SR1 F5区出土遺物実測図（2）



第234図　SR1 F6区出土遺物実測図（1）



第235図　SR1 F6区出土遺物実測図（2）

5．科学分析

古環境復元のため樹種同定、種実同定、花粉分析、植物珪酸体分析を行った。

樹種同定ではＳＲ１・土坑５基・掘立柱建物１基から出土した54点の木材を同定し、その結果からは掘立１、ＳＫ14・22出土の柱材はカヤで、ＳＲ１出土の杭はヒノキで作られているものが多く認められた。

種実同定ではＳＲ１とＳＫ24から出土した13点を対象とし、分析からは全てがモモ（核）と同定された。

分析結果からは、樹種同定と種実同定から船ヶ谷遺跡周辺地域にはヒノキやカヤが分布し、モモが栽培されていたと想定される。

〔文献〕

森光晴1985　『船ヶ谷遺跡』　愛媛県教育委員会
高尾和長　1999　『船ヶ谷遺跡２次調査』　松山市文化財調査報告書第70集
真鍋昭文　1995　『持田町三丁目遺跡』　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
梅木謙一　1998　「石井東小学校構内遺跡」『石井・浮穴の遺跡』　松山市文化財調査報告書第65集
梅木謙一・水木完見　2001「釜ノ口遺跡９次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報12』
長井数秋・土居聡子　1975　「西野遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書１』　愛媛県教育委員会
長井数秋　1986　「土壇原遺跡」『愛媛県史資料編考古』　愛媛県史編纂委員会
三吉秀充　2002　第２回愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム淘質土器の受容と初期須恵器の生産

写　真　図　版

写真図版例言

1．遺構は、主な検出状況、遺物出土状況、完掘状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール　28㎜～85㎜他
フイルム	白黒　プラスXパン・ネオパンSS		
	カラー　エクタクロームEPP		

2．単色図版は白黒写真を等倍で印刷原稿に使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸器	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣRC

3．製版　カラー写真、写真図版175線
印刷　オフセット印刷
用紙　ニューVマット
製本　アジロ綴り

【参考】　『埋文写真研究』vol．1～13　〔大西朋子〕

1　遺構検出状況南区（東より）

2　遺構検出状況北区（南東より）

1　遺構完掘状況南区（北東より）

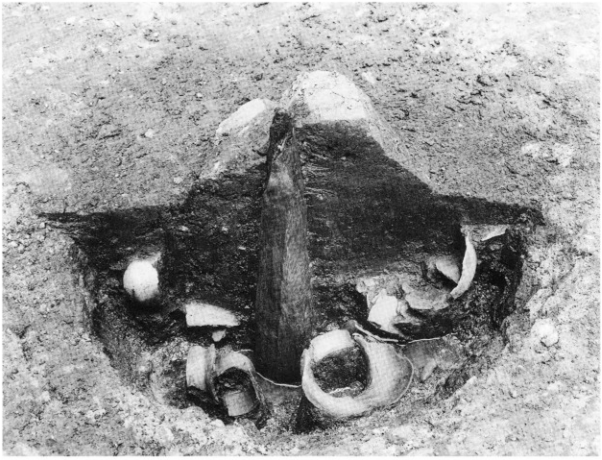
2　ＳＲ１陶質土器出土状況（南より）

1　ＳＫ１遺物出土状況（北東より）

2　ＳＫ10遺物出土状況（南より）

1　ＳＫ７遺物出土状況（南より）

2　ＳＫ８完掘状況（西より）



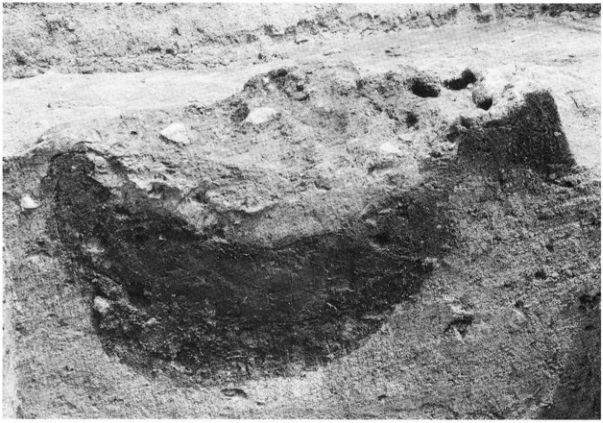
1　ＳＫ14遺物出土状況（南より）

2　ＳＫ22柱出土状況（南より）

1　ＳＫ24遺物出土状況（北東より）

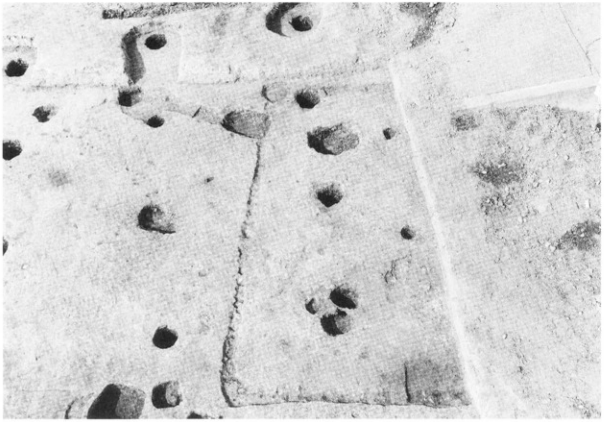
2　ＳＫ24井戸枠出土状況（東より）

1　ＳＫ2焼土出土状況（北西より）



2　ＳＫ2土層（西より）

1　ＳＸ２遺物出土状況（北より）



2　ＳＢ１完掘状況（南より）

1　遺構完掘状況北区（南東より）

報告書抄録

ふ り が な	ふながたにいせき
書　　名	船 ヶ 谷 遺 跡
副 書 名	4次調査
巻　　次	遺構・遺物編
シ リ ー ズ 名	松山市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第88集
編 著 者 名	高尾和長・山之内志郎・大西朋子・三辺利一・(株)古環境研究所
編 集 機 関	松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所 在 地	市教委：〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL 089－948－6605 埋　文：〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL 089－923－6363
発 行 年 月 日	西暦　2002年12月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふな が た に 船 ヶ 谷 4 次 調 査 地	まつやまにしながと 松山市西長戸	38201		33° 51′ 54″	132° 44″ 28″	20000410～ 20000929	2,881	北部福祉施設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
船 ヶ 谷 4 次	集 落	弥生時代	土坑 溝 自然流路	弥生土器・木製品 石製品	壺を井戸枠に使用、土器棺、泥よけ木製品、茄子形木製品、多量の石製品の出土。
		古墳時代	自然流路・溝 竪穴式住居 掘立柱建物 土坑 杭列 柵列	陶質土器、須恵器 土師器、石製品 勾玉、臼玉、紡錘車、 鉄製品、骨	陶質土器の小型器台2点出土。市場系土器の出土。土師器の甕、短甲、盾、鏡の祭祀遺物の出土。

松山市文化財調査報告書　第88集

船ヶ谷遺跡 —4次調査—

遺構・遺物編

平成14年12月24日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6—1
TEL 089—948—6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL 089—923—6363

印刷　岡田印刷株式会社
〒790-0012　松山市湊町7丁目1—8
TEL 089—941—9111